登別市
千歳5遺跡

—北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財第二次発掘調査報告書—

昭和59年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

登別市
千歳5遺跡

—北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財第二次発掘調査報告書—

昭和59年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

目　　次

挿 図 目 次

写真図版目次

表　目　次

1．遺構発掘風景（S→N）

2．出土遺物

Ⅰ　調査の概要

1．調査要項

事業名	北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	日本道路公団札幌建設局
事業受託者	財団法人　北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	千歳5遺跡（北海道教育委員会登載番号　J-03-24）
所在地	登別市千歳町　147-2，197
調査面積	1,150㎡
調査期間	昭和59年4月1日～昭和60年3月31日 （発掘調査期間　5月8日～7月31日）

2．調査にいたる経緯

北海道教育委員会は昭和55年に登別市内における埋蔵文化財包蔵地の一般分布調査を実施した。本遺跡は，この調査によって発見されたものであるが，遺跡の位置が北海道縦貫自動車道の予定路線内にあることが判明したため，ただちに日本道路公団と埋蔵文化財保護の事前協議が行なわれた。しかし予定路線の変更が不可能であることが明らかになったため，記録保存のための発掘調査を実施することが決定された。

範囲確認調査は同年11月に実施され，調査対象面積は3,980㎡と決定，昭和57年5月から10月にかけて当センターが発掘を行なった。この調査の結果，縄文時代中期末から後期初頭の住居跡・土壙が多数検出され，土器・石器などの出土遺物は約15万点におよんだ。これらの遺構・遺物の検出状況・分布状態を検討した結果，本遺跡の範囲がさらに西側へ続いていることが，充分に予測されたため，北海道教育委員会は，昭和58年8月に二回目の範囲確認調査を行なって，調査対象面積を1,150㎡追加した。今回の発掘調査は以上の経緯で実施することが決定されたものである。二次にわたる発掘調査の総面積は，5,130㎡となる。

3．調査体制

財団法人　北海道埋蔵文化財センター	理事長	中村龍一
	調査部長	竹田輝雄
	調査第四班長	鬼柳　彰
	文化財保護主事	西田　茂 （発掘担当者）
	嘱託	中田裕香
	〃	和泉田　毅

4．調査の要約

出土した土器のほとんどは，北筒式，煉瓦台式，余市式などの縄文時代中期後葉～後期前葉のものである。ごくわずかに中期の円筒上層式，後期の手稲式，堂林式などが出土し，早期の貝殻腹縁文土器もある。遺構は住居跡11か所，土壙43か所，遺構に付属しない焼土11か所を検出できた。住居跡はすべて縄文時代中期末葉～後期前葉の頃のものである，

石器は，石鏃，石槍，ドリル，スクレイパー，石斧，石皿など縄文時代に通有のものが出土している。土製品は三角形のもの，石製品には垂飾，青竜刀形石器，石刀，オロシガネ状石器などがある。

なお遺構中および包含層から検出された資料の放射性炭素による年代測定結果はつぎの通りである。

KSU.964　H-23床面出土の炭化物　　4,210±55　B.P.

KSU.965　E-100-d-イ　暗褐色土Ⅱ層下層出土の炭化物　　4,110±70　B.P.

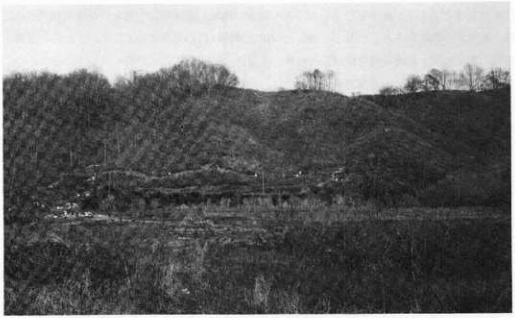
KSU.966　E-1-c-ハ　暗褐色土Ⅱ層出土の炭化物　　4,200±45　B.P.

※　このうちコード名KSU.966に用いた資料は，発掘調査時から多量の炭化果実が認められていたものの一部である。このE-1-c-ハ区出土の炭化物の一部を矢野牧夫氏（北海道開拓記念館）に，肉眼，実体顕微鏡等で鑑定していただいた結果，次のようなことがあきらかになった。

① 鑑定に供した資料のすべては，加熱によるいちじるしい炭化を受けている。

②クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc）とオニグルミ（Juglans mandshurica var. siebolbiana Max）が認められる。クリの大きさは，長さ14mm，幅16mmていどのものが多い。

③　このほかに，広葉樹の木片もある。



図版Ⅰ－1　遺跡周辺風景（昭和55年11月）

Ⅱ　調査の方法と遺物の分類

1．調査の方法

(1)　調査のねらい

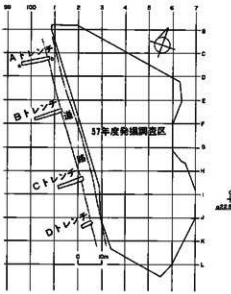
昭和57年度の発掘調査によって，この遺跡では，縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての遺構，遺物が密集して検出されることが，明らかになっている。今回の調査区は，57年度調査区の西側につづく部分であることから，次の３点を目標においた。

①：遺物包含層の土層の変化が微妙であり，遺構の掘り込み面の把握は困難であることが予想されるが，遺物の出土状況を参照しながら，掘り込み面の確認につとめる。住居跡調査の場合は，構築時の排土，遺構を埋積した土などを識別することによって，重複したものの先後関係を明らかにすること。

②：出土する土器は，縄文時代中期後葉から後期前葉の時期の，北筒式，煉瓦台式，余市式などが大半をしめることが予想される。これら，きわめて接近した時期の資料の先後関係を，出土の状況などから，明らかにすること。

③：前回の調査によって出土した石器の大半は，縄文時代中期後葉から後期前葉の時期のものであるが，ごく少数，縄文時代早期・前期・後期中葉のものと考えられる石器も出土している。この縄文時代中期後葉から後期前葉の時期の良好な石器群の把握につとめること。また，縄文時代早期・前期・後期中葉とみなされる石器の出土状況を，周辺の遺跡との関連も含めて把握すること。

なお，昭和58年８月に北海道教育委員会文化課がおこなった範囲確認調査で得られた資料の一部は，図Ⅱ-1に示すとおりである。



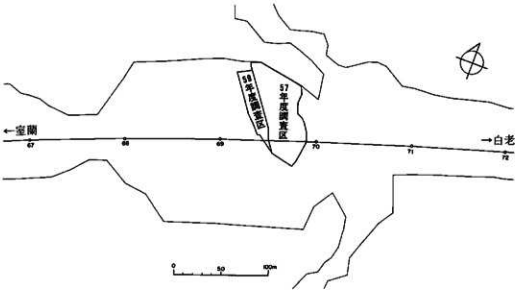
(2)　発掘区の設定

前回の調査で使用したグリッドを延長して，発掘区を設定した。詳細は，次のとおりである（図Ⅱ-2）。

層位
1.盛　土
2.撹　乱
3.沼炭土
4.暗灰色火山灰
5.黒色土
6.淡灰褐色火山灰
7.黒色土と火山灰が互層に堆積
8.黒色土十火山灰（軽石を含む）

図Ⅱ－１　範囲確認調査の平面図と土層図

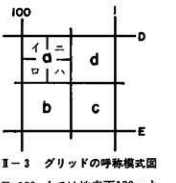
道路予定線内の中心線杭STA 69＋00とSTA 70＋00を結ぶ直線を基準線とする。そして，STA 70＋00を基準点として10mごとの方眼を区切る。この10m方眼は，その北西の交点をもってアルファベットと算用数字の組みあわせで呼称する(例B－1)。この10m方眼を5m方眼に4分割し，5m方眼をさらに2.5m方眼に4分割する(図Ⅱ-3)。5m方眼も，2.5m方眼もともに北西の交点をもって呼称，いずれも反時計まわりに，a，b，c，dと，イ，ロ，ハ，ニで表示する。したがって，2.5mグリッドの表示は，C－1－d－ニのようにおこなう。



図Ⅱ－2　工事区域と発掘調査区

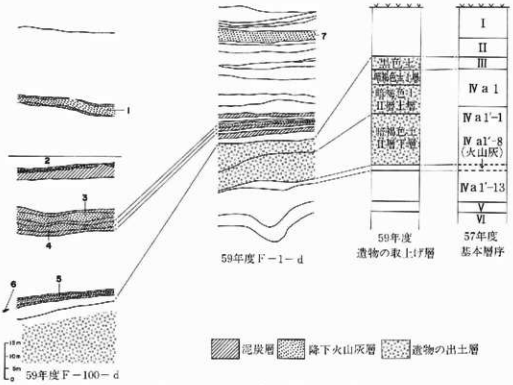
(3) 土層の区分

土層の区分は，前回の調査による成果をふまえて，降下火山灰層等の無遺物層と，暗褐色土の遺物包含層とでは異なる表示方法をとった。調査区域内の丘の部分と沢の部分では，土層の堆積状態に大きなちがいが認められたことと，遺物包含層部分をほぼ推定できるようになっていたからである。

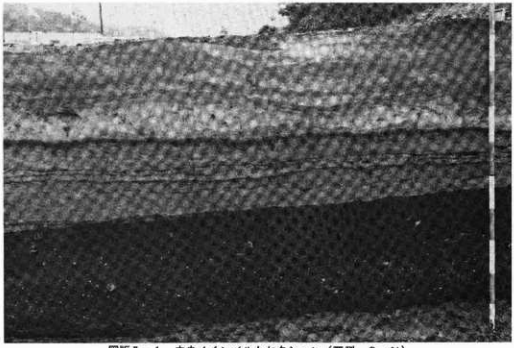


図Ⅱ－3　グリッドの呼称模式図

図Ⅱ-4には，前回の調査報告書で示した基本層序と，今回の遺物の取りあげ層，F-100-d-ニ，F-1-dにおける土層柱状図を示した。遺物包含層は，F-1-dでは地表下55cm～85cmに，F-100-dでは地表下130cmよりも深いところである。この遺物包含層を，さらに適宜細分したところもある。細分にあたっては，軽石の有無，色調の変異，その土層のひろがり，人為的堆積土などの明確な区分とともに，発掘時点での感覚的な判断に依ったところもある。



図Ⅱ－4　57，59年度の土層対比柱状図



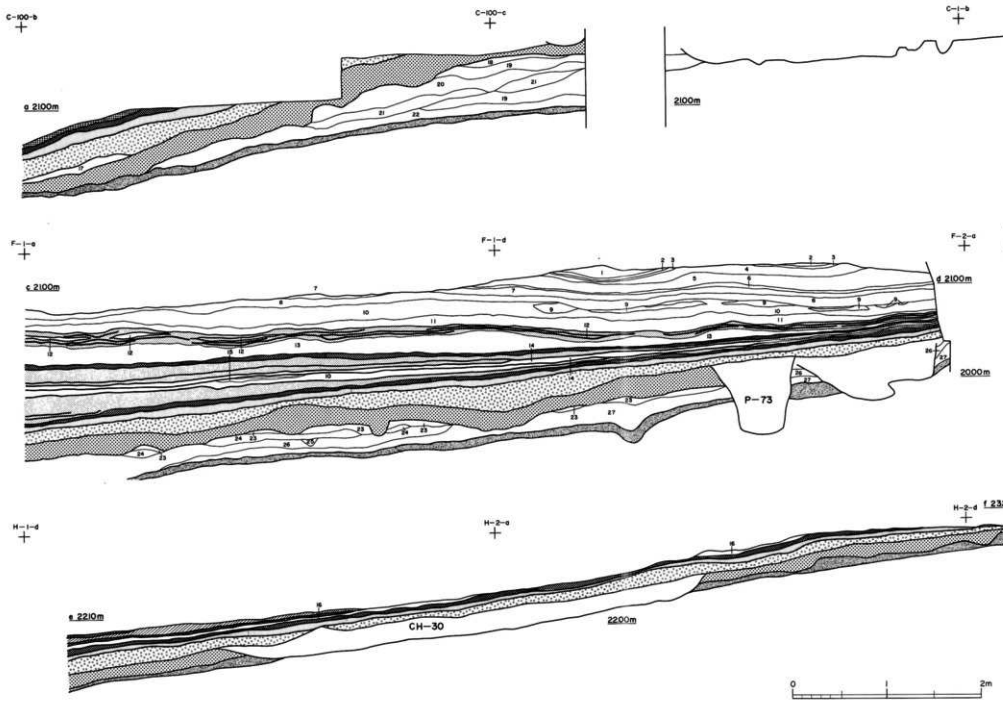
図版Ⅱ－1　中央メインベルトセクション（西側　S→N）

(4) 発掘の手順と遺物のとりあげ

遺構，遺物が密集して検出されることが予想され，さらに包含層の厚さが場所によって10～80cmと大きな差異があることが推定された。遺構，包含層を適確に把握して，遺物の平面的ひろがりを理解するために，発掘の手順，遺物の取りあげは，次のような方法をとった。

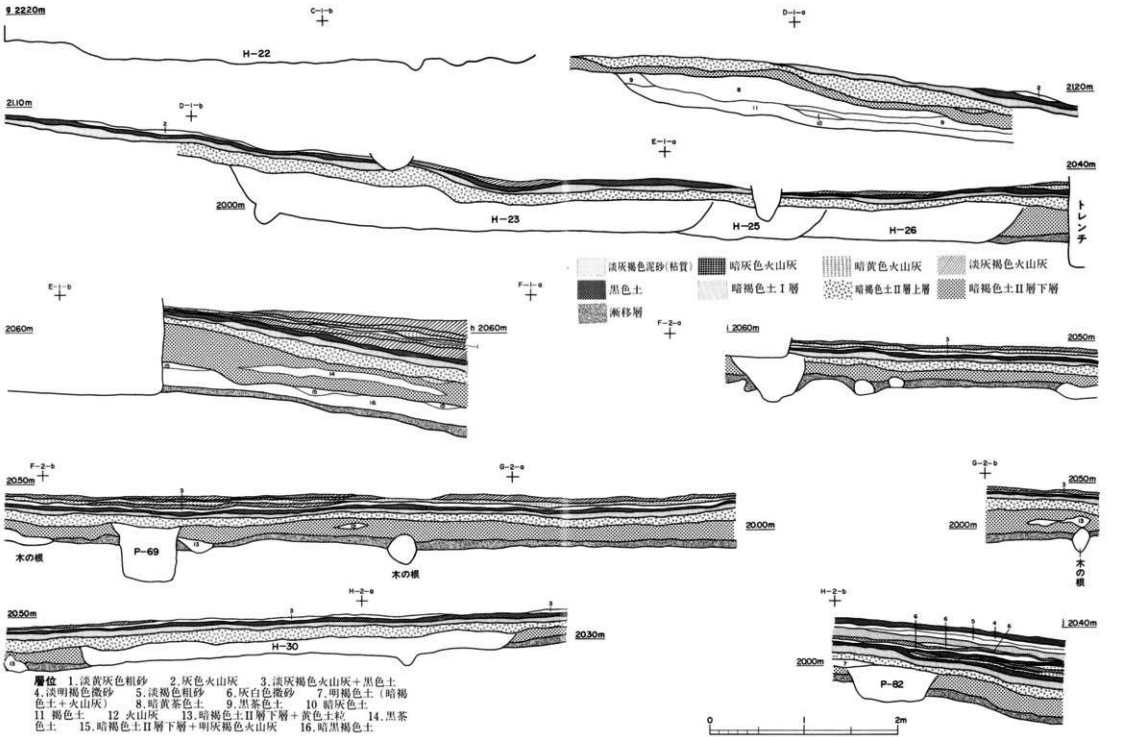
2.5m グリッドの周囲に幅10cmの土層観察用ベルトを残しながら，平面的に掘り下げ，土層の変化，遺物の出土状態に応じて遺物を区別し，メモを残してとりあげをおこなった。遺構と関連するものと考えられる遺物は，写真撮影，出土状況図作成の後にとりあげた。また遺構の床面や焼土，微細遺物の密集部分などについては，水洗い，水浮かしなどによってとりあげたものもある。

図版Ⅱ－2　作業風景（S→N）



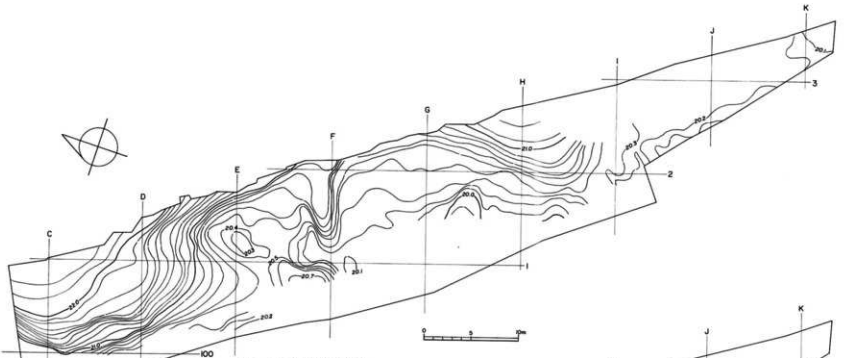
層位 1.褐色泥砂 2.暗褐灰色泥砂（非常に堅い） 3.暗茶灰色粗砂 4.淡褐灰色泥砂 5.暗灰色微砂 6.暗黄灰色泥砂(⑤と同質だが,黄色土粒を混入し,軽石を含まない) 7.黒褐色泥砂 8.灰褐色微砂 9.淡黄灰色粗砂 10.淡灰褐色微砂(明灰色微砂が不規則,互層に堆積する) 11.明灰色粗砂 12.灰色微砂 13.灰白色微砂 14.淡黄色砂泥 15.淡灰褐色粗砂 16.黒色土＋淡灰褐色火山灰 17.暗褐色土Ⅱ層上層＋少量の火山灰 18.暗黄茶色土（2～20mm大の軽石を含む，砂質） 19.暗黄茶色土（砂質） 20.暗茶灰色土（砂質） 21.黒茶灰色土(微小の軽石を少量含む,砂質) 22.暗黒褐色土(1～2cm大の軽石を少量含む,砂質) 23.暗褐色土Ⅱ層下層＋明灰褐色火山灰 24.暗褐色土Ⅱ層下層＋暗灰色土＋多量の軽石 25.黄色土ブロック 26.暗黒褐色土（暗褐色土Ⅱ層下層より軽石を多く含む） 27.淡褐色土（軽石を含まず，粘質）

図Ⅱ－5 東西メインベルトセクション図（南面）

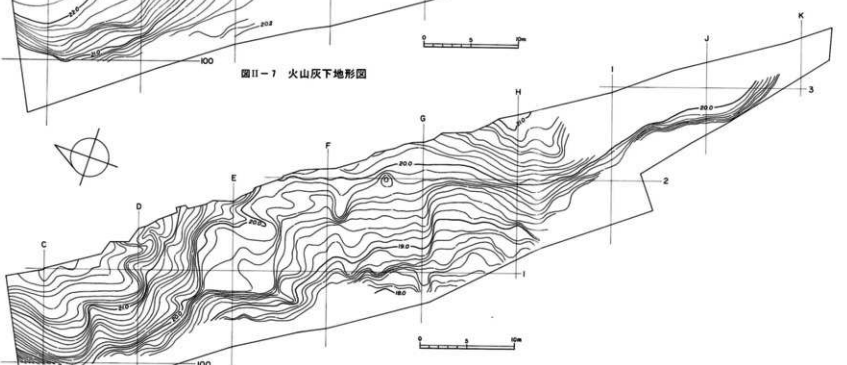


層位 1.淡黄灰色粗砂　2.灰色火山灰　3.淡灰褐色火山灰＋黒色土　4.淡明褐色微砂　5.淡褐色粗砂　6.灰白色微砂　7.明褐色土（暗褐色土＋火山灰）　8.暗黄茶色土　9.黒茶色土　10 暗灰色土　11 褐色土　12 火山灰　13.暗褐色土Ⅱ層下層＋黄色土粒　14.黒茶色土　15.暗褐色土Ⅱ層下層＋明灰褐色火山灰　16.暗黒褐色土

図Ⅱ－6　南北メインベルトセクション図（西面）



図Ⅱ－7　火山灰下地形図



図Ⅱ－8　最終面地形図

(5) 整理の方法

出土した遺物は，野外調査と並行して現地で水洗・注記作業をおこなった。小片あるいは微細なものを除いて，大多数の遺物には，発掘区と土層を注記してある。遺物台帳作成，遺物の分類・計測，遺構台帳作成等ののち，土器の復原，土器・石器の実測・製図，遺物集計およびその他の記録類の整理をおこなった。

遺物は，遺構別，発掘区別，分類別に，プラスチックコンテナ（縦60cm×横40cmで，深さ9cm，15cm，25cmの3種類）に納め，遺物収納台帳（索引簿）を付して，遺物台帳等の諸記録とともに保管される。

遺物および記録類のすべては，北海道教育委員会が保管する。

図版Ⅱ－3　室内整理作業風景

2．遺物の分類

出土した遺物の分類は，従来，当埋蔵文化財センターが使用している分類規準によった（註1）。

この分類基準は，新千歳空港建設用地内における美沢川流域遺跡群調査の成果をもとに作成し，のち北海道縦貫自動車道江別地区の発掘資料により修正したものである。今回は，さらに北海道縦貫自動車道登別地区および白老地区の発掘資料による追加をおこなっている（註2）。

土器は，縄文時代早期に属する資料をⅠ群とし，以下順次前・中・後・晩期を，Ⅱ群，Ⅲ群，Ⅳ群，Ⅴ群とした。続縄文時代や擦文時代に属する資料は出土していない。

石器については，定形的な石器をⅠ群～Ⅷ群に分け，石器のつくりかたにかかわる石核，剥片類をⅨ群とし，定形的な石器としては認定しがたいものを，加工痕や使用痕のある剥片・礫としてⅩ群をもうける。その他の礫，石製品，土製品，骨角器，漆器，木製品などには，分類記号はない。

註1　『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・高岸遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　昭和55年度

註2　『川上B遺跡』，『千歳5遺跡』，『虎杖浜3遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター　昭和57年度

土　器

〈Ⅰ　群〉

縄文時代早期に属する土器群　　本群はa，bの2類に分類され，後者はさらにb-1，b-2，b-3，b-4の4類に細分される。

a類　　貝殻文，条痕文のある土器群

b類　　縄文，撚糸文，組紐圧痕文，貼付文等のある土器群。今回の調査では出土していない。

b-1類　東釧路Ⅲ式に相当するもの

b-2類　コッタロ式に相当するもの

b-3類　中茶路式に相当するもの

b-4類　東釧路Ⅳ式に相当するもの

〈Ⅱ　群〉

縄文時代前期に属する土器群　　本群はa，bの2類に分類され，前者はさらにa-1，a-2の2類に細分される。

a類　　縄文尖底土器群　　今回の調査では出土していない。

a-1類　綱文土器とそれに伴う斜行縄文，羽状縄文，組紐回転文等の施された土器群

a-2類　春日町式，中野式に相当するもの

b類　円筒下層式に相当するもの　今回の調査では出土していない。

〈Ⅲ　群〉

縄文時代中期に属する土器群　　本群はa，bの2類に分類され，後者はさらにb-1，b-2，b-3類に細分される。

a類　円筒土器上層式に相当するもの

b類

b-1類　天神山式，見晴町式に相当するもの

b-2類　柏木川式，大安在B遺跡出土資料に相当するもの

b-3類　北筒式，ノダップⅡ式，静狩式，煉瓦台式に相当するもの

〈Ⅳ　群〉

縄文時代後期に属する土器群　　本群はa，b，cの3類に分類される。

a類　余市式，入江式に相当するもの　入江貝塚第3貝層出土資料(註3)，鳥崎遺跡出土資料（註4），大津遺跡B地点出土資料（註5）に相当するものと，涌元式，手稲砂山式（註6）に類似するものを含む。

b類　船泊上層式，手稲式および茶津洞穴Ⅳ層出土資料(註7)に相当するもの　ウサクマイ遺跡群C地点出土資料（註8）に類似するものを含む。

c類　堂林式および茶津洞穴Ⅲ層出土資料に相当するもの

〈Ⅴ　群〉

縄文時代晩期に属する土器群　　本群はa，b，cの3類に分類される。今回の調査では出土していない。

a類　大洞B式，大洞BC式に相当するもの　上ノ国式に類似するものを含む。

b類　大洞C_1式，大洞C_2式に相当するもの

c類　大洞A式に相当するもの　タンネトウL式を含む。

註3　名取武光・峰山巌　昭和33年　「入江貝塚」『北方文化研究報告』第十三輯

註4　森町教育委員会　昭和50年　『鳥崎遺跡』

註5　松前町教育委員会　昭和49年　『松前町大津遺跡発掘報告書』

註6　石川徹　昭和42年　「札幌郡手稲砂山出土の土器について」『北海道考古学』3

註7　小樽市博物館　昭和37年・昭和45年　『茶津洞窟遺跡群』

註8　千歳市教育委員会　昭和49年　『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』

石器

〈Ⅰ　群〉　石鏃・槍先類

A：石鏃

1：石刃鏃（今回は，出土していない）

2：細身で薄いもの　基部が内湾するもの

a：柳葉形のもの

b：五角形になるもの（今回は，出土していない）

c：大きめのもの（今回は，出土していない）

3：三角形のもの

（基部にえぐりのあるものも含む）

4：茎が明瞭に見られないもの

（ひし形のもの，基部が丸くなるもの）

5：茎をもつもの

8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

B：槍先・ナイフ

1：茎をもつもの

2：茎が明瞭に見られないもの

（ひし形のものも含む）

8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

〈Ⅱ　群〉　石錐（いしきり）類

A：石錐

1：刺突部をつくりだしたもの

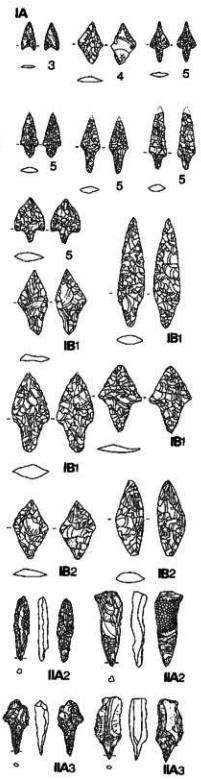
（刺突部が複数のものもある）

2：棒状のもの

3：棒状のものにつまみ部がつくりだされたもの

8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの



〈Ⅲ　群〉　ナイフ・スクレイパー類

A：つまみ付きナイフ

1：二次加工が片面全体に施され，その面の右側縁に急角度の刃部をもつもの

2：二次加工が片面全体に施されるもの

3：二次加工が周辺に施されるもの

4：両面加工のもの

5：横形のもの

8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

B：スクレイパー

1：石べらと称されるもの

2：まる形のもの（ラウンド・スクレイパー）

3：エンド・スクレイパー

8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

〈Ⅳ　群〉　石斧類

A：石斧

1：擦り切り手法によって製作されたもの

2：敲打痕（ペッキング）のみられるもの

3：打ち欠きによる整形がみられるもの

4：素材を大きく変形することなく，刃部のみに磨きがみられるもの

5：全面磨製のもの

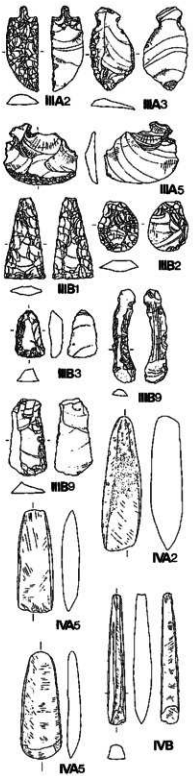
8：素材，未製品，すり切り残片，破片など

9：今後，分類を必要とするもの

B：石のみ

〈Ⅴ　群〉　たたき石，台石類

A：たたき石

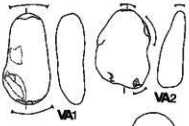


1：棒状の一端，もしくは両端にたたき痕がみられるもの

2：扁平礫の周辺にたたき痕がみられるもの

3：扁平礫の腹，背面にたたき痕がみられるもの（くぼみ石と称されるものを含む）

4：円礫状のもの

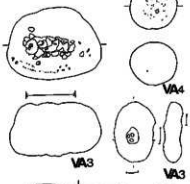


8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

B：台石（石器製作，その他の作業でテーブルとなったもの　出土状態などの状況証拠を重視）

1：台石（板状の面の平坦面に使用痕がみられるもの）



8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

〈Ⅵ　群〉　すり石・石皿類

A：すり石

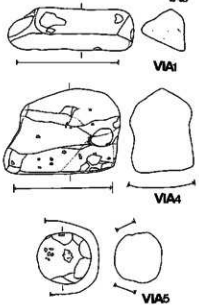
1：断面がすみまる三角形の礫の稜をすったもの

2：扁平礫の側縁をすったもの

3：扁平礫を半円状に粗く打ち欠き弦をすったもの（今回は，出土していない）

4：北海道式石冠と称されるもの

5：円礫状で，すり面が曲面のもの（側辺にたたき痕がみられるものが多い）

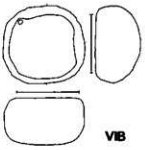


8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

B：石皿（すり面のあるもの）

1：石皿（板状の石の平坦面に，広くすり面がみられるもの）



8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

〈Ⅶ　群〉　石鋸（いしのこ）・砥石（といし）類

A：石鋸

1：石鋸（刃部が直線状になるもの）

8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

B：砥石

1：研磨面に溝があるもの

2：板状のもの（破損したものが多い）

3：角柱状のもの（4面を使ったものが多い）

8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

〈Ⅷ　群〉　石錘（いしおもり）類（今回は，出土していない）

A：石錘

1：打ち欠きを4ヶ所にもつもの

2：長軸の両端に打ち欠きをもつもの

3：短軸の両端に打ち欠きをもつもの

8：破片など

9：今後，分類を必要とするもの

〈Ⅸ　群〉　石核・剥片類

A：石核（剥片石器の素材となる原石等も含む）

B：剥片・破片

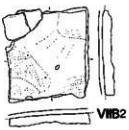
〈Ⅹ　群〉　加工痕，使用痕のみられる剥片・礫など

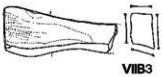
A：

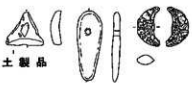
1：剥片に加工痕が見られ，今後，分類を必要とするもの（定形的な石器としては認定されないもの。彫器，ピエス・エス・キーユと呼称されるもの。それらの削片などを含む）

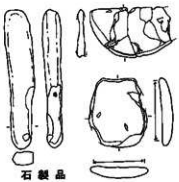
2：剥片に使用痕がみられるもの

B：礫に加工痕・使用痕がみられ，今後，分類を必要とするもの









Ⅲ　遺跡の環境と立地

1．自然環境

登別市は北海道の南西部に位置している。北から火山地帯・高原状台地・沖積平野と，北に高く南に低い地形で，南側は太平洋に面している。気候は温暖で，冬季は西～北西，夏季は東～南東の風が多く吹く。海洋の影響を強く受けるため，昼夜・夏冬の温度差は内陸部にくらべて少ない。

登別市の中央部に広がる札内台地は，ほぼ北西から南東に向って流れ，太平洋に注ぐ幌別川・登別川・来馬川などの中小河川によって谷が深く形成されている。

千歳5遺跡はこれらの河川の一つである岡志別川の上流域左岸に位置し，谷の開口部より約0.5km上流左岸の平坦地（標高20m）およびそれに続く丘陵西斜面（標高20～33m）にある。岡志別川は札内台地中央付近に源を発する延長約5kmの河川で，千歳町を経て太平洋に注いでいる。千歳5遺跡が所在する上流部分はハルキオカシペツ〔harki（左の）okas-pet（オカシペツ川）〕と呼ばれている。

今回の調査区は，57年度発掘調査区の西側に隣接し，谷底の平坦地で古くから畑地，町道として利用されていた。当地区の北・北東側の丘陵は札内台地中央部より南へのびる尾根の一つで，この付近は戦後放牧地として利用されていた。しかし現在ではクマイザサと灌木の疎林となっている。

ハルキオカシペツは，最寒冷期の海水面低下の頃と推定される谷地形の形成以後，徐々に水

図Ⅲ－1　遺跡周辺の地形および概念図

位が上昇したものと考えられる。昭和58年9月25日の豪雨のとき，ハルキオカシベツは洪水を起しているが，今回の調査区内にも縄文時代以降いくたびか洪水を起した痕跡がみられた。図Ⅱ-4の土層柱状図，図Ⅱ-5の土層断面図には，砂礫層，砂層，シルト層の互層が認められる。また調査区のあたりは，泥炭層の発達する比較的平静な滞水期も認められ，その泥炭層のなかには降下火山灰7枚以上がよく封じこめられている。それらの降下火山灰のうちで図Ⅱ-4の4は，噴出源が白頭山と推定される苫小牧火山灰[B.C.10]と呼ばれるもので，厚さ4～6cmほどの良好な堆積状態である。同じく図Ⅱ-4の7は有珠bと推定される。[A.D.17]

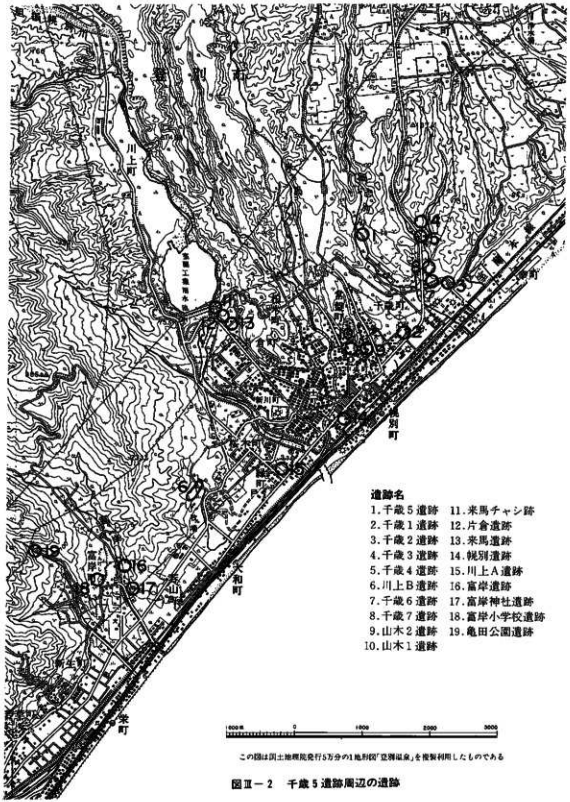
2．千歳5遺跡周辺の遺跡

北海道教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地分布図には，本遺跡のほかに千歳1遺跡・千歳2遺跡・千歳3遺跡・千歳4遺跡・千歳6遺跡・千歳7遺跡の7か所の遺跡が登載されている[12,13,14]（図Ⅲ-2参照）。このうち千歳1・4・5[15,16]・6遺跡は発掘調査が行なわれ，千歳1遺跡を除く3遺跡はすでに報告書が刊行されている。[17,18]

千歳1遺跡は岡志別川下流右岸南西部の河岸段丘上に所在し，縄文時代前期の遺物・遺構が検出されている。[19] 千歳4遺跡は岡志別川支流のエコイカウンオカシベツ川とシンノシケウンオカシベツ川の合流点に近い丘陵西斜面に所在し，縄文時代早期の遺物，中期後葉から後期中葉の遺物・遺構が検出されている。[20] 千歳6遺跡は岡志別川下流北東岸の台地端部に所在し，縄文時代早・前期の遺物，中期後葉から後期中葉の遺物・遺構が検出されている。[21] また千歳2遺跡は岡志別川下流の北東岸，千歳6遺跡の南東海岸寄りに所在し，縄文時代早期から後期の遺物と恵山式土器片が採集されているという。[22] 千歳3遺跡は千歳4遺跡のほぼ北，エコイカウンオカシベツ川の左岸，丘陵裾部に所在し，恵山式土器片が採集されている。[23] 千歳7遺跡はハルキオカシベツ川とシンノシケウンオカシベツ川の合流点付近，千歳6遺跡の北西に所在し，縄文時代中期の土器片などが採集されている。[24] これらの遺跡はほぼ札内台地の南西部，岡志別川の本・支流付近に近接し，立地条件も非常に似かよっている。遺物の出土状況，遺構の検出状態などから見ると，縄文時代早・前期と，縄文時代中期後葉から後期中葉にかけて，さらに続縄文時代と人々の生活の場となっていたと考えられる。

この他に幌別川・来馬川・富岸川沿いには来馬チャシ・片倉遺跡など十数か所の遺跡が報告され，また埋蔵文化財包蔵地調査カードに登載されている（図Ⅲ-2参照）。このうち幌別川と富岸川のほぼ中間地点，丘陵先端部に所在する川上B遺跡は，当センターにより継続して発掘調査が行なわれており，縄文時代早期から後期にいたる遺物・遺構が検出されている。[25] また富岸遺跡も当センターにより発掘調査が行なわれ，縄文時代早期から後期の遺物が検出されている。[26]

このように札内・高野台の台地が海岸近くまでのびる幌別・富岸地区は上述のように多くの遺跡が点在している。とくに台地の先端部，しかも台地を縦断する中小河川の周辺部には縄文時代早期から中・後期にかけての遺跡が多い。また台地と海岸にはさまれた帯状の平野部には



この図は国土地理院発行5万分の1地形図「登別温泉」を複製利用したものである

図Ⅲ－2　千歳5遺跡周辺の遺跡

縄文時代晩期・続縄文時代・擦文時代の遺物が採集されている。[註18] このようなことからこの地区周辺はほぼ継続的に人々の生活の場となっていたことがわかる。

註(1) 東は東経141°11′22″から西は東経140°58′15″まで，南は北緯42°20′59″から北は北緯42°33′13″におよんでいる。(登別町史編纂委員会『登別町史』「第一編　第一章　一　位置・面積・境界」昭和42年刊　参照)

註(2) 登別町史編纂委員会『登別町史』「第一編　第一章　五　気候」昭和42年刊　参照。

註(3) 標高100～200mの地帯で，地形は緩傾斜ないし緩波状段丘である。クッタラ火山から噴出した登別熔結凝灰岩を基岩とし，その上に火山性の土壌がのっており，未耕地にはカシワ・ミズナラ・カバ類・イタヤ類が混生し，下草にはクマイザサ・ミヤコザサがはびこっている。(登別町史編纂委員会『登別町史』「第一編　第一章　二　地勢」昭和42年刊　参照)

註(4) 「幌別町のアイヌ語地名」(知里真志保・山田秀三『北方文化研究報告』第十三輯　昭和33年3月)には「語源はよくわからないが，O(川尻)，Kas(魚捕小屋)，Un(ある)，Pet(川)のようにも聞える」と説明されている。また山田秀三氏は『北海道の地名』(北海道新聞社刊　昭和59年10月31日発行)で「他地名の同名，類名から考えるならば，オ・カシ・ペツ『O-Kash-Pet 川尻に・仮小屋（ある)・川』と解すべきであろう」としている。

註(5) 「千歳5遺跡」(財北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第12集　昭和57年度

註(6) 北海道教育大学　春日井昭教授（札幌分校　地学）の御指摘による。

註(7) 北海道火山灰命名委員会

註(8) 登別市教育委員会「札内台地の縄文時代集落址―北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書」1982年　第一章　第一節には，千歳6遺跡の東側，丘陵舌状部分に四か所の遺物散布地が報告されている。

註(9) 昭和57年度に当センターによって今年度調査区に隣接する東側斜面3,980㎡の発掘調査が行なわれ，昭和58年3月に報告書が刊行されている。

註(10) 千歳1・6遺跡は昭和56年度に登別市教育委員会により発掘調査が行なわれ，千歳6遺跡については昭和57年3月に報告書が刊行されている。千歳4遺跡は昭和55年度に当センターにより発掘調査が行なわれ，昭和56年3月に報告書が刊行されている。

註(11) 登別市教育委員会「札内台地の縄文時代集落址―北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書」1982年　第一章　註(3)　19頁。

註(12) 「社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡」(財北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第1集　昭和55年度。

註(13) 登別市教育委員会「札内台地の縄文時代集落址―北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書」1982年。

註(14) 登別町史編纂委員会「登別町史」「第一編　第一章　三　登別町の遺跡」昭和42年刊によると「北海道ソーダ工場裏」とされるものが千歳2遺跡に相当するものと思われる。

註(15) 北海道教育委員会　埋蔵文化財包蔵地調査カード　千歳3遺跡　昭和55年11月12日作成

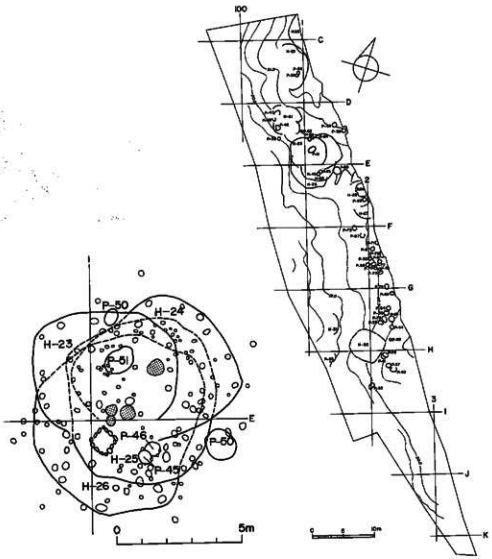
註(16) 北海道教育委員会　埋蔵文化財包蔵地調査カード　千歳7遺跡　昭和55年11月12日作成

註(17) 「川上B遺跡」(財北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第13集　昭和55・57年度

註(18) 註(3)に同じ。

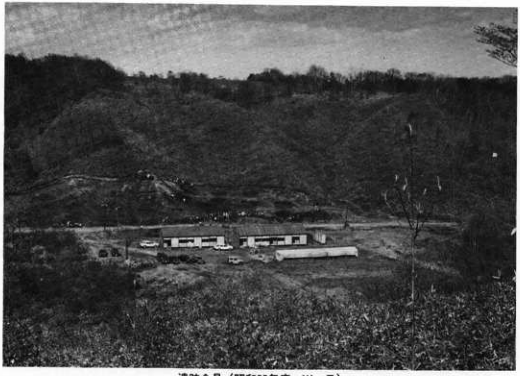
註(19) 登別町史編纂委員会「登別町史」「第一編　第二章　三　登別町の遺跡」「第三章　一　幌別地区」昭和42年刊

Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物

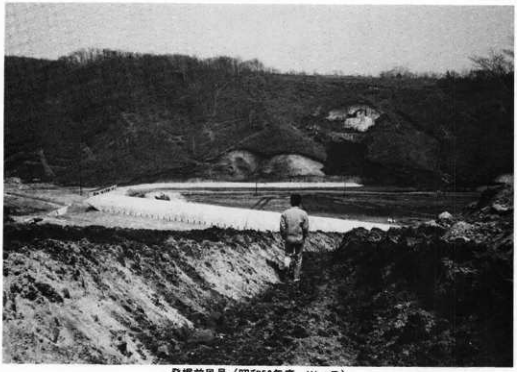


図Ⅳ－1　遺構位置図

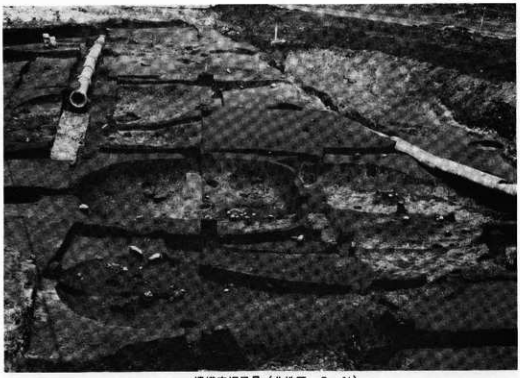
図版Ⅳ－1



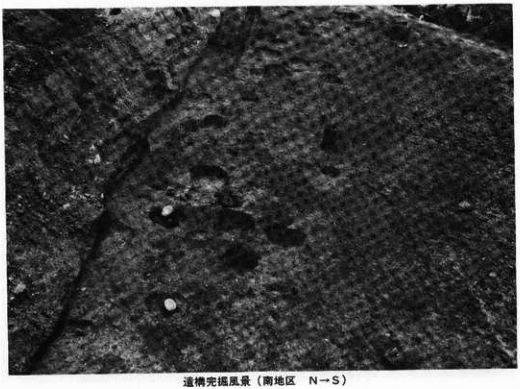
遺跡全景（昭和57年度　W→E）



発掘前風景（昭和59年度　W→E）

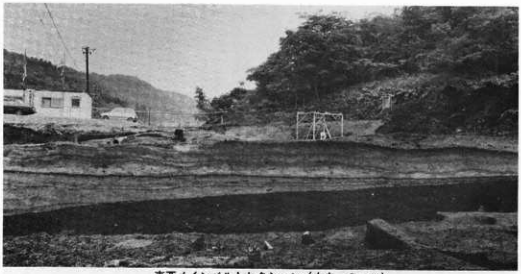


遺構完掘風景（北地区　S→N）



遺構完掘風景（南地区　N→S）

図版Ⅳ－3



東西メインベルトセクション（中央　S→N）

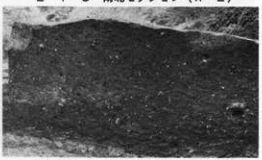
南北メインベルトセクション（→F-2-b←　W→E）

南北メインベルトセクション（→G-2-a←　W→E）

東西メインベルトセクション（北　S→N）

E－1－C　南北セクション（W→E）

G－1－d－ハ　北セクション（S→N）



E－100－d　東西セクション（N→S）

作業風景（黒色土除去　SE→NW）

作業風景（北地区　暗褐色土Ⅰ層除去　S→N）

暗褐色土Ⅰ層出土遺物（G－1－d　S→N）

暗褐色土Ⅰ層出土遺物(D－100－d－ニ　S→N)

図版Ⅳ－5

作業風景（北地区　暗褐色土Ⅱ層上層除去　S→N）

作業風景（南地区　暗褐色土Ⅱ層上層除去　W→E）

暗褐色土Ⅱ層上層出地遺物
（G－2－C　S→N）

暗褐色土Ⅱ層上層出土遺物
（D－1－C－イ　E→W）

暗褐色土Ⅱ層上層出土遺物
（F－1－d－ニ　S→N）

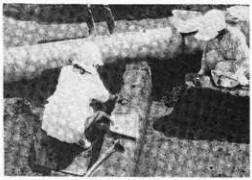
作業風景（暗褐色土Ⅱ層下層除去　S→N）

暗褐色土Ⅱ層下層出土遺物
（F－2－a－イ　SE→NW）

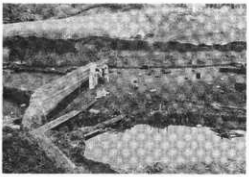
作業風景（南地区　暗褐色土Ⅱ層下層除去　W→E）

暗褐色土Ⅱ層下層出土遺物
（F－2－a－イ　W→E）

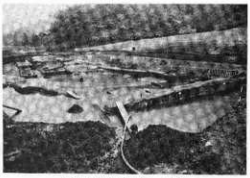
遺構調査風景（H－23　E→W）



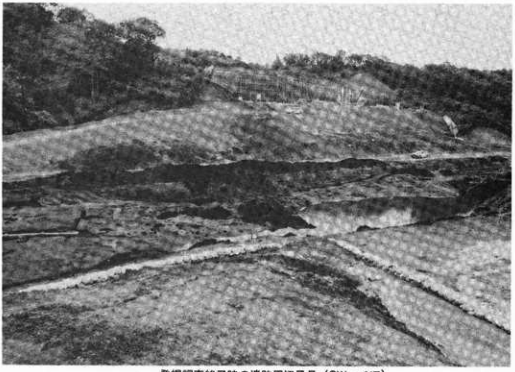
遺構調査風景（H－24　W→E）



土層剝ぎ取り作業風景（SW→NE）



遺跡冠水状態（S→N）



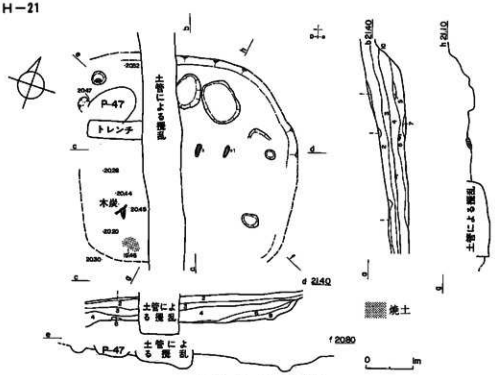
発掘調査終了時の遺跡周辺風景（SW→NE）

1．はじめに

本遺跡の調査により竪穴住居跡11か所，土壙43か所の遺構が検出された。本章ではこれら遺構の構造と出土遺物について記述する。遺構番号は昭和57年度からの継続番号とし，検出順に付した。土壙はP-38から87までの遺構番号を付しているが，このうち41，42，43，60，62，68，72は欠番となっている。遺構の平面形・規模は確認面でのものである（長径・上場／下場×短径・上場／下場×最深長）。また出土遺物の計測値は最大値を示し，破損品については（　）で現存値を示している。P-45・46，P-53・54，P-58・61はまとめて記載した。

2．住居跡

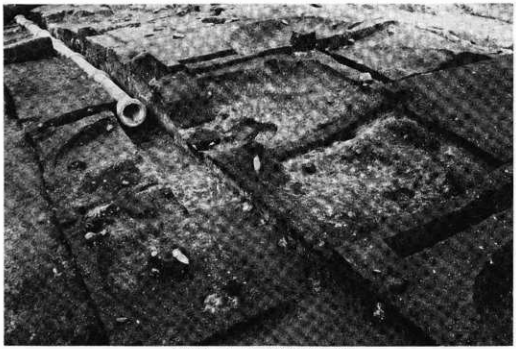
H－21



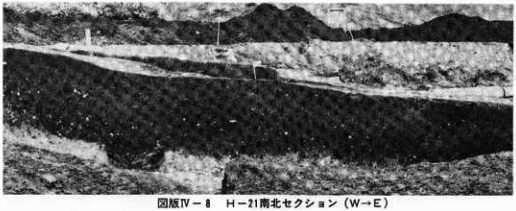
図Ⅳ－2　H－21実測図

層位　1．黄灰色火山灰　2．暗褐色土Ⅰ層　3．暗褐色土Ⅱ層上層　4．暗褐色土（少量の木炭，赤褐色火山灰，軽石を含む）　5．黒褐色土(火山灰を多く含む)　6．暗茶褐色土　7．茶褐色土(粘質)　8．焼土　9．暗茶褐色土（木炭を多量に含む）　10．暗褐色土Ⅱ層下層

D-100-d-イ・ロ・ハ・ニ，調査区北西，北から南へ傾斜する緩斜面に位置している。ほぼ南北に掘られた溝（地元の人々の話によると，戦時中土管を埋設するために掘られた溝であるという）の東壁断面を観察したところ，暗褐色土Ⅱ層下層上面よりの落ち込みが認められ，住居跡であることを確認した。くぼみの中央で直交するセクションベルトを残し掘り下げたけれども，



図版Ⅳ－7　H－21完掘（S→N）

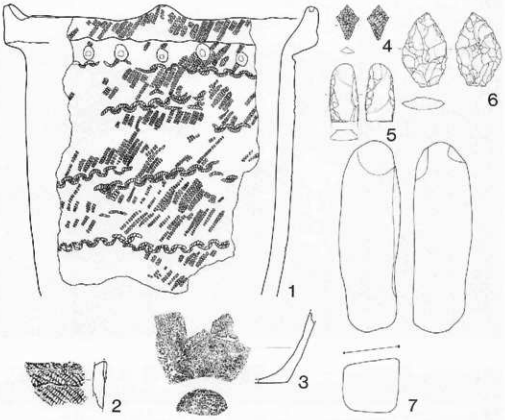


図版Ⅳ－8　H－21南北セクション（W→E）

北壁以外は立ちあがりが不明瞭で，全体の平面形，規模はわからない。住居跡の東側では地山の掘り込みが二重にめぐるような形状を示しているが，二つの住居跡が重複している可能性もあるが，積極的な証拠は認められなかった。床面は南に傾斜している。柱穴と思われる小ピットは四個検出されている。北側では楕円形と隅丸長方形のピットが検出されたが，これらは住居跡にともなうものと思われる。

床面から出土した深鉢（図Ⅳ-3　1）は，口縁が平坦で縄文が施されている。当遺跡から出土している北筑式土器相当の土器の中でも新しいものであろう。このことから当住居跡の構築時期は縄文時代中期後葉と推測される。

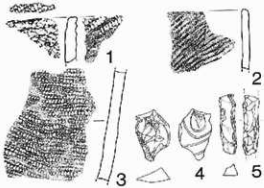
図Ⅳ-3　4の石鏃は，図Ⅳ-2の台石（S-1）の下から出土している。



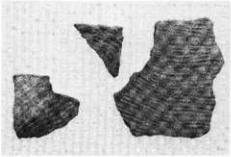
図Ⅳ－3　H－21出土遺物（床面）

図版Ⅳ－9　H－21出土遺物（図Ⅳ－3　1）

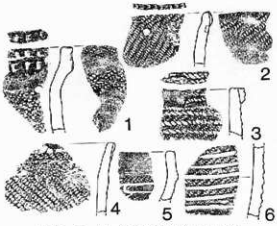
図版Ⅳ－10　H－21出土遺物（図Ⅳ－3）



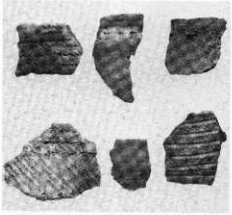
図Ⅳ－4　H－21出土遺物（覆土下層）



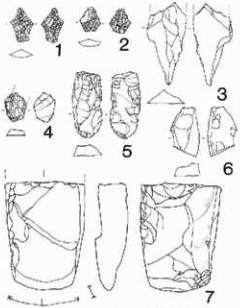
図版Ⅳ－11　H－21出土遺物
（図Ⅳ－4　1・2・3）



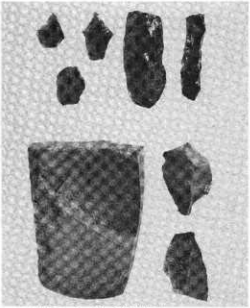
図Ⅳ－5　H－21出土遺物（覆土上層）



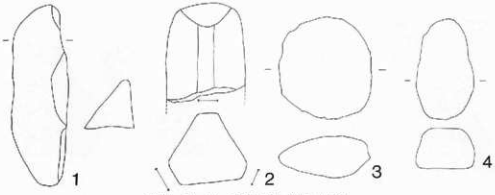
図版Ⅳ－12　H－21出土遺物（図Ⅳ－5）



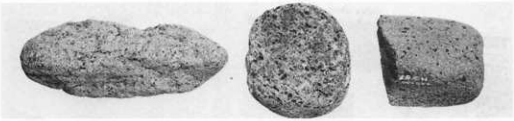
図Ⅳ－6　H－21出土遺物（覆土上層）



図版Ⅳ－13　H－21出土遺物
（図Ⅳ－4　4・5　図Ⅳ－6）



図Ⅳ－7　H－21出土遺物（覆土上層）



図版Ⅳ－14　H－21出土遺物（図Ⅳ－7）

上　器	器b-2	器b-3	器a	器b	器c	不明	小計	石器・礫	石斧	石鏃	石錐	スクレイパー	石斧	たたき石	磨り石	砥石	礫	フレイク	剥片	小計
床　面		4	13			6	23	床　面	1	1			1	1					3	7
覆土下層		4	22			14	40	覆土下層								1		1	2	4
覆土上層	2	54	60	7	2	56	201	覆土上層	1								1	12	23	7	44
小　計	2	62	115	7	2	76	264	小　計	2	1			1	1	1	1	1	13	25	10	54

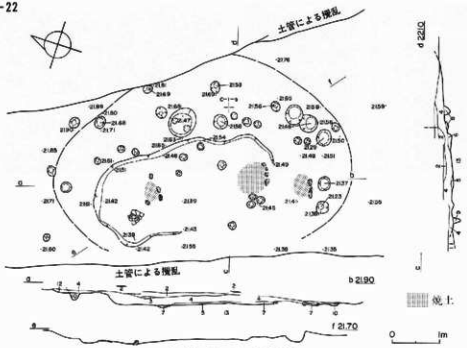
表Ⅳ－1　H－21出土遺物点数一覧

図番号		名　称	出土層位	分　類	胎　土		色　調	成　形
図Ⅳ-3	1	土　器	灰　層	器b-3	内面色調	外面色調	胎土色調	
	2	〃	〃	〃a	淡橙色	明橙色	淡茶灰色	口径25.4cm器高(29.0cm)内面は円凸が多く、不定方向にナデ調整。
	3	〃	〃	〃	暗灰色	暗灰色	淡褐色	内面はタテ方向にナデ調整、他成員好整備。
					暗灰色	暗灰色	暗黒褐色	内面はていねいなヨコナデ調整、小穴・薄手、全体に軟質。
図Ⅳ-4	1	土　器	覆土下層	器b-3	淡橙灰色	暗褐色	淡茶灰色	二条の隆線文。全体につくりは粗雑である。
	2	〃	〃	〃a	淡黒褐色	暗灰色	淡黒色	小穴・薄手。全体に軟質・石英を含む。
	3	〃	〃	〃	淡橙灰色	暗灰色	淡褐灰色	内面はタテ・ヨコ方向に調整、他成員好。
図Ⅳ-5	1	土　器	覆土上層	器b-3	褐　色	暗灰色	暗茶灰色	内面に縄文あり。その上に部分的にヨコナデ痕。他は粗い。
	2	〃	〃	〃	淡褐色	茶灰色	淡茶灰色	全体に軟質。粗土は褐色。長石を多く含む。
	3	〃	〃	〃	黄灰色	暗褐灰色	暗茶灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。他成員多い。
	4	〃	〃	〃	暗褐灰色	暗黄灰色	暗黄色	長石・石英・小石が入り器面にひび割れがある。
	5	〃	〃	〃a	明灰色	暗黒褐色	明灰色	内面研磨。外面には縄文痕有り。他成員整形良。
	6	〃	〃	〃	黒褐色	淡灰褐色	暗茶褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。他成員好整備。

図番号		名　称	出土層位	分　類	材　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
図Ⅳ-3	4	石　鏃	床　面	ⅠA8	黒曜石	(2.8)	1.8	0.5	(1.6)
	5	石　斧	〃	Ⅳ8	緑色泥岩	(4.6)	(2.3)	(0.8)	(14.1)
	6	石　錐	〃	ⅠBⅣ	黒曜石	(5.9)	3.6	1.0	(19.5)
	7	角柱礫	〃	XB	安山岩	36.4	9.4	8.5	5,384g
図Ⅳ-4	4	スクレイパー	覆土下層	ⅢB8	頁　岩	(3.8)	2.7	1.1	(11.0)
	5	〃	〃	〃	黒曜石	(4.8)	1.2	0.9	(7.0)
図Ⅳ-6	1	石　鏃	覆土上層	ⅠA5	黒曜石	(2.7)	1.6	0.5	(1.6)
	2	フレイク	〃	XA2	〃	1.0	1.7	0.6	1.7
	3	石　錐	〃	ⅡA2	〃	(5.5)	3.1	1.1	(16.1)
	4	フレイク	〃	XA2	黒曜石	(2.4)	1.8	0.5	(2.0)
	5	〃	〃	XA2	〃	(5.2)	2.3	0.8	(14.6)
	6	砥　石	〃	ⅦB8	砂　岩				(9.6)
	7	石　斧	〃	Ⅳ A8	緑色泥岩	(8.6)	(6.4)	(2.3)	(290.0)
図Ⅳ-7	1	礫	覆土上層	XB	安山岩	14.4	4.4	3.8	380.9
	2	磨り石	〃	ⅦA1	〃	(7.4)	6.3	5.6	460.0
	3	礫	〃	XB	頁　岩	8.1	7.4	3.3	117.2

表Ⅳ－2　H－21掲載遺物一覧

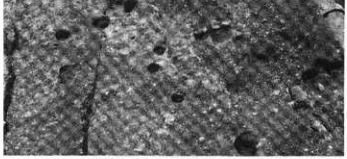
H－22



図Ⅳ－8　H－22実測図

層位　1．暗褐色土Ⅰ層　2．暗褐色土Ⅱ層上層　3．暗黒茶色土　4．暗黒茶色土（軽石を多く含む。下層に炭化物を含む）　5．暗黄茶色土（焼土を含む）　6．茶黄色土（汚れている）　7．暗黒茶色土＋焼土　8．褐色土（軽石を少量含む）　9．暗茶灰色土　10．黒褐色土（砂質）　11．暗茶褐色土　12．暗黒茶色土　13．地山

C-100-c-ロ・ハ，C-100-d-イ・ロ・ハ・ニ，C-1-a-イ・ロ，C-1-b-イ，調査区の北部，東から西へゆるやかに傾斜する尾根の先端部に位置している。壁の立ちあがりは北・東側の一部を除き不明であるが，小ピットの検出状況から見て，長軸方向　N→W18°，南北約6.40m，東西約4.50mのほぼ長円形の平面形と思われる。C-100-c-ニ区を掘り下げたところ地山上で焼土が



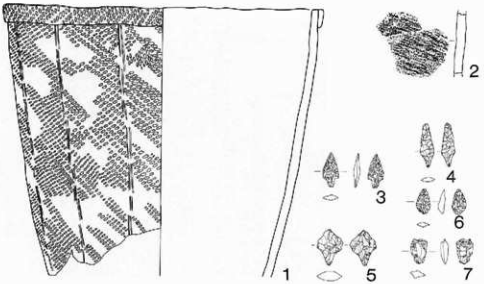
図版Ⅳ－15　H－22完掘（N→S）

図版Ⅳ－16　Ｈ－22東西セクション（Ｓ→Ｎ）

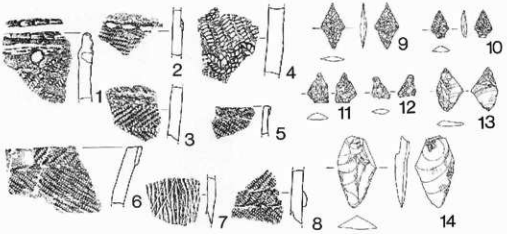
図版Ⅳ－17　Ｈ－22遺物出土状況と石組炉跡（Ｗ→Ｅ）

検出された。付近を精査すると，焼土を囲むように軽石が５個検出された。南北二本，東西二本のセクションベルトを残し全体的に掘り下げた結果，住居跡であることを確認した。この地区は道路敷設の際ほとんどが削平されており，掘り込み面を確認することができなかった。床面は東・北側でわずかに地山を掘り込んでつくられており，西に向って傾斜している。また中央部東寄りには10～20cm程の段がある。検出された３か所の石組炉跡の石が置かれている面が床面と思われる。小ピットは全部で32検出された。外側の小ピットはほぼ垂直に掘られている。石組炉跡は中央部長軸方向に３か所検出された。３か所とも掘り込みはなく，焼土を囲むように軽石，河原石が数個並んでいるにすぎない。これらの先後関係は不明である。ほぼ同時に使用されていたかも知れないが，判断しがたい。

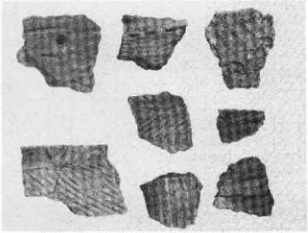
北側の石組炉跡の北西側，床面上から内面を下にし，押しつぶされた状態でⅣ群ａ類（余市式）に相当する土器が出土している。



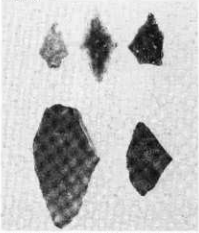
図Ⅳ－９　Ｈ－22出土遺物（床面）



図Ⅳ－10　H－22出土遺物（覆土下層）



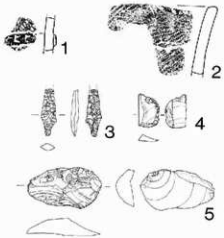
図版Ⅳ－18　H－22出土遺物（図Ⅳ－10　1～8）



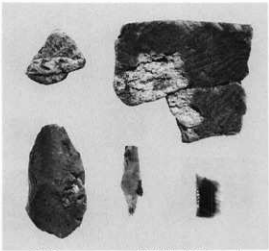
図版Ⅳ－19　H－22出土遺物(図Ⅳ－10　9～14)

図版Ⅳ－20　H－22出土遺物（図Ⅳ－9　1）

図版Ⅳ－21　H－22出土遺物(図Ⅳ－9　2～7)



図Ⅳ－11　Ｈ－22出土遺物（覆土上層）



図版Ⅳ－22　Ｈ－22出土遺物（図Ⅳ－11）

土器	Ⅲb-2	Ⅲb-3	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	不明	小計	石器・礫	石鏃	石槍	石錐	スクレイパー	石斧	たたき石	すり石	石皿	磨石	礫	フレイク	剥片	小計
石器炉跡内			2				1	3	石器炉跡内									3	1		4
床面		3	3				15	19	床面	4								3	30		37
覆土下層	1	28	68				54	151	覆土下層	3				1				2	30		36
覆土上層		12	12				35	39	覆土上層	2									5	3	10
小計	1	44	85				82	212	小計	9				1				8	26	3	47

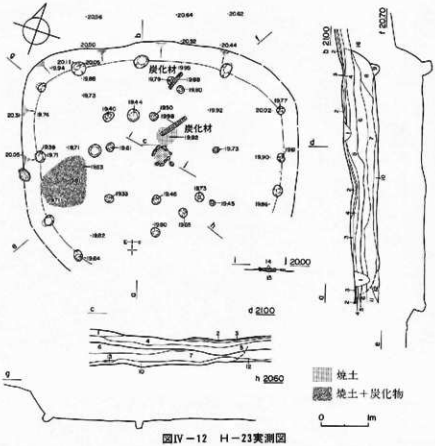
表Ⅳ－３　Ｈ－22出土遺物点数一覧

図番号	石器	形	出土層位	分類	胴部色調	外面色調	土色調	備考
図Ⅳ-9	1	土器	床面	Ⅳa	淡灰色	淡褐色	暗茶灰色	口径26cm器底（21.6cm）口縁は平坦、海綿質軟質。
	2	〃	〃	〃	淡褐色	褐色	暗褐灰色	内面は明色が多い。タテ方向にナデ広がり、絶成良好堅緻。
図Ⅳ-10	1	土器	覆土下層	Ⅲb-2	淡灰褐色	淡褐色	淡灰褐色	内面は黒色が多い。全体につくりが粗雑である。堅い。
	2	〃	〃	Ⅲb-3	暗褐色	暗灰色	淡褐色	内面はタテ方向にていねいなミガキ調整。絶成良好堅緻。
	3	〃	〃	〃	黄灰色	明灰褐色	茶灰色	内面はていねいなコテナデ調整。外面に縄文端による押し、ひき出あり。堅緻。
	4	〃	〃	〃	明褐灰色	淡褐灰色	淡茶灰色	内面は不定方向にナデ広あり。胎土に3～5mmの小石が入る。胎土は粗い。
	5	〃	〃	Ⅳa	明褐橙色	淡褐色	灰色	内面はていねいなコテナデ調整。小型・薄手。
	6	〃	〃	〃	淡黄色	黄灰色	淡茶灰色	口縁は平坦。内面・口縁はていねいなコテナデ調整。長石を多量に含む。
	7	〃	〃	〃	暗茶褐色	暗灰色	暗茶褐色	内面はナデ調整。外面は無節縄文による粗雑な成種。小型・薄手。
	8	〃	〃	〃	暗褐色	暗褐色	淡褐色	長石・小石を多く含む。胎土は粗い。
図Ⅳ-11	1	土器	覆土上層	Ⅲb-3	褐色	明灰色	淡褐灰色	全体につくりが粗雑で軟質。
	2	〃	〃	Ⅳa	明灰色	淡褐色	淡茶灰色	内面はていねいなコテナデ調整。胎土は良質で緻密。

図番号	石器	名称	出土層位	分類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
図Ⅳ-9	3	石斧	床面	ⅠA5	黒曜石	2.7	1.2	0.5	1.2
	4	〃	〃	〃	頁岩	(3.5)	1.1	0.35	(1.2)
	5	〃	〃	〃	〃	2.9	2.0	0.75	3.1
	6	〃	〃	ⅠA6	黒曜石	(2.0)	1.1	0.5	(1.3)
	7	フレイク	〃	ⅡA2	〃	(1.95)	(1.25)	(0.6)	(1.8)
図Ⅳ-10	9	石鏃	覆土下層	ⅠA4	黒曜石	3.7	1.9	0.45	1.5
	10	〃	〃	ⅠA5	頁岩	(2.2)	1.4	0.5	(0.9)
	11	〃	〃	ⅠA6	黒曜石	(2.35)	(1.6)	0.35	(1.8)
	12	〃	〃	〃	〃				(1.7)
	13	フレイク	〃	ⅡA2	〃	(3.8)	(2.1)	0.4	(2.5)
	14	〃	〃	〃	頁岩	(5.7)	(3.0)	1.05	(14.2)
図Ⅳ-11	3	石鏃	覆土上層	ⅠA5	頁岩	(4.7)	1.2	0.6	(2.2)
	4	フレイク	〃	ⅡA2	黒曜石	2.7	1.6	0.5	1.9
	5	〃	〃	〃	頁岩	5.8	3.2	1.4	24.2

表Ⅳ－４　Ｈ－22掲載遺物一覧

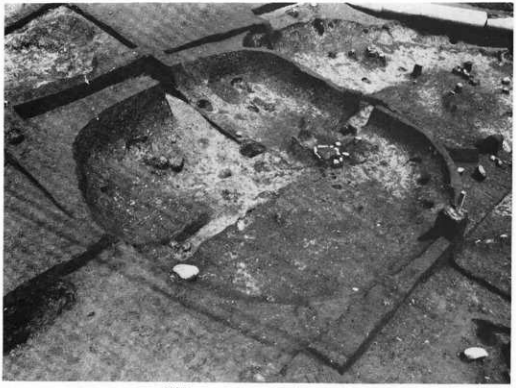
H－23



図Ⅳ－12　H－23実測図

層位　1．攪乱　2．淡灰褐色火山灰　3．黒色土　4．暗褐色土Ⅰ層　5．暗褐色土Ⅱ層上層　6．暗黒茶色土（砂質）　7．黒茶色土　8．暗茶黄色土(㋐より大きな軽石を含む)　9．黒褐色土（砂質）　10．黒茶黄色土(㋐＋炭化物＋少量の黄色土)　11．淡黒色土　12．暗黄褐色土　13．焼土　14．黄灰色土（焼土，骨片を含む）　15．暗茶色土（炭化物を含む）　16．暗褐色土Ⅱ層下層

D-100-c-ハ・ニ，E-100-d-ニ，D-1-b-イ・ロ・ハ・ニ，E-1-a-イ，調査区中央部北側，南へ傾斜する緩斜面に位置している。北壁は地山を掘り込んでいる。床面はほぼ平坦であるが，わずかに南へ傾斜している。長軸方向　N→E 72.5′，東西約5.92m，南北約4.90mの隅丸長方形であろうと思われる。北壁の最深長は約0.44mである。掘り込み面は暗褐色土Ⅱ層上層中か上面と思われる。北・北西壁の立ちあがりは確認できたけれども，他の壁は明瞭ではない。床面の東側では地山より10cm程上に軽石・炭化物・黄色土を多量に含む暗茶色土が堆積しており，石組炉はこの層の上にすえられていた。この汚れた土の上面が生活面と考えられる。石組炉跡の北側には丸太材状の炭化材が北から南へ向って数本確認され，この下には焼土が数cm程堆積していた。また東壁際には1.2m×1.0mの範囲に厚さ10cm程の焼土と炭化物が堆積していた。小ピットは24個検出され，このうち壁際には内側に傾く小ピットが10個検出された。また



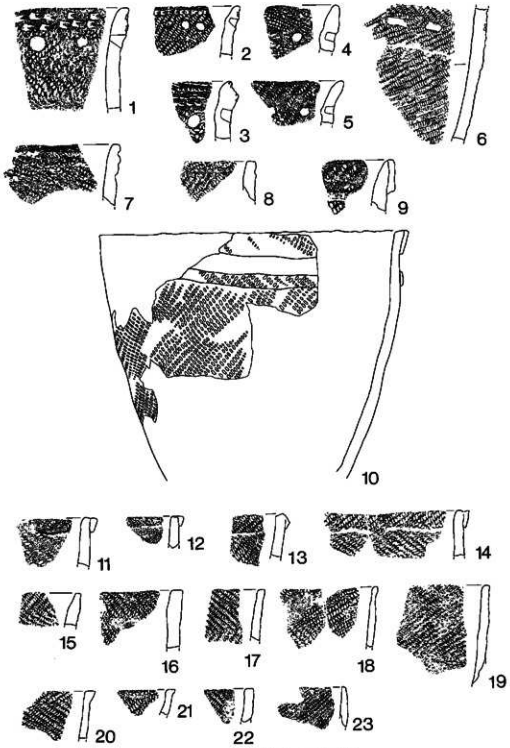
図版Ⅳ－23　H－23完掘（S→N）

図版Ⅳ－24　H－23南北セクション（E→W）

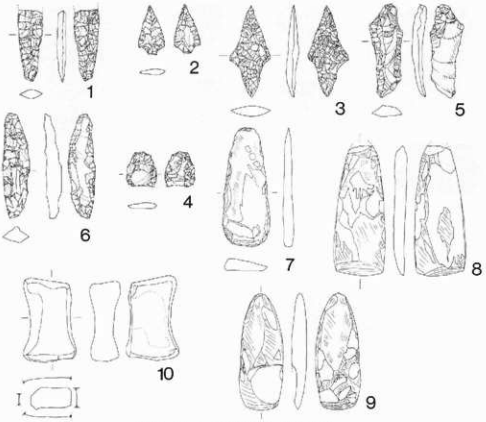
図版Ⅳ－25　H－23石組炉跡（S→N）

石組炉を長方形状に取り囲むように，垂直に掘られた深い小ピットが8個検出された。これらの小ピットはこの住居跡にともなうものと思われる。石組炉跡は住居跡のほぼ中央部に位置し，小さな河原石を粗雑に並べたものである。

石組炉内の焼土には骨片と黒曜石の剥片が68点含まれていた。また焼土直上からはⅣ群a類（余市式）に相当する土器片が出土している。

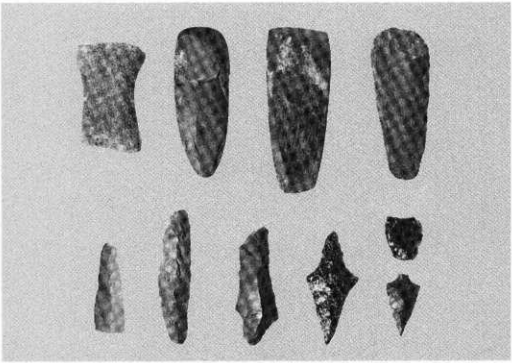


図Ⅳ－13　H－23出土遺物（覆土下層）

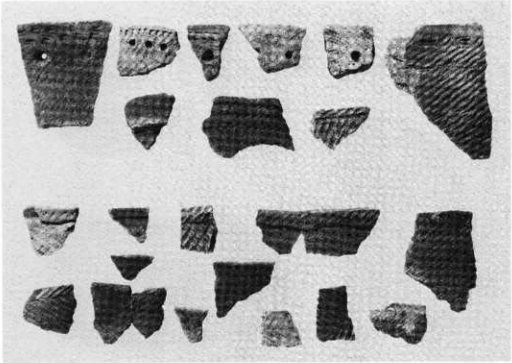


図Ⅳ－14　H－23出土遺物（覆土下層）

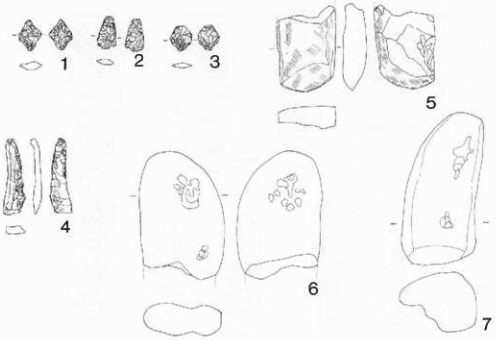
図版Ⅳ－26　H－23出土遺物（図Ⅳ－13　10）



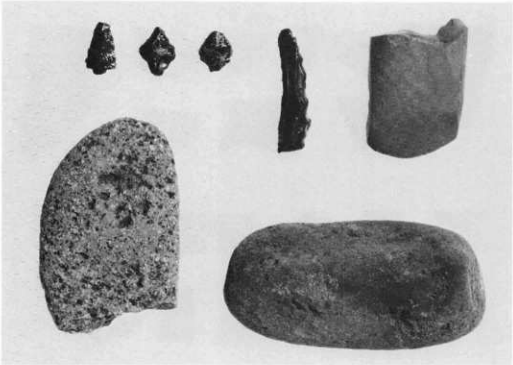
図版Ⅳ－27　H－23出土遺物（図Ⅳ－14）



図版Ⅳ－28　H－23出土遺物（図Ⅳ－13）



図Ⅳ－15　H－23出土遺物（覆土上層）



図版Ⅳ－29　H－23出土遺物（図Ⅳ－15）

土　　部	Ⅲb-3	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	不明	小計	石器・礫	石鏃	石錐	石鎚	スクレイパー	石斧	たたき石	石皿	すり石	磨石	敲	フレイク	剥片	小計
床　面		7			8	15	床　面												68	68
覆土下層	57	68			55	190	覆土下層	1	2		3	4				1	19	9	2	41
覆土上層	36	78	1		121	236	覆土上層	2				1					19	40	3	65
小　計	93	153	1		194	441	小　計	3	2		3	5				1	38	49	73	174

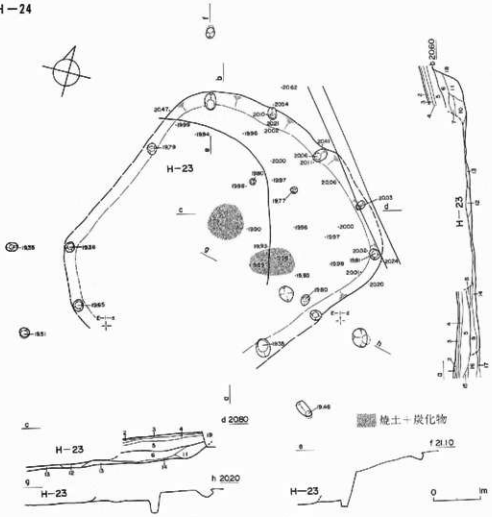
表Ⅳ－5　H－23出土遺物点数一覧

図	番	号	名　称	出土層位	分　類	内面色調	外面色調	胎土色調	備　　考
図Ⅳ－13		1	土　師	覆土下層	図b－3	黄灰色	暗褐色	茶灰色	内面は凹凸はなはだしい。全体に軟質。胎土は緻密。
		2	〃	〃	〃	暗灰色	黄灰色	暗褐色	内面はヨコナデ調整のち縦文を施す。焼成良好堅緻。
		3	〃	〃	〃	暗灰色	暗灰色	淡茶灰色	内面はヨコナデ調整。焼成良好。胎土は緻密。
		4	〃	〃	〃	褐　色	黄灰色	暗褐色	内面の調整は不明。焼成不良。胎土は粗い。
		5	〃	〃	〃	暗灰色	黄灰色	暗灰色	内面に縦文を施す。軟質で胎土は粗く、砂粒を多く含む。
		6	〃	〃	〃	暗灰色	淡褐色	淡茶灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。長石・小石を含むが緻密。
		7	〃	〃	〃	淡褐灰色	暗褐色	暗黄灰色	口唇は平坦。3～5㎜大の小石を多く含む。全体につくりは粗雑。
		8	〃	〃	〃	暗灰色	淡褐灰色	茶灰色	口唇は平坦。口唇・内面はヨコナデ調整。焼成良好。
		9	〃	〃	〃	暗褐色	暗褐色	褐　色	全体に堅いが、胎土は粗い。
		10	〃	〃	Ⅳa	明灰橙色	淡黄灰色	淡黄灰色	口縁(25㎝)器高(19㎝)内面はヨコナデ調整。全体に軟質。胎土緻密。
		11	〃	〃	〃	黄灰色	黄灰色	茶灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。軟質。砂粒多し。
		12	〃	〃	〃	明褐色	暗褐色	暗灰色	口唇は平坦で縦文を施す。軟質。砂粒多し。
		13	〃	〃	〃	褐　色	暗黄灰色	淡茶灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。焼成良好。胎土は粗い。
		14	〃	〃	〃	暗褐色	暗褐色	暗灰褐色	内面はヨコナデ調整。胎土は粗い。砂粒多し。
		15	〃	〃	〃	橙灰色	明灰色	淡橙灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。5㎜大の小石を含む。砂粒多し。
		16	〃	〃	〃	淡褐色	暗褐色	暗茶褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。口唇は平坦。
		17	〃	〃	〃	褐灰色	暗褐色	淡茶灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。焼成良好堅緻。
		18	〃	〃	〃	暗黒褐色	褐　色	暗黒褐色	小型・薄手。焼成良好。胎土は粗い。
		19	〃	〃	〃	暗黄灰色	褐　色	暗茶灰色	内面は不定方向にナデ痕あり。長石・小石を多く含む。
		20	〃	〃	〃	褐　色	褐　色	暗茶褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。口唇は平坦。焼成良好堅緻。
		21	〃	〃	〃	淡灰褐色	暗褐色	淡褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。砂粒多し。
		22	〃	〃	〃	灰　色	灰　色	淡灰色	口唇・内面はていねいなヨコナデ調整。砂粒多し。
		23	〃	〃	〃	淡茶灰色	暗灰色	淡茶灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。小型・薄手。焼成良好堅緻。

図	番	号	名　称	出土層位	分　類	材　質	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重さ(g)
図Ⅳ－14		1	石　槍	覆土下層	ⅠB8	頁　岩	(5.6)	(2.0)	(0.7)	(9.1)
		2	石　鏃	〃	ⅠA5	〃	(3.9)	2.1	0.45	(2.8)
		3	〃	〃	〃	黒曜石	7.3	3.3	0.9	11.2
		4	スクレイパー	〃	ⅢB8	〃	(2.7)	2.4	0.45	(5.9)
		5	つまみ付きナイフ	〃	ⅢA3	頁　岩	(7.4)	2.6	0.9	(16.1)
		6	スクレイパー	〃	ⅢB8	〃	(8.3)	2.1	1.3	(19.9)
		7	石　斧	〃	ⅣA8	緑色泥岩	(9.5)	(3.8)	(0.9)	(42.0)
		8	〃	〃	ⅣA5	〃	(10.3)	4.1	1.0	(74.6)
		9	〃	〃	〃	〃	9.5	3.8	0.9	42.0
		10	砥　石	〃	ⅥB2	砂　岩	9.5	3.2	1.6	91.9
図Ⅳ－15		1	石　鏃	覆土上層	ⅠA4	黒曜石	(2.4)	1.8	0.55	(2.3)
		2	〃	〃	ⅠA5	〃	(2.5)	1.5	0.4	(1.6)
		3	フレイク	〃	ⅡA2	〃	(1.95)	1.7	0.4	(1.9)
		4	〃	〃	ⅡA2	〃	(9.0)	1.2	0.65	(6.1)
		5	石　斧	〃	ⅣA6	緑色泥岩	(5.9)	(4.6)	(1.8)	(89.3)
		6	砥	〃	ⅥB	安山岩	(10.2)	(6.8)	(2.5)	(220.0)
		7	砥	〃	〃	砂　岩	12.0	6.0	4.65	40.0

表Ⅳ－6　H－23掲載遺物一覧

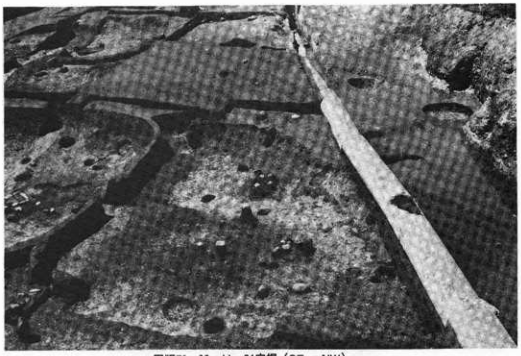
H－24



図Ⅳ－16　H－24実測図

層位　1．淡灰褐色火山灰　2．淡黄灰色火山灰　3．黒色土　4．暗褐色土Ⅰ層　5．暗褐色土Ⅱ層上層　6．黒茶色土　7．暗茶色土（小さな軽石と火山灰粒がまじる）　8．暗黒茶色土（微小の軽石を含む）　9．暗黒茶色土　10．暗黒茶色土（砂質）　11．暗黒茶色土（軽石を多量に含み，堅い）　12．焼土＋炭化物　13．暗茶黄色土（黄色土，多量の炭化物を含む）　14．暗茶黄色土（⑬より炭化物が少ない）　15．暗黒茶色土（⑬より軽石が少ない）　16．＝9　17．＝14　18．暗褐色土Ⅱ層下層　19．撹乱

D－1－b－イ・ロ・ハ・ニ，D－1－c－イ・ロ，調査区の中央部北側，南へ傾斜する緩斜面に位置している。H－25を切り，H－23に切られている。北・東壁は地山を掘り込んでつくられている。平面形は柱穴状小ピットの検出状況などから推測すると，長軸方向　N→E 26.5°，東西約4.80 m，南北約6.20mの隅丸長方形であろうと思われる。北壁の最深長は約0.45mである。掘り込み面は暗褐色土Ⅱ層下層上面と思われる。北・東壁はゆるやかは傾斜で立ちあがっている。西壁



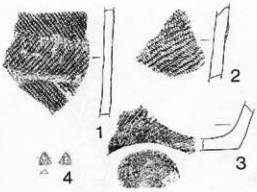
図版Ⅳ－30　H－24完掘（SE → NW）

図版Ⅳ－31　H－24東西セクション（N→S）

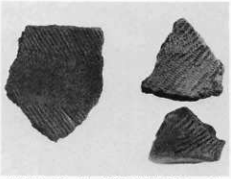
図版Ⅳ－32　H－24南北セクション（E→W）

はH-23に切られており，南壁も不明瞭である。床面は平坦だが，南へわずかに傾斜している。地山上には5～10cm程の厚さで黄色土と炭化物を混入した汚れた土が堆積し，さらに中央部のやや北寄りには2か所の焼土がこの土の上に堆積していることから見て，この汚れた土の上面が生活面と思われる。小ピットは19個検出された。このうち10個は壁際に垂直に掘られており，5個は住居跡の壁から1～1.2m離れて，住居側に傾いた状態で検出された。この15個の小ピットは住居跡にともなうもので，柱穴と考えられる。石組炉跡は検出されなかったが，中央部北東寄りにそれぞれ0.75m×0.75m，0.55m×0.96mの広がりをもつ2か所の焼土が確認された。

焼土の中から23点の土器片が出土している。そのうち3点はⅢ群b－3類に相当するものであるが，他は細片のため時期を判別することはできなかった。

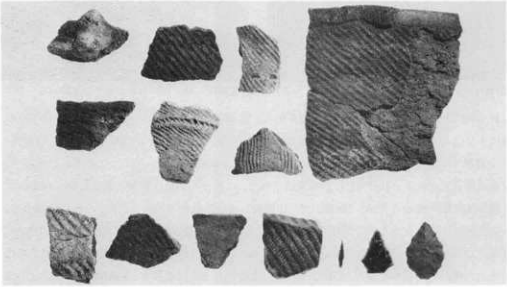


図Ⅳ－17　H－24出土遺物（床面）

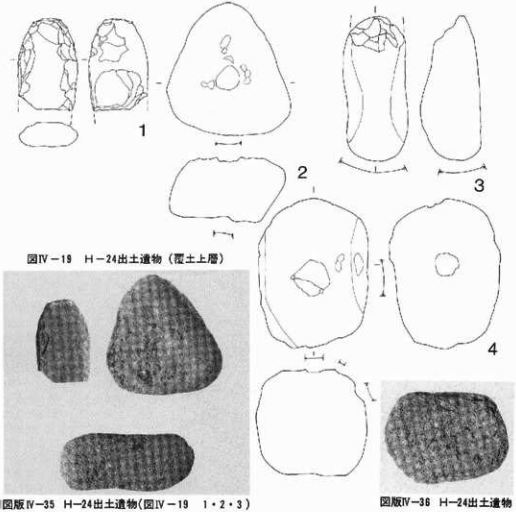


図版Ⅳ－33　H－24出土遺物（図Ⅳ－17）

図Ⅳ－18　H－24出土遺物（覆土下層）



図版Ⅳ－34　H－24出土遺物（図Ⅳ－18）



図版Ⅳ－35　H－24出土遺物(図Ⅳ－19　1・2・3)

図版Ⅳ－36　H－24出土遺物

図Ⅳ－19　H－24出土遺物（覆土上層）

土　器	Ⅲb-3	Ⅲb-3	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	不明	小計
縄　土		3				29	32
床　面	1	34	5			35	75
覆土下層		56	29			42	127
覆土上層		26	13			48	87
小　計	1	162	38			115	316

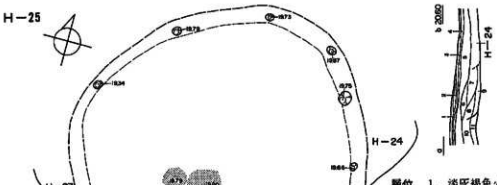
石器・礫	石鏃	石槍	石錐	スクレイパー	石斧	たたき石	すり石	石皿	砥石	礫	フレイク	剥片	小計
縄　土	1											42	43
床　面	1									3	7		11
覆土下層			1	1						16			19
覆土上層					1					4	2		7
小　計	2		1	1	1					23	9	42	80

表Ⅳ－7　H－24出土遺物点数一覧

図番号		名称	出土層位	分類	内面色調	外面色調	粘土色調	備考
図Ⅳ－17	1	土器	床面	Ⅲb－3	褐色	灰褐色	明褐色	内面は不定方向にナデ調あり。砂粒多い。
	2	〃	〃	Ⅳa	暗灰黄色	黄褐色	黄褐色	内面にはナデ方向にナデ調あり。焼成良好堅緻。
	3	〃	〃	〃	暗黒褐色	褐黒色	褐色	内面横位不明。焼成良好。砂三は多い。
図Ⅳ－18	1	土器	覆土下層	Ⅲb－3	暗褐色	暗褐色	褐色	内面はヨコナデ調整。粗有・小石を含む。
	2	〃	〃	〃	暗黒褐色	暗褐色	褐赤灰色	内面はナデ方向にていねいなナデ調整。小石を多く含む。
	3	〃	〃	〃	暗褐色	黄灰色		内面はヨコナデ調整。全面に軟質。
	4	〃	〃	〃	褐色	暗黒褐色	褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。焼成良好。粘土は細い。
	5	〃	〃	〃	淡黄褐色	黄灰色	淡黄灰色	内面にはヨコナデ調整。長石・石英・小石を含む。硬質。
	6	〃	〃	〃	暗褐色	暗黄灰色	淡茶褐色	内面にはナデ方向のナデ痕あり。粘土は細い。砂粒多い。
	7	〃	〃	Ⅳa	淡褐灰色	褐	暗茶褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。口唇は平坦。焼成良好。
	8	〃	〃	〃	暗褐色	灰色	暗褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。焼成良好。粘土は細い。
	9	〃	〃	〃	暗褐色	褐色	明褐色	内面はヨコナデ調整。長石・石英を多く含む。
	10	〃	〃	〃	褐色	明褐灰色	暗褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。口唇は平坦。
	11	〃	〃	〃	淡褐色	暗褐色	淡赤灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。焼成良好堅緻。

図番号		名称	出土層位	分類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
図Ⅳ-17	4	石鏃	表面	ⅠA8	黒曜石	(1.0)	(1.0)	0.3	(0.2)
図Ⅳ-18	12	石鏃	覆土下層	ⅠA5	黒曜石	(3.3)	2.5	0.5	(3.9)
	13	石錐	〃	ⅡA2	〃	2.3	0.35	0.3	0.3
	14	スクレイパー	〃	類B8	頁岩	(4.3)	2.75	0.8	(10.5)
図Ⅳ-19	1	石斧	覆土上層	ⅣA8	緑色変質	(7.2)	(4.7)	(2.0)	(133.5)
	2	敲	〃	ⅩB	安山岩	10.5	9.7	4.35	540.0
	3	〃	〃	〃	〃	(11.5)	5.0	4.8	(430.0)
	4	〃	〃	〃	〃	11.9	8.8	8.1	1.35kg

表Ⅳ－8　H－24掲載遺物一覧

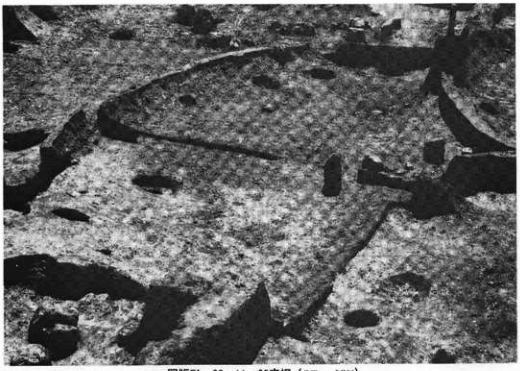


図Ⅳ－28　H－25実測図

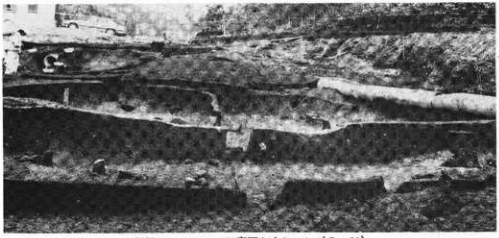
層位　1．淡灰褐色火山灰　2．淡黄灰色火山灰　3．黒色土　4．暗褐色土Ⅰ層　5．暗褐色土Ⅱ層上層　6．暗黒茶色土（軽石を少量含む）　7．暗黒茶色土（軽石を多く含む）　8．暗茶褐色土　9．暗茶黄色土（暗黒茶色土＋黄色土＋少量の炭化物）　10．黒茶褐色土　11．暗茶黄色土（暗黒茶色土＋黄色土＋多量の炭化物）

E-100-c-ハ，E-1-a-イ・ニ，D-1-b-ロ・ハ，調査区の中央部北側，北から南へわずかに傾斜する緩斜面に位置している。H-26を切り，H-23，24とP-50に切られている。南壁際に小ピットが5個検出され，またこれと類似する小ピットの検出状況などから見ると，長軸方向N→E16°，東西約6.80m，南北約6.70mの卵形の平面形をもつものと推定することができる。掘り込み面は暗褐色土Ⅱ層下層上面と思われるが明瞭ではない。床面はほぼ平坦である。地山上に数cm程の厚さで黄色土と炭化物が混入した土が堆積しており，その上面が生活面と思われる。H-25にともなうと思われる小ピットは15個検出されている。石組炉跡は検出されなかったが，中央部南側に3か所，地山の焼けた個所が確認された。

遺物は床面よりⅢ群b-3類(北筒式)，Ⅳ群a類(余市式)に相当する土器片が出土している。またG-1-d-ログリットの暗褐色土Ⅱ層から出土した青竜刀形石器の同一個体の破片が床面より出土した。

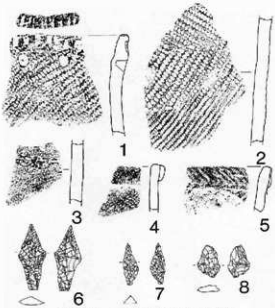


図版Ⅳ－37　Ｈ－25完掘（SE → NW）

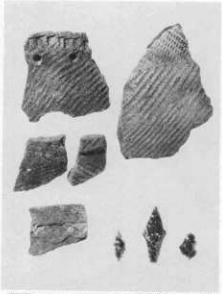


図版Ⅳ－38　Ｈ－25東西セクション（Ｓ →Ｎ）

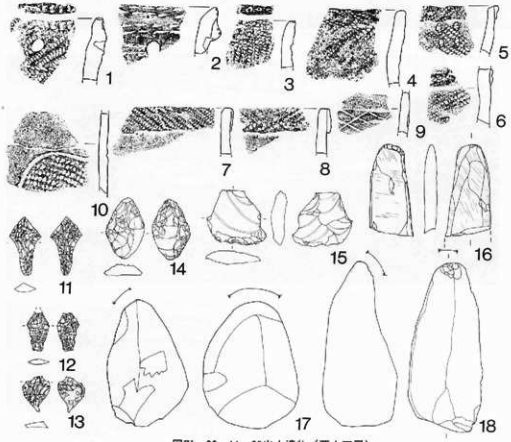
図版Ⅳ－39　Ｈ－25南北セクション
（Ｅ →Ｗ）



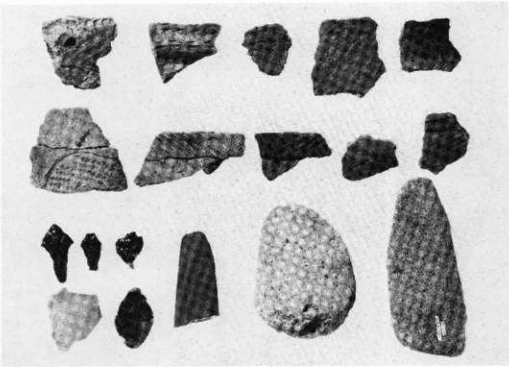
図IV－21　H－25出土遺物（床面）



図版IV－40　H－25出土遺物(図IV－21)



図IV－22　H－25出土遺物（覆土下層）



図版Ⅳ－41　H－25出土遺物（図Ⅳ－22）

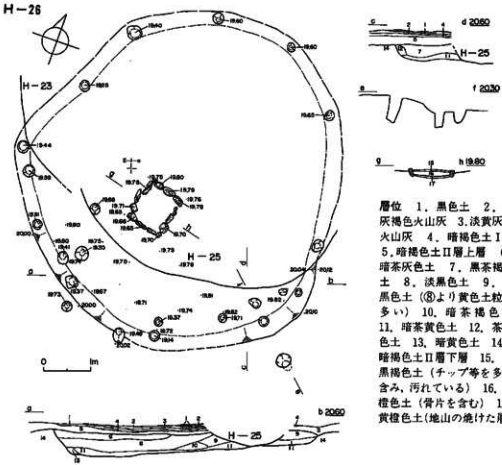
土　器	縄ⅢⅢ-2	縄ⅢⅢ-3	縄Ⅳa	縄Ⅳb	縄Ⅳc	不明	小計	石器・剥	石鏃	石槍	スクレイパー	石斧	たたき石	すり石	石皿	砥石	敲	フレイク	剥片	石製品	小計
床　面		23	21			30	74	床　面		1	1	1	1					8	1		14
堆土下層		29	55			65	149	堆土下層	1	1				1				4	1	2	10
堆土上層	2	27	28	2		74	133	堆土上層	1	1			2					11	4	2	21
小　計	2	79	104	2		169	356	小　計	2	3	1	1	3	1				23	6	4	45

表Ⅳ－9　H－25出土遺物点数一覧

区	番	号	名	称	出土層位	分	類	外面色調	胎土色調	備	考
区Ⅳ－21	1		土	器	床　面	縄ⅢⅢ－3		明褐色	暗褐色	内面はヨコナデ調整し、短文を施す。全体に軟質	
	2		〃		〃	〃		明褐色	暗褐色	内面はヨコナデ調整。3mm大の小石を含む。つくりは全体に粗雑。	
	3		〃		〃	〃		淡褐色	暗褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。焼成良好。	
	4		〃		〃	縄Ⅳa		明黄灰色	暗黄灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。軟質。砂粒多し。	
	5		〃		〃	〃		明灰白色	暗灰白色	内面はていねいなヨコナデ調整。及石・石英粒を多く含む。	
区Ⅳ－22	1		土	器	堆土下層	縄ⅢⅢ－1		明黄灰色	淡黄灰色	内面はヨコナデ調整の後ミガキを施す。全体につくりは粗雑。	
	2		〃		〃	〃		明灰色	淡褐色	内面はヨコナデ調整。砂粒は細い。	
	3		〃		〃	〃		明褐色	暗褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。粒土は細い。	
	4		〃		〃	〃		明褐色	暗褐色	全体につくりは粗雑である。	
	5		〃		〃	〃		明褐色	暗褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。長石・石英を多く含む。粒土は細い。	
	6		〃		〃	〃		暗灰色	暗黄灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。焼成良好。砂粒多し。	
	7		〃		〃	縄Ⅳa		明灰褐色	暗灰褐色	内面はケズリ調整。長石を多く含む。粒土は細い。	
	8		〃		〃	〃		明褐色	暗褐色	内面・口縁はていねいなヨコナデ調整。口縁は平坦。小石を多く含む。	
	9		〃		〃	〃		淡褐色	暗褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。斜格子状に条痕付設文。	
	10		〃		〃	〃		暗褐色	淡黄色	内面はナデ及び一部にていねいなナデ調整。長石・小石を多く含む。	

図	番	号	名	称	出土層位	分	類	材	質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
図Ⅳ－21	6		石	斧	床　面	ⅠA5		黒	輝石	(5.2)	2.1	0.6	(5.0)
	7		石	錐	〃	ⅡA2		〃	〃	(3.3)	1.2	0.6	(1.6)
	8		エアレイパー		〃	ⅢB3		〃	〃	2.3	1.8	0.5	1.0
図Ⅳ－22	11		石	斧	堆土下層	ⅠA5		黒	輝石	4.5	2.5	0.7	5.3
	12		〃		〃	ⅠA4		〃	〃	(3.0)	1.7	0.4	(2.0)
	13		〃		〃	ⅠA5		〃	〃	(3.8)	2.1	0.5	(3.6)
	14		石	錐	〃	ⅠB2		〃	〃	(4.5)	3.0	0.8	(11.8)
	15		フレイク		〃	ⅩA2		頁	岩	(4.2)	4.5	1.1	(17.6)
	16		石	斧	〃	ⅣA5		黒色片	岩	(7.1)	(3.3)	(1.0)	(45.3)
	17		〃	錐	〃	Ⅹ5		安	山岩	10.1	7.6	5.4	600.0
	18		〃		〃	〃		〃	〃	13.9	5.8	3.8	530.0

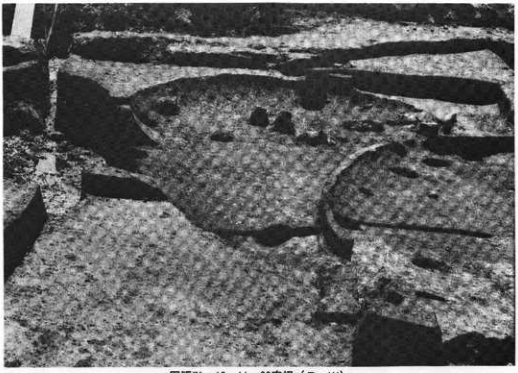
表Ⅳ－10　H－25掲載遺物一覧



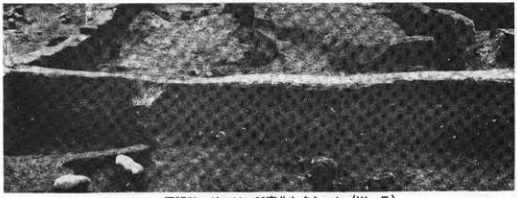
図Ⅳ－23　H－26実測図

D-100-c-ハ，E-100-d-ハ・ニ，E-1-a-イ・ロ・ハ・ニ．調査区の中央部北側，北から南へわずかに傾斜する斜面に位置する。南壁以外はH-23，25に切られ不明である。柱穴状小ピットの検出状況などから推定すると，長軸方向　N→E24.5′，　東西約6.50m，南北7.24m，一辺3～5mの不整六角形状の平面形をもつものであろうと思われる。掘り込み面は，暗褐色土Ⅱ層下層上面である。床面はわずかに南に傾斜している。また床面全体に焼土・炭化物の混り合った汚れた土が堆積している。石組炉跡は長軸1.2m，短軸0.95mで，住居跡の長軸方向と一致し，中央部やや南側につくられている。炉石は石皿を用い，炉内は浅い掘り込みがあり，ていねいにつくられている。小ピットは17個検出された。とくに壁際に沿って7個の垂直に掘られた小ピット，また南東側には住居の外側，壁より約0.6m離れた地点に，住居側に傾く小ピットが1個検出された。

石組炉跡内の焼土下層より，直群b-3類に相当すると思われる土器片が一点出土している。また黒曜石の剥片が同層上層より72点，同層中層より228点，同層下層より275点出土した。

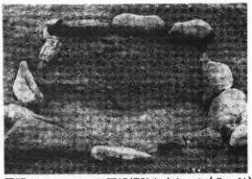


図版Ⅳ－42　Ｈ－26完掘（Ｅ→Ｗ）

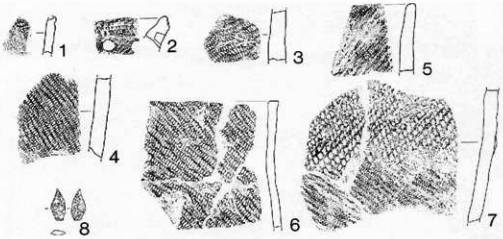


図版Ⅳ－43　Ｈ－26南北セクション（Ｗ→Ｅ）

図版Ⅳ－44　Ｈ－26石組炉跡（Ｓ→Ｎ）

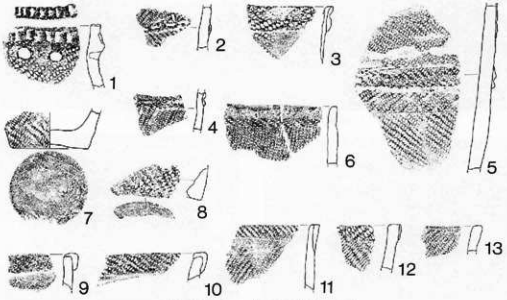


図版Ⅳ－45　Ｈ－26石組炉跡セクション（Ｓ→Ｎ）

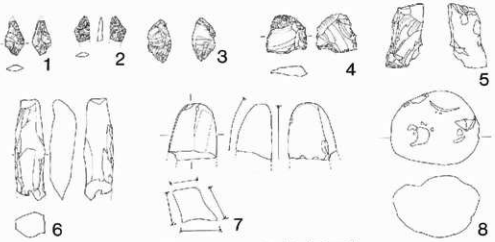


図IV－24　H－26出土遺物（床面）

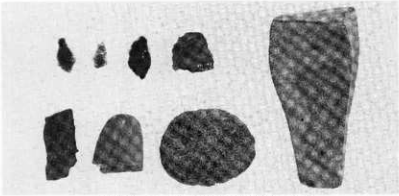
図版IV－46　H－26出土遺物（図IV－24）



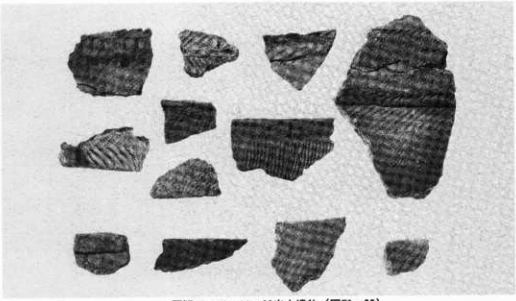
図IV－25　H－26出土遺物（覆土下層）



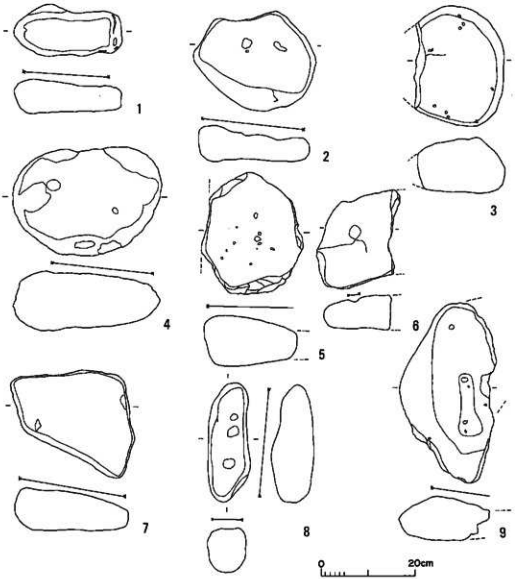
図Ⅳ－26　Ｈ－26出土遺物（覆土下層）



図版Ⅳ－47　Ｈ－26出土遺物（図Ⅳ－26）



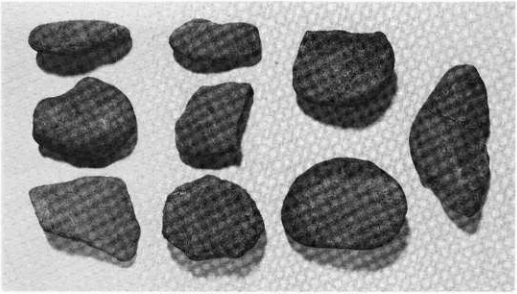
図版Ⅳ－48　Ｈ－26出土遺物（図Ⅳ－25）



図Ⅳ－27　H－26出土遺物（石組炉跡石）

土　部	Ⅲb-2	Ⅲb-3	Ⅳa	Ⅳb	Ⅳc	不明	小計	石部・礫	石鏃	石槍	石錐	スクレイパー	石斧	たたき石	砥石	磨石	敲石	礫	フレイク	剥片	小計
炉跡内		2					2	炉跡内								8		2		575	585
床　面		6	13			4	23	床　面	1												1
覆土下層	2	40	31	1		85	159	覆土下層					2				2	8	2	10	24
覆土上層	1	15	15			26	57	覆土上層	1						1			7	43	2	54
小　計	3	63	59	1		115	241	小　計	2			1	2		9	2	17	45	587	664

表Ⅳ－11　H－26出土遺物点数一覧

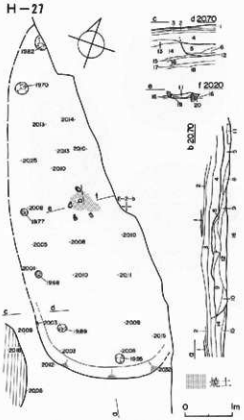


図版Ⅳ－49　H－26出土遺物（図Ⅳ－27）

図番号		名称	出土層位	分類	内面色調	外面色調	胎土色調	備考
図Ⅳ－24	1	土器	伊勢湾	Ⅲb－3	明橙灰色	明橙灰色	赤褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。砂粒を含み、粒土は粗い。
	2	〃	床面	Ⅲb－3	暗灰色	褐色	暗茶灰色	内面はヨコナデ調整。晩成良好焼成。
	3	〃	〃	〃	暗灰色	暗橙灰色	淡黄灰色	内面はナデ方向にナデ流れ。器面に繊維痕あり。
	4	〃	〃	〃	淡褐色	褐色	暗茶褐色	内面はナデ方向にていねいなナデ調整。小石を多く含む。
	5	〃	〃	Ⅳa	暗黒褐色	褐色	暗黒褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。外面にススの付着あり。
	6	〃	〃	〃	暗灰色	褐灰色	暗灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。口唇は平坦。薄手。
	7	〃	〃	〃	暗灰色	淡褐色	暗灰色	内面はナデ方向にナデ流れ。砂質。砂粒多し。
図Ⅳ－25	1	土器	腹土下層	Ⅲb－3	茶灰色	明褐色	茶灰色	内面はていねいなヨコナデ調整で縦文を付す。晩成良好焼成。
	2	〃	〃	〃	褐色	暗灰色	淡褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。粒石砂を多量に含む。
	3	〃	〃	〃		明褐灰色	暗茶灰色	晩成良好焼成。
	4	〃	〃	〃	淡灰褐色	褐色	淡灰褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。晩成良好焼成。
	5	〃	〃	〃	明灰褐色	明灰褐色	淡灰褐色	内面不定方向にナデ流れ。外面にススの付着あり。
	6	〃	〃	〃	暗黒灰色	淡灰色	淡灰褐色	内面はヨコナデ調整。外側整形広範文。砂粒多し。
	7	〃	〃	〃	暗黒褐色	暗黒灰色	暗褐色	内面はヨコナデ調整。底部に火を受けた淡赤色の広あり。
	8	〃	〃	〃		橙灰色	橙灰色	粒石・小石を多く含む。粒土は粗い。
	9	〃	〃	Ⅳa	黄灰色	明黄灰色	黄灰色	内面はヨコナデ調整。砂質。砂粒多し。
	10	〃	〃	〃	褐色	暗黒褐色	茶褐色	内面はヨコナデ調整。小石を多く含む。
	11	〃	〃	〃	橙灰色	橙灰色	橙灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。口唇は平坦。外面にススの付着あり。
	12	〃	〃	〃	暗灰色	暗灰色	暗茶褐色	内面はていねいなヨコナデ調整。小石を多く含む。
	13	〃	〃	〃	茶褐色	淡褐色	淡茶褐色	口縁・内面はていねいなヨコナデ調整。晩成良好焼成。

図番号		名称	出土層位	分類	材質	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）
図Ⅳ－24	8	石鏃	床面	ⅠA5	黒曜石	(2.4)	1.1	0.35	(0.8)
図Ⅳ－26	1	石鏃	腹土下層	ⅠA5	黒曜石	(2.7)	1.5	0.5	(1.5)
	2	〃	〃	ⅠA8	〃	(2.0)	(1.2)	(0.4)	(0.8)
	3	フレイク	〃	ⅩA1	〃	3.4	1.8	0.45	2.8
	4	〃	〃	〃	頁岩	3.1	3.2	0.8	7.5
	5	石斧	〃	ⅣA8	黒色片岩				(19.1)
	6	〃	〃	〃	緑色泥岩				(54.1)
	7	砥石	〃	ⅦB2	砂岩	(3.8)	(3.5)	(3.0)	(51.2)
	8	磨	〃	ⅩB	安山岩	7.0	5.9	4.3	27.0
図Ⅳ－27	1	石皿	石敷炉	ⅦB1	安山岩	22.6	11.0	7.1	2.5kg
	2	〃	〃	〃	〃	26.4	21.0	7.2	5.5kg
	3	〃	〃	〃	〃	25.2	(29.7)	11.7	(7.5kg)
	4	〃	〃	〃	〃	31.8	22.0	12.4	13.6kg
	5	〃	〃	〃	〃	25.4	21.9	10.6	8.5kg
	6	〃	〃	〃	〃	23.9	21.5	8.6	5.5kg
	7	〃	〃	〃	〃	25.1	9.0	9.2	2.8kg
	8	〃	〃	〃	〃	(31.8)	(36.0)	(14.6)	(3.6kg)

表Ⅳ－12　H－26掲載遺物一覧



図Ⅳ－28　H－27実測図

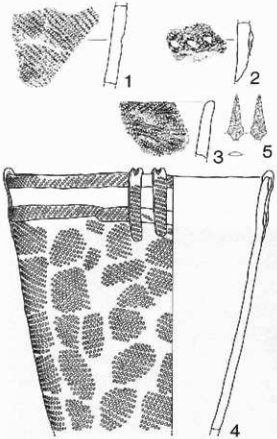
図版Ⅳ－50　H－27完掘（N→S）

図版Ⅳ－51　H－27東西セクション（N→S）

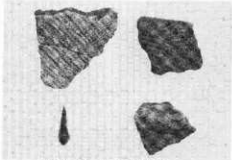
図版Ⅳ－52　H－27石組炉跡セクション（S→N）

層位　1．暗灰色火山灰　2．黒色土　3．暗褐色土Ⅰ層　4．暗褐色土Ⅱ層上層　5．黒茶色土（軽石を少量含む）　6．黒褐色土（黄色土粒，軽石をわずかに含む）　7．＝6　8．黒褐色土（大量の黄色土を含み，汚れている。炭化物を少量含む）　9．黒褐色土（やや明るい色で，軽石をやや多く含む）　10．黒褐色土（炭化物を多量に含む）　11．明橙色土（焼土，黒色土がブロック状に入る）　12．黒褐色土（わずかに軽石を含む）　13．暗褐色土Ⅱ層上層＋多量の黄色土＋炭化物　14．暗褐色土Ⅱ層下層　15．淡灰褐色火山灰　16．褐色土（粘質，無遺物層）　17．暗黄褐色土（漸移層）　18．暗黄灰色土（地山）　19．暗褐色土　20．黒色土（ボソボソしている）

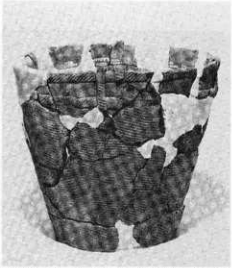
E－1－c－ハ・ニ，E－1－d－ハ・ニ，調査区の中央部東側，ほぼ平坦なところに位置している。暗褐色土Ⅱ層下層を掘り下げたところ，焼土，炭火物さらに石組炉跡が検出されたため住居跡であることが判明した。セクションベルトの断面観察と，また住居跡の南側には暗褐色土Ⅱ層上層中に黄色土が数cm程広く堆積しており，これがH-27の構築時の排土と推察されるところから，掘り込み面は暗褐色土Ⅱ層上層中か上面と思われる。床面は暗褐色土Ⅱ層下層の下に堆積してい



図Ⅳ－29　H－27出土遺物（床面）



図版Ⅳ－53　H－27出土遺物
（図Ⅳ－29　1・2・3・5）



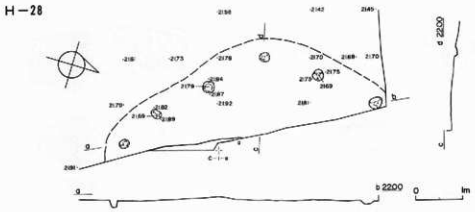
図版Ⅳ－54　H－27出土遺物（図Ⅳ－29　4）

る淡灰褐色火山灰を部分的に削って構築され，ほぼ平坦である。南壁以外の壁を確認できなかったため平面形，規模なども不明である。小ピットは6個検出され，垂直に掘られている。石組炉跡は自然石・軽石を粗雑に並べたもので，H-29の石組炉跡の上に新たにつくられている。石組炉跡周辺の床面上より Ⅳ群a類（余市式　図Ⅳ-29　4）に相当する土器が出土している。

図番号	名称	出土層位	分類	内面色調	外面色調	胎土色調	備考
図Ⅳ-29　1	土器	床面	Ⅲb－3	暗褐色	暗黄灰色	暗褐色	内面は不定方向にナデ調整。熱成良好。粘土は粗い。
2	〃	〃	〃	暗灰色	暗灰色	暗灰色	内面は不定方向にナデ調整。全体につくりは粗雑。
3	〃	〃	Ⅳa	暗黒褐色	暗褐色	暗褐灰色	内面はていねいなヨコナデ調整。小石を多く含む。
4	〃	〃	〃	暗灰色	淡黄灰色	淡黒色	口径21.4㎝器高(30.7㎝)。薄手。内面はヨコナデ調整。口縁は平坦。底部。

図番号	名称	出土層位	分類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
図Ⅳ-29　5	石錘	床面	1A5	黒曜石	(2.5)	1.3	0.3	(1.0)

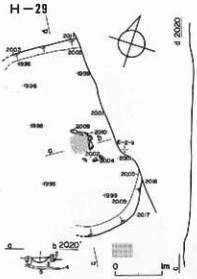
表Ⅳ－13　H－27掲載遺物一覧



図Ⅳ－30　H－28実測図

図版Ⅳ－55　H－28完掘（E→W）

B-100-c-ハ・ニ，C-100-d-ニ，C-1-a-イ，調査区の最北東部，ほぼ平坦なところに位置している。上層が道路敷設の際に削平されており，掘り込み面はまったく確認することができなかった。暗褐色土Ⅱ層下層を掘り下げたところ，地山面に暗褐色の土の入った柱穴状小ピットが6個検出されたため住居跡であろうと判断された。柱穴は0.7～0.9mの間隔で，ほぼ垂直に掘られている。遺物は住居跡であることを確認する前に取り上げたため，この住居跡にともなうものかどうか判断するのは困難である。



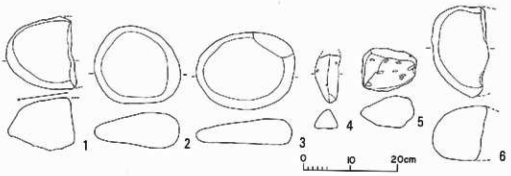
図Ⅳ－31　H－29実測図

図版Ⅳ－56　H－29完掘（N→S）

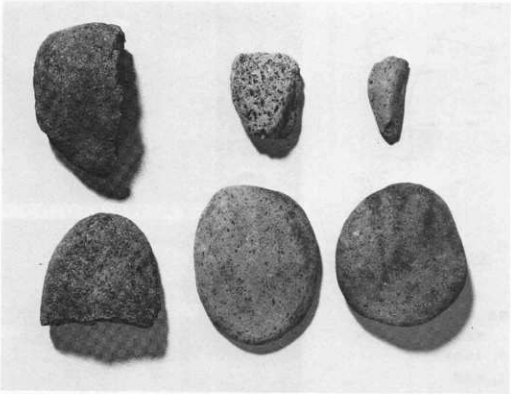
図版Ⅳ－57　H－29石組炉跡セクション（S→N）

層位　1．黄橙色土（焼土）
2．黒色土（ボソボソしている）
3．暗黒茶色土
4．漸移層
5．地山

E－1－c－ニ，E－1－d－ハ，調査区の中央部東側，ほぼ平坦なところに位置している。H-27を全体に地山面まで掘り下げたところ，この住居跡の北・南壁を確認した。全体的な平面形，規模は不明である。 床面は暗褐色土Ⅱ層下層と漸移層の間の軽石を多く含む暗黒茶色土中につくられている。柱穴状小ピットは検出されなかった。石組炉跡はH-27の炉跡の真下にあり，炉石は北と東側のものが残っていた。炉石は石皿を利用している。炉の規模は東西約0.5m×南北約0.5m と思われる。炉内には浅い掘り込みが認められた。



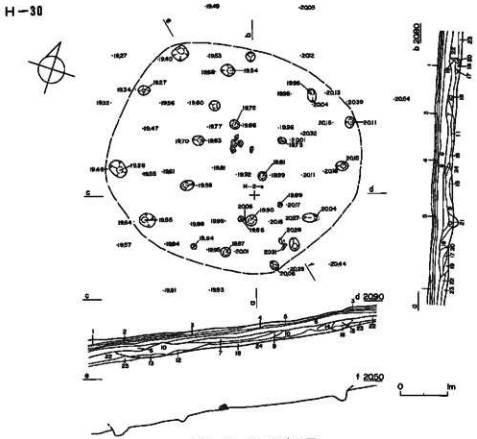
図Ⅳ－32　H－29出土遺物（石組炉跡石）



図版Ⅳ－58　H－29出土遺物（図Ⅳ－32）

図番号		名称	出土層位	分類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
図Ⅳ－32	1	石皿	石組炉跡	Ⅵ B 8	安山岩				(2.5kg)
	2	〃	〃	Ⅵ B 1	〃	18.8	16.8	7.6	3.0kg
	3	〃	〃	〃	〃	20.8	16.5	5.4	3.0kg
	4	〃	〃	Ⅵ B 8	〃	(10.4)	4.9	4.0	(268.0)
	5	砥石	〃			11.4	9.3	5.8	268.0
	6	石皿	〃	Ⅵ B 8	安山岩			11.5	(2.75kg)

表Ⅳ－14　H－29掲載遺物一覧



図Ⅳ－33　H－30実測図

層位　1．淡灰褐色火山灰　2．黄色火山灰　3．黒色土＋淡灰褐色火山灰　4．黒色土　5．暗褐色土Ⅰ層　6．暗褐色土Ⅱ層上層　7．暗褐色土（黄色土粒＋軽石）　8．暗灰褐色土（多量の黄色土粒と軽石を含む）　9．暗灰褐色土（黄色土粒と軽石を含む）　10．暗褐色土（黄色土粒を含む）　11．暗灰褐色土（黄色土と炭化物を含む）　12．暗褐色土（わずかに黄色土粒と軽石を含む）　13．暗黄褐色土　14．暗褐色土（黄色土，軽石をやや多く含む）　15．黒茶色土　16．黒茶色土（黄色土粒，軽石を少量含む）　17．暗黒褐色土　18．暗灰褐色土（暗褐色土＋黄色土）　19．暗黄褐色土（黄色土粒を多く含む）　20．暗黄褐色土（多量の軽石，黄色土を含む）　21．黄褐色土　22．暗褐色土Ⅱ層下層　23．漸移層　24．地山

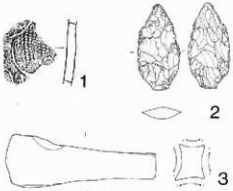
G－1－c－ロ・ハ・ニ，G－2－b－イ・ロ，H－1－d－イ・ニ，H－2－a－イ，調査区南側の尾根の先端部で，東から西へゆるやかに傾斜する斜面に位置している。掘り込み面は確認することはできなかった。地山上より数cm程上方に石組炉がくずれたと思われる5個の礫と焼土が検出されたため，住居跡であることを確認した。地山上で22個の小ピットが検出された。外周の小ピット12個は中心部方向に傾いており，石組炉跡周辺の小ピットはほぼ垂直に掘られている。床面は西側に傾斜している。

遺物は床面よりⅣ群ａ類（図Ⅳ-34　1）に相当する土器片1点，砥石（図Ⅳ-34　3），スクレイパー（図Ⅳ-34　2）が1点づつ出土している。

図版Ⅳ－59　Ｈ－30完掘（Ｗ→Ｅ）

図版Ⅳ－60　Ｈ－30南北セクション(Ｗ→Ｅ)

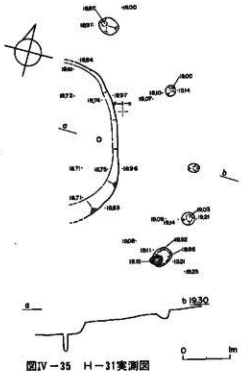
図版Ⅳ－61　Ｈ－30東西セクション(NS → SE)



図Ⅳ－34　Ｈ－30出土遺物（床面）

図版Ⅳ－62　Ｈ－30出土遺物（図Ⅳ－34）

H－31

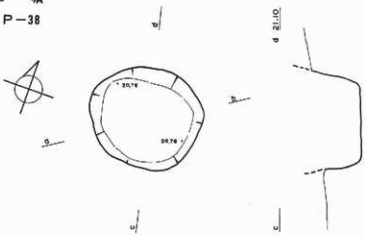


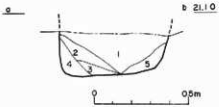
図Ⅳ－35　H－31実測図

G-1-a-ハ，G-1-b-ニ，調査区南部，ゆるやかに傾斜する斜面に位置している。地山面まで掘り下げた段階で確認された。東壁はほぼ垂直に立ちあがっているが，ほかの部分は不明である。掘り込み面は不明である。壁より1.0m～1.2m離れて住居側に傾きをもつ小ピットが5個検出された。住居跡内にも，垂直に掘られた小ピットが1個ある。床面はほぼ平坦で，西側に傾斜している。

3．土　壙

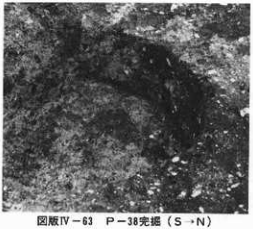
P－38





図Ⅳ－36　P－38実測図

層位　1．暗黒茶色土（1cm大の軽石を少量含む）　2．暗黒茶色土（微少の黄色土粒を含む）　3．暗黒茶色土（微少の黄色土粒，2～3cm大の軽石を含む）　4．黒茶色土（黄色土，1～2cm大の軽石を多く含む）　5．暗茶黄色土（暗黒茶色土＋黄色土粒＋軽石）



図版Ⅳ－63　P－38完掘（S→N）

図版Ⅳ－64　P－38セクション（S→N）

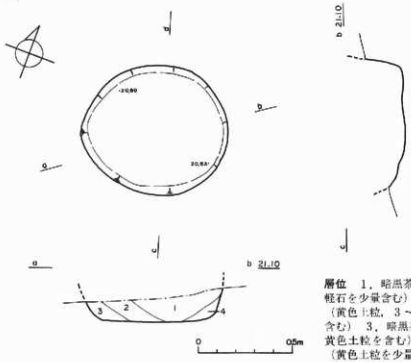
位置　D-1-a-ハ，D-1-d-ロ　　平面形　楕円形

規模　0.6m/0.5m×0.55m/0.42m×0.23m　　長軸方向　N→W　76.2°

床面は平坦で壁は垂直に近い傾斜で立ちあがっている。確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。覆土上層は暗褐色土Ⅱ層上層と同質であるが，部分的に軽石，黄色土粒がまじり合っている。また東壁際の覆土には黄色土粒が多く含まれている。

遺物は出土していない。

P－39



層位　1．暗黒茶色土（1cm大の軽石を少量含む）　2．暗黒茶色土（黄色土粒，3～4cm大の軽石を含む）　3．暗黒茶色土(黄色土と黄色土粒を含む）　4．黒茶色土（黄色土粒を少量含む）

図IV－37　P－39実測図

図版IV－65　P－39完掘（SW→NE）

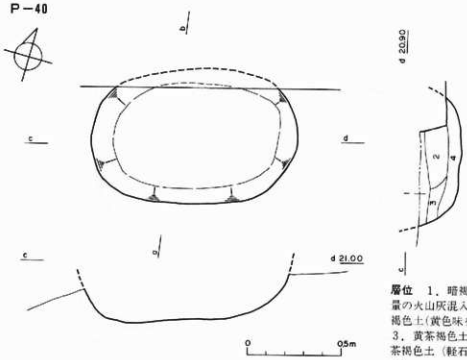
図版IV－66　P－39セクション（S→N）

位置　D-1-d-ロ　　平面形　楕円形

規模　0.78m/0.73m×0.68m/0.6m×0.18m　　長軸方向　N→E　70°

床面はほぼ平坦である。南壁側はゆるやかな傾斜で立ちあがっているが，ほかの部分では垂直に近い。確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。覆土はP-38に酷似している。南壁際の覆土には黄色土粒がまじり合って，汚れた土が堆積している。

遺物は出土していない。



層位　1．暗褐色土（少量の火山灰混入）　2．暗褐色土（黄色味を帯びる）　3．黄茶褐色土　4．暗茶褐色土（軽石を多く含む）

図Ⅳ－38　P－40実測図

図版Ⅳ－67　P－40完掘（N→S）

図版Ⅳ－68　P－40セクション（W→E）

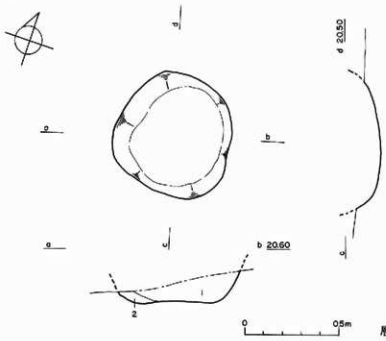
位置　H-2-a-ハ　　平面形　長円形

規模　1.11m/(0.88m)×(0.72m)/(0.52m)×0.22m　　長軸方向　N→E　67.3°

床面はわずかに凹凸がある。下場は不明瞭で，壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっている。確認面は暗褐色土Ⅱ層下層上面である。床は地山を掘り込んでいる。覆土中には全体的に軽石がまじり合っている。さらに覆土上層には少量の火山灰が混入し，同下層には軽石が多く混入している。

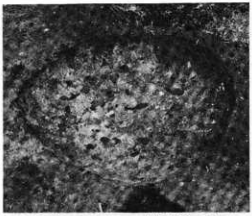
遺物は出土していない。

P－44



層位　1．暗褐色土
2．暗褐色土＋黄色土

図Ⅳ－39　P－44実測図



図版Ⅳ－69　P－44完掘（W→E）

図版Ⅳ－70　P－44セクション（S→N）

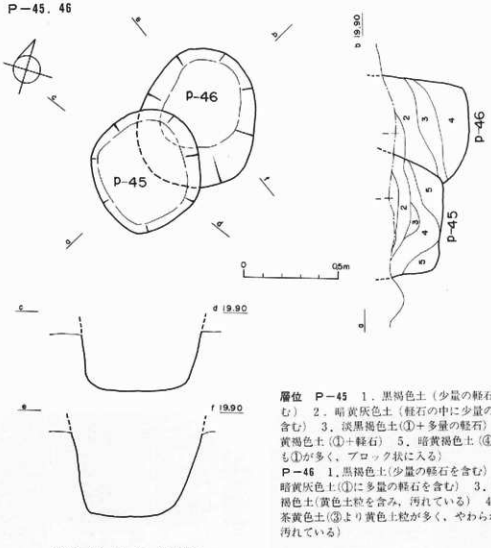
位置　G-2-b-ニ　　平面形　ほぼ円形

規模　0.7m/0.52m×0.66m/0.51m×0.13m　　長軸方向　N→W　29°

床面にはわずかに凹凸がある。壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっており，下場は不明瞭である。確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。覆土は軽石をほとんど含まない黒茶色で，かたくしまっている。

遺物は出土していない。

P－45．46



層位　P－45　1．黒褐色土（少量の軽石を含む）　2．暗黄灰色土（軽石の中に少量の①を含む）　3．淡黒褐色土（①＋多量の軽石）　4．黄褐色土（①＋軽石）　5．暗黄褐色土（④よりも①が多く，ブロック状に入る）

P－46　1．黒褐色土（少量の軽石を含む）　2．暗黄灰色土（①に多量の軽石を含む）　3．暗黄褐色土（黄色土粒を含み，汚れている）　4．暗茶黄色土（③より黄色土粒が多く，やわらかく，汚れている）

図Ⅳ－40　P－45，46実測図

図版Ⅳ－71　P－45，46完掘（S→N）

図版Ⅳ－72　P－45，46セクション（N→S）

P-45 位置　E-1-a-イ　　平面形　隅丸方形

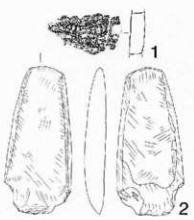
規模　0.6m/0.5m×0.6m/0.55m×0.31m

P-46 位置　E-1-a-イ・ニ　　平面形　楕円形

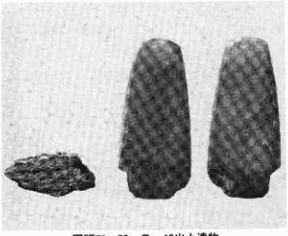
規模　(0.74m)/0.47m×0.62m/0.4m×0.44m　　長軸方向　N→W　14.5°

P-45の床面はほぼ平坦で，壁は垂直に近い傾斜で立ちあがっている。覆土の上層と下層の壁際以外の部分にはぎっしりと軽石が入っている。P-46の床面はほぼ平坦で，南壁がゆるやかな傾斜で立ちあがっているほかはほぼ垂直に立ちあがっている。覆土は中層に軽石が多く入り，下層には軽石，黄色土粒，炭化物が多量に含まれている。P-46の覆土下層が軟質であるほかは全体的にきわめて堅い。確認面はH-25の床面下で，地山を深く掘り込んでつくられている。H-26にともなうものかどうかは不明である。確認面での重復関係は確認できなかった。長軸方向で半截し，その断面観察によってP-45がP-46を切っているのが確認された。しかしながら断面ではP-45とP-46を区分することは可能であるが，平面形，覆土の堆積状態などから見ると，あるいは一つの遺構である可能性もある。

遺物はP-46の上層よりⅢ群b-3類（図Ⅳ-41　1　器面に繊維痕がある）に相当する土器片と，石斧（図Ⅳ-41　2　ⅣA5　緑色泥岩）が出土している。石斧は覆土上層（暗黄灰色土）の上方，西壁際に水平の状態で出土した。

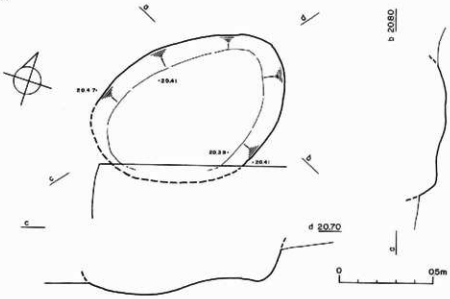


図Ⅳ－41　P－46出土遺物



図版Ⅳ－73　P－46出土遺物

P－47



図Ⅳ－42　P－47実測図

位置　D-100-d-イ，　平面形　楕円形，

H－21の床面調査の過程で検出された。床面には凹凸があり，壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっている。掘り込み面は明らかでなくH－21との先後関係も不明である。

遺物は覆土下層から時期を判別することができない土器片が1点，軽石(幅9.5cm，厚さ5.7cm）が1点出土している。

図版Ⅳ－74　P－47完掘（S→N）

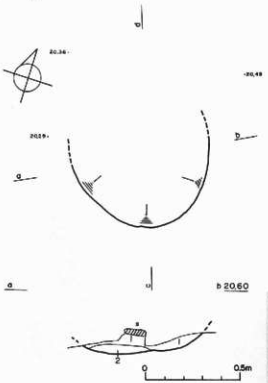
P－48

位置　D-100-a-イ，D-100-a-ニ　平面形　楕円形か？

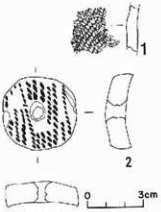
P-47と同様にH-21の西側を調査する過程で検出された。掘り込み面は不明である。壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっていると思われる。

遺物は覆土上層よりフレイク1点，同下層より土器片2点（1点は時期を判別できない），土製品が1点出土している。図Ⅳ-44　1の土器は，内面はていねいなヨコナデ調整を施し，焼成は良好で堅緻である。Ⅲ群b-3類に相当するものと思われる。図Ⅳ-44　2の土製品は土器の胴部破片を利用したもので，周縁は打ちかき後，調整されており，孔は両面からうがたれている。外面には撚糸文が施され，内面は磨かれている。

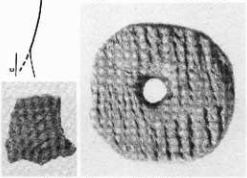
P－48



図Ⅳ－43　P－48実測図

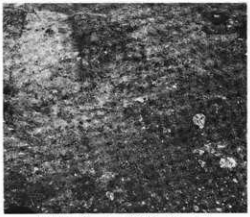


図Ⅳ－44　P－48出土遺物

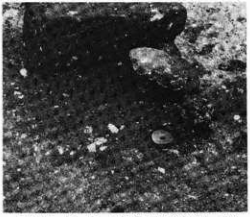


図版Ⅳ－75　P－48出土遺物

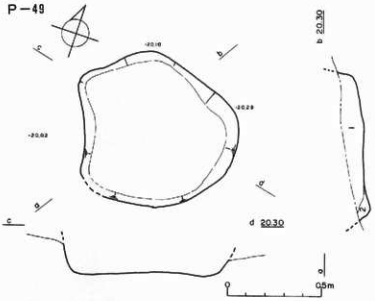
層位　1．暗褐色土（軽石を多量に含む）　2．黄褐色土



図版Ⅳ－76　P－48完掘（W→E）



図版Ⅳ－77　P－48遺物出土状況（S→N）



図Ⅳ－45　P－49実測図

層位　1．暗褐色土（火山灰，炭火物が混入）
2．黄茶褐色土（軽石が混入）

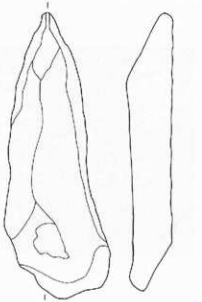
図版Ⅳ－78　P－49完掘（S→N）

図版Ⅳ－79　P－49出土遺物

位置　D-100-d-ロ　　平面形　不整形

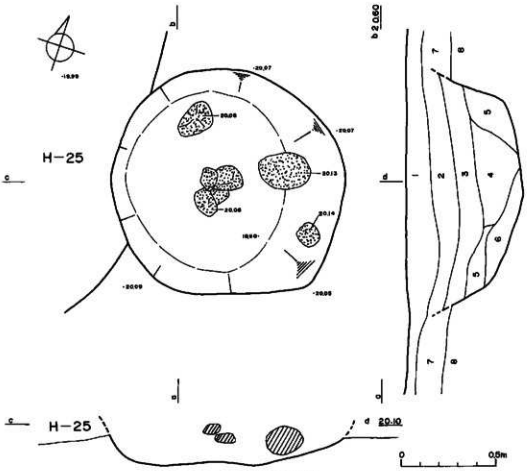
H-21の西側を調査中に礫と木炭が出土したため，周辺を精査したところ検出された。礫のレベルから判断すると，H-21よりも後に掘り込まれたものと推測される。床面は中央がやや高く，壁は垂直に近い傾斜で立ちあがっている。

前述した礫（図Ⅳ-46）は二つに割れており，焼けた痕跡がある。長さ30cm，最大幅10cm，厚さ4.9cm，重さ1.5kgで，平面形はほぼ三角形を呈している。また覆土中から頁岩製のフレイクが4点まとまった状態で出土した。



図Ⅳ－46　P－49出土遺物

P－50



図Ⅳ－47　P－50実測図

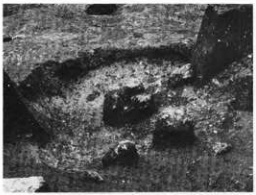
層位　1．暗褐色土Ⅰ層　2．暗茶褐色土（砂質，1～3㎝大の軽石を含む）　3．暗茶褐色土（②＋微少の炭化物）　4．茶黄色土（②＋多量の黄色土＋炭化物）　5．暗茶褐色土（やや粘質）　6．黒茶褐色土（少量の黄色土，軽石を含む。やや粘質）　7．暗褐色土Ⅱ層上層　8．暗褐色土Ⅱ層下層

位置　E－1－a－ニ，E－1－d－イ　　平面形　ほぼ円形

規模　1.34m/0.9m×1.22m/0.85m×0.49m

床面には全体に凹凸があり，中央部分がくぼんでいる。壁は急傾斜で立ちあがっている。攪り込み面は暗褐色土Ⅱ層上層上面である。覆土上・中層は砂質，同下層は黄色土，炭化物がまじり，粘質である。全体に微細な軽石を含んでいる。また覆土中・下層には10～25㎝大の軽石が7個，礫が2個混在していた。覆土は埋め戻しの堆積状態を示している。

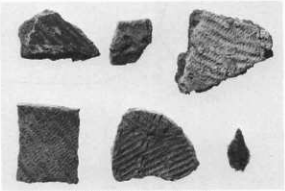
遺物は覆土上層より土器片6点，同下層より土器片6点，フレイク2点，石鏃破片1点が出土している。



図版Ⅳ－80　P－50完掘（E→W）

図版Ⅳ－81　P－50セクション（W→E）

図Ⅳ－48　P－50出土遺物

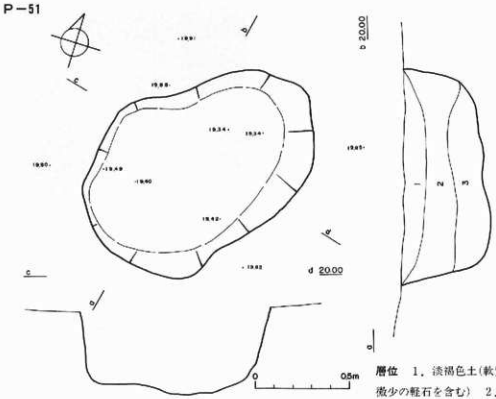


図版Ⅳ－82　P－50出土遺物

図番号		名称	出土層位	分類	内面色調	外面色調	粘土色調	備考
図Ⅳ－48	1	土器	覆土下層	類b－3	淡褐色	暗灰色	黒褐色	内面はヨコナデ調整。1㎜大の小石・長石・石英を含む。軟質。
	2	〃	〃	〃	明灰褐色	暗灰色	暗灰色	内面に明らかでないようなヨコナデ調整。焼成良好堅緻。
	3	〃	〃	〃	暗灰色	淡橙色	淡黒色	内面は黒色がはなはだしい。3～5㎜大の小石を多く含む。
	4	〃	〃	〃	暗褐色	褐色	暗褐色	内面はヨコナデ調整。長石粒を含む。焼成良好堅緻。
	5	土器	覆土上層	類b－3	淡灰褐色	褐色	明灰色	内面はタテ・ヨコ方向にナデ痕。軟質。砂粒多し。

図番号		名称	出土層位	分類	材質	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）
図Ⅳ－48	6	石鏃	覆土上層	ⅠA8	黒曜石		1.5	0.4	

表Ⅳ－15　P－50掲載遺物一覧



図Ⅳ－49　P－51実測図

層位　1．淡褐色土(軟質，微少の軽石を含む)　2．暗黄灰色土(砂質)　3．暗灰褐色土

図版Ⅳ－83　P－51完掘（S→N）

図版Ⅳ－84　P－51南北セクション（E→W）

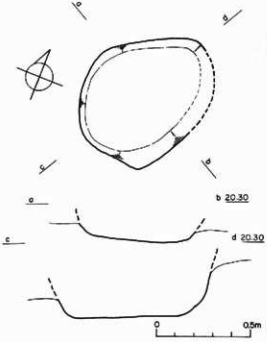
位置　D-1-d-ロ　　平面形　変形長円形

規模　1.37m/1.13m×0.82m/0.62m×0.46m　　長軸方向　N→E　36.5°

床面には凹凸があり，壁は垂直に近い傾斜で立ちあがっている。H-23の石組炉跡の下で確認した。覆土は砂質で，軽石，黄色土が多量にまじり，汚れている。

遺物は出土していない。

P－52



図Ⅳ－50　P－52実測図

図版Ⅳ－85　P－52完掘（S→N）

位置　D-1-b-イ　　平面形　長円形

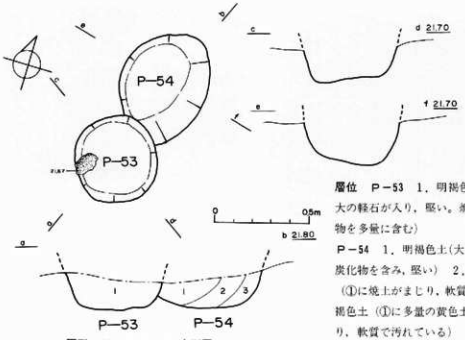
規模　0.8m/0.7m×0.6m/0.5m×0.24m

長軸方向　N→E　32°

床面はほぼ平坦で，壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっている。H-23の床面上で確認されたが，掘り込み面は不明である。覆土は軽石を少量含み，粘質である。

遺物は出土していない。

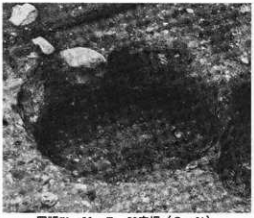
P－53．54



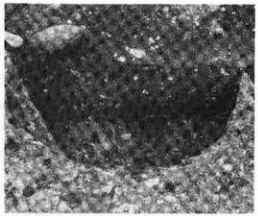
図Ⅳ－51　P－53，54実測図

層位　P－53　1．明褐色土（1cm大の軽石が入り，堅い。焼土，炭化物を多量に含む）

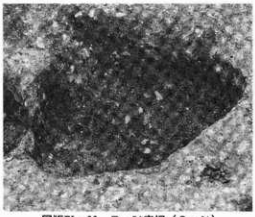
P－54　1．明褐色土（大きな軽石，炭化物を含み，堅い）　2．明褐色土（①に焼土がまじり，軟質）　3．茶褐色土（①に多量の黄色土粒がまじり，軟質で汚れている）



図版Ⅳ－86　P－53完掘（S→N）



図版Ⅳ－87　P－53セクション（S→N）



図版Ⅳ－88　P－54完掘（S→N）

図版Ⅳ－89　P－54セクション（S→N）

図Ⅳ－52　P－53(1)，P－54(2)出土遺物

図版Ⅳ－90　P－53，54出土遺物

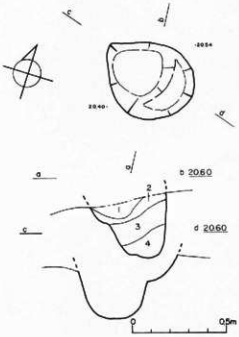
P-53　位置　C-100-c-ニ　　平面形　ほぼ円形，規模　0.46m/0.38m×　/　×0.17m

P-54　位置　C-100-c-ニ　　平面形　長円形，規模 0.59m/0.38m×(0.48m)/0.3m×0.24m，長軸方向　N→W　8.6°，P-53，54とも床面には凹凸があり，壁は垂直に近い傾斜で立ちあがっている。覆土は，P-53では焼土，軽石，P-54では焼土，炭化物，軽石を混入し，上層は堅く，ほかは軟質で汚れている。P-53がP-54を切ってつくられている。P-53の南西部分には，H-22の石組炉の石がのっている。

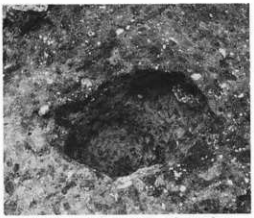
図番号		名称	出土層位	分類	内面色調	外面色調	粘土色調	備考
図Ⅳ－52	1	土器	覆土上層		淡褐灰色	淡褐灰色	淡茶灰色	粘土は粗雑。
	2	〃	〃		淡黒褐色	淡黒褐色	淡黒褐色	内面はタテ方向にていねいなナデ痕あり。焼成良好堅緻。

表Ⅳ－16　P－53，54掲載遺物一覧

P－55



図Ⅳ－53　P－55実測図



図版Ⅳ－91　P－55完掘（S→N）

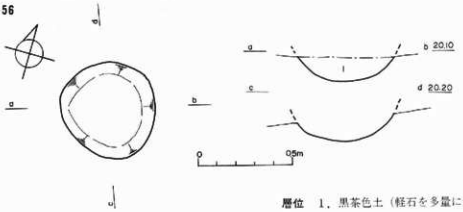
図版Ⅳ－92　P－55セクション（W→E）

層位　1．暗褐色土　2．暗茶褐色土　3．暗褐色土（軽石を含む）　4．暗褐色土

位置　D-100-d-ハ　・平面形　楕円形？　地山上で確認されたもので，東側に段をもつ。他の土壙と比較して小型であり，H-21に隣接することから，同住居跡に付属する可能性がある。

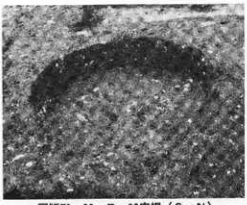
遺物は覆土中より土器細片が出土しているが，時期は不明である。

P－56

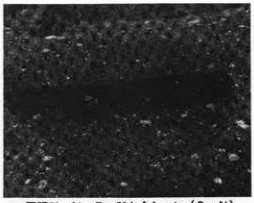


層位　1．黒茶色土（軽石を多量に含む）

図Ⅳ－54　P－56実測図



図版Ⅳ－93　P－56完掘（S→N）

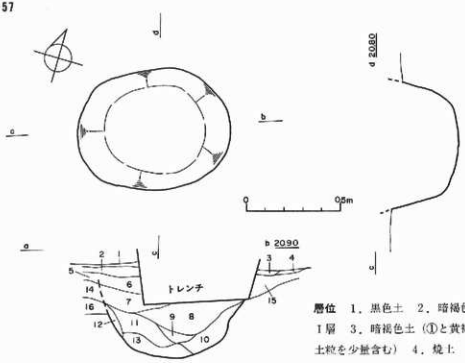


図版Ⅳ－94　P－56セクション（S→N）

位置　D-100-c-ニ　　平面形　ほぼ円形　　規模　0.52m/0.4m×0.48m/0.36m×0.13m

床面は中央部がくぼみ，断面形は皿状である。地山上で確認され，掘り込み面は不明である。覆土は堅く，軽石を多く含んでいる。遺物は出土していない。

P－57



図Ⅳ－55　P－57実測図

層位　1．黒色土　2．暗褐色土Ⅰ層　3．暗褐色土（①と黄褐色土粒を少量含む）　4．焼土　5．暗褐色土Ⅱ層上層　6．暗褐色土　7．暗褐色土（黄色土粒を少量混入）　8．黄茶色土　9．＝7　10．黄褐色土（暗褐色土混入）　11．暗褐色土　12．暗茶褐色土　13．暗褐色土（黄色味を帯びる）　14．暗褐色土Ⅱ層下層　15．＝14　16．黄褐色土（黄色味を帯び，軽石を含む）

図版Ⅳ－95　P－57発掘（N→S）

図版Ⅳ－96　P－57セクション（N→S）

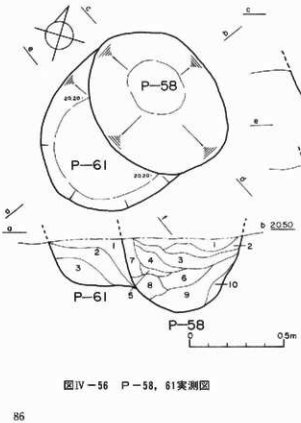
位置　H-2-a-ハ・ニ　　平面形　長円形

規模　0.84m/0.53m×0.64m/0.46m×0.35m　　長軸方向　N→E　69.4°

床面は中央部がくぼみ，壁は急傾斜で立ちあがっている。東壁側では暗褐色土Ⅱ層下層上面に堆積している焼土を切っており，この焼土が覆土に混入している。掘り込み面は暗褐色土Ⅱ層上層中か同層上面と思われる。覆土最下層には炭化物が混入し，全体に汚れている。

遺物は出土していない。

P－58，61



図Ⅳ－56　P－58，61実測図

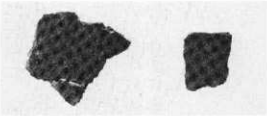
層位　P－58　1．暗褐色土（火山灰を混入）　2．暗茶褐色土（①を混入）　3．暗褐色土(木炭を少量混入)　4．暗褐色土(黄色土粒を混入)　5．黄褐色土　6．暗褐色土(黄色土まじり)　7．暗黄色土　8．暗褐色土(黄色土を多量に混入)　9．暗褐色土(⑧より黄色土が少ない)　10．暗黄褐色土

P－61　1．暗茶褐色土　2．暗茶褐色土（黄褐色土まじり）　3．褐色土(黄褐色土混入)

図版Ⅳ－97　P－58，61完掘（W→E）

図版Ⅳ－98　P－58，61セクション（S→N）

図Ⅳ－57　P－61出土遺物



図版Ⅳ－99　P－61出土遺物

P-58　位置　H-2-a-ニ　　平面形　長円形

規模　0.86m/0.29m×0.65m/0.27m×0.38m　　長軸方向　N→W　63.5°

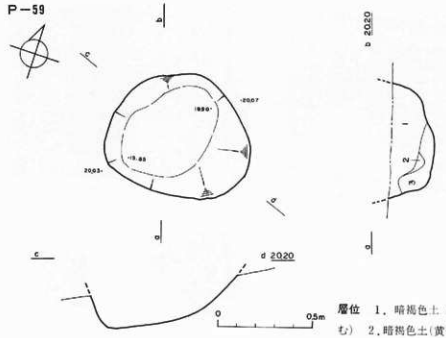
P-61　位置　H-2-a-ニ　　平面形　長円形か？

床面はP-58では中央部がくぼみ，P-61では平坦である。壁はともに急傾斜で立ちあがっている。確認面は漸移層中である。掘り込み面は不明である。P-58の覆土は中・下層に黄色土が多く混入し，特に南壁側は汚れている。P-61の覆土も黄色土が多量に混入し，非常に汚れている。P-58の上層とP-61の上層は同質の土で，確認面では両者の切り合い関係を確認することができなかったが，長軸方向に半截し，その断面観察によってP-58がP-61を切ってつくられていることが判明した。

遺物はP-58の覆土上層より土器片（時期不明）が1点，礫破片が1点出土している。P-61の覆土中より土器片が2点，黒曜石剥片が1点出土している。

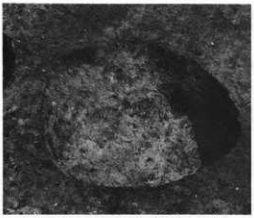
図Ⅳ-57　1の土器は，胎土に2㎜大の小石が多く入り，焼成良好で堅い。内面はタテ方向にていねいなナデ調整が施されている。色調は内面が淡褐色，外面は暗褐灰色である。Ⅲ群b-3類に相当するものと思われる。

図Ⅳ-57　2の土器は，胎土に長石を多く含み，あらい。内面はヨコナデ調整を施している。色調は内外面とも暗灰褐色である。小型・薄手の土器である。Ⅲ群b-3類に相当するものと思われる。

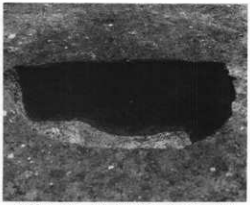


図Ⅳ－58　P－59実測図

層位　1．暗褐色土（軽石を少量含む）　2．暗褐色土（黄褐色土まじり）
3．黄褐色土（汚れている）



図版Ⅳ－100　P－59完掘（W→E）



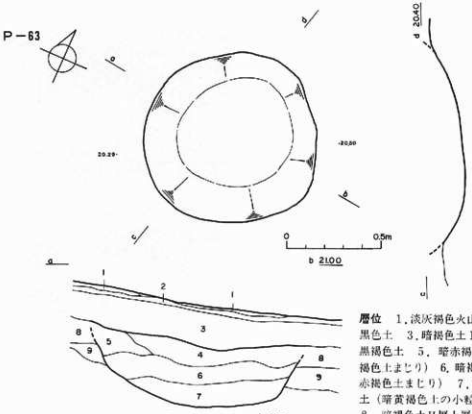
図版Ⅳ－101　P－59セクション（E→W）

位置　G-2-b-イ　　平面形　楕円形か？

規模　0.76m/0.4m×0.68m/0.54m×0.23m　　長軸方向　N→W　70.5°

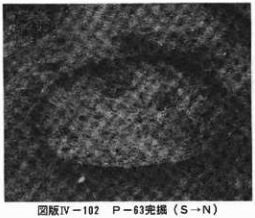
床面は西側がくぼみ，北西側にはゆるやかな段をもつ。東側はゆるやかな傾斜で立ちあがり，ほかはほぼ急傾斜で立ちあがっている。確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。覆土は南側下層に汚れた黄褐色土が堆積している。

遺物は出土していない。

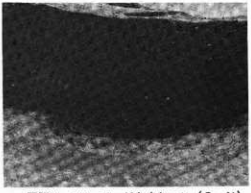


図Ⅳ－59　P－63実測図

層位　1.淡灰褐色火山灰　2.黒色土　3.暗褐色土Ⅰ層　4.黒褐色土　5.暗赤褐色土（暗褐色土まじり）　6.暗褐色土（暗赤褐色土まじり）　7.暗茶褐色土（暗黄褐色土の小粒を含む）　8.暗褐色土Ⅱ層上層　9.暗褐色土Ⅱ層下層



図版Ⅳ－102　P－63完掘（S→N）



図版Ⅳ－103　P－63セクション（S→N）

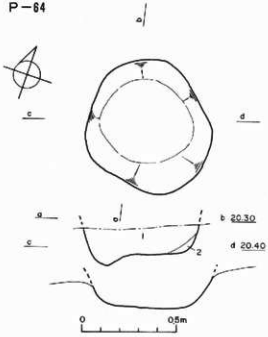
位置　G-2-a-ハ，G-2-b-ニ　　平面形　ほぼ円形

規模　0.96m/0.6m×　/　×0.32m

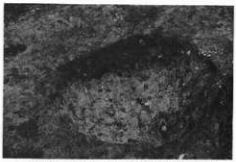
床面は東側に傾斜している。壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっている。掘り込み面は暗褐色土Ⅱ層上層中か，同層上面と思われ，地山を掘り込んでつくられている。覆土下層には黄色土が多量に混入し，汚れている。

遺物は出土していない。

P－64



図Ⅳ－60　P－64実測図



図版Ⅳ－104　P－64完掘（W→E）

図版Ⅳ－105　P－64セクション（E→W）

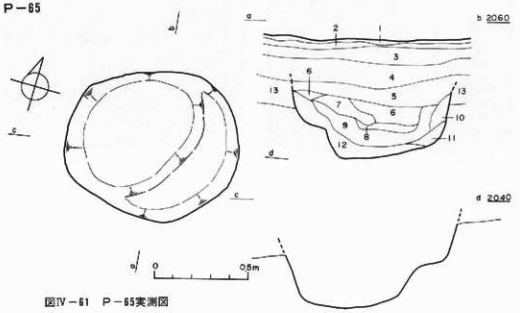
層位　1．暗褐色土（黄褐色土の小粒を含む）　2．黄褐色土

位置　G－2－a－ハ　平面形　隅丸長方形か？　規模　0.7m/0.47m×0.63m/0.43m×0.2m　長軸方向　N→W　61°

床面はほぼ平坦だが，南壁際に径約17cmの浅いくぼみがある。壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっている。

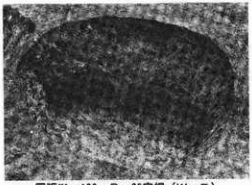
遺物は出土していない。

P－65

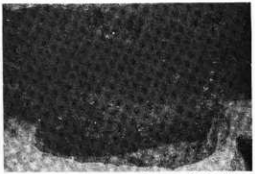


図Ⅳ－61　P－65実測図

層位　1．淡灰褐色火山灰　2．黒色土　3．暗褐色土Ⅰ層　4．暗褐色土Ⅱ層上層　5．暗褐色土　6．黄褐色土（⑤がまじり，軽石を含む）　7．黒褐色土　8．暗黄褐色土　9．暗褐色土（黄色味を帯びる）　10．暗黄褐色土　11．黄茶褐色土　12．黄褐色土（粘質，汚れている）　13．暗褐色土Ⅱ層下層



図版Ⅳ－106　P－65完掘（W→E）



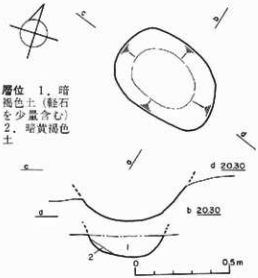
図版Ⅳ－107　P－65セクション（E→W）

位置　G－2－a－ハ　　平面形　ほぼ長円形

規模　0.93m/0.75m×0.72m/0.35m×0.4m　　長軸方向　N→W　75.5°

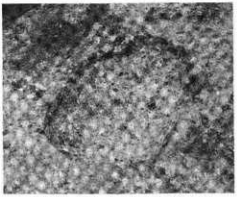
床面は東側が段状になっている。壁はほぼ垂直に近い傾斜で立ちあがっている。掘り込み面はセクションベルトの断面観察によると暗褐色土Ⅱ層下層上面で，地山を掘り込んでつくられている。覆土は全体に黄色土が混入し汚れている。遺物は出土していない。

P－66



層位　1．暗褐色土（軽石を少量含む）　2．暗黄褐色土

図Ⅳ－62　P－66実測図



図版Ⅳ－108　P－66完掘（W→E）

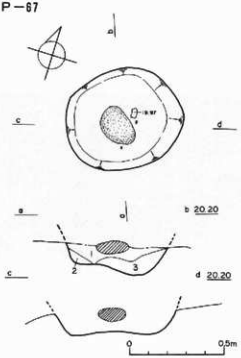
位置　G－2－a－ニ　　平面形　長円形

規模　0.58m/0.36m×0.41m/0.25m×0.16m

長軸方向　N→W　71°

床面は中央部がくぼみ，断面形は碗状である。確認面は地山上であり，掘り込み面は不明である。遺物は覆土中よりⅢ群b－3類に相当する土器片が2点，時期不明の土器細片3点，黒曜石のフレイク，剥片が1点づつ出土した。

P－67



図Ⅳ－63　P－67実測図

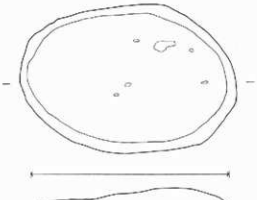
層位　1．黒色土　2．黒色土＋黄色土
3．暗黄茶色土（軽石を多量に含む）

図版Ⅳ－109　P－67検出状況（S→N）

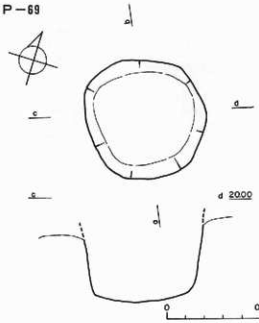
図版Ⅳ－110　P－67完掘（W→E）

位置　F－2－a－ロ　　平面形　長円形
規模　0.61m/0.59m×0.51m/0.45m×0.15m
長軸方向　N→E　45.5°

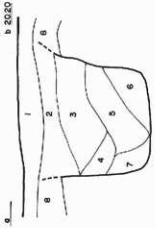
床面は北西側がくぼんでいる。壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっている。確認面は地山上であり，掘り込み面は不明である。覆土下層には黄色土，軽石が多く混入し，汚れている。覆土中の礫（図Ⅳ-64）は長さ23.1cm，最大幅15.5cm，厚さ7.8cm，重さ4.0kgで，材質は多孔性安山岩である。片面全体に使用痕があり，石皿を何らかの目的でこの土壙に置いたものと思われる。



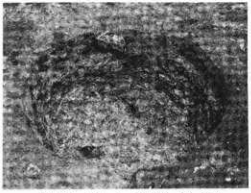
図Ⅳ－64　P－67出土遺物



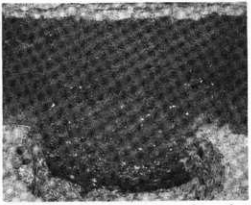
図Ⅳ－65　P－69実測図



層位　1．暗褐色土Ⅱ層上層　2．黒茶色土　3．黒茶色土(黄色土粒を含む)　4．黒茶色土(軟質。黄色土粒を含む)　5．暗黄茶色土(軽石，黄色土，炭化物を含む)　6．暗黒茶色土　7．黒色土(粘質)　8．暗褐色土Ⅱ層下層



図版Ⅳ－111　P－69完掘（W→E）



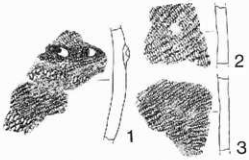
図版Ⅳ－112　P－69セクション（W→E）

位置　F－1－c－ニ，F－2－b－イ　　平面形　ほぼ円形

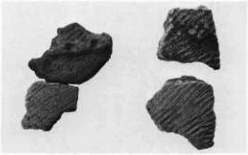
規模　0.62m/0.51m×　/　×0.57m

床面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ちあがっている。掘り込み面は，南北メインセクションベルトの断面観察によると，暗褐色土Ⅱ層下層中あるいは同層上面と思われる。地山を深く掘り込んでつくられている。覆土は黄色土を多量に含み，中層から下層にかけて炭化物が混入している。覆土は全体的に汚れており，埋め戻したものと推察される。

遺物は覆土中より10点（Ⅲ群b－2類に相当するものが2点，Ⅲ群b－3類に相当するものが3点，時期不明のものが2点）出土している。



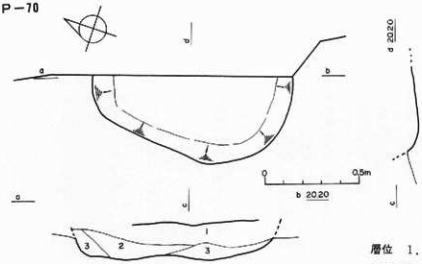
図Ⅳ－66　P－69出土遺物



図版Ⅳ－113　P－69出土遺物

図番号		名称	出土層位	分類	内面色調	外面色調	胎土色調	備考
図Ⅳ－66	1	土器	覆土中	類b－2	暗黒褐色	淡橙色	淡茶褐色	内面はタテ方向にミガキ調整か？。軟質。砂粒多し。
	2	〃	〃	類b－3	沢色	淡黄橙色	淡黄灰色	焼成良好堅緻。
	3	〃	〃	〃	暗褐色	黄橙色	淡褐色	内面はヨコナデ調整。砂粒多し。

表Ⅳ－17　P－69掲載遺物一覧



図Ⅳ－67　P－70実測図

層位　1．黄茶褐色土　2．暗黄褐色土　3．黄褐色土

位置　F－2－a－ロ　　平面形　隅丸長方形？

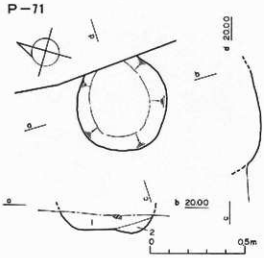
規模　(1.1m)/(0.75m)×(0.75m)/(0.6m)×0.18m

長軸方向　N→W　18°

床面には凹凸がある。壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっているものと思われる。確認面は地山上であり，掘り込み面は不明である。覆土は黄色土，軽石をわずかに含む黒茶色土である。

遺物は覆土下層よりⅢ群b－3類に相当すると思われる土器片が1点出土している。

図版Ⅳ－114　P－70完掘（W→E）



図Ⅳ－68　P－71実測図

図版Ⅳ－115　P－71発掘（W→E）

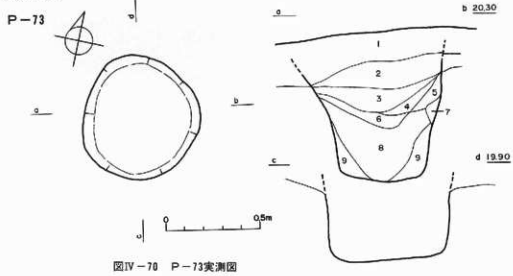
図Ⅳ－69
P－71出土遺物

図版Ⅳ－116
P－71出土遺物

層位　1．暗褐色土　2．暗黄褐色土

位置　F－2－a－イ・ロ　平面形　隅丸方形か？　規模　(0.49m)/(0.32m)×　/　×0.09m

床面はほぼ平坦であるが，南壁際に浅いくぼみがある。壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっている。確認面は地山上であり，掘り込み面は不明である。覆土は黒茶色土で土器片が4点出土している。図Ⅳ-69の土器は床面より数cm程上方より出土した。内面はていねいなヨコナデ調整を施し，色調は内面が淡黒色，外面が黄灰色で，胎土はあらい。Ⅲ群b－2類に相当するものと思われる。



図Ⅳ－70　P－73実測図

層位　1．暗褐色土Ⅱ層下層　2．暗褐色土(①と同質だが黒色味を帯びる)　3．明黒褐色土(軽石，黄色土，炭化物を含む)　4．淡茶褐色土(黄色土粒を多く含む)　5．淡黒褐色土(微少の黄色土粒，炭化物を含む)　6．黄褐色土(多量の黄色土を含む)　7．暗黄色土　8．淡黒褐色土(黄色土粒を含む)　9．暗黄褐色土

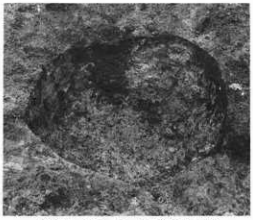
位置　E-1-c-ハ，E-1-d-ニ

平面形　隅丸長方形

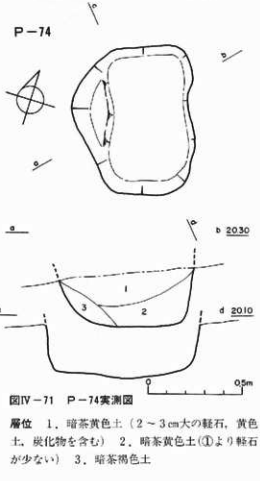
規模　0.68m/0.58m×0.63m/0.54m×0.5m

長軸方向　N→W　35.4°

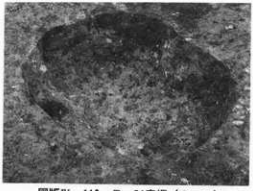
床面は平坦で，壁は垂直に立ちあがっている。確認面は地山上であるが，東西メインセクションベルトの断面観察によると，掘り込み面は暗褐色土Ⅱ層下層中か同層上面と思われる。覆土には黄色土，炭化物，軽石が多量に混在し，埋め戻されたものと思われる。遺物は覆土中よりⅣ群a類に相当する薄手で無文の口縁部破片が2点出土している。



図版Ⅳ－117　P－73完掘（S→N）



図Ⅳ－71　P－74実測図



図版Ⅳ－118　P－74完掘（S→N）

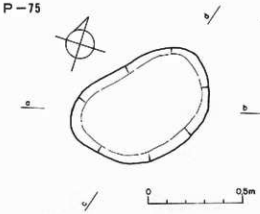
図版Ⅳ－119　P－74セクション（S→N）

層位　1．暗茶黄色土（2～3cm大の軽石，黄色土，炭化物を含む）　2．暗茶黄色土(①より軽石が少ない)　3．暗茶褐色土

位置　F-2-b-ハ　G-2-a-ニ　平面形　隅丸長方形　規模　0.78m/0.67m×0.5m/0.42m×0.28m　長軸方向　N→W　18.5°

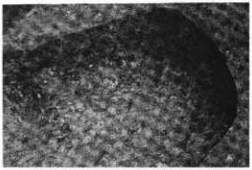
床面にはわずかに凹凸がある。壁はほぼ垂直に立ちあがっている。覆土には黄色土，軽石がまじり，上層には炭化物が混入している。

P－75

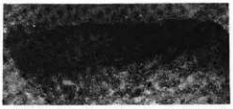


図Ⅳ－72　P－75実測図

層位　1．淡黒色土　2．暗茶黄色土（①＋黄色土）　3．暗茶褐色土（黄色土粒を多く含む）　4．暗黄褐色土（③＋黄色土＋鞍石）　5．暗黄灰色土（多量の黄色土を含む）



図版Ⅳ－120　P－75完掘（N→S）



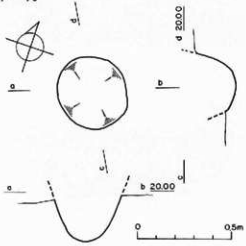
図版Ⅳ－121　P－75セクション（W→E）

位置　F－2－b－1　　平面形　長円形

規模　0.7m/0.62m×0.54m/0.43m×0.24m　長軸方向　N→E21°

床面はほぼ平坦で，壁は急傾斜で立ちあがっている。確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。覆土には多量の黄色土が混入している。遺物は出土していない。

P－76



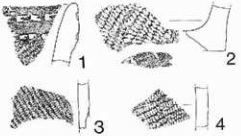
図Ⅳ－73　P－76実測図

図版Ⅳ－122　P－76完掘（S→N）

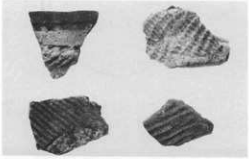
位置　F-2-b-ロ　　平面形　円形

規模　0.37m/　×　/　×0.23m

確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。また南側は風倒木により大きく撹乱されていた。覆土は軽石まじりの黒茶色土である。土器片が6点（口縁部1点，底部1点，胴部4点）出土している。



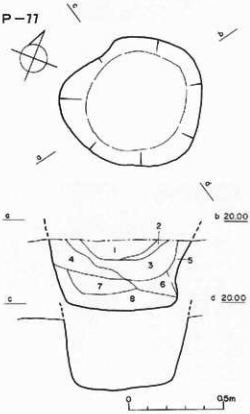
図Ⅳ－74　P－76出土遺物



図版Ⅳ－123　P－76出土遺物

図版番号	番号	名称	出土層位	分類	内面色調	外面色調	胎土色調	備考
図Ⅳ－74	1	土器	覆土中	Ⅲb－3	淡褐灰色	暗灰色	褐茶灰色	内面・口縁にていねいなヨコナデ調整，軟質，長石・石英を多く含む。
	2	〃	〃	〃	淡灰褐色	黄灰色	淡茶灰色	内面はヨコナデ調整，底部外面に縄文状・ケズリ痕あり，軟質。
	3	〃	〃	類a	淡褐色	淡褐色	明灰黄色	内面はていねいなヨコナデ調整，軟質，長石粒・小石を含む。
	4	〃	〃	〃	淡褐色	淡褐色	淡灰褐色	内面はヨコナデ調整，硬質，砂粒多し。

表Ⅳ－18　P－76掲載遺物一覧



図Ⅳ－75　P－77実測図

図版Ⅳ－124　P－77完掘（S→N）

図版Ⅳ－125　P－77セクション（S→N）

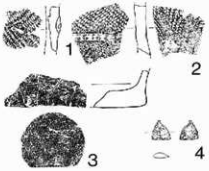
層位　1．暗褐色土（木炭を少量含む）　2．暗茶褐色土　3．暗褐色土　4．暗黄褐色土（軽石を多量に含む）　5．黄褐色土（汚れている）　6．黒褐色土（ボソボソしている）　7．灰茶褐色土（軽石を多量に含む）　8．暗茶褐色土（軽石を多量に含む）

位置　F－2－b－イ　　平面形　隅丸長方形？

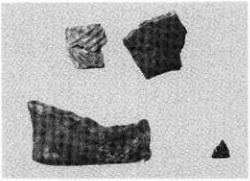
規模　0.68m/0.52m×(0.6m)/(0.42m)×0.32m　長軸方向　N→W　16.5°

床面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ちあがっている。確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。南西壁側の覆土中には軽石，黄色土が混入しており，壁が崩れたものと思われる。覆土上層には炭化物が混入している。

遺物は覆土中より土器片10点，石鏃破片1点，フレイク1点が出土している。



図Ⅳ－76　P－77出土遺物



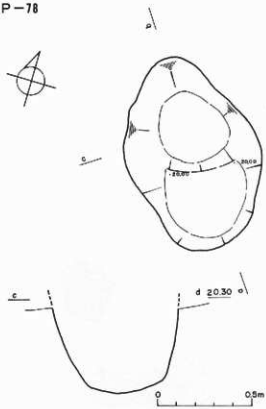
図版Ⅳ－126　P－77出土遺物

図番号		名称	出土部位	分類	内面色調	外面色調	胎土色調	備考
図Ⅳ－76	1	土器	覆土中	類土－3	灰褐色	黄灰色	暗褐色	焼成良好堅緻。
	2	〃	〃	〃		暗灰色	暗茶灰色	内面に褐変痕あり。焼成良好堅緻。
	3	〃	〃	不明		暗灰色	暗茶灰色	直部外面色調黄灰色。焼成良好堅緻。

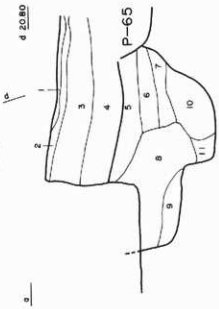
図番号		名称	出土層位	分類	材質	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）
図Ⅳ－76	4	石鏃	覆土中	IA8	黒曜石				

表Ⅳ－19　P－77掲載遺物一覧

図版Ⅳ-127　G-2-c暗褐色土Ⅱ層上層出土遺物（S→N）



図Ⅳ－77　P－78実測図



層位　1．淡灰褐色火山灰　2．黒色土　3．暗褐色土Ⅰ層　4．暗褐色土Ⅱ層上層　5．暗褐色土（軽石を少量含む）　6．暗褐色土（火山灰を少量含む）　7．暗褐色土（黄色土粒，炭化物を少量含む）　8．暗茶褐色土（汚れている）　9．暗褐色土（Ⓖと同質）　10．暗黄褐色土　11．黒褐色土

図版Ⅳ－128　P－78完掘（W→E）

図版Ⅳ－129　P－78セクション（W→E）

位置　G－2－a－ロ，G－2－b－イ

平面形　楕円形　長軸方向　N→W　33.5°

規模　1.03m/0.4m×0.7m/0.36m×0.51m

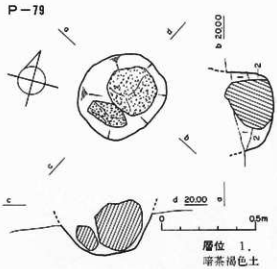
床面は南東側が18cm程高く，段状になっている。壁は北西壁がゆるやかな傾斜であるけれども，ほかの部分はほぼ垂直に立ちあがっている。確認面は地山上であるが，セクションベルトの断面観察によると，北西壁上方はP－65に切られ

図Ⅳ－78　P－78出土遺物

図版Ⅳ－130　P－78出土遺物

ている。P-65の掘り込み面は暗褐色土Ⅱ層上層中と推察されるので，P-78の掘り込み面は同層上層中か同層下層上面かと思われる。覆土は全体的に黄色土が混入し，非常に汚れている。

遺物は覆土中より土器片が3点出土している。図Ⅳ－78の土器は胎土に小石を含むが，緻密で，焼成良好である。



層位　1．暗黒褐色土
2．暗黄褐色土

図Ⅳ－79　P－79実測図

図版Ⅳ－131　P－79軽石出土状況（S→N）

図版Ⅳ－132　P－79完掘（S→N）

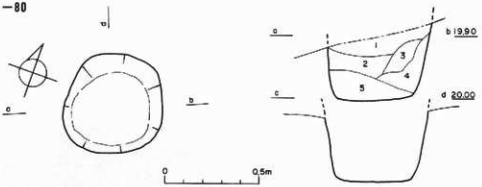
図版Ⅳ－133　P－79セクション（S→N）

位置　F-2-b-イ　　平面形　ほぼ円形

規模　0.46m/0.29m×　/　×0.24m

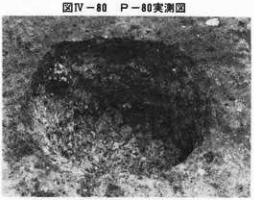
床面の中央部はくぼんでいる。壁は南東壁がほぼ垂直に立ちあがり，ほかはゆるやかな傾斜で立ちあがっている。確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。覆土には2個の軽石（長さ0.24m　幅0.22m　厚さ0.26m，長さ0.16m　幅0.1m　厚さ0.14m）があり，ともに床面に接していた。

P－80



層位　1．暗褐色土(軽石を少量含む)　2．黄茶褐色土(黄白色の小粒を少量含む)　3．黄茶褐色土(軽石を含む)　4．暗茶褐色土(軽石を少量含む)　5．暗黄褐色土(軽石を含む)

図Ⅳ－80　P－80実測図



図版Ⅳ－134　P－80完掘(W→E)

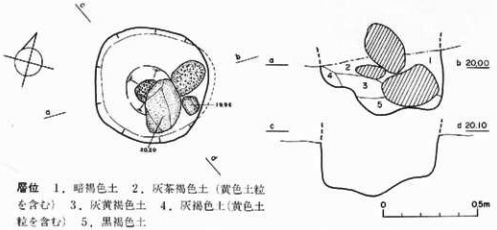
図版Ⅳ－135　P－80セクション(S→N)

位置　F-2-a-ロ，F-2-b-イ，F-1-c-ニ　　平面形　ほぼ円形

規模　0.55m/0.42m×　/　×0.35m

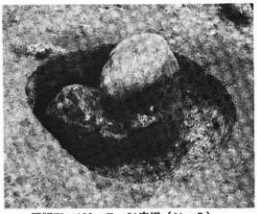
床面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ちあがっている。確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。遺物は覆土中よりⅢ群b-3類に相当する土器片2点，時期不明の土器2点が出土している。

P－81

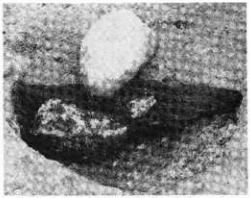


層位　1．暗褐色土　2．灰茶褐色土(黄色土粒を含む)　3．灰黄褐色土　4．灰褐色土(黄色土粒を含む)　5．黒褐色土

図Ⅳ－81　P－81実測図



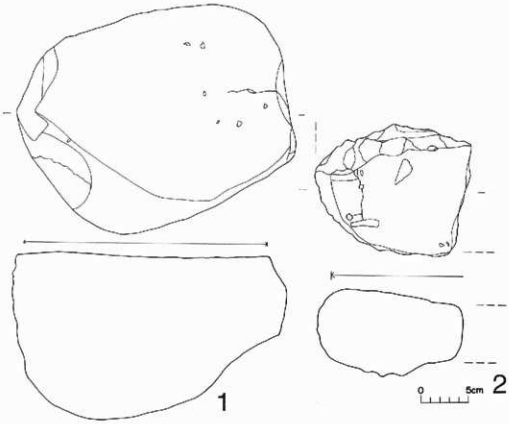
図版Ⅳ－136　P－81完掘（N→S）



図版Ⅳ－137　P－81セクション（N→S）

位置　F-2-b-イ　　平面形　ほぼ円形　　規模　0.6m/0.55m×　/　×0.3m

床面は中央部が浅くくぼんでいる。壁は北東壁がわずかにオーバーハングしている以外は，ほぼ垂直に立ちあがっている。確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。南西壁側の覆土には黄色土が混入して汚れている。覆土からは石皿２点，軽石２点が相互に重なりあい，一部を床面に接した状態で出土した。遺物はⅢ群b-３類に相当する土器片が１点出土した。



図Ⅳ－82　P－81出土遺物

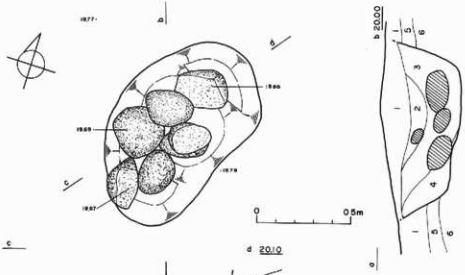
図版Ⅳ－138　P－81出土遺物(図Ⅳ－81　1)

図版Ⅳ－139　P－81出土遺物(図Ⅳ－81　2)

図番号	名称	出土層位	分類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
図Ⅳ－82　1	石皿	覆土中	VB1	安山岩	28.5	22.0	17.2	15.30kg
2	〃	〃	〃	〃	(16.0)	13.0	9.8	(2.04kg)

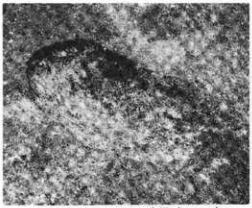
表Ⅳ－20　P－81掲載遺物一覧

P－82



図Ⅳ－83　P－82実測図

層位　1．暗褐色土Ⅱ層下層　2．黒茶色土(軽石を多く含む)　3．暗茶黄色土(軽石と暗茶色土がまじり，汚れている)　4．黒茶色土　5．漸移層　6．地山



図版Ⅳ－140　P－82完掘（W→E）

図版Ⅳ－141　P－82検出土状況（W→E）

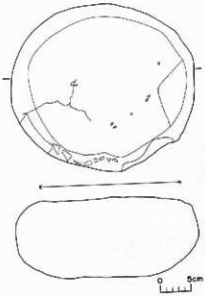
図版Ⅳ－142　P－82セクション（W→E）

位置　H－1－c－ニ，H－2－b－イ

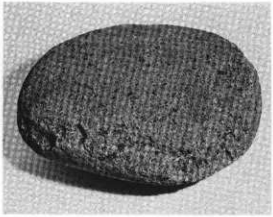
平面形　長円形　　長軸方向　N→E　10°

規模　1.04m/0.85m×0.66m/0.5m×0.22m

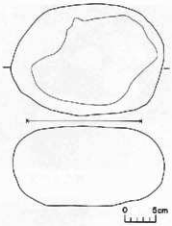
床面は中央部がくぼみ，低い段状になっている。壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっている。かなり急な斜面に掘り込まれており，床面も南へ傾斜している。確認面は地山上であるが，セクションベルトの断面観察によると，掘り込み面は暗褐色土Ⅱ層上層上面と思われる。覆土の中・下層には黄色土，軽石が多量に混入し，汚れている。覆土下層からは7個の石皿が出土している。



図Ⅳ－84　P－82出土石皿



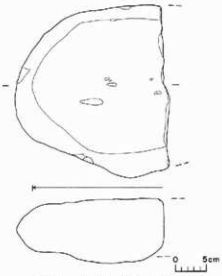
図版Ⅳ－143　P－82出土石皿（図Ⅳ－84）



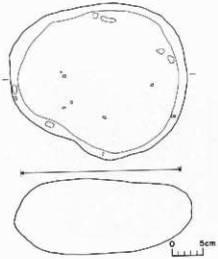
図Ⅳ－85　P－82出土石皿

図版Ⅳ－144　P－82出土石皿(図Ⅳ-85)

図版Ⅳ－145　P－82出土石皿(図Ⅳ-86)

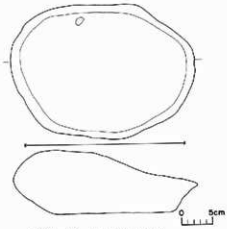


図Ⅳ－86　P－82出土石皿

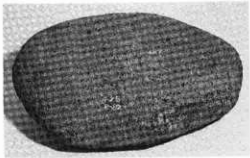


図Ⅳ－87　P－82出土石皿

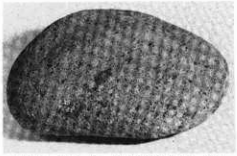
図版Ⅳ－146　P－82出土石皿(図Ⅳ－87)



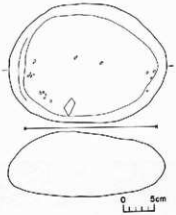
図Ⅳ－88　P－82出土石皿



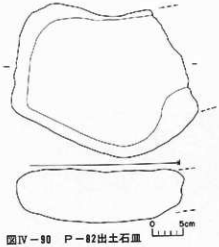
図版Ⅳ－147　P－82出土石皿(図Ⅳ－88)



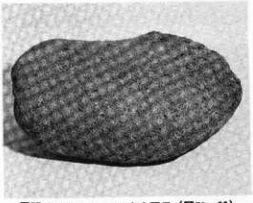
図版Ⅳ－148　P－82出土石皿(図Ⅳ－89)



図Ⅳ－89　P－82出土石皿



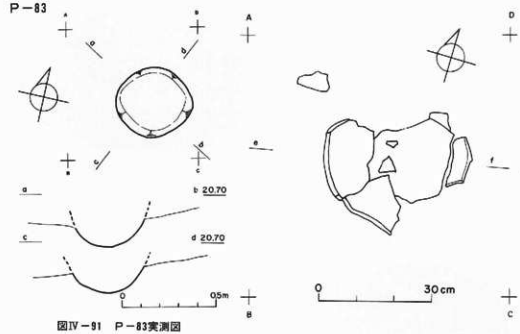
図Ⅳ－90　P－82出土石皿



図版Ⅳ－149　P－82出土石皿（図Ⅳ－90）

図　番　号	名　称	出土層位	分　類	材　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
図Ⅳ－84	石　皿	覆土下層	Ⅵ類Ⅰ	安山岩	29.6	26.3	12.5	14.5kg
図Ⅳ－85	〃	〃	〃	〃	25.0	17.4	12.7	8.5kg
図Ⅳ－86	〃	〃	〃	〃	(24.5)	27.2	10.1	(9.5kg)
図Ⅳ－87	〃	〃	〃	〃	28.4	25.0	12.0	11.8kg
図Ⅳ－88	〃	〃	〃	〃	29.6	24.1	10.0	9.8kg
図Ⅳ－89	〃	〃	〃	〃	25.3	18.8	10.2	6.5kg
図Ⅳ－90	〃	〃	〃	〃	(28.2)	22.1	8.0	(10.5kg)

表Ⅳ－21　P－82掲載遺物一覧

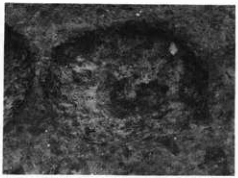


図Ⅳ－91　P－83実測図

図版Ⅳ－150　P－83遺物出土状況(W→E)

図Ⅳ－92　P－83遺物出土状況

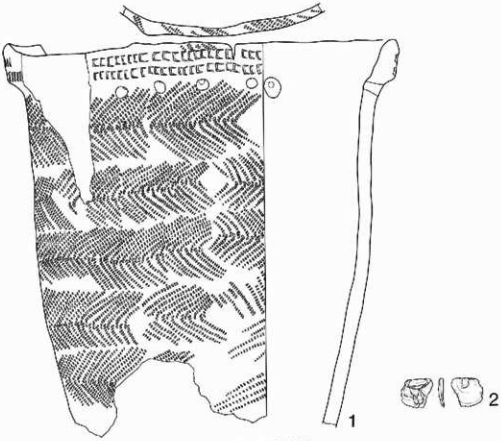
図版Ⅳ－151　P－83遺物出土状況(W→E)



図版Ⅳ－152　P－83完掘（W→E）

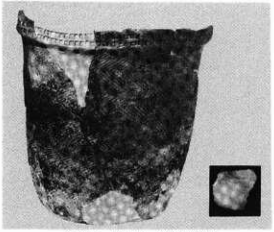
位置　F-2-d-ロ　　平面形　隅丸方形　　規模　0.36m/0.31m×　/　×0.31m

床面はくぼみ，断面形は碗状である。包含層を漸移層まで掘り下げたところで，内面を上にした一括土器を検出し，周囲を精査してその輪郭の検出に努めたが形状を確認することはでき



図Ⅳ－93　P－83出土遺物

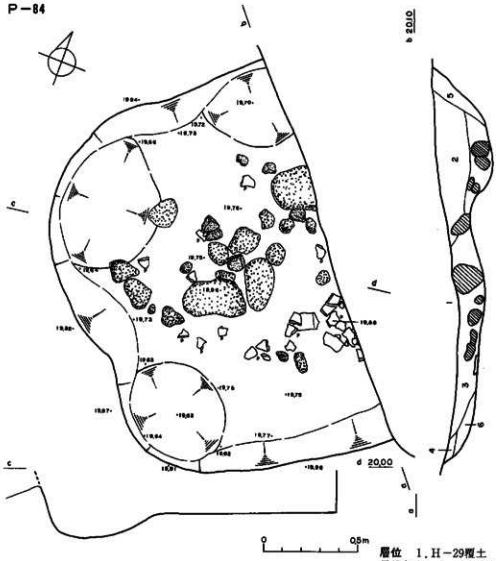
なかった。上方の包含層にはこの土器片はなく，土器を割り，その一部分を土壙の底に置いたものと思われる。この土器（図Ⅳ-93　1）はⅢ群b-3類（北筒式）に相当するものである。またこの土器の直上にフレイクが1点出土している。



図版Ⅳ－153　P－83出土遺物

図番号	名称	出土層位	分類	内面色調	外面色調	断面色調	備考
図Ⅳ-93　1	土器	底面	底面b-3	暗灰色	淡灰褐色	淡茶褐色	口径32.0cm器高(31.5cm)。内面は指押痕あり。軟質，砂土混密。
図番号	名称	出土層位	分類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
図Ⅳ-93　2	フレイク	火面	XA2	珪質	2.3	2.3	0.4	1.8

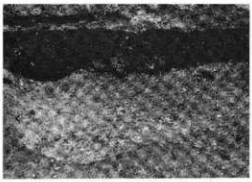
表Ⅳ－22　P－83掲載遺物一覧



図Ⅳ－94　P－84実測図

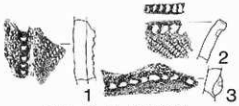
層位　1．H－29覆土　2．黒褐色土　3．暗黒茶色土（大きな軽石，土器片を含む）　4．黒茶色土　5．暗灰褐色土（少量の軽石を含む）　6．暗黄茶色土

位置　F－2－d－ロ　　床面はほぼ平坦であるが，北・北西・南壁際に，それぞれ0.41m×(0.38m)，0.52m×0.72m，0.44m×0.57m，深さ30cm程のくぼみがある。壁はゆるやかな傾斜で立ちあがっていると思われる。H－29の床面を掘り下げ地山上で確認されたものである。覆土は黒茶色土で全体に軽石，礫が多量に混在している。床面より約10cm程の高さから土器片が多数出土した。また小礫，軽石も含まれている。出土状況などから判断すると，これらは一時期に混入されたものと思われる。遺物は土器271点（Ⅱ群b－2類相当8点，Ⅲ群b－3類相当90点，Ⅳ群a類相当70点，時期不明103点），石器13点，礫54点が出土している。



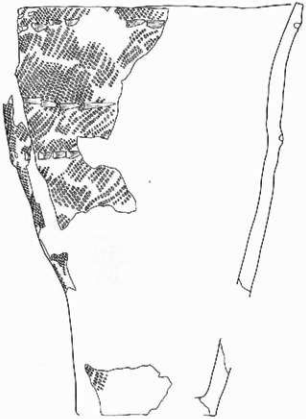
図版Ⅳ－154　P－84完掘（W→E）

図版Ⅳ－155　P－84遺物出土状況（S→N）



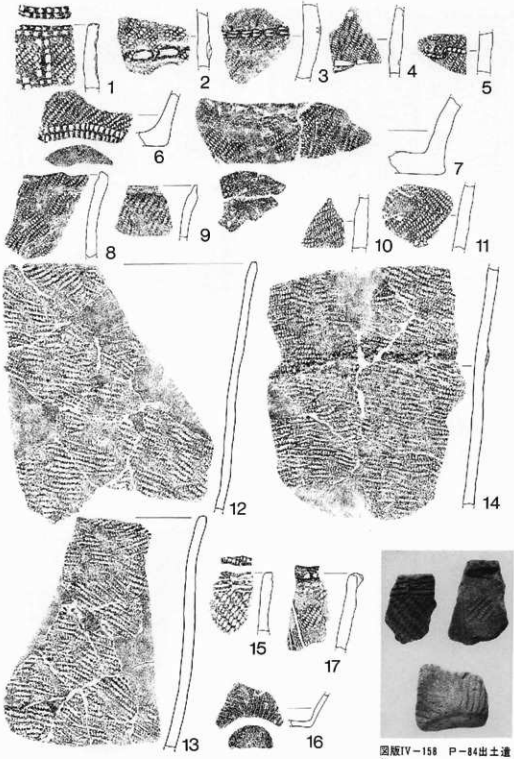
図Ⅳ－95　P－84出土遺物

図版Ⅳ－156　P－84出土遺物（図Ⅳ－95）



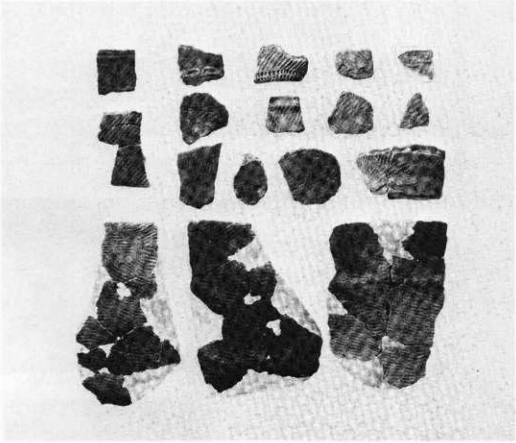
図Ⅳ－96　P－84出土遺物

図版Ⅳ－157　P－84出土遺物（図Ⅳ－96）

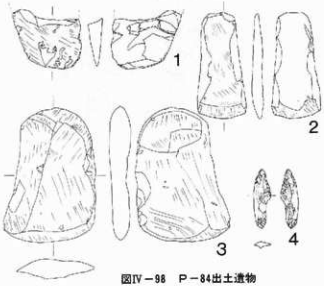


図IV－97　P－84出土遺物

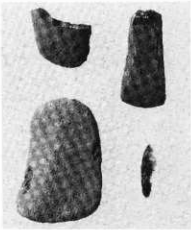
図版IV－158　P－84出土遺物
（図IV－97　15・16・17）



図版Ⅳ－159　P－84出土遺物（図Ⅳ－97）



図Ⅳ－98　P－84出土遺物

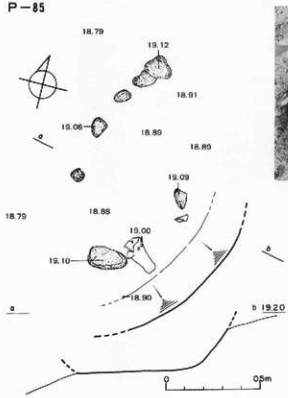


図版Ⅳ－160　P－84出土遺物

遺構番号	名称	地出土層位	分類	内面色調	外面色調	胎土色調	備考
図Ⅳ－95	1 土器	覆土中	甕ⅱ－3	暗灰色	淡褐色	淡褐色	乗成良好甕。
	2 〃	〃	〃	暗黒褐色	淡褐色	淡褐色	内面にはナデ方向のヘラ状ありヘ。軟質，砂粒多。
図Ⅳ－96	1 土器	覆土中	甕ⅱ－3	明褐色	明褐色	淡褐色	口縁部に2条凹線，内面にコゲ付着。乗成良好甕。
図Ⅳ－97	1 土器	覆土中	甕ⅱ－3	暗褐色	暗褐色	暗褐色	内面はヨコナデ調整，白石粒多く含む。乗成良好甕。
	2 〃	〃	〃	暗褐色	暗褐色	暗褐色	内面はていねいなヨコナデ調整，全体につくりは粗雑。
	3 〃	〃	〃	暗灰色	淡褐色	暗褐色	内面はヨコナデ調整，軟質，砂粒多し。
	4 〃	〃	〃	暗灰褐色	暗橙色	淡橙色	内面は不定方向にナデ痕あり。乗成良好甕。
	5 〃	〃	〃	淡褐色	橙色	淡橙色	乗質，粒子は細密。
	6 〃	〃	〃	暗黒褐色	赤橙色	暗黒褐色	内面はヨコナデ調整，軟質，砂粒多し。
	7 〃	〃	〃	暗灰褐色	赤橙色	淡黒褐色	内面はヨコナデ調整，軟質，粒子細密。
	8 〃	〃	〃	淡褐色	黒褐色	淡黒褐色	内面はていねいなヨコナデ調整，乗成良好甕。
	9 〃	〃	〃	黒褐色	淡黒灰色	黒褐色	内面はヨコナデ調整，砂粒多し。
	10 〃	〃	〃	淡褐色	暗灰色	淡褐色	内面はヨコナデ調整，3～5mm大の小石含む。
	11 〃	〃	〃	淡黒色	暗橙色	黒褐色	内面はていねいなヨコナデ調整，粒子は粗い。
	12 〃	〃	甕ⅱ	暗灰色	暗灰色	暗灰色	外面にススの付着あり。乗成良好甕。
	13 〃	〃	〃	暗褐色	暗灰色	暗灰色	内面はナデ方向にていねいなヨコナデ調整，乗成良好甕。
	14 〃	〃	〃	暗灰色	暗褐色	暗黒褐色	内面はナデ方向にていねいなヨコナデ調整，軟質，外面にススの付着あり。
	15 〃	〃	〃	淡褐色	淡褐色	暗灰色	内面はヨコナデ調整，全体につくりは粗雑。
	16 〃	〃	〃	暗褐色	淡灰褐色	淡灰褐色	内面はヨコナデ調整，軟質，砂粒は細密。
	17 〃	〃	〃	暗灰褐色	暗褐色	暗褐色	内面はていねいなヨコナデ調整，粘土を多く含み，粒子は粗い。

遺構番号	名称	出土層位	分類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
図Ⅳ－98	1 石斧	覆土中	M A 8	緑色凝灰岩	8.4	3.9	0.7	(39.1)
	2 〃	〃	M A 2	〃	10.2	7.3	1.6	148.0
	3 磨石	〃	明 R 2	砂岩	4.8	1.4	0.5	2.7
	4 フレイク	〃	玉 A 2	黒曜石				

表Ⅳ－23　P－84掲載遺物一覧



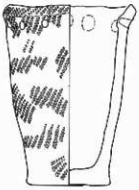
図Ⅳ－99　P－85実測図

図版Ⅳ－161　P－85完掘（S→N）

図版Ⅳ－162　P－85遺物出土状況（S→N）

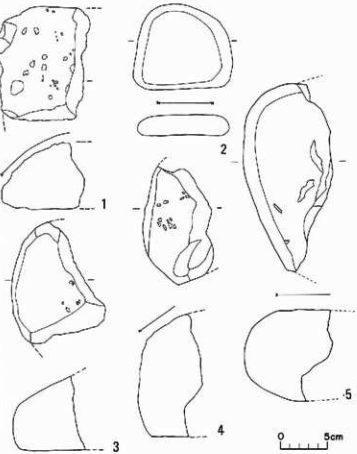
位置　H－1－a－ニ

地山土で完型土器（図Ⅳ-100）が出土したため周辺を精査したところ，南東壁の立ちあがりを確認して，遺構であることが判明した。平面形，規模などは不明である。床面より約10cm程上方の土中から礫数個（図Ⅳ-101）が出土している。床面は一部分しか残存していないが，東から西へ傾斜している。

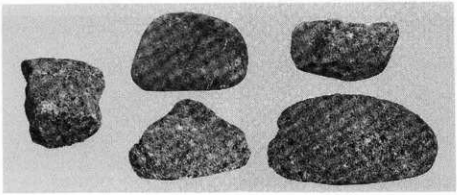


図Ⅳ－100　P－85出土遺物

図版Ⅳ－163　P－85出土遺物



図Ⅳ－101　P－85出土遺物



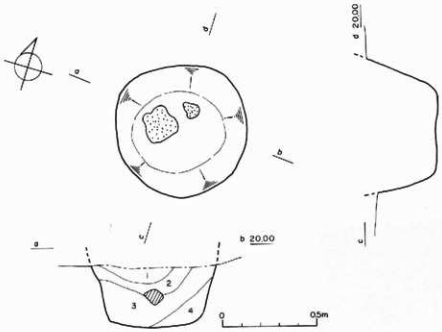
図版Ⅳ－164　P－85出土遺物（図Ⅳ－101）

図番号	名称	出土層位	分類	内面色調	外面色調	胎土色調	備考
図Ⅳ－101	土器	1K 黒	国ヶ－3	黒褐色	明褐色	暗灰褐色	暗灰褐色	口径10.8cm器高14.3cm内面は指凹になはがしい。全体につ（りが厚薄。

図番号	名称	出土層位	分類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
図Ⅳ－101	1	石皿	縄土中	粗目8	安山岩	〃		6.9	(1.08kg)
	2	〃	〃	〃	〃	9.0	10.4	2.1	420.0
	3	〃	〃	〃	〃				(690.0)
	4	〃	〃	〃	〃				(1.21kg)
	5	〃	〃	〃	〃			4.8	(1.56kg)

表Ⅳ－24　P－85掲載遺物一覧

P－86



図Ⅳ－102　P－86実測図

層位　1．暗褐色土（粘質。炭化物を含む）　2．褐色土(粘質。炭化物を多く含む)　3.暗茶黄色土（黄色土，軽石，①がまじり，汚れている）　4．黒褐色土(軽石を含む)

図版Ⅳ－165　P－86完掘（S→N）

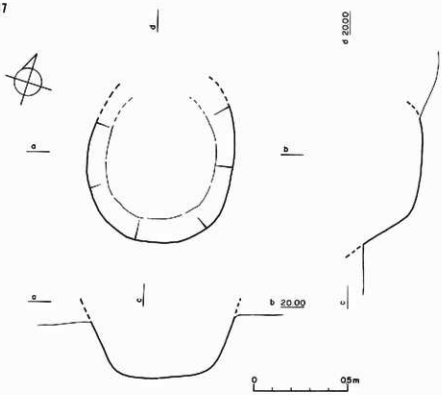
図版Ⅳ－166　P－86セクション(S→N)

位置　E-1-c-ニ　　平面形　ほぼ円形

規模　0.35m/0.24m×0.35m/0.21m×0.33m

床面はほぼ平坦である。壁は垂直に近い傾斜で立ちあがっている。H-29の床面を地山まで掘り下げたところで確認された。覆土上層には炭化物が混入し，中・下層には黄色土と軽石が混入して非常に汚れている。遺物は出土していない。

P－87



図Ⅳ－103　P－87実測図

位置　F-1-D-ニ

平面形　長円形か？

規模　/　×0.76m/0.58m×0.31m

長軸方向　N→W　18'

床面はほぼ平坦で，壁はやや急な傾斜で立ちあがっている。確認面は地山上で，掘り込み面は不明である。北側は風倒木による撹乱を受けている。遺物は出土していない。

図版Ⅳ－167　P－87発掘（N→S）

V　包含層出土の遺物

1．土　器

ここでは第1章で示した土器の分類基準にしたがって，今回の調査で出土した各時期の土器について記述する。

なお，写真図版に入れた番号のうち，カッコ内のものは，拓本の番号と一致している。

Ⅰ群ａ類の土器（図版Ｖ－１－４－１～９）

器形の全体がわかるものはない。

１～４・９は同一個体で，横位の貝殻条痕文と貝殻腹縁文が施文されている。５の口縁端部はほぼ平坦で，外面には貝殻条痕文がみられる。６・７は外面に貝殻による押引文，内面に貝殻条痕文が施文されている。８は外面に貝殻条痕文が施されたものである。

これらは，白老郡白老町虎杖浜３遺跡のⅠ群ａ－２類土器（財団法人　北海道埋蔵文化財センター編　1983ａ）に相当するものである。

Ⅱ群ａ類の土器（図版Ｖ－１－４－10～13）

10は撚糸を押圧した貼付帯が口縁部をめぐり，その下に爪形の撚糸圧痕文が施されている。11は貼付帯によって区画された内側に爪形の撚糸圧痕文と三本単位の撚糸圧痕文が施されている。10～12まではサイベ沢Ｖａ式土器に相当するものである。

13は口縁部に波状の貼付帯がめぐるもので，サイベ沢Ｖｂ式土器に相当すると思われる。

Ⅱ群ｂ－２類の土器（図版Ｖ－１－１－１・２，図版Ｖ－１－５～６）

柏木川式土器に相当するもので，文様要素から以下のように細分した。

図版Ｖ－１－５－１～14・18

貼付帯上，または器面に刺突文があるもの。１～３・９・11・13は口縁端部にも刺突文が施されている。12は刺突文の間とその下部に沈線文が施されている。18は刺突文が施されたもので，底部には貼り出しがみられる。

図版Ｖ－１－１－１，図版Ｖ－１－６－６

貼付帯上に押引文が施されたものである。図版Ｖ－１－１－１の深鉢は口縁部がほぼ直立し，胴部にくびれがある。外面には炭化物が付着している。口縁に平行する２条の貼付帯と口縁から垂下する貼付帯の交点には円形文が貼付されている。内面はナデ調整が行われているが，なお，ザラつきが残る。図版Ｖ－１－６－６では縦方向の貼付帯上に押引文を施した後，刺突を行っている。

図版Ｖ－１－１－２，図版Ｖ－１－５－15～17，図版Ｖ－１－６－１～３

縄線文を施した土器である。口縁端部には刺突文を施している例が多い。

図版Ｖ－１－１－２は口縁部が直線的に立ちあがる深鉢で，山形突起を有し，口縁端部にも

縄文が施文されている。胴部には，地文の縄文上に粗雑な斜格子状沈線が描かれている。内面調整はミガキである。内面の胴下部と外面には炭化物が付着している。図版Ⅴ－１－５－16は山形突起から垂下する貼付帯上と口縁内面に縄線文が施文されたもので，口唇直下と貼付帯の側縁には，刺突文が施されている。図版Ⅴ－１－６－３は円形の貼付文がある。

図版Ⅴ－１－６－４～13

沈線文が施されたものを一括した。

４と５は同一個体である。４の口縁部には半截竹管状工具による刺突文が施されている。また，貼付帯上にも刺突文の痕跡が残っている。胴部上位には半截竹管状工具を使用してU字形の沈線文が施されている。これに類似した文様は羅志郡乙部町元和遺跡第３地点(元和11遺跡)出土のD群土器[出](大沼忠春編　1976）にみとめられる。７と８は同一個体で，刺突文を有する貼付帯の下に２本一組の沈線によって曲線的な文様が描かれている。これらの土器や10・12にみられる沈線文は，大木系土器と関連をもつものかもしれない。９は口縁部に狭い無文帯をもち，縦方向の沈線が１条施されている。13は刺突文が施された貼付帯の内部に３条の太い沈線がみられるもので，一応，この類に含めた。

図版Ⅴ－１－６－14～17

口縁部に貼付突起を有するものを一括した。14～16は貼付帯上に貫通孔があるもので，14は横，15は縦，16は斜方向に孔が穿たれている。これと同様の土器は昭和57年度の調査の際にも出土している(財団法人　北海道埋蔵文化財センター編　1983ｂ)。これらは，元和遺跡E群(大沼忠春　1976）にみられるつり耳が退化したものの可能性があろう。17は波状口縁で，大きく外反している。

Ⅲ群ｂ－３類の土器

本報告書では，この時期の土器を３つに分類し，それらをさらに細分した。

Ⅲ群ｂ－３類の１（図版Ⅴ－１－１－３～５，図版Ⅴ－１－７）

胎土には砂粒・小礫が多量に混入している。成形・調整は粗雑で内面は凹凸が多く，指オサエの痕跡が顕著に残っている。胴部は斜行縄文や結束羽状縄文が施されているものが大部分を占めているが，図版Ⅴ－１－７－９のように撚糸文が施文されている例もある。同図版４～６・19は胴部にも押引文が施されている。14は押引文上に刺突文があるものである。

器形・文様からみると次のように細分される。

図版Ⅴ－１－１－５，図版Ⅴ－１－７－１～16

口縁部に断面三角形の肥厚帯をもつものである。

図版Ⅴ－１－１－５，図版Ⅴ－１－７－１～14

肥厚帯上には押引文が施されたものと縄文が施されたものがある。押引部の施文具には半截竹管状工具が使用されているものが多いが，図版Ⅴ－１－７－２のように縄端圧痕文が施されたものや同図版10のようにヘラ状工具によって施文されたものもみられる。同図版１は口縁端部にも押引文が施文されている。肥厚帯直下には突瘤文が施されるのが一般的だが，同図版３

は突瘤文をもたない例である。

図版Ⅴ－１－７－11・12は口縁部に山形突起の痕跡が残り，その頂部には小孔がみられる。

図版Ⅴ－１－７－15・16

幅の広い肥厚帯上にヘラ状工具によって短刻線文が施され，その直下に突瘤文を有する。後述するⅢ群ｂ－３類の３の一部と文様要素が類似していることに注意すべきだろう。

図版Ⅴ－１－１－３・４，図版Ⅴ－１－７－17～26

口縁部に断面三角形の肥厚帯をもたないもので，口縁端部の形態は丸味を帯びたものが多いが，図版Ⅴ－１－７－22のようにＴ字形に肥厚したものもみられる。

図版Ⅴ－１－１－３は胴部が大きくふくらんだものである。山形突起の頂部には小孔が穿たれている。図版Ⅴ－１－１－４は口縁部が外反し，胴部にふくらみがある。外面の口縁部から胴部にかけては炭化物が付着している。図版Ⅴ－１－７－17は山形突起を有し，口縁端部には押引文が施文されている。同図版20と21は同一個体で，口縁部の貼付帯に縄端圧痕と思われるものが施されている。26は内面に細密条痕（大島直行・瀬川拓郎編　1982）を有するが，この類に含めておく。

これらの土器は，トコロ６類（駒井和愛編　1963）に相当する土器である。

Ⅲ群ｂ－３類の２（図版Ⅴ－１－６－18）

胎土は砂粒を含み，内面は研磨されている。口縁部内面には炭化物が付着している。

口頸部は大きくくびれ，いったん屈曲した後，張りのある胴部に続く。口縁端部には山形の突起がある。口頸部には刺突文を施した細い貼付帯がめぐり，山形突起の直下は弧状になっている。

大木系の土器と思われる。

Ⅲ群ｂ－３類の３（図版Ⅴ－１－６，図版Ⅴ－１－８～10）

胎土は砂粒が多いが，成形，調整は後述するⅣ群ａ類の１と比較すると一般に丁寧である。

内面調整はナデが普通だが，ミガキが施されたものもみられる。また，刷毛目状の細密条痕がある例がわずかにみとめられる。

器形は胴部が直線的に立ちあがるもの，胴上部でいったん屈曲し，外反する口縁部に続くもの，胴部にふくらみがあるものがみられる。

器面の縄文は，すべて単節の斜行縄文で原体を横方向に回転したものが多いが，図版Ⅴ-1-10-15・16など原体を縦方向に回転した例もみられる。縄文は条が通り，節が深く印されたものが大半である。貼付帯を有する場合は，貼付を行った後に縄文が施されている。貼付帯上に羽状縄文が施されているものには，貼付帯の中央か，あるいは下端を境にして施文されている。

文様などから次の５つに細分される。

図版Ⅴ－１－８

貼付帯上，または地文上に１条ないし２条の縄線文が施されたもので，LR と RL の両方の撚りがみとめられる。縄線文は口縁に平行してめぐるものが多いが，８や12のように縦位のもの

もある。4・12は口縁端部にも縄線文が施文されている。

6は口縁部がやや内彎し，羽状縄文が縦位に施されている。10・11は口縁端部に突起があるもので，突起の頂部に10は刻み目が，11は縄線文が施されている。15～17は，外反する無文の口縁部と以下の縄文や撚糸文の境を縄線文で区画したものである。19は底部付近に2条の縄線文が施されたもので，底部は外側に張り出している。

図版Ⅴ－1－9

ヘラ状の工具やや半截竹管状の工具を使用して短刻線文が描かれている。短刻線文は，貼付帯上に施されたもの，地文上に直接施されたもの，その両方に施文されたものの三種類がある。横位のものが多いが，縦位・斜位の例もある。

図版Ⅴ－1－9－7・8の口縁部には円形の貼付文が施されている。これに類するものは，上磯郡知内町湯の里1遺跡のⅠ群ｆ類土器（峰山巌・山田格・古原敏広・大島直行　1979）にもみられる。図版Ⅴ－1－9－12の短刻線文は斜方向から刺突が行われている。

図版Ⅴ－1－10－1～8

短刻線文の下かまたはその間に無文帯をもつもので，短刻線文が貼付帯上に施されている場合には貼付帯上に縄文がみられない。5は無文帯の部分に突瘤文が施文されたもので，登別市千歳6遺跡（大島直行・瀬川拓郎編　1982）や白老郡白老町虎杖浜4遺跡（財団法人　北海道埋蔵文化財センター編　1981）からもこれに類似したものが出土している。

図版Ⅴ－1－1－6，図版Ⅴ－1－10－9～17

貼付帯上，または肥厚帯上に縄文を施すものである。後述するⅣ群ａ類の1とは，器面に縄文を施文する順序や貼付帯の断面形が異なっている。

図版Ⅴ－1－1－6は胴部が直線的に立ちあがり，肥厚帯が3条めぐっている。図版Ⅴ－1－10－14・17は貼付帯の下または上下にナデによって無文帯を形成したものである。同図版12は縦位の貼付帯が施されている。

図版Ⅴ－1－10－18～25

斜行縄文または羽状縄文が器面全体に施されている。口縁端部の形態は四角いものが多いが，22は三角形である。18・23は口縁部に幅の狭い無文帯がある。

これらに類似した土器は，函館市西桔遺跡の第Ⅱ文化層（松下亘編　1974），山越郡静狩遺跡（大場利夫・田川賢蔵　1955），函館市煉瓦台遺跡（大場利夫・蛯子千代志　1965），登別市千歳6遺跡（大島直行・瀬川拓郎編　1982）などから出土し，それぞれ，ノダップⅡ式，静狩式，煉瓦台式，短刻線文土器群（Ⅲ2ａ群土器）などと称されている。

Ⅳ群ａ類の土器

本報告書では，この時期の土器を3つに分類し，それをさらに細分した。

Ⅳ群ａ類の1（図版Ⅴ－1－11・12）

胎土は砂粒が多く，成形・調整は一般に粗雑で，器面に指オサエの痕跡が残るものも多い。ナデ調整が行われている場合でも，器面にはザラつきが残っている。

器形は胴部が直線的に立ちあがるもの，胴上部でいったん屈曲してから外反する口縁部に続くもの，胴部にふくらみをもつものがある。

地文の縄文には，原体を横方向に回転したものと縦方向に回転したものの２種類がある。前者の縄文は条が通り，節が器面に深く印されているが，後者の縄文には，浅く印され，条が通らず，施文単位間に空白部分が残っているものもみとめられる。

貼付帯をもつものは，縄文を施文してから貼り付けを行い，この貼付帯上に縄文を施しているものが多いが，貼り付け後，全体に施文を行う例も図版Ⅴ－１－11－10など少数みられる。

文様などから次の４つに細分される。

図版Ⅴ－１－11，図版Ⅴ－１－12－１・５・７

貼付帯には図版Ⅴ－１－11－１のように粘土帯の合わせ目にみられる肥厚帯と区別し難いものもあるが，一般的には扁平で，幅も一定ではない。図版Ⅴ－１－11－10・12～14，図版Ⅴ－１－12－５・７のように，貼付帯の間に無文部をもつものもみられる。この場合，無文部にはナデ調整が行われているものが多い。図版Ⅴ－１－11－14は口縁端部に縄文が施されているが，このような例は少ない。図版Ⅴ－１－12－１は口縁部が無文である。

図版Ⅴ－１－12－２

地文と貼付帯上に斜格子状の撚糸文を施している。貼付帯の成形と撚糸文の施文の順序についてははっきりしない。

図版Ⅴ－１－12－３・４・６・８

縄文のみの土器である。図版Ⅴ－１－12－３は胴部にややふくらみがある。８の口縁部には狭い無文帯がある。

図版Ⅴ－１－２－１，図版Ⅴ－１－12－９

無文の土器である。図版Ⅴ－１－２－１は小型で，口縁部はゆるやかに外反している。

これらは余市式土器（大沼忠春　1981）に属するものと思われる。

Ⅳ群ａ類の２（図版Ⅴ－１－13）

図版Ⅴ－１－13－１～17

地文の縄文や貼付帯の上に縄線文を施しているものである。貼付帯は，地文の縄文を施文した後に貼付けられている。ナデによって口縁部に無文帯が形成されたものもある。

１・２は同一個体で，胴部にふくらみがあり，口縁部の無文帯と地文の縄文の境が縄線文で区画されている。12は大きく屈曲する器形で，貼付帯上とその側縁，および地文上に縦・横・斜位の縄線文をもつものである。一応この群に含めたが，中期のものの可能性も残る。14は無文帯中に刺突文がみられるものである。

図版Ⅴ－１－13－18～21

磨消手法によって曲線的な文様が描かれている。

20・21は網代の痕跡がある底部破片で，この群のものと考えられる。

これらに類似したものは，虻田郡虻田町入江貝塚出土のⅢ類Ⅱａ，Ⅱｂ土器の一部（名取式光・

峰山巌　1958)，上磯郡知内町涌元遺跡（千代肇　1972)，茅部郡森町鳥崎遺跡出土の第4群・第5群土器（佐藤忠雄編　1975)，爾志郡乙部町元和遺跡群出土のF群土器（大沼忠春　1976)，山越郡長万部町静狩遺跡の表採品（大島直行・瀬川拓郎編　1982）などがあげられる。

これらのうち，入江貝塚では，同一層位から余市式土器が出土している。また，鳥崎遺跡の報告者によれば，第4群土器は第2群土器（ノダップⅡ式）とともに「余市式と強い関連を示」し，第5群土器は第2群土器，第6群土器（入江式，大湯式）に伴う傾向があるという（佐藤忠雄編　1975)。

Ⅳ群a類の3（図版Ⅴ－1－14）

1～5　地文の縄文上に沈線で曲線的な文様が描かれている。

6～13　磨消縄文手法により，文様が描かれている。

14　無文地に沈線で曲線的な文様が描かれている。

15～18　撚糸文が施されている。15は口縁部に撚糸文を施した後，胴部に縦位の撚糸文を施文している。

19　撚糸文により，斜格子状の文様が描かれている。

20　撚糸文を地文とし，二本一組の沈線で曲線的な文様が描かれている。内面には炭化物が付着している。

これらはトリサキ式土器～大津式土器（森田知忠　1981）に相当すると思われる。

Ⅳ群b類の土器

船泊上層式に相当するもの（図版Ⅴ－1－15－1～4）

地文の縄文上に鋸歯状あるいは平行する沈線を施しているもので，2は無文帯がみられる。手稲式土器に属するもの（図版Ⅴ－1－2－2・3，Ⅴ－1－3，Ⅴ－1－15－5～12，Ⅴ－1－16～17）

これ以前の時期と比較して，器種・器形の分化が顕著なため，器種ごとに記述する。

深鉢

a（図版Ⅴ－1－15－6）

波状口縁で胴部は直線的に立ちあがっている。縄文を地文としており，口縁部には4本の山形沈線を施した上に縦方向の沈線が3本施文されている。口唇直下は無文である。

b（図版Ⅴ－1－2－2，Ⅴ－1－15－5，7～12，Ⅴ－1－16－1～19）

頸部が屈曲するもので，口縁部は内彎するものが多い。波状口縁と平縁のものがみられるが，前者が多いようである。文様には，口縁上部と頸部が無文で，その間に縄文を地文として横走する沈線をめぐらし，これを弧状の沈線でつなぐもの（図版Ⅴ－1－15－5・10・11）や磨消縄文を施しているもの（図版Ⅴ－1－16－3～9）がめだつ。

図版Ⅴ－1－2－2は小型の深鉢で，五弁の波状口縁を有する。口縁部は地文の縄文上に9本の沈線がめぐり，波頂部の直下には，さらに3本一組の沈線が縦方向に施文されている。図版Ⅴ－1－15－5・12は同一個体で，胴上部にも文様帯がみられる。胴部内面には炭化物が付

着している。同図版８・11は胎土に小礫を含んでいる。同図版９は口縁端部が肥厚し，貼付帯がみられる。図版Ｖ－１－16－１～３・８の内面には炭化物が付着している。

ｃ（図版Ｖ－１－２－３）

大型の深鉢で，肩部が強く張り，五弁の波状口縁は大きく外反している。波頂部と波頂部の間には，うずまき状の貼付文が５個みられる。口縁部はよくみがかれている。口縁部と胴部の境には１条の沈線がめぐり，胴部には縄文が施されている。胴部には焼成の際の黒斑がみられる。内面の調整はミガキである。図示しなかったが，今回の調査では，これとは別個体でうずまき状の貼付がある口縁部の破片が１点出土している。

ｄ（図版Ｖ－１－３－１，図版Ｖ－１－16－10・11・13）

口縁に狭い無文帯があり，以下は斜行縄文が施されたもので，図版Ｖ－１－16－11のように波状口縁のものもある。同図版10・11は無文帯と斜行縄文の境に１条の沈線がめぐっている。

ｅ（図版Ｖ－１－16－12・14・15）

胴部は直線的に立ちあがり，器面全体に縄文が施されている。14・15は同一個体の破片で，薄手の土器である。

ｆ（図版Ｖ－１－17－３）

胴部にふくらみがある無文の土器である。

浅鉢

ａ（図版Ｖ－１－17－１・２，４～８）

口縁が内彎するもので，縄文を地文として横走する沈線や弧状の沈線により文様が施されている。２の口縁端部の断面形は切り出しナイフ状である。

ｂ（図版Ｖ－１－17－９・10）

口縁には狭い無文帯があり，以下は斜行縄文が施されている。

注口土器（図版Ｖ－１－３－２・３）

口頸部は大きく外反し，体部は扁平である。器厚は薄く，内外面ともよくみがかれている。口頸部にはナデによって浅い段がつくり出され，その下にヘラ状の工具を使用して右下がりの浅い沈線がめぐっている。体部上面にも，同一の工具によって注口部の真上を起点として放射状に沈線が描かれている。体部には円形文と工字状文の組み合わせによる文様が段ちがいに施されているが，それらの内部も沈線で充填され，磨消縄文風の効果をあげている。この土器に類似した器形や文様は関東地方の加曽利Ｂ式にもいくつかみられる。[83]

図版Ｖ－１－17－12～15は，注口土器または壺形土器の一部と考えられるものである。14は磨消縄文によって文様が描かれている。15の胴部上位には細かい縄文が施され，以下はみがかれている。内面には調整痕が残っている。

Ⅳ群ｃ類の土器（図版Ｖ－１－18）

堂林式土器に属するものである。

１～７・10は同一個体で，口縁部はほぼ直立し，内面からの突瘤文が施されている。内面は

横方向によく研磨されている。8・9は口縁部に沈線文が施されている。

註

1　大沼忠春氏によれば，「中期中葉の榎林式（角田文衛　1939）に属するものを主とする」という。
2　大沼忠春氏によれば，「知内町涌元遺跡等から出土した資料（千代肇　1972）に近い」とされる。
3　爾志郡乙部町元和15遺跡から出土した土器片にも，沈線文によって磨消縄文風の文様が施されたものがある（乙部町教育委員会編　1980）。

参考文献

大島直行・瀬川拓郎編　『札内台地の縄文時代集落址　北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書』（1982年）

大沼忠春編　『元和』（1976年）

大沼忠春　「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」（『考古学雑誌』第66巻第4号，1981年）

大場利夫・蛯子千代志　「函館郊外煤瓦台遺跡」（『北方文化研究報告』第二十輯，1965年）

大場利夫・田川賢蔵　『静狩遺跡』（1955年）

乙部町教育委員会編　『オカシ内・元和15遺跡――国道229号線改良工事に伴う発掘調査報告――』（1980年）

駒井和愛編　『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』上巻　常呂の遺跡（1963年）

財団法人北海道埋蔵文化財センター編

『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡――北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財調査報告書――』（『㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告』第1集，1981年）

『虎杖浜3遺跡――北海道縦貫自動車道白老地区埋蔵文化財発掘調査報告書――』（『㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告』第11集，1983年a）

『千歳5遺跡――北海道縦貫自動車道登別地区及び白老地区埋蔵文化財発掘調査報告書――』（『㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告』第14集，1983年b）

佐藤忠雄編　『島崎遺跡――函館本線森・桂川駅間複線工事に伴う緊急発掘調査報告書――』（1975年）

千代肇　『涌元遺跡』（1972年）

角田文衛　「陸奥榎林遺跡の研究」（『考古学論叢』10，1939年）

名取武光・峰山巌　「入江貝塚」（『北方文化研究報告』第十三輯，1958年）

松下亘編　『西駄――函館市宇紅葉山西駄遺跡発掘調査報告書――』（1974年）

峰山巌・山田格・古原敏弘・大島直行　『知内川中流域の縄文時代遺跡　北海道上磯郡知内町湯の里1遺跡発掘調査報告』（1979年）

森田知忠　「北海道」（野口義麿編『縄文土器大成』3――後期，1981年）

写真番号	出土グリッド	分類	図番号
図版V－1－1－1	E－100－d，F－1－a G－1－b	Ⅲ群b－2類	1
2	D－100－c	〃	2
3	F－1－a	Ⅲ群b－3類の1	3
4	G－1－d	〃	4
5	E－1－b・c	〃	5
6	E－1－a	Ⅲ群b－3類の3	7
図版V－1－2－1	F－1－b	Ⅳ群a類の1	9
2	D－100－c	Ⅳ群b類の2	11
3	D－100－a・d E－100－c E－1－a・b	〃	10
図版V－1－3－1	F－100－d	Ⅳ群b類の2	12
2・3	D－100－c，E－100－c E－1－d，F－100－d F－1－d，F－2－a	〃	14
図版V－1－4－1	表採	1群a類	16
2	H－1－d	〃	17
3	H－1－d	〃	18
4	H－1－d	〃	19
5	H－1－d	〃	20
6	C－100－b	〃	24
7	H－1－d	〃	23
8	G－2－b	〃	21
9	H－2－a	〃	22
10	F－100－d	Ⅲ群a類	
11	E－1－d	〃	
12	D－100－c	〃	
13	C－100－d	〃	
図版V－1－5－1	B－100－b	Ⅲ群b－2類	
2	C－100－a	〃	25
3	F－1－a	〃	27
4	F－1－b	〃	
5	F－1－a	〃	
6	F－1－b	〃	26
7	G－1－a	〃	
8	G－100－d	〃	28
9	F－1－a	〃	30
10	E－1－c	〃	
11	E－100－d	〃	31
12	H－100－d	〃	29
13	G－100－d	〃	
14	E－1－a	〃	
15	D－100－c	〃	
16	F－2－a	〃	33
17	E－1－c	〃	34
18	F－100－c	〃	32
図版V－1－6－1	D－100－c	Ⅲ群b－2類	

表V－1－1　掲載土器一覧表(1)

写真番号	出土グリッド	分類	図番号
図版V－1－6－2	E－100－d	Ⅲ群b－2類	
3	F－1－d	〃	
4	E－1－c	〃	36
5	G－100－d	〃	
6	F－1－b	〃	39
7	E－100－d	〃	35
8	E－100－d	〃	
9	F－1－d	〃	
10	D－100－c	〃	38
11	D－100－c	〃	
12	F－1－c	〃	37
13	G－1－a	〃	40
14	F－1－a	〃	
15	G－100－d	〃	
16	F－1－b	〃	
17	D－100－c	〃	
18	D-1-b, F-1-a	Ⅲ群b－3類の2	6
図版V－1－7－1	F－1－a	Ⅲ群b－3類の1	41
2	H－1－d	〃	42
3	G－1－d	〃	
4	D－100－c	〃	43
5	F－1－b	〃	
6	E－1－a	〃	
7	G－1－d	〃	
8	D－100－c	〃	45
9	D－100－d	〃	46
10	E－1－c	〃	44
11	E－100－d	〃	47
12	F－1－a	〃	49
13	D－1－b	〃	
14	F－1－a	〃	
15	D－100－a	〃	48
16	E－1－d	〃	
17	D－100－c	〃	50
18	F－1－c	〃	51
19	D－100－d	〃	
20	F－1－b	〃	55
21	F－100－c	〃	52
22	G－1－b	〃	53
23	D－100－c	〃	
24	F－2－b	〃	54
25	B－100－c	〃	
26	G－1－d	〃	
図版V－1－8－1	D－100－c	Ⅲ群b－3類の1	57
2	G－1－d	〃	56

表V－1－2　掲載土器一覧表(2)

写真番号	出土グリッド	分類	図番号
図版V－1－8－3	G－1－d	Ⅲ群b－3類の1	
4	D－100－c	〃	59
5	E－100－c	〃	
6	C－100－b	〃	58
7	E－1－a	〃	
8	D－100－c	〃	
9	E－1－c	〃	
10	F－1－a	〃	
11	F－1－a	〃	
12	D－100－c	〃	60
13	B－100－c	〃	
14	E－1－a	〃	
15	C－100－b	〃	61
16	F－2－b	〃	62
17	C－100－a	〃	
18	G－2－a	〃	
19	G－1－d	〃	63
図版V－1－9－1	D－100－c	Ⅲ群b－3類の3	64
2	E－1－c	〃	
3	D－100－a	〃	
4	F－1－c	〃	
5	E－100－d	〃	66
6	C－100－b	〃	65
7	D－100－d	〃	68
8	不明	〃	
9	E－1－c	〃	70
10	D－1－b	〃	67
11	D－100－c	〃	73
12	F－1－a	〃	69
13	G－2－b	〃	
14	E－100－c	〃	72
15	F－1－a	〃	
16	B－100－b	〃	71
17	F－2－a	〃	
18	F－1－a	〃	
19	E－1－a	〃	74
20	G－1－d	〃	
21	E－1－c	〃	75
22	D－100－c	〃	
図版V－1－10－1	C－100－b	Ⅲ群b－3類の3	
2	F－1－d	〃	
3	F－1－a	〃	78
4	C－100－b	〃	
5	F－2－b	〃	79
6	D－100－c	〃	

表V－1－3　掲載土器一覧表(3)

写真番号	出土グリッド	分類	図番号
図版V－1－10－7	F－100－c	Ⅲ群b－3類の3	
8	E－100－d	〃	77
9	F－1－d	〃	81
10	D－100－a	〃	
11	F－1－a	〃	
12	F－1－d	〃	84
13	E－100－c	〃	
14	F－1－d	〃	80
15	G－2－a	〃	
16	E－100－c	〃	82
17	E－1－c	〃	
18	F－100－d	〃	76
19	F－1－d	〃	83
20	E－1－a	〃	
21	D－1－b	〃	85
22	D－100－d	〃	87
23	D－100－c	〃	
24	G－1－a	〃	
25	E－100－d	〃	86
図版V－1－11－1	D－100－b	Ⅳ群a類の1	
2	D－100－a	〃	
3	G－2－c	〃	
4	F－100－c	〃	88
5	E－1－c	〃	
6	H－1－a	〃	93
7	D－100－a	〃	89
8	D－100－a	〃	
9	H－1－a	〃	
10	G－1－a	〃	91
11	E－1－a	〃	90
12	F－2－b	〃	92
13	D－1－b	〃	
14	D－1－b	〃	
図版V－1－12－1	G－1－a	Ⅳ群a類の1	95
2	E－1－c	〃	94
3	G－1－d	〃	
4	C－100－b	〃	97
5	F－2－a	〃	
6	E－1－c	〃	
7	F－1－d	〃	
8	E－100－c	〃	96
9	D－100－c	〃	
図版V－1－13－1	D－1－b	Ⅳ群a類の2	8
2	E－1－a	〃	
3	E－1－a	〃	99

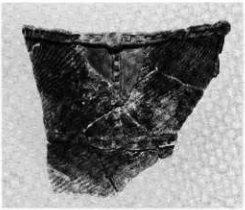
表V－1－4　掲載土器一覧表(4)

写真番号	出土グリッド	分類	図番号
図版V－1－13－4	F－2－a	Ⅳ群a類の2	
5	D－100－c	〃	
6	E－100－a	〃	
7	D－1－b	〃	
8	D－1－a	〃	98
9	D－100－c	〃	
10	E－1－a	〃	
11	G－1－d	〃	
12	D-100-c, E-100-d	〃	104
13	F－1－a	〃	
14	E－1－c	〃	
15	D－100－c	〃	
16	G－1－a	〃	
17	G－1－d	〃	100
18	G－1－a	〃	102
19	E－1－a	〃	101
20	F－1－d	〃	103
21	G－100－d	〃	
図版V－1－14－1	G－100－d	Ⅳ群a類の3	107
2	F－1－c	〃	106
3	E－1－b	〃	105
4	F－1－c	〃	
5	D－100－c	〃	111
6	F－100－d	〃	109
7	F－1－d	〃	
8	E－1－c	〃	110
9	G－1－a	〃	
10	E－100－d	〃	112
11	E－1－c	〃	
12	G－100－d	〃	
13	E－100－d	〃	
14	D－1－b	〃	108
15	E－1－c	〃	113
16	F－2－b	〃	114
17	E－1－a	〃	115
18	E－100－b	〃	
19	E－1－a	〃	116
20	E－100－d	〃	117
図版V－1－15－1	E－100－d	Ⅳ群b類	118
2	E－100－d	〃	119
3	E－100－d	〃	
4	E－100－d	〃	
5	D－100－b	〃	120
6	C－100－a	〃	121
7	D－99－c	〃	

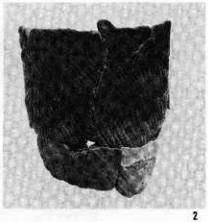
表V－1－5　掲載土器一覧表(5)

写真番号	出土グリッド	分類	図番号
図版V－1－15－8	F－1－d	Ⅳ群b類	
9	E－100－d	〃	125
10	D－100－b	〃	
11	E－100－d	〃	124
12	D－100－b	〃	123
図版V－1－16－1	D－100－c	Ⅳ群b類	122
2	B－100－b	〃	128
3	B－100－b	〃	130
4	G－100－c	〃	
5	D－100－c	〃	
6	F－100－d	〃	129
7	I－2－c	〃	127
8	E－100－d	〃	126
9	D－100－b	〃	
10	C－100－a	〃	132
11	D－100－d	〃	131
12	E－1－a	〃	134
13	E－100－d	〃	133
14	E－100－d	〃	135
15	E－100－d	〃	
図版V－1－17－1	E－100－d	Ⅳ群b類	137
2	D－1－b	〃	139
3	C－100－b	〃	
4	F－100－d	〃	136
5	C－100－a	〃	138
6	F－100－d	〃	140
7	C－100－b	〃	141
8	F－2－b	〃	142
9	C－100－b	〃	143
10	E－1－a	〃	144
11	D－100－c	〃	145
12	F－100－d	〃	146
13	D－100－c	〃	147
14	F－1－c	〃	148
15	D－100－c	〃	13
図版V－1－18－1	F－1－d	Ⅳ群c類	15
2	F－1－d	〃	
3	F－1－d	〃	
4	F－1－d	〃	
5	F－1－d	〃	
6	F－1－d	〃	
7	F－1－d	〃	
8	G－1－a	〃	
9	F－1－b	〃	
10	F－1－d	〃	

表V－1－6　掲載土器一覧表(6)



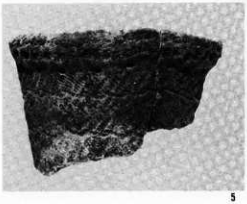
1



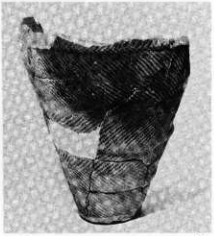
2

3

4



5

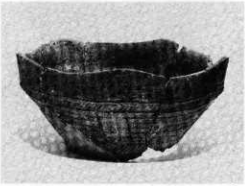


6

包含層出土の土器

図版Ⅴ－1－2

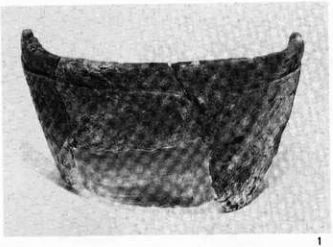
1



2

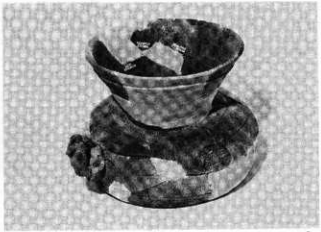
3

包含層出土の土器



1

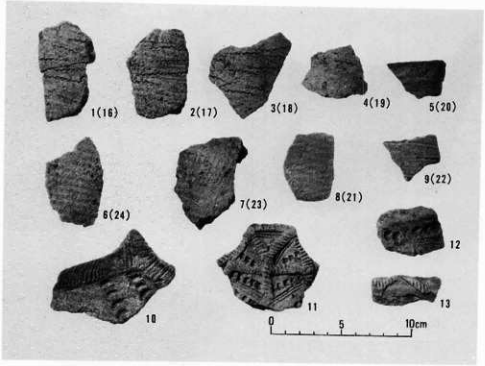
2



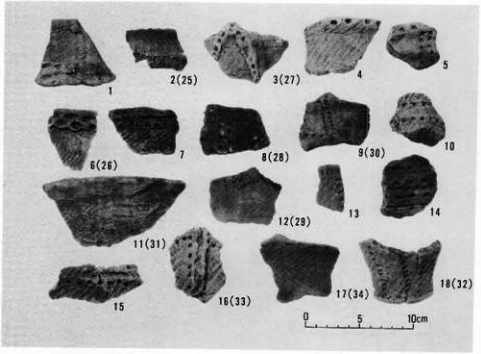
3

包含層出土の土器

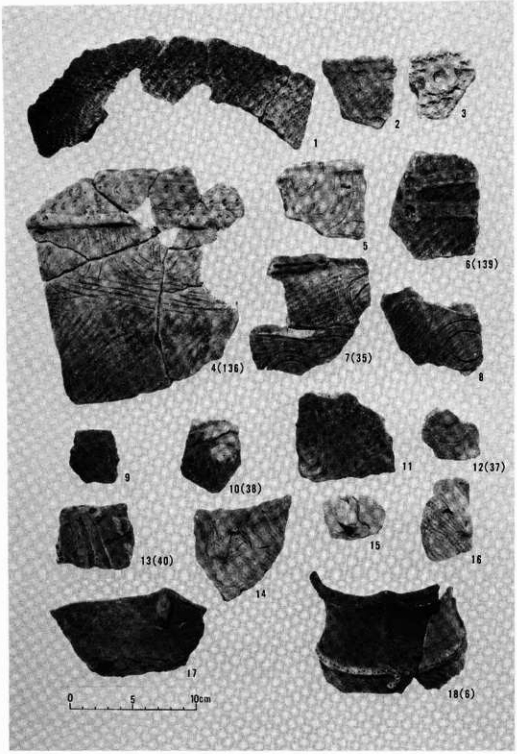
図版Ⅴ－１－４



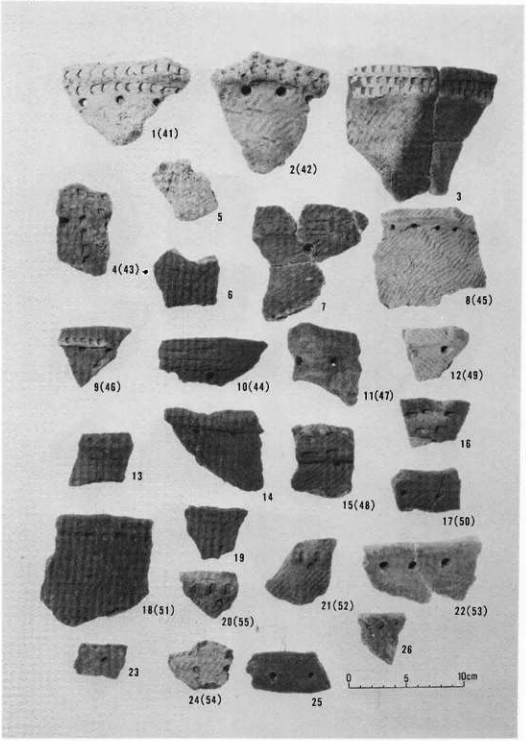
図版Ⅴ－１－５



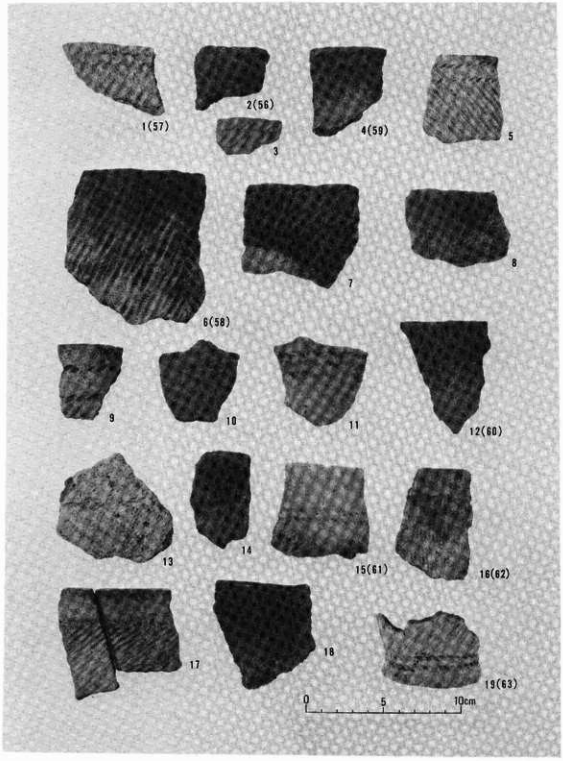
包含層出土の土器



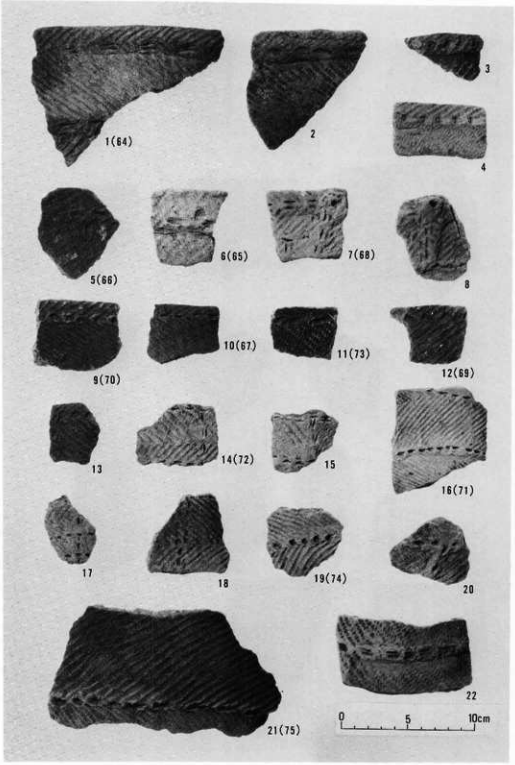
包含層出土の土器


1(41)
2(42)
3
4(43)
5
6
7
8(45)
9(46)
10(44)
11(47)
12(49)
13
14
15(48)
16
17(50)
18(51)
19
20(55)
21(52)
22(53)
23
24(54)
25
26
0
5
10cm

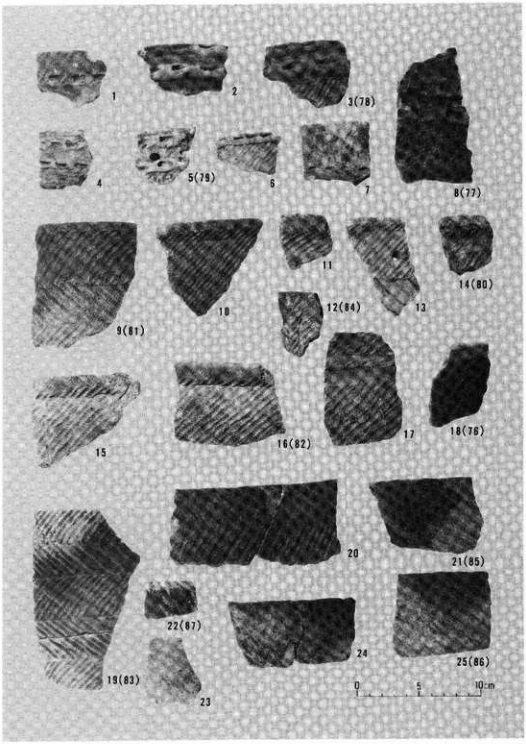
包含層出土の土器


1(57)
2(56)
3
4(59)
5
6(58)
7
8
9
10
11
12(60)
13
14
15(61)
16(62)
17
18
19(63)
0
5
10cm

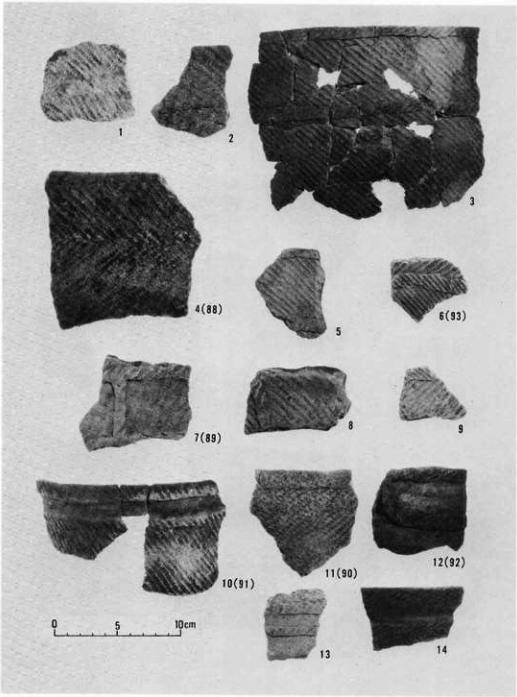
包含層出土の土器


1(64)
2
3
4
5(66)
6(65)
7(68)
8
9(70)
10(67)
11(73)
12(69)
13
14(72)
15
16(71)
17
18
19(74)
20
21(75)
22
0
5
10cm

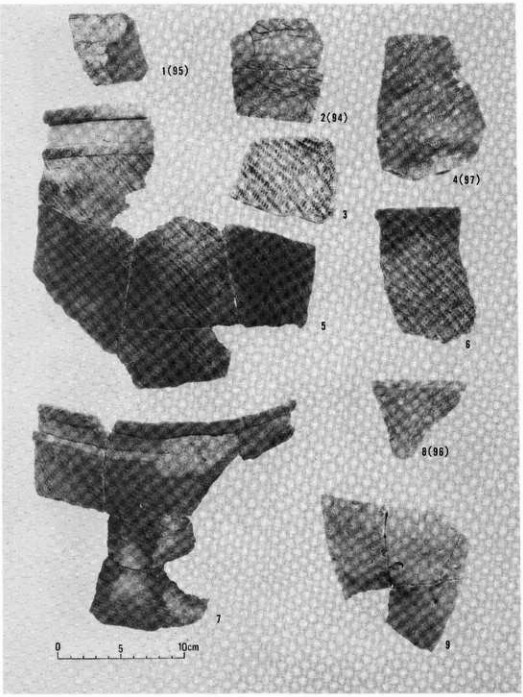
包含層出土の土器


1
2
3(78)
4
5(79)
6
7
8(77)
9(81)
10
11
12(84)
13
14(80)
15
16(82)
17
18(76)
19(83)
20
21(85)
22(87)
23
24
25(86)
0
5
10cm

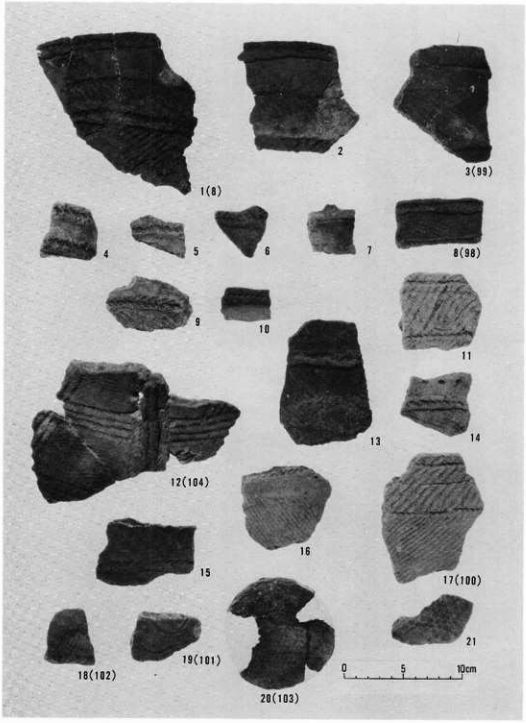
包含層出土の土器



包含層出土の土器

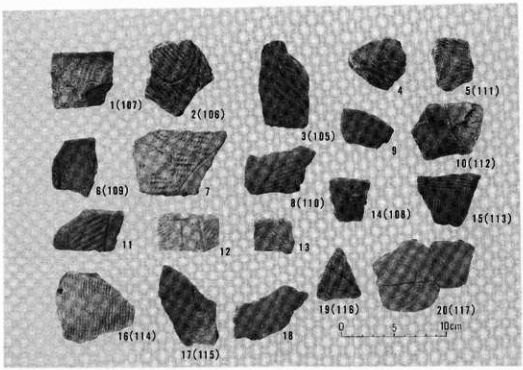


包含層出土の土器

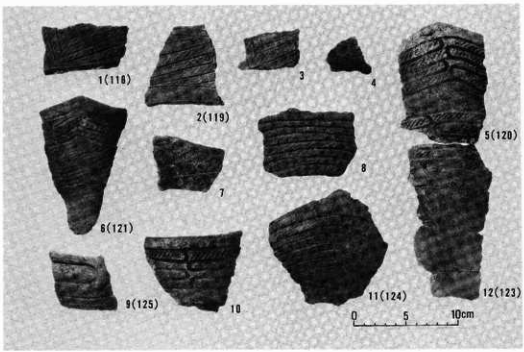

1(8)
2
3(99)
4
5
6
7
8(98)
9
10
11
12(104)
13
14
15
16
17(100)
18(102)
19(101)
20(103)
21
0
5
10cm

包含層出土の土器

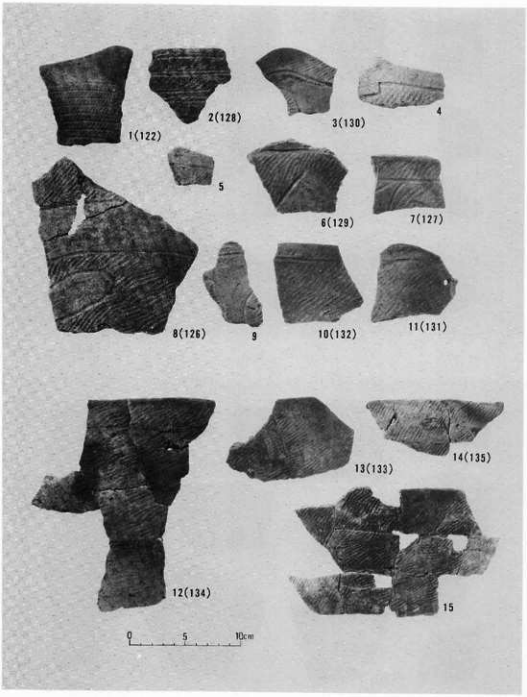
図版Ⅴ－1－14



図版Ⅴ－1－15

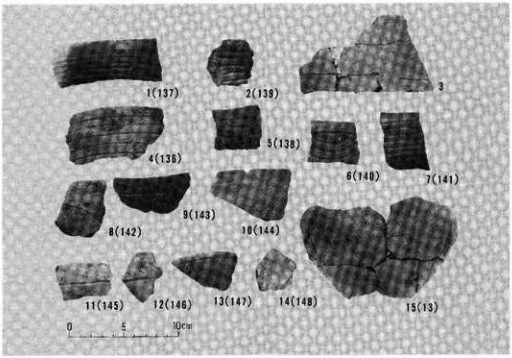


包含層出土の土器

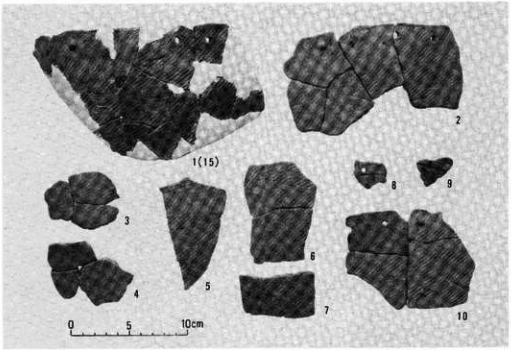

1(122)
2(128)
3(130)
4
5
6(129)
7(127)
8(126)
9
10(132)
11(131)
12(134)
13(133)
14(135)
15
0
5
10cm

包含層出土の土器

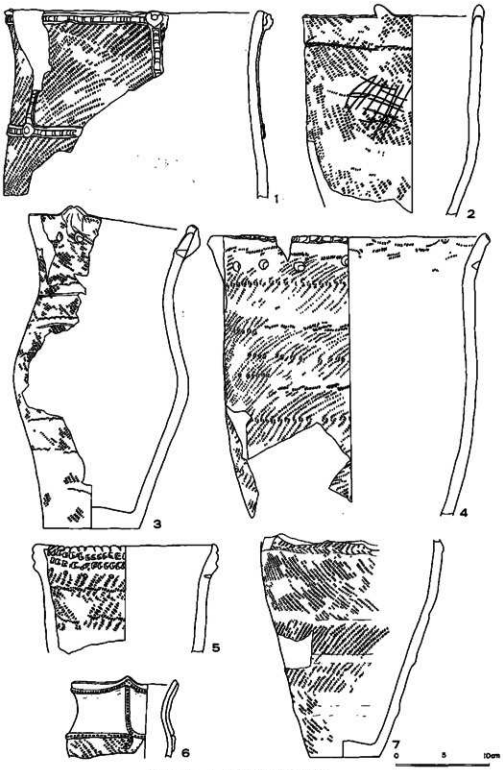
図版Ⅴ－１－17



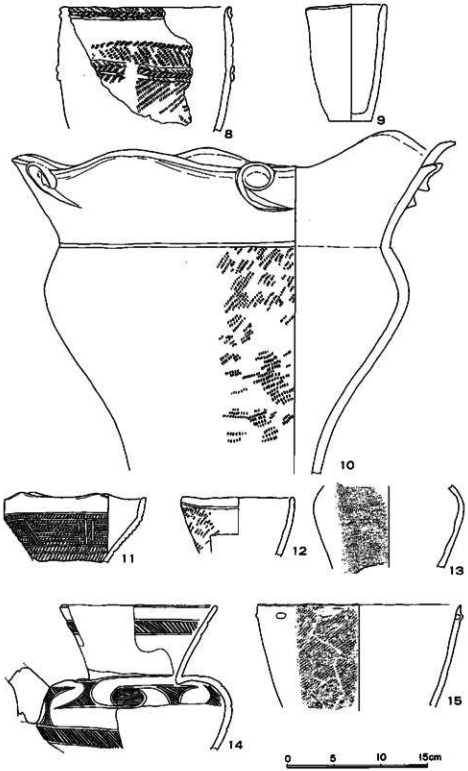
図版Ⅴ－１－18



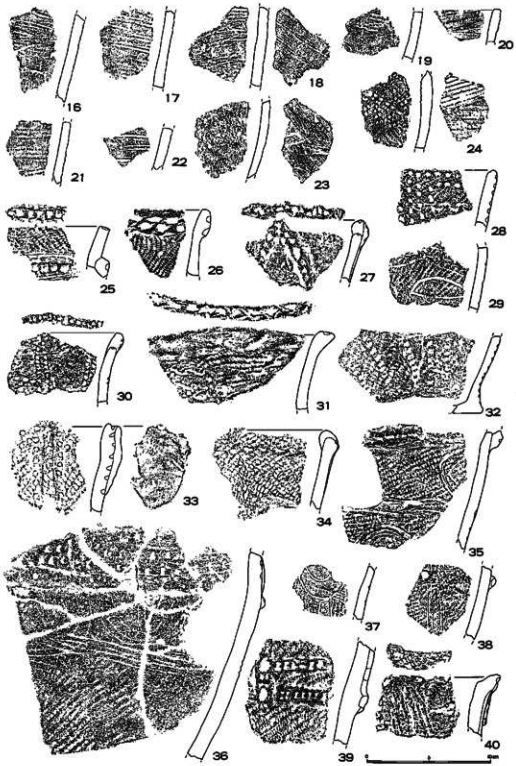
包含層出土の土器



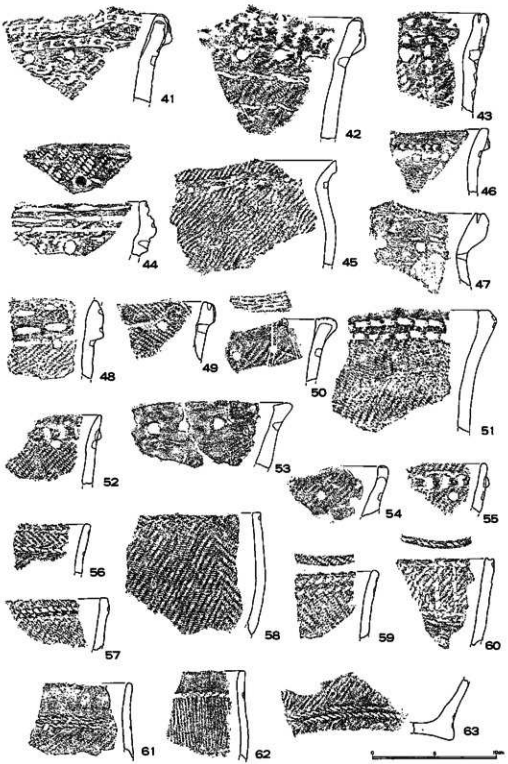
図Ⅴ－1－1　包含層出土の土器(1)



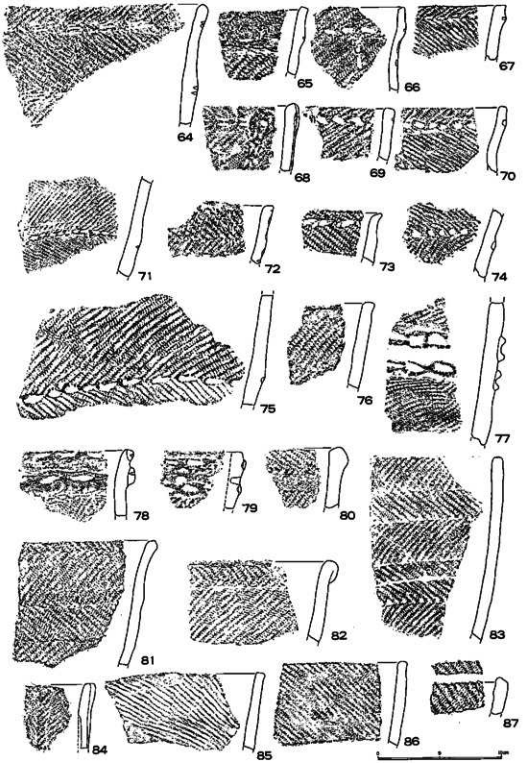
図Ⅴ－１－２　包含層出土の土器(2)



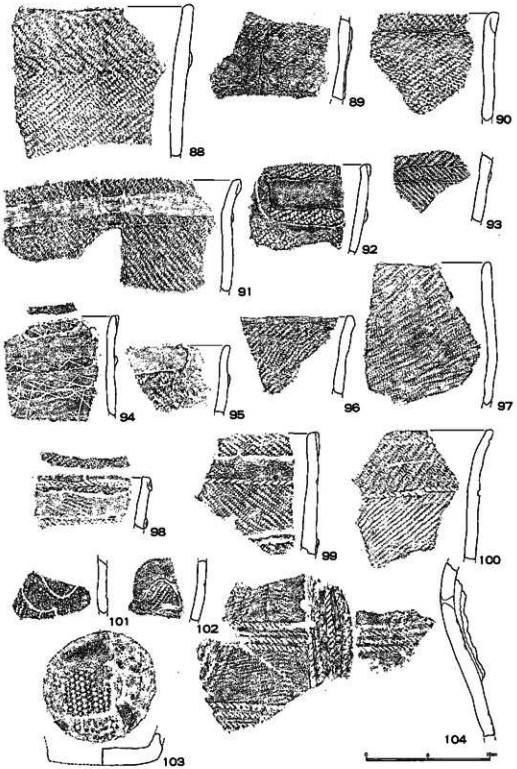
図Ⅴ－１－３　包含層出土の土器(3)



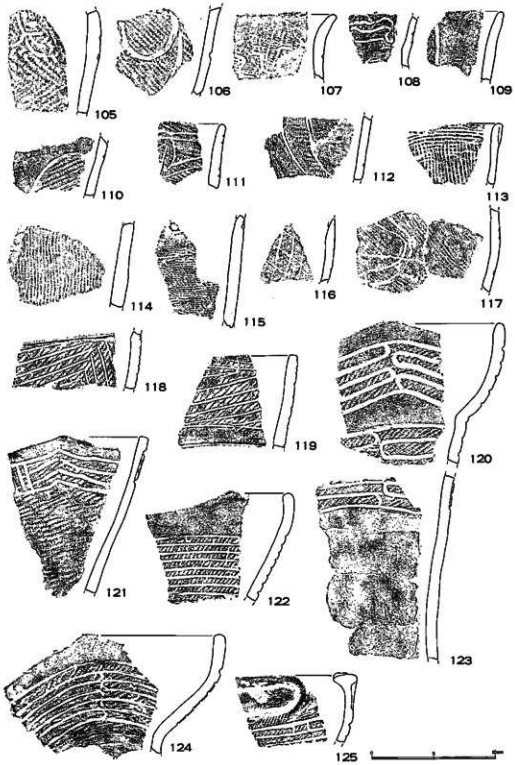
図Ⅴ－１－４　包含層出土の土器(4)



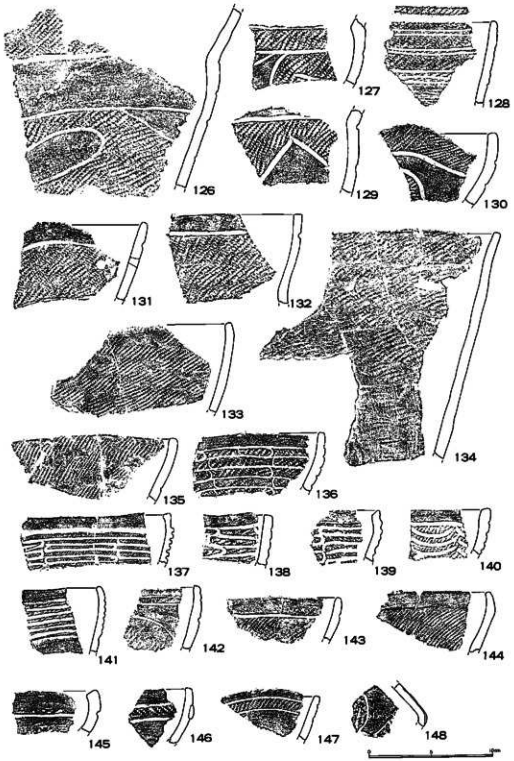
図Ⅴ－1－5　包含層出土の土器(5)



図Ⅴ－1－6　包含層出土の土器(6)



図Ⅴ－1－7　包含層出土の土器(7)



図Ⅴ－１－８　包含層出土の土器(8)

2．包含層出土の石器等

今回の調査によって包含層から出土した石器類は，石鏃，槍先またはナイフ，石錐，つまみ付きナイフ，スクレイパー，石斧，石のみ，たたき石，台石，すり石，石皿，石鋸，砥石などである。このほかに，土製品，石製品も出土している。これらの分類別のうちわけは，表Ⅴ－2－1のとおりである。これらの遺物の多くは，図Ⅴ－2－6～26，巻頭カラー，図版Ⅴ－2－1～10などに図示してある。

図Ⅴ－2－1～5は，石器等の分類毎の出土分布図である。図Ⅴ－2－1は，図示したものを含む石器の分布図であるが，図Ⅴ－2－2～5は，図示していない遺物の分布図である。図示した遺物は，その説明表に，分類，出土区を明記してあるので，分布状況は確かめられるようになっている。これらの分布図をみると，D・E・F・G区に遺物が多く出土していることがよくわかる。

1・2はIA3と分類した石鏃である。1は97のつまみ付きナイフとともにF－1－d－ロ区の焼土中から出土した。この焼土中からは堂林式土器（図Ⅴ－1－2－15）が出土しているので，1と97の石器は縄文時代後期後葉のものと考えられる。

3～9はIA4と分類した石鏃で，その分布状態は図Ⅴ－2－1に示してある。10～27はIA5と分類した石鏃で，その分布状態も同図の中に示してある。このうち10～12と19～21とでは形態に若干のちがいが認められる。10～12の形態の石鏃は，手稲式土器にともなって出土する例がいくつか知られていることから、縄文時代後期中葉の石鏃と考えられる。

30～66は，槍先またはナイフである。この石器は茎部のつくりだしの明瞭さから，30～54までと55～66とに分けられるが，一般的に両方の形態のものが縄文時代中期後葉から後期前葉の時期に多くみられるので，分布状態は合わせて示してある（図Ⅴ－2－1）。33・40・43・44・48～51・53～55・59・61などのように刃部の形が左辺と右辺とでは異っており，使用による刃部の減退をうかがわせる例もある。

67～81は石錐である。出土した16点のうちB－100－b区から出土した1点を除くほかは図示してある。棒状のもの（67～70・73～75）と，つまみ部がみられるもの（71・72・76～81）に分けられる。

82～101はつまみ付きナイフで，出土したもののすべてを図示してある。二次加工が片面全体に施されるもの（82～87），二次加工が片面の周辺にのみ施されるもの（88～96），横形のもの（97～101）に分けられる。横形の97が，堂林式土器にともなうことは，前述したとおりである。

102～149はスクレイパーである。出土した57点のうち48点を図示してある。石べらと称されるもの（102～104），まる形のもの（105），エンド・スクレイパー（106～113）などに分けられるが，114～149などのように，今後の細分を待つ必要があるものが多い。

150～174は形態のあきらかな石斧である。石材は緑色泥岩と黒色片岩の二種があり，破片などの図示しなかったものの分布状態は，石材別に示してある（図Ⅴ－2－2）。この分布図の点

数は，体部・刃部などの破片の接合を試みたのちの個体識別をおこなった数字である。また石斧の素材と考えられる緑色泥岩の礫・礫片・破片・石斧未製品なども出土しており，これの分布状況は図Ⅴ－２－２に示したとおりである。後述する砥石の出土状況などに合わせ考えると，57年度調査区と同様に今回の調査区内でも，素材を持ちこんで石斧製作がおこなわれていたことがわかる。

図示したうちで，大きなものは162の480g，150の320gがあり，小さなものには50g以下の156・158・160・172・174などがある。石斧は，立木の伐採，加工，細部加工など用途に応じた使用が推定されるが，156・158のような刃部形態が片刃のものは，横斧で加工用かもしれない。

また，162・163・169・171・173などのように，いくつかの破片に分れて出土したものがある。このような石斧の出土状況については，別項（Ⅵ－１）であらためて述べる。

175～177は，石のみである。図示したもののほかにＢ－100－ｂ区から黒色片岩製のものが１点出土している。このうち，176は，横断面形が台形で特徴的な形態をしている。使用の結果と考えられる下辺に顕著な刃こぼれ，上辺には敲打痕が認められる。

178～196は，たたき石である。図示してない41点の分布状況は図Ⅴ－２－３のとおりである。棒状のもの（178～182・185），扁平礫の周辺を使ったもの（183・184・186・187），扁平礫の腹背を使ったもの（188～191），円礫状のもの（192～196）などに分けられる。

197～202は，すり石である。縄文時代早期の土器にともなう例の多い断面がほぼ三角形のもの（197～199），北海道式石冠と呼称されるもの（200），円礫状のもの（201・202）などに分けられる。

203～205は，石錐である。203は完形品であり，厚さ0.3cmほどの直線的な刃部がみられる。

206～218は，砥石である。図示したものも218のほかは，すべて破損品で，破片が多い。消耗する度合の高い石器なのであろうか。図示しなかった破片の分布状況は，図Ⅴ－２－３のとおりである。溝があるもの（206），板状のもの（207～209・218），角柱状のもの（210～217）などに分けられる。角柱状のものは，「四面砥石（しめんとい し）」と呼ばれることもある特徴的な砥石で，北筒式土器や余市式土器にともなう例が多い。

219～240は，台石，石皿である。加工の度合が高いもの，すり面のあるものを石皿に，加工が少ないもの，敲打痕がみられるものを台石に分けた。これらの石器も破損品が多い。図示しなかったものの分布状況は図Ⅴ－２－３のとおりである。224～226・228～230・236・238～240の石皿は，登別溶結凝灰岩を整形したもので，236が典形的な形態と考えられる。登別溶結凝灰岩を素材に使い，ほぼ全体に整形する例は，登別近辺では，縄文時代中期・後期に多くみられる。

241～251は，加工痕や使用痕のみられる剥片である。241～243は，上下両端や左右両端に，中央にむかう小さな剥離面がみられることから，ピエス・エス・キーユと呼ばれるものと考えられる。244～251は剥片の周辺に微細な剥離痕がみられるが，定形的な石器とはとらえがたいものである。これらの石器で図示しなかったものの分布状況は，図Ⅴ－２－４に，黒曜石製と

頁岩・珪岩製とに分けて示してある。ともに調査区の中央付近から多く出土している。

252は加工痕や使用痕のみられる礫である。敲打痕や研磨痕がみられるが，定形的な石器とはとらえがたいものである。284～286も同様なものであるが，この3点は研磨痕が著しい。

253～256は石核である。253・256は板状になっているが，表面には上下方向，裏面には左右方向の剥離面がみられる。254は，ほぼ円錐形である。255は，礫の表面を多く残しているところから，素材は角礫だったと考えられる。4点ともに，最終的な剥離面は3cm四方に満たない小さなものである。石核と関連する剥片は，接合する良好な資料がないので，図示していない。図Ⅴ－2－5は，剥片の石材毎の出土分布図である。いずれの石材もC・D・E・F・G区から多く出土しており，この場所で剥片剥離，石器製作がおこなわれたのではないかと想像される。

257～262は垂飾である。259は両面から穿孔途中のものであり，ほかの5点も両面から穿孔されている。259は孔が連結する可能性はひくい。261は両面からの孔がわずかにつながっている。262だけが表面に割れ面を残しているが，ほかは全面が研磨されている。258の円孔の上辺には，紐ずれを思わせるような，へこみがある。

263～265は，三角形の土製品である。土器の破片をほぼ正三角形状に整形してある。土器型式を特定できるほどの特徴はみられない。

266～269は，加工痕のある剥片と分類したが，むしろ石製品としてとらえたほうが，適切かもしれない。それぞれが特徴ある形をしている。

270～273は，加工痕のある礫と分類したが，むしろ石製品としてとらえたほうが適切であろう。270～272は形態，大きさともに石斧に類似しているが，刃部の研磨がみられない。石斧の未製品というよりも「石斧もどき」なのかもしれない。273は，一部に刃部の研磨を思わせるところがみられるが，不完全な研磨面であり，石斧のうちで大きめのもの（150・162など）よりも，はるかに大きい（1400g以上）ものである。

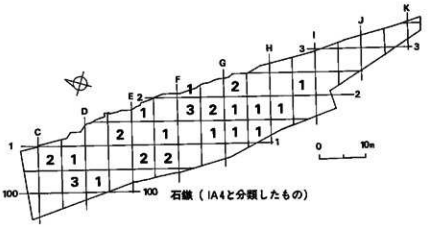
274は石刀と分類した。棒状の礫を，にぎり部分を敲打によって整形し，刃部に相当するところは，丸みをもった礫面に敲打痕がみられる。包含層のごく浅いところから出土しているが，

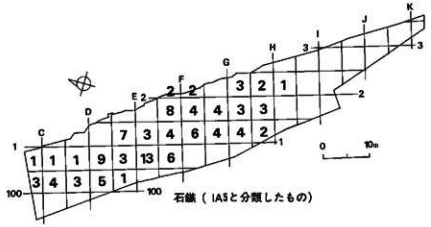
（198頁につづく）

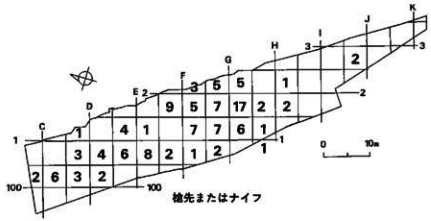
名称・分類	点数	名称・分類	点数	名称・分類	点数	名称・分類	点数
石鏃 ⅠA 3	2	スクレイパー ⅢB1	3	ただき石 ⅥA9	41	石核 ⅡA	6
4	32	2	1	台石 ⅥB1	6	黒曜石の剥片 ⅡB	1,447
5	117	3	8	すり石 ⅥA1	3	黒っぽい頁岩(A)の剥片	332
8	29	9	45	4	1	白っぽい頁岩(B)の剥片	333
9	2	石斧 ⅣA2	1	5	2	焼土などの剥片	118
穂先・ナイフ ⅠB 1	64	3	11	石皿 ⅥB1	16	加工痕のある剥片ⅡA1	3
2	34	5	13	5	50	〃 2	205
8	30	8	105	石錘 ⅥA1	3	加工痕のある礫 ⅡB	11
ドリル ⅡA 2	8	石のみ ⅣB	4	砥石 ⅥB1	1	粗石製品	13
3	8	ただき石 ⅥA1	6	2	4	敲石礫	226
つまみ付きナイフⅡA2	6	2	4	3	8	土製品	4
3	9	3	4	8	59	石製品	10
5	5	4	5	石錐 ⅥA	0		

表Ⅴ－2－1　包含層出土石器等の分類別点数

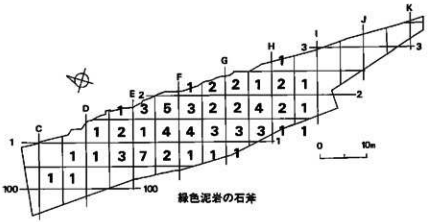
※ 石斧のⅣA8には小さな破片・砕片は含まれていない。
※ 台石ⅥB1と石皿ⅥB の区分は厳密なものではない。それらの破片はⅥB8にまとめてある。
※ 剥片ⅡB には厳密なものは含まれない。



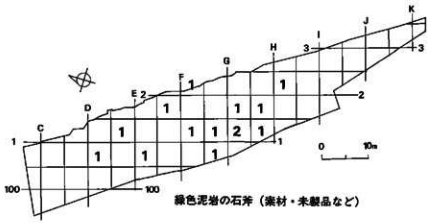




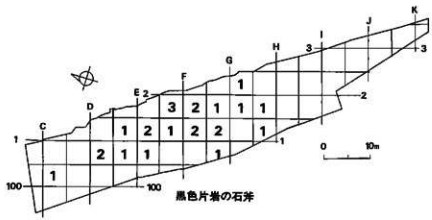
図Ⅴ－２－１　包含層出土の石器等の出土分布図(1)



緑色泥岩の石斧

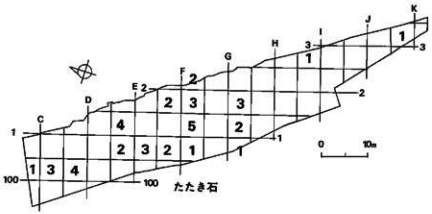


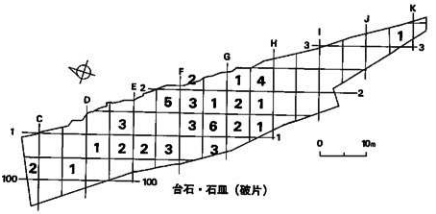
緑色泥岩の石斧（素材・未製品など）

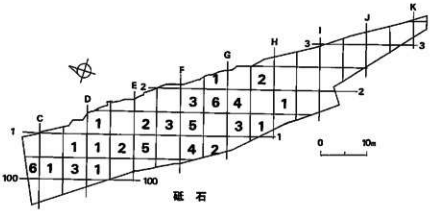


黒色片岩の石斧

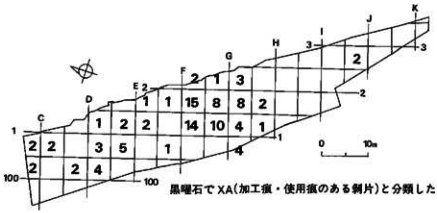
図Ⅴ－２－２　包含層出土の石器等の出土分布図(2)



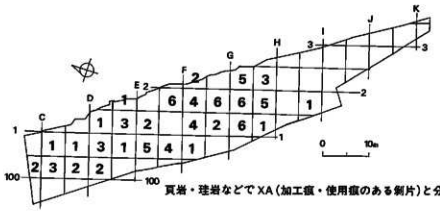




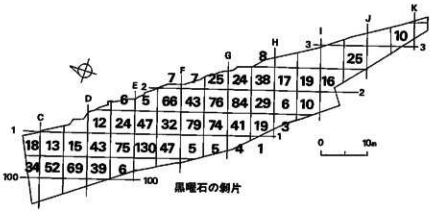
図Ⅴ－２－３　包含層出土の石器等の出土分布図(3)



黒曜石でXA(加工痕・使用痕のある剥片)と分類したもの

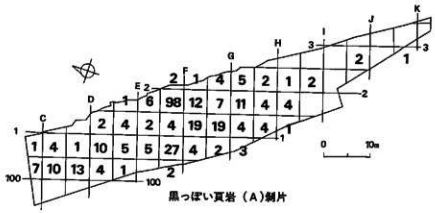


頁岩・珪岩などでXA(加工痕・使用痕のある剥片)と分類したもの



黒曜石の剥片

図V－2－4　包含層出土の石器等の出土分布図(4)



図Ⅴ－２－５　包含層出土の石器等の出土分布図(5)

番号	名称	分類	発掘区	重量(g)	材質	写真
1	石鏃	IA3	F-1-d-ロ	0.3	黒曜石	189頁
2	〃	〃	E-1-d-ニ	0.8	頁岩	〃
3	〃	IA4	C-IB-d-ニ-3	0.7	黒曜石	〃
4	〃	〃	C-IB-a-ロ-3	1.5	黒曜石	〃
5	〃	〃	F-1-d-ニ	0.9	黒曜石	〃
6	〃	〃	D-1-b-ロ-2	2.0	黒曜石	〃
7	〃	〃	C-IB-a-ハ	3.5	黒曜石	〃
8	〃	〃	D-1-a-ロ-2	2.6	黒曜石	〃
9	〃	〃	E-IB-d-ハ-3	2.8	黒曜石	〃
10	〃	IA5	E-IB-d-ハ-2	0.6	黒曜石	〃
11	〃	〃	C-IB-a-イ-2	0.8	黒曜石	〃
12	〃	〃	E-1-a-イ-3	0.6	黒曜石	〃
13	〃	〃	D-IB-e-ロ-2	0.5	黒曜石	〃
14	〃	〃	E-IB-d-ハ-3	0.9	頁岩	〃
15	〃	〃	F-1-c-ニ-3	1.9	黒曜石	〃
16	〃	〃	E-1-b-ハ-2	1.3	珪質頁岩	〃
17	〃	〃	E-1-a-ニ-3	1.8	白色珪岩	〃
18	〃	〃	F-1-a-ハ-1	1.1	黒曜石	〃
19	〃	〃	D-IB-d-ニ-2	1.8	頁岩	〃
20	〃	〃	D-IB-c-ハ-3	1.5	黒曜石	〃
21	〃	〃	D-1-b-ロ	2.2	頁岩	〃
22	〃	〃	E-1-c-ハ-3	1.5	黒曜石	〃
23	〃	〃	E-IB-d-ハ-3	1.9	黒曜石	〃
24	〃	〃	G-1-c-イ-3	2.3	黒曜石	〃
25	〃	〃	E-1-c-ロ-3	2.9	頁岩	〃

番号	名称	分類	発掘区	重量(g)	材質	写真
26	石鏃	IA5	表採砂土	3.6	黒曜石	189頁
27	〃	〃	E-1-c-ハ	2.2	暗赤色珪岩	〃
28	〃	IA9	C-IB-b-ハ-2	0.6	黒曜石	〃
29	〃	IA8	F-1-b-イ-2	1.4	黒曜石	〃
30	槍先	IB1	F-IB-d-ハ	8.7	黒曜石	〃
31	〃	〃	E-1-c-ロ-2	4.3	黒曜石	〃
32	〃	〃	H-2-a-イ-3	7.3	黒曜石	〃
33	〃	〃	G-1-d-イ-3	4.5	黒曜石	〃
34	〃	〃	G-1-c-ハ-3	8.1	黒曜石	〃
35	〃	〃	E-1-c-ロ-2	14.4	黒曜石	〃
36	〃	〃	C-IB-b-イ	7.6	黒曜石	〃
37	〃	〃	G-1-d-イ-1	11.7	黒曜石	〃
38	〃	〃	D-IB-c-ハ-3	8.9	黒曜石	〃
39	〃	〃	F-IB-c	7.7	黒曜石	〃
40	〃	〃	G-1-d-イ-3	6.1	黒曜石	〃
41	〃	〃	F-1-b-ロ-1	6.7	黒曜石	〃
42	〃	〃	C-IB-b-ハ-3	6.1	黒曜石	〃
43	〃	〃	F-IB-a-ハ	5.5	黒曜石	〃
44	〃	〃	C-IB-b-ロ-3	6.3	黒曜石	〃
45	〃	〃	F-1-b-イ	6.1	黒曜石	〃
46	〃	〃	C-IB-c-ロ-2	3.3	黒曜石	〃
47	〃	〃	D-IB-d-ニ-3	3.0	黒曜石	〃
48	〃	〃	G-1-d-イ-3	5.2	黒曜石	〃
49	〃	〃	D-1-b-ニ	4.7	黒曜石	〃
50	〃	〃	E-1-a-ニ-2	4.2	黒曜石	〃

番号	名称	分類	発掘区	重量(g)	材質	写真
51	槍先	IB1	G-2-a-イ-2	2.0	黒曜石	189頁
52	〃	〃	G-1-d-イ-3	9.7	黒曜石	〃
53	〃	〃	G-1-d-イ-3	4.3	黒曜石	〃
54	〃	〃	E-IB-c-ハ-3	3.4	黒曜石	〃
55	〃	IB2	C-1-b-イ-4	3.5	黒曜石	〃
56	〃	〃	D-IB-c-ハ-3	3.5	黒曜石	〃
57	〃	〃	D-1-b-ニ-1	5.5	黒曜石	〃
58	〃	〃	D-IB-a-ニ	15.0	頁岩	〃
59	〃	〃	F-1-d-ハ	6.4	黒曜石	〃
60	〃	〃	I-2-c-イ-3	8.3	黒曜石	〃
61	〃	〃	G-1-d-ニ-3	5.0	黒曜石	〃
62	〃	〃	F-1-d-ニ	2.8	黒曜石	〃
63	〃	〃	F-2-b-ロ-3	3.8	黒曜石	〃
64	〃	〃	H-1-d-ニ	17.5	頁岩	〃
65	〃	〃	F-1-a-ニ-3	28.6	黒曜石	〃
66	〃	〃	G-2-a-ハ	4.4	黒曜石	〃
67	石鏃	IIA2	D-1-b-ロ-3	4.2	頁岩	190頁
68	〃	〃	D-IB-c-イ-3	9.8	頁岩	〃
69	〃	〃	C-IB-b-ロ-2	9.7	〃 〃 ウ	〃
70	〃	〃	F-1-a-ハ-1	2.9	頁岩	〃
71	〃	IIA3	G-1-d-ニ	7.0	頁岩	〃
72	〃	〃	D-IB-d-イ-3	1.3	黒曜石	〃
73	〃	IIA2	E-IB-d-ニ	4.2	珪質頁岩	〃
74	〃	〃	D-IB-a-ニ	0.6	黒曜石	〃
75	〃	〃	E-IB-d-イ-3	1.7	珪岩	〃

番号	名称	分類	発掘区	重量(g)	材質	写真
76	石鏃	IIA3	E-1-b-ハ-3	2.0	黒曜石	190頁
77	〃	〃	メインS-d	2.5	黒曜石	〃
78	〃	〃	F-1-c-イ	4.1	頁岩	〃
79	〃	〃	D-IB-d-ニ-3	4.6	頁岩	〃
80	〃	〃	メインS-c	4.5	頁岩	〃
81	〃	〃	F-1-d-イ-3	9.8	黒曜石	〃
82	つまみ付きナイフ	IIIA2	C-IB-a-イ-3	18.0	頁岩	〃
83	〃	〃	G-1-d-ロ-3	11.0	珪質頁岩	〃
84	〃	〃	D-1-a-ロ	12.5	頁岩	〃
85	〃	〃	E-IB-d-ハ-3	13.0	黒曜石	〃
86	〃	〃	B-IB-c-ハ-2	8.9	黒曜石	〃
87	〃	〃	H-1-d-ニ-2	9.9	頁岩	〃
88	〃	IIIA3	F-IB-d	15.1	頁岩	〃
89	〃	〃	D-IB-d-ニ-3	10.2	頁岩	〃
90	〃	〃	C-IB-b-イ-3	11.3	頁岩	〃
91	〃	〃	G-1-d-イ-1	13.1	頁岩	〃
92	〃	〃	E-1-c-ハ-3	13.3	頁岩	〃
93	〃	〃	C-IB-b-ロ-3	12.8	頁岩	〃
94	〃	〃	G-1-c-イ-2	12.6	頁岩	〃
95	〃	〃	F-1-b-イ-3	5.0	珪岩	〃
96	〃	〃	F-1-b-イ-2	8.3	頁岩	〃
97	〃	IIIA5	F-1-d-ロ-3	14.4	黒曜石	〃
98	〃	〃	E-IB-d-イ	26.3	頁岩	〃
99	〃	〃	F-1-c-ロ-3	15.6	頁岩	〃
100	〃	〃	H-IB-4	10.7	頁岩	〃

表Ⅴ－２－２　図示した石器等の説明表(1)

番号	名	称	分類	発掘区	重さ(g)	材	質	写真
101	つるみ岳ネライフ		HA5	H-1-a-2-3	5.3	頁	岩	190頁
102	スタレイバー		HB1	G-9-a-0-3	11.1	頁	岩	191頁
103		〃	〃	C-10-b-ハ	26.9	頁	岩	〃
104		〃	〃	G-1-c-ハ-2	5.5	黒 曜	石	〃
105		〃	HB2	G-1-d-ハ-2	8.8	黒 曜	石	〃
106		〃	HB3	F-10-d	35.2	珪 質	頁 岩	〃
107		〃	〃	D-10-a-ニ	16.3	頁	岩	〃
108		〃	〃	F-1-d-0	24.0	黒 曜	石	〃
109		〃	〃	E-1-b-イ-2	9.2	珪 質	頁 岩	〃
110		〃	〃	G-2-a-イ	7.8	黒 曜	石	〃
111		〃	〃	G-1-c-ニ-3	8.3	頁	岩	〃
112		〃	〃	F-1-d-0-3	5.3	黒 曜	石	〃
113		〃	〃	G-1-c-ハ-3	9.8	頁	岩	〃
114		〃	HB9	F-10-c	71.0	頁	岩	〃
115		〃	〃	E-10-d-イ-3	12.8	頁	岩	〃
116		〃	〃	C-10-b-イ-3	15.4	頁	岩	〃
117		〃	〃	H-2-a-ハ-3	47.2	珪 質	頁 岩	〃
118		〃	〃	D-10-c-0	15.1	頁	岩	〃
119		〃	〃	E-10-c-イ	44.8	頁	岩	〃
120		〃	〃	G-1-d-0-3	34.1	頁	岩	〃
121		〃	〃	D-10-c-0-3	17.9	頁	岩	〃
122		〃	〃	G-2-a-0-3	26.5	頁	岩	〃
123		〃	〃	G-1-a-ハ-2	14.0	頁	岩	〃
124		〃	〃	D-10-a-ニ	13.9	頁	岩	〃
125		〃	〃	C-10-b-0-3	8.9	珪 質	頁 岩	〃

番号	名	称	分類	発掘区	重さ(g)	材	質	写真
126	スタレイバー		HB9	E-1-a-0-2	16.2	頁	岩	191頁
127		〃	〃	G-1-c-イ-3	40.3	頁	岩	〃
128		〃	〃	E-1-c-イ	21.6	珪	岩	〃
129		〃	〃	F-1-a-ハ-1	17.2	珪 質	頁 岩	〃
130		〃	〃	G-1-d-0-3	10.3	泥	岩	〃
131		〃	〃	E-1-c-ニ-2	37.0	頁	岩	〃
132		〃	〃	E-1-a-イ-2	15.0	頁	岩	〃
133		〃	〃	G-1-c-0-2	14.3	頁	岩	〃
134		〃	〃	H-1-d-ニ-3	18.5	黒 曜	石	〃
135		〃	〃	G-10-d	22.6	黒 曜	石	〃
136		〃	〃	B-10-b-ハ-2	11.5	黒 曜	石	〃
137		〃	〃	C-1-d-0-3	6.0	黒 曜	石	〃
138		〃	〃	ノインS-イ	7.2	黒 曜	石	〃
139		〃	〃	C-10-a-ハ	4.8	黒 曜	石	〃
140		〃	〃	F-1-d-ハ-1	7.0	黒 曜	石	〃
141		〃	〃	F-10-d-ニ	8.7	黒 曜	石	〃
142		〃	〃	C-10-b-イ-3	4.3	頁	岩	〃
143		〃	〃	C-10-c-ニ-3	6.8	黒 曜	石	〃
144		〃	〃	D-1-c-イ-3	5.9	黒 曜	石	〃
145		〃	〃	F-1-c-ハ-3	9.4	黒 曜	石	〃
146		〃	〃	C-10-a-イ-2	10.5	黒 曜	石	〃
147		〃	〃	G-1-d-ハ	7.4	黒 曜	石	〃
148		〃	〃	F-2-b-イ-1	15.4	黒 曜	石	〃
149		〃	〃	F-1-c-ニ-2	25.7	黒 曜	石	〃
150	石	斧	HA2	E-1-b-イ	320.0	緑 色	泥 岩	192頁

番号	名	称	分類	発掘区	重さ(g)	材	質	写真
151	石	斧	HA3	E-1-b-イ	200	緑 色	泥 岩	192頁
152		〃	〃	D-10-c-ハ	113.4	黒 色	片 岩	〃
153		〃	〃	D-1-b-ニ	103	砂	岩	〃
154		〃	〃	F-1-d-ハ	210	緑 色	泥 岩	〃
155		〃	〃	G-1-c-ハ-3	87.2	黒 色	片 岩	〃
156		〃	〃	E-10-d-イ-3	25.8	黒 色	片 岩	〃
157		〃	〃	D-1-b-ニ-1	77	黒 色	片 岩	〃
158		〃	〃	H-2-a-イ-2T	30.7	黒 色	片 岩	〃
159		〃	〃	G-10-d	59.3	黒 色	片 岩	〃
160		〃	〃	F-1-c-0-3	47.7	黒 色	片 岩	〃
161		〃	〃	C-10-c-ハ	64.4	黒 色	片 岩	〃
162		〃	HA5	F-1-c-0-2 F-1-c-イ-2	480	緑 色	泥 岩	〃
163		〃	〃	F-1-c-ニ-3 D-10-c-0-3	138.8	緑 色	泥 岩	〃
164		〃	〃	F-1-b-ニ	149.4	緑 色	泥 岩	〃
165		〃	〃	F-10-d-ハ	135.6	緑 色	泥 岩	〃
166		〃	〃	E-10-d-ニ	188.7	緑 色	泥 岩	〃
167		〃	〃	F-1-b-ハ	102	緑 色	泥 岩	〃
168		〃	〃	E-10-d-ニ	72.1	緑 色	泥 岩	〃
169		〃	〃	E-1-b-イ-2 C-1-d-イ-2	70.9	緑 色	泥 岩	〃
170		〃	〃	E-1-c-ハ	154.6	緑 色	泥 岩	〃
171		〃	〃	D-10-a-ニ-3 G-1-c-ハ-3	51.7	緑 色	泥 岩	〃
172		〃	〃	D-10-c-ニ	24.6	緑 色	泥 岩	〃
173		〃	〃	C-1-b-ニ-1 C-1-b-ニ-2	52.8	緑 色	泥 岩	〃
174		〃	〃	F-1-d-ニ-3	26.2	緑 色	泥 岩	〃
175	石	のみ	HB	F-1-b-ニ-2	34.8	黒 色	片 岩	〃

番号	名	称	分類	発掘区	重さ(g)	材	質	写真
176	石	のみ	HB	F-1-b-ニ	68.7	黒 色	片 岩	192頁
177		〃	〃	E-10-c-ハ-2	7.4	黒 色	片 岩	〃
178	たたき石		HA1	H-2-c-イ-2	320	安 山	岩	193頁
179		〃	〃	E-1-a-イ-2	460	安 山	岩	〃
180		〃	〃	G-1-d-0	670	安 山	岩	〃
181		〃	〃	D-10-d-ハ-2	570	安 山	岩	〃
182		〃	〃	ノインS-b	360	安 山	岩	〃
183		〃	HA2	G-1-a-ニ-2	240	安 山	岩	〃
184		〃	〃	D-10-c-ハ-2	1032	安 山	岩	〃
185		〃	HA1	C-10-c-0-3	138.2	安 山	岩	〃
186		〃	HA2	G-1-a-ハ-1	470	安 山	岩	〃
187		〃	〃	G-1-a-イ-1	560	緑 色	泥 岩	〃
188		〃	HA3	G-10-c	540	安 山	岩	〃
189		〃	〃	E-1-b-ハ-3	470	安 山	岩	〃
190		〃	〃	E-1-a-ニ-2	550	安 山	岩	〃
191		〃	〃	G-1-b-ニ-3	460	安 山	岩	〃
192		〃	HA4	E-1-a-イ	340	泥	岩	〃
193		〃	〃	E-1-b-イ-3	188	安 山	岩	〃
194		〃	〃	F-1-b-イ-3	158.7	安 山	岩	〃
195		〃	〃	D-10-c-ハ-2	250	安 山	岩	〃
196		〃	〃	E-10-d-ニ-3	213	安 山	岩	〃
197	すり	石	HA1	45 表採	181.5	安 山	岩	〃
198		〃	〃	E-1-d-0-3	340	安 山	岩	〃
199		〃	〃	G-1-a-ハ-1	620	安 山	岩	〃
200		〃	WA4	F-1-d-イ-2	1130	安 山	岩	〃

表Ⅴ－２－３　図示した石器等の説明表(2)

番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	写真
201	すり石	WA5	G-10-d	300	かんらん岩	153頁
202	〃	〃	G-1-a-ロ	260	かんらん岩	〃
203	石鏃	WA1	J-3-b-イ-2	110	砂岩	194頁
204	〃	〃	C-10-b-イ-3	35.8	砂岩	〃
205	〃	〃	E-1-a-ニ-3	20.3	砂岩	〃
206	砥石	WB1	F-1-d-ニ-2	26.4	砂岩	〃
207	〃	WB2	B-10-d-ニ-3	135.3	砂岩	〃
208	〃	〃	G-10-b-ロ-3 E-10-d-ハ-3	73.7	砂岩	〃
209	〃	〃	G-1-b-ニ-3 G-1-d-イ-2 G-1-a-ホ-1 F-1-a-ロ-1	136.6	砂岩	〃
210	〃	WB3	G-1-a-ハ-2	147	砂岩	〃
211	〃	〃	G-1-d-ハ-3	135.2	砂岩	〃
212	〃	〃	G-2-b-ハ-1	265	砂岩	〃
213	〃	〃	E-1-a-イ-2	321	砂岩	〃
214	〃	〃	E-1-c-イ-2	290	砂岩	〃
215	〃	〃	G-2-b-イ-1	704	砂岩	〃
216	〃	〃	E-10-d-ハ-5下	138.7	砂岩	〃
217	〃	〃	D-1-b-ロ-3	90.9	砂岩	〃
218	〃	WB2	G-10-d-イ	1662	砂岩	〃
219	台石	VB1	D-10-d-イ-2	581	安山岩	195頁
220	〃	〃	E-10-d-イ-3 E-10-d-ハ-3	475	堆積岩輝石岩	〃
221	台石	〃	G-1-a-イ-3	13500	安山岩	〃
222	〃	〃	メインS	26000	安山岩	〃
223	〃	〃	C-10-b-ロ-2	6000	安山岩	〃
224	石皿	VB1	H-1-b	8000	堆積岩輝石岩	〃

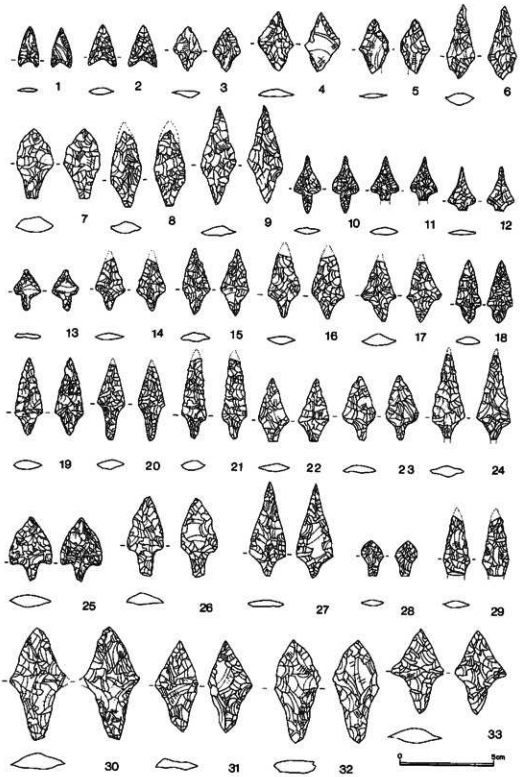
番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	写真
225	石皿	VB1	F-10-d	6500	堆積岩輝石岩	195頁
226	〃	〃	D-10-c-ハ-3	8500	堆積岩輝石岩	〃
227	〃	〃	E-10-d-ハ-3	3000	安山岩	〃
228	〃	〃	B-10-b-ハ-2	10000	堆積岩輝石岩	〃
229	〃	〃	H-1-b	2500	堆積岩輝石岩	〃
230	〃	〃	D-10-c-ハ-3	3250	堆積岩輝石岩	〃
231	〃	〃	F-1-a-イ-2 F-1-a-イ-2	4500	安山岩	〃
232	〃	〃	C-10-b-ロ-3	4500	安山岩	〃
233	〃	〃	F-2-b-イ-3	2200	安山岩	〃
234	〃	〃	E-10-a-ニ-3	3000	安山岩	〃
235	〃	〃	F-2-b-イ-3	920	堆積岩輝石岩	〃
236	〃	〃	H-10-d-ハ-2	3000	堆積岩輝石岩	〃
237	台石	VB1	E-10-d-ハ-3	920	堆積岩輝石岩	〃
238	〃	VB1	E-1-c-イ-3	3000	堆積岩輝石岩	〃
239	〃	〃	F-2-b-イ-3	3100	堆積岩輝石岩	〃
240	〃	〃	F-2-b-イ-3	2600	堆積岩輝石岩	〃
241	ピエス・エスキーユ	IA1	G-1-d-イ-1	6.3	頁岩	196頁
242	〃	〃	E-10-d-ハ-3	8.6	頁岩	〃
243	〃	〃	E-10-d-ハ-3	3.2	黒曜石	〃
244	加工痕・使用痕のある剥片	IA2	C-10-d-ロ-3	11.9	頁岩	〃
245	〃	〃	G-1-d-ロ-3	10.7	黒曜石	〃
246	〃	〃	G-1-d-ロ-3	4.6	黒曜石	〃
247	〃	〃	トレンチB	1.8	黒曜石	〃
248	〃	〃	E-1-d-ロ-3	5.9	珪質頁岩	〃
249	石刀	〃	赤色土、不明	6.4	黒曜石	〃

番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	写真
250	加工痕・使用痕のある剥片	IA2	E-10-d-ハ-3	5.3	頁岩	196頁
251	〃	〃	H-1-d-ル-2	12.1	黒曜石	〃
252	加工痕・使用痕のある礫	IB	G-1-a-イ-2	40.4	砂岩	〃
253	石核	IIA	メインS-4	8.3	黒曜石	〃
254	〃	〃	G-1-d-イ	20.8	黒曜石	〃
255	〃	〃	G-1-c-イ-2	60.3	黒曜石	〃
256	〃	〃	表採礫土	20.9	頁岩	〃
257	敲り玉		F-1-a-ニ	23.8	滑石	カラー
258	〃		B-10-b-ロ	44.6	滑石	〃
259	〃		F-10-c-ハ-2	60.5	滑石	〃
260	〃		F-1-d-ロ	19.4	滑石	〃
261	〃		G-2-a-イ	4.1	滑石	〃
262	〃		F-1-c-イ	3.2	滑石	〃
263	三角形土製品		E-10-d-ニ	6.3	土器の破片	〃
264	〃		D-1-a-ハ	8.7	土器の破片	〃
265	〃		E-10-d-ニ	5.3	土器の破片	〃
266	加工痕のある剥片	IA2	D-10-a-イ	8.1	黒曜石	197頁
267	〃	〃	G-10-d	7.0	黒曜石	〃
268	〃	〃	F-1-b-イ	1.0	黒曜石	〃
269	〃	〃	トレンチE	5.9	黒曜石	〃
270	加工痕のある礫	IB	E-1-b-ニ-3 E-1-d-ロ-3	47.2	黒色片岩	196頁
271	〃	〃	F-1-d-ハ-2	178.0	緑色泥岩	〃
272	〃	〃	B-10-b-ハ	72.5	緑色泥岩	〃
273	〃	〃	E-1-b-ニ-3 E-1-d-ロ-3	1,420.0	緑色泥岩	〃
274	石刀?		D-1-c-イ-3	690.0	緑色泥岩	カラー

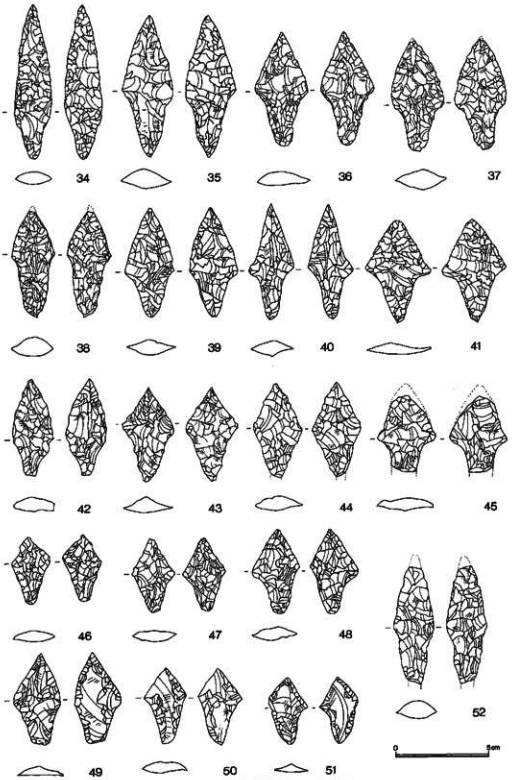
番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質	写真
			G-1-d-ロ-1 G-1-d-ロ-3	135.1	堆積岩輝石岩	カラー197頁
276	〃	〃	G-1-d-ロ-2	45.3	堆積岩輝石岩	〃
277	オロシガネ状石製品		G-1-b-ニ-3	230.0	堆積岩輝石岩	カラー
278	土製品		D-10-b-ニ	6.2	焼土を焼いたもの	198頁
279	使用痕のある剥片	IIB	E-1-a-ニ-3	4.7	黒曜石	〃
280	〃	IIB	C-10-b-ロ	3.8	黒曜石	〃
281	剥片	IIB	D-1-b-ハ-3	5.5	黒曜石	〃
282	軽石製品		F-1-a-イ-2	24.8	軽石	〃
283	加工痕のある礫	IIB	E-10-a-イ	48.0	軽石	〃
284	〃	〃	G-1-b-ニ-3	95.6	砂質	〃
285	〃	〃	H-2-a-イ-3	120.4	砂岩	〃
286	〃	〃	C-10-d	99.0	滑石	〃
287	〃	〃	D-10-d-ハ	63.9	軽石	〃
288	〃	〃	G-1-d-ハ	124.8	軽石	〃

※遺物の出土層位は、本文中に述べるもののほかはとくに区別しなかったので記さない。

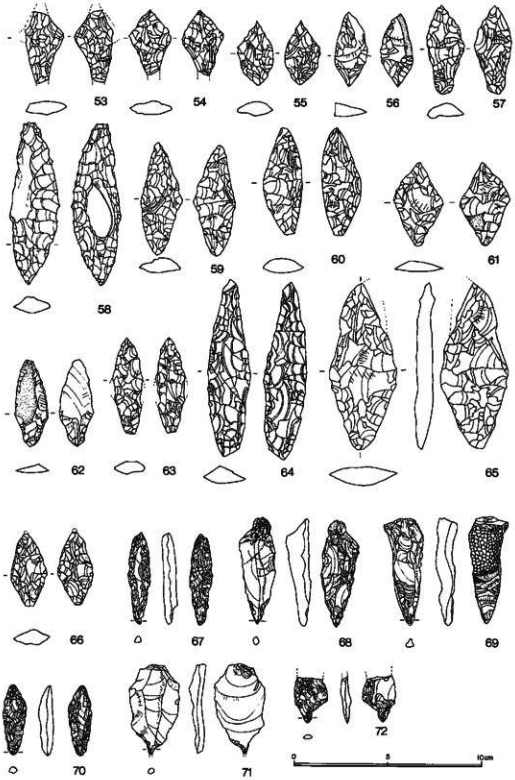
表Ⅴ－２－４　図示した石器等の説明表(3)



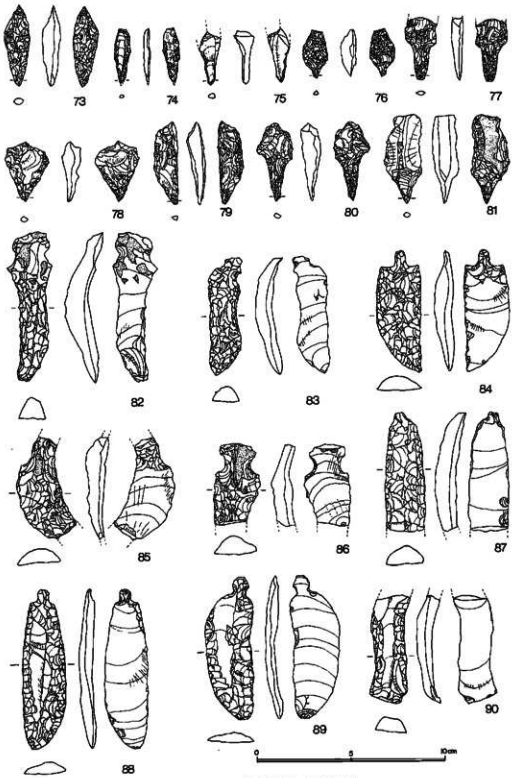
図Ⅴ－２－６　包含層出土の石器等(1)



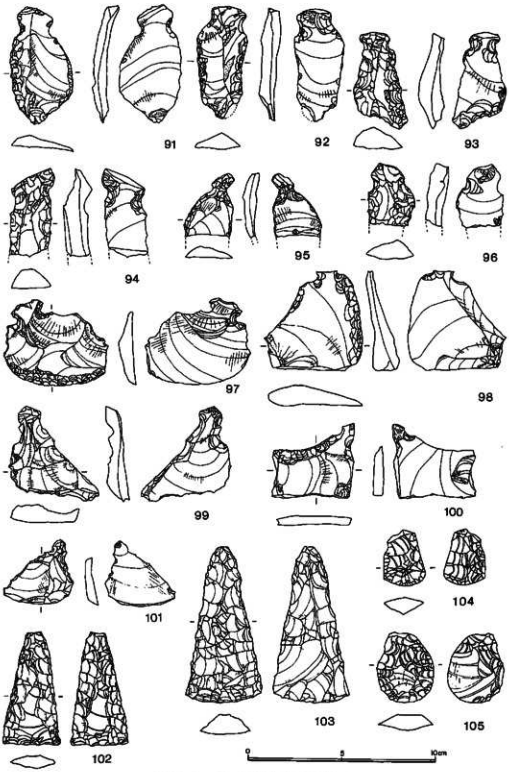
図Ⅴ－２－７　包含層出土の石器等(2)



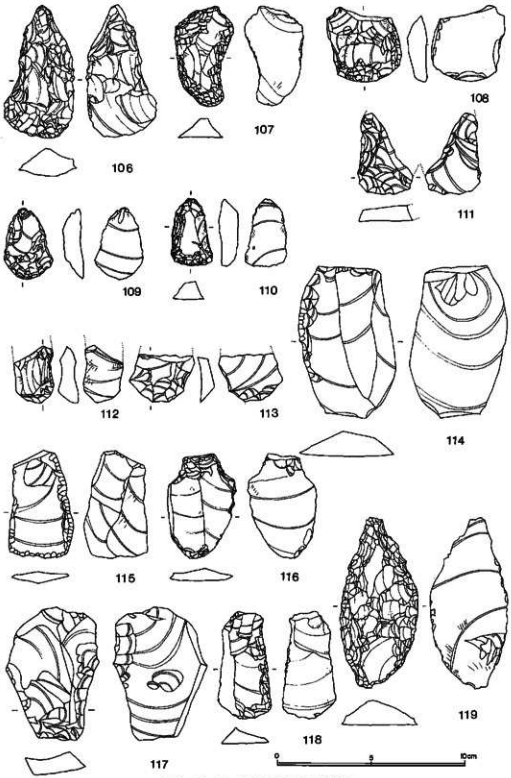
図Ⅴ－２－８　包含層出土の石器等(3)



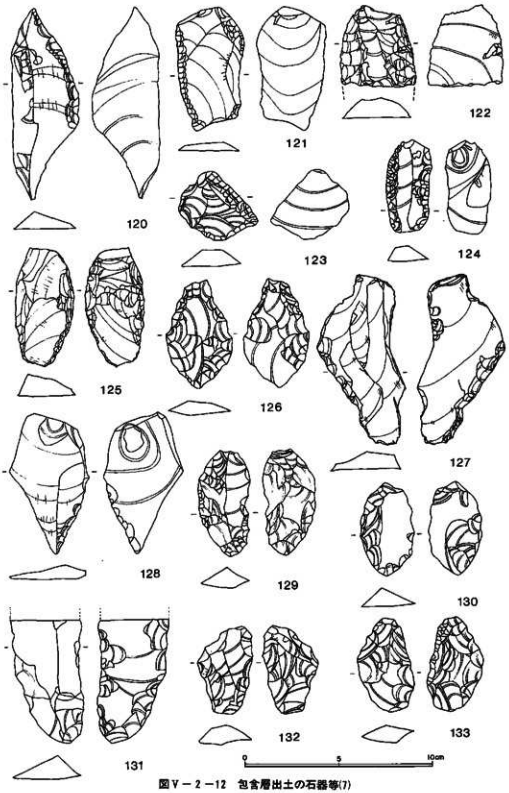
図Ⅴ－2－3　包含層出土の石器等(4)



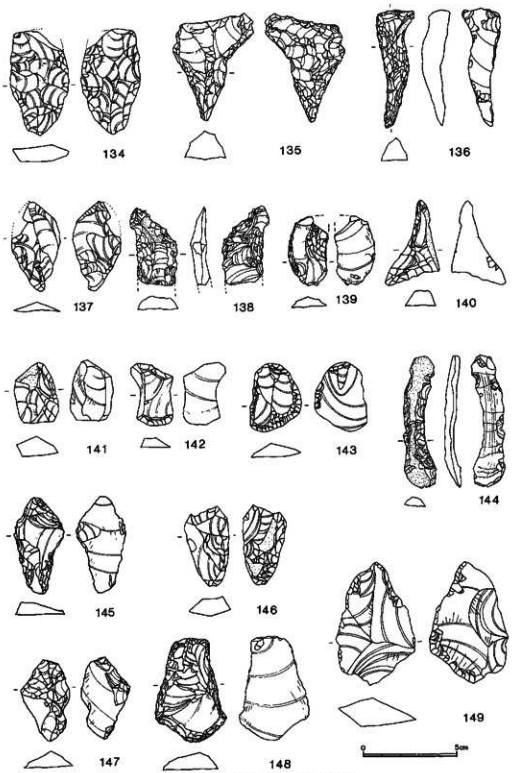
図Ⅴ－２－18　包含層出土の石器等(5)



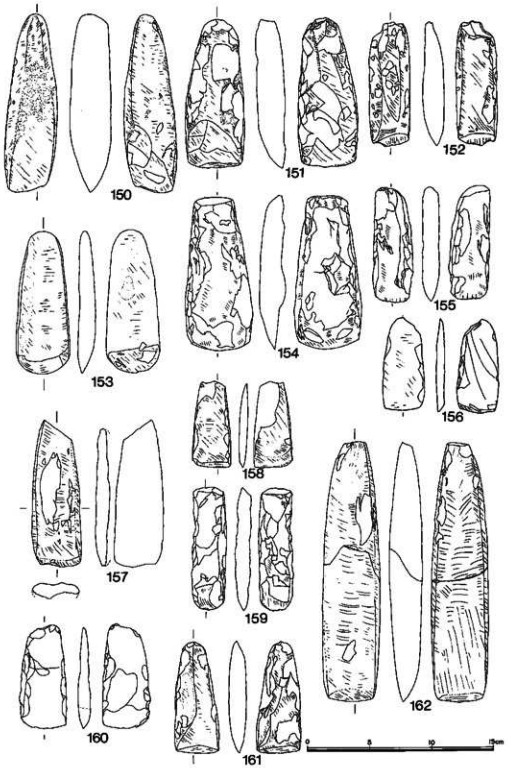
図Ⅴ－２－11　包含層出土の石器等(8)



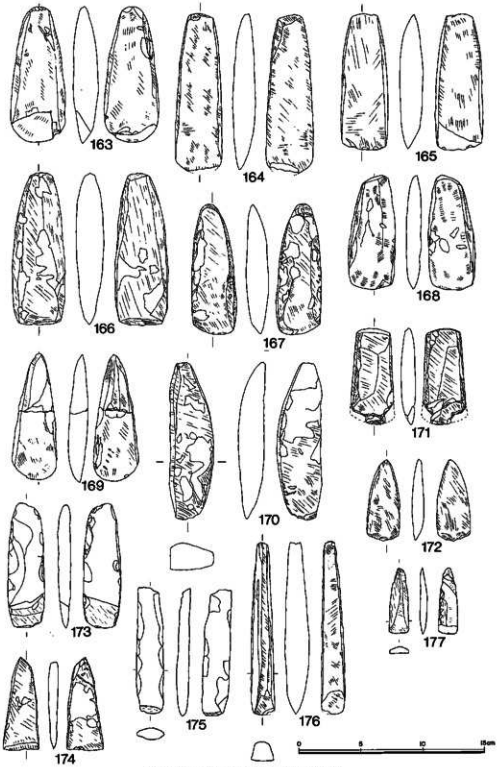
図Ⅴ－2－12　包含層出土の石器等(7)



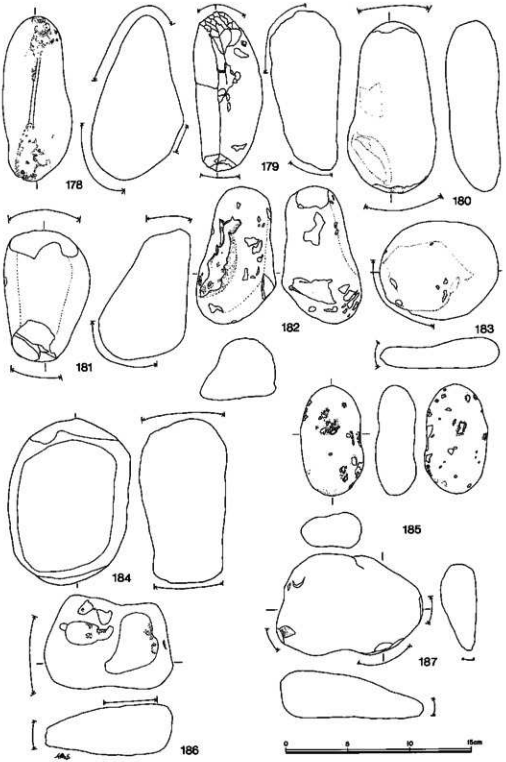
図Ⅴ－2－13　包含層出土の石器等(8)



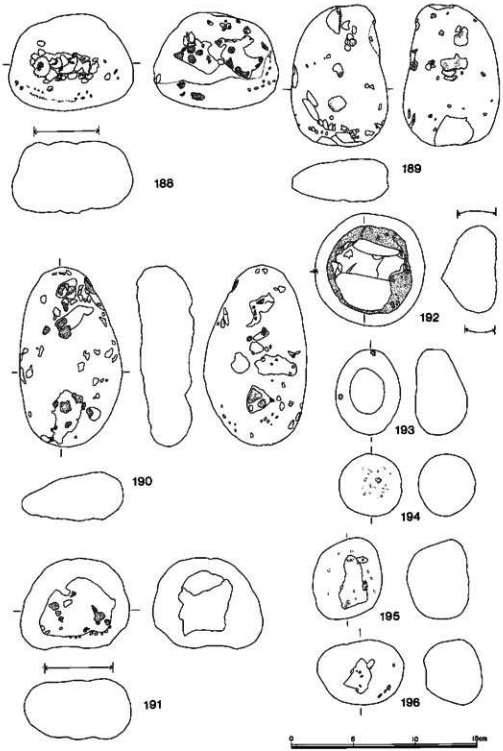
図Ⅴ－2－14　包含層出土の石器等(9)



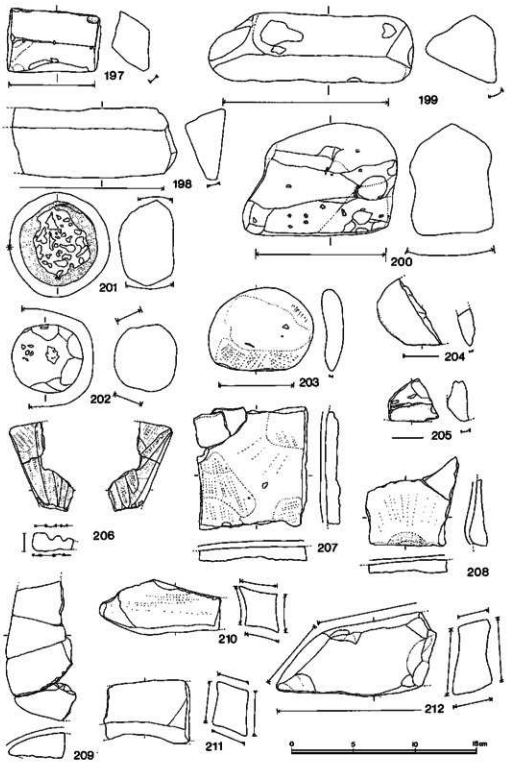
図Ⅴ－２－15　包含層出土の石器等(1)



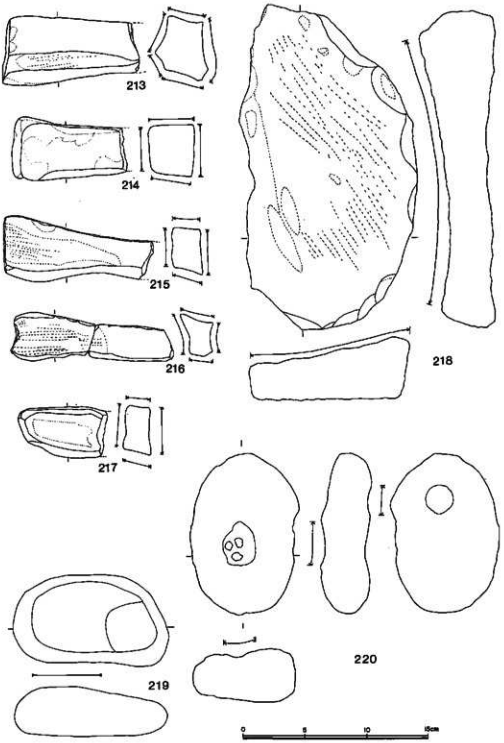
図Ⅴ－２－16　包含層出土の石器等(11)



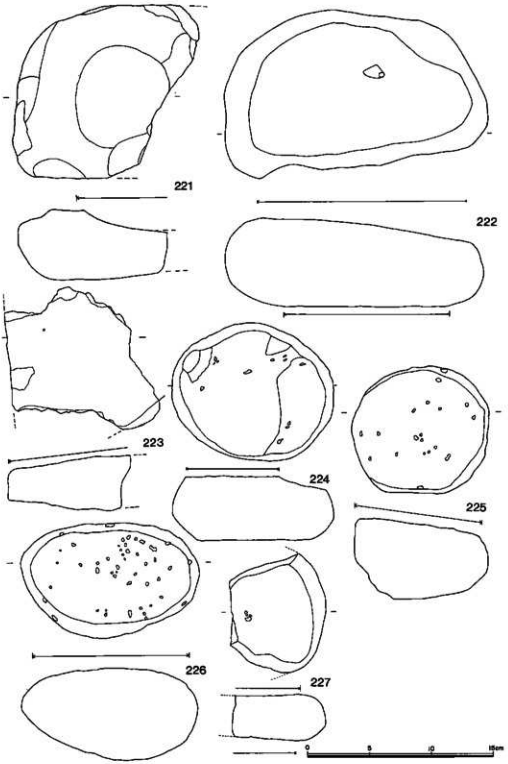
図Ⅴ－2－17　包含層出土の石器等(17)



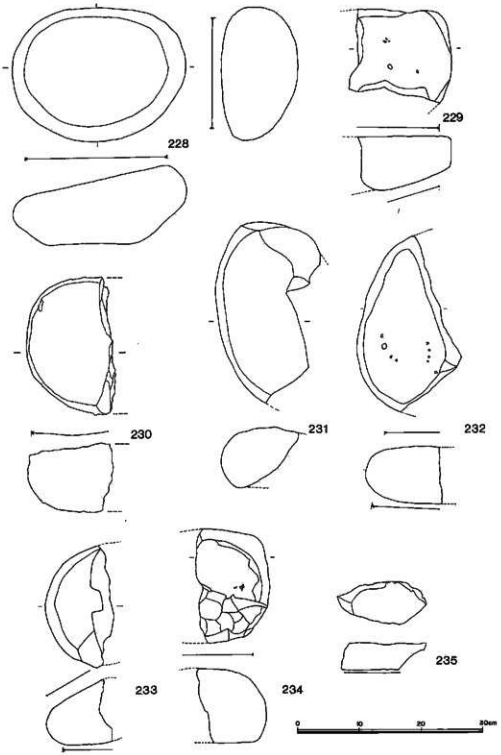
図Ⅴ－２－18　包含層出土の石器等(1)



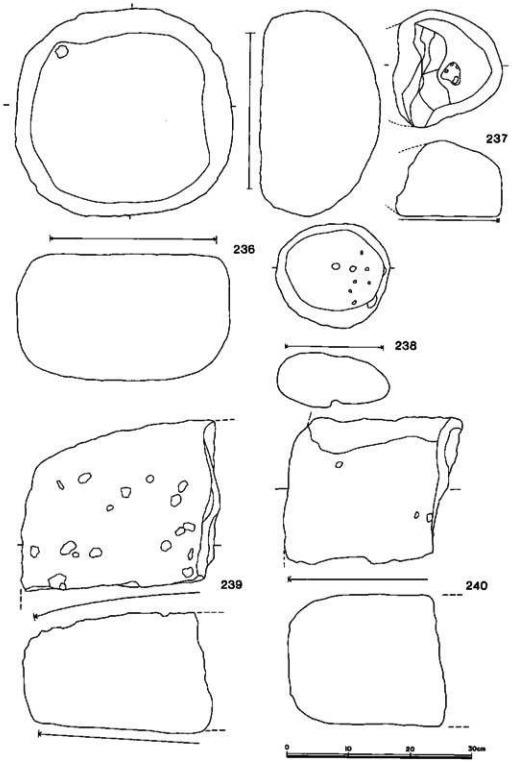
図Ⅴ－2－19　包含層出土の石器等(4)



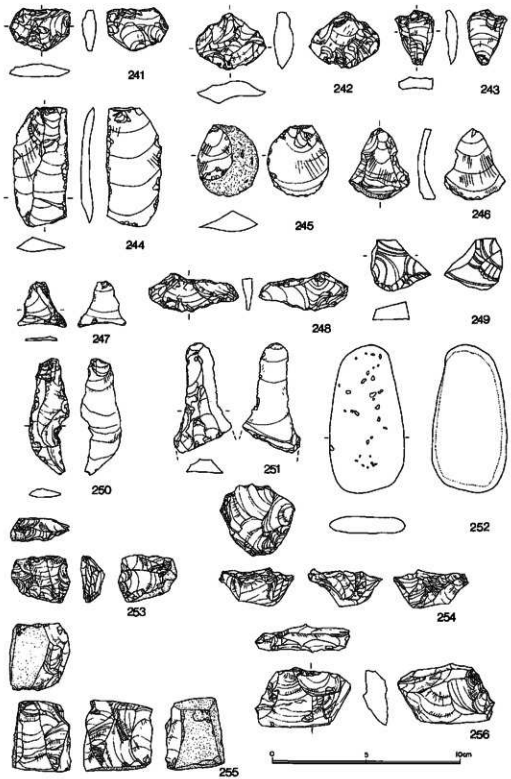
図Ⅴ－２－20　包含層出土の石器等(9)



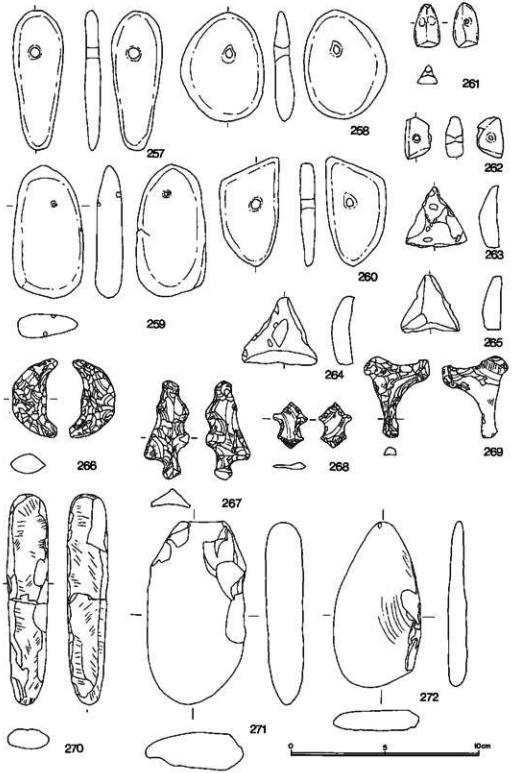
図Ⅴ－2－21　包含層出土の石器等⑨



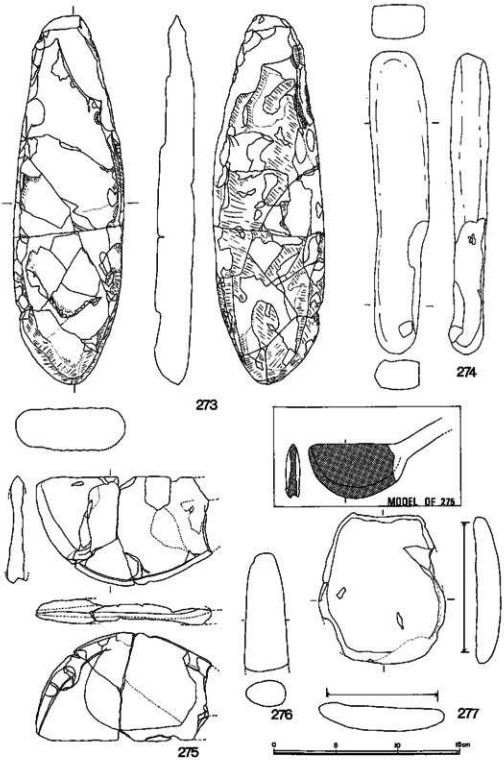
図Ⅴ－２－22　包含層出土の石器等(17)



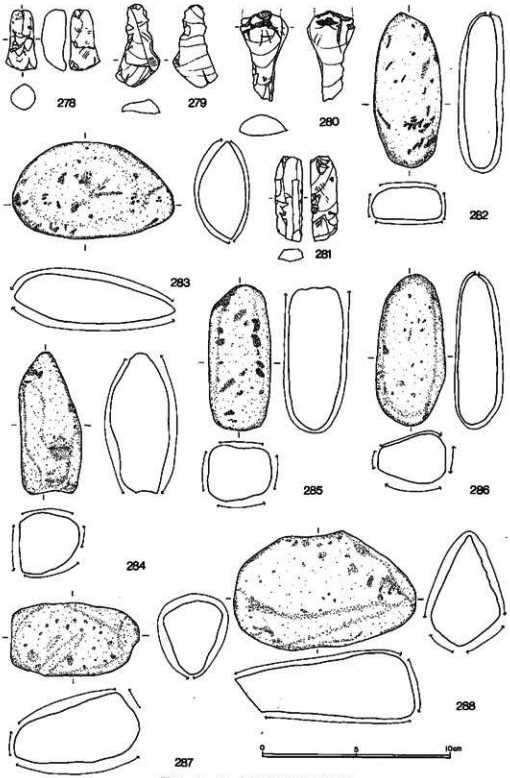
図Ⅴ－２－23　包含層出土の石器等(8)



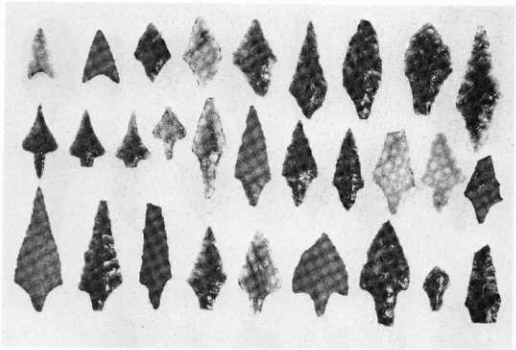
図Ⅴ－２－24　包含層出土の石器等(1)

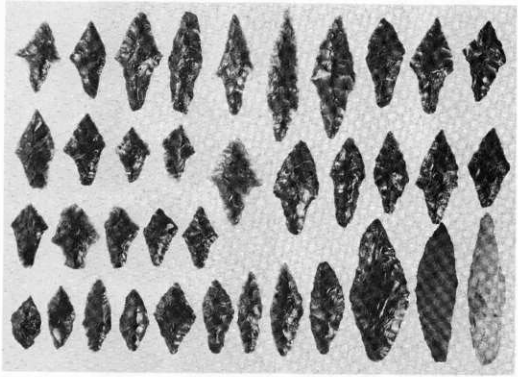


図Ⅴ－2－25　包含層出土の石器等(20)



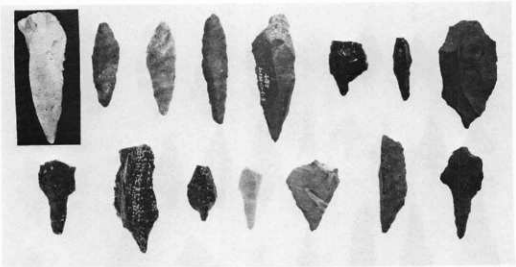
図Ⅴ－２－26　包含層出土の石器等(2)

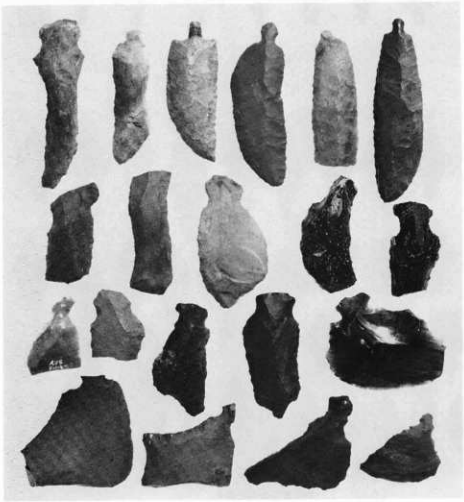




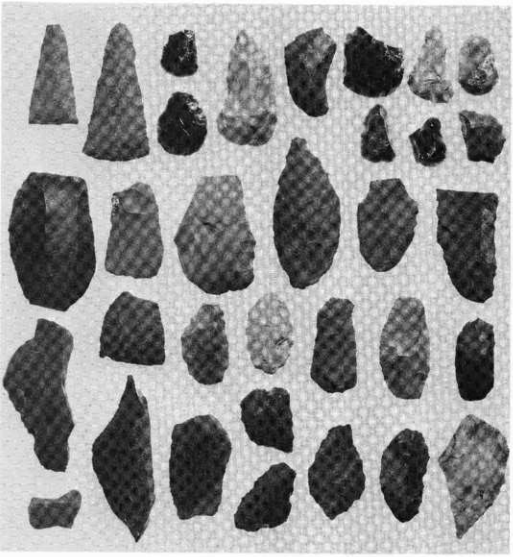
包含層出土の石器等

図版Ⅴ－２－２

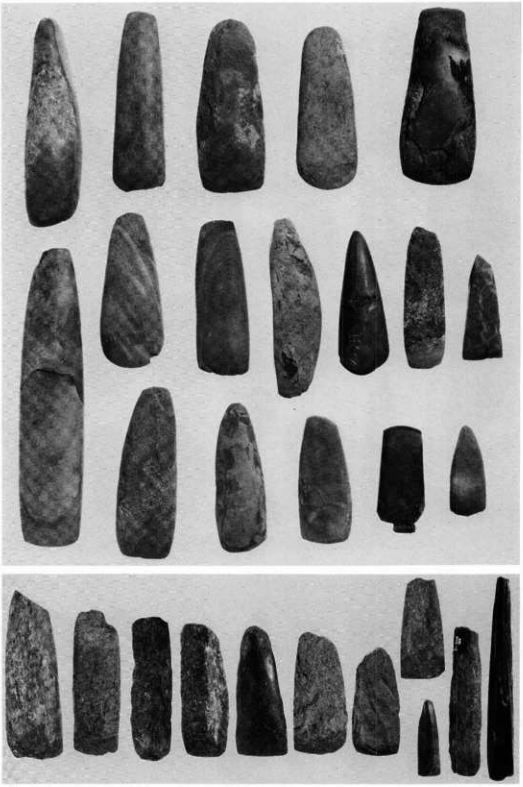




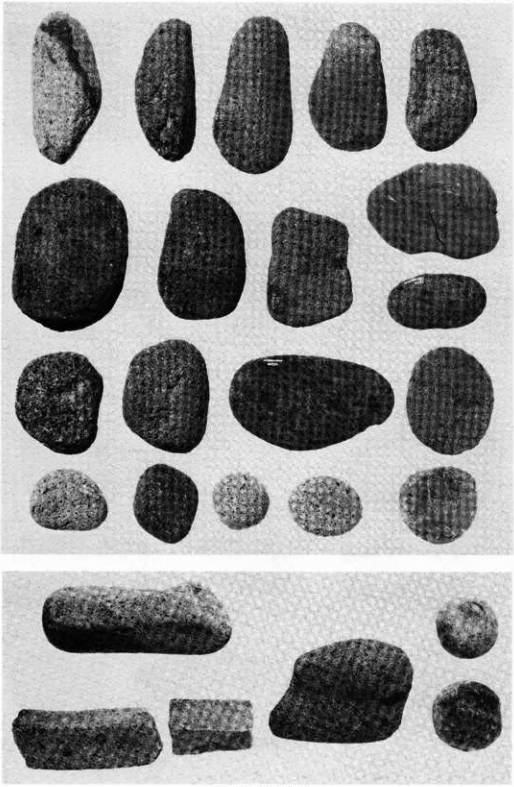
包含層出土の石器等



包含層出土の石器等

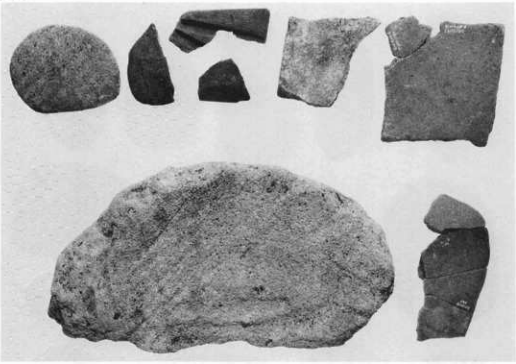


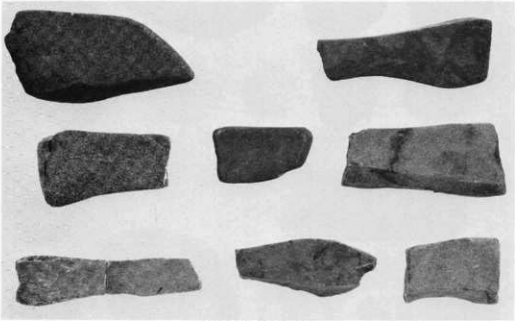
包含層出土の石器等



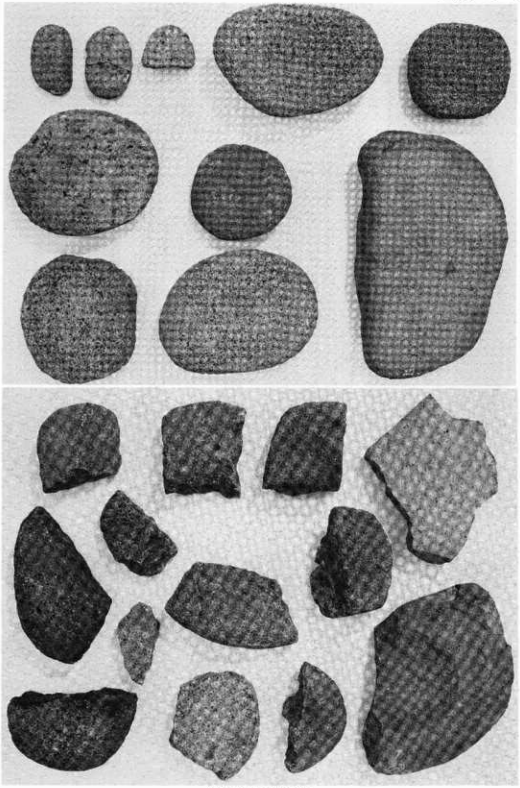
包含層出土の石器等

図版Ⅴ－２－６

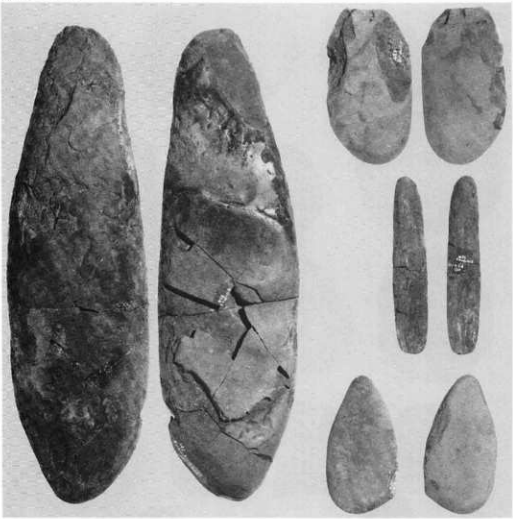




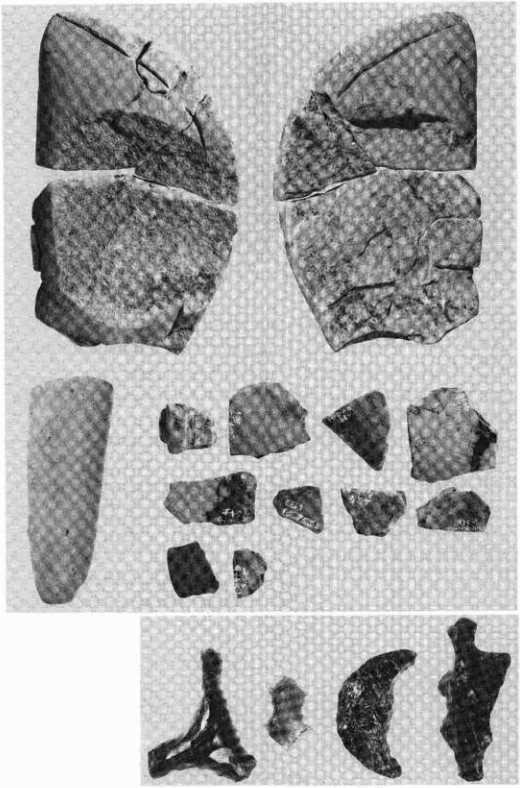
包含層出土の石器等



包含層出土の石器等



包含層出土の石器等



包含層出土の石器等

図版Ⅴ－2－10

周辺を精査したにもかかわらず，関連する遺構，遺物は検出できなかった。

275・276は青竜刀形石器と呼ばれるものの破片である。ともに，淡黄褐色の珪藻質泥岩を素材としているが，材質が微妙に異なるので，別個体と考えられる。275は多数の小破片となって出土している（図版Ⅴ－2－9）。この小破片のうちで275に接合したもののひとつは，住居跡H－25の床面から出土している。

277は，オロシガネ状石器とでも呼ぶべき石器である。このような石器は，縄文時代後期中葉の手稲式土器にともなう例が知られている。

278は焼成粘土塊，279・280は黒曜石剥片が火焼を受けたもの，281は黒曜石剥片である。

282・283・287・288は軽石礫に明瞭な加工がみられるものである。軽石礫は多数出土しているが，加工の判断には微妙なものがある。軽石礫の分布図は示していないが，E・F・Gという相対的に低いところから多く出土している。

Ⅵ　成果と問題点

今回の調査では，57年度の成果から当初予期していた以上に，新しい知見を得ることができた。これらの具体的な内容についてはⅣ章とⅤ章とに詳しく記してある。今回の調査で解明できたことがらや，そこから派生する問題点について，調査にあたってもうけた「調査のねらい」をふまえて，ここでは次の五項目について検討を試みる。1．遺跡の形成について，2．遺構の構築時期・性格とその関係について，3．縄文時代中期末葉から後期初頭の土器の編年について，4．石器等について，5．オロシガネ状石器について

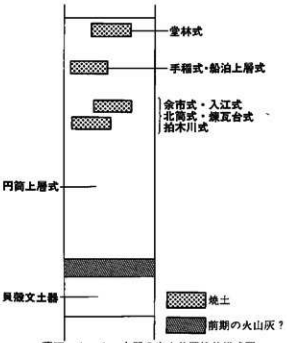
1．遺跡の形成について

今回の調査区域の諸資料が，どのような自然的，歴史的な条件のもとに埋没していたのか。そして，また，どのような埋没状況にあったのかについて，生活面の推定（㋑，㋺）や遺跡の様態の例示（㋩，㋥）をおこなったうえで，遺跡の形成のあらましを述べる。

㋑　出土した土器のうちで，もっとも古い時期のものはⅠ群ａ類に分類した縄文時代早期の貝殻文土器であり，もっとも新しい時期のものはⅣ群ｃ類に分類した縄文時代後期後葉の堂林式土器である。この両者の間に，古いものから順に，円筒上層式，柏木川式，北筒式，煉瓦台式，余市式，入江式，船泊式層式，手稲式などの型式に相当する土器が出土している。これらの土器の出土状況を土層との関係において，模式的に示したのが図Ⅵ－１－１である。柱状図の右側は発掘時に確認できたものであり，左側は推定したものである。

㋺　図Ⅵ－１－２は焼土の平面分布図である。焼土の中から検出されたいくつかの土器片や，発掘時の観察記録をもとにすると，これらの焼土は図Ⅵ－１－１の模成図に示したような時期のものといえる。Ｆ－１－ｄ－ロ区の，暗褐色土Ⅰ層中の焼土は，暗褐色土を掘りはじめて３～15cmほどの深さに，200cm×130cmのひろがりをもっていた。この焼土の中には白色の焼けた獣骨片多数とともに堂林式土器（図Ⅴ－１－２－15），石鏃（図Ⅴ－２－６－１），つまみ付きナイフ（図Ⅴ－２－10－97）がふくまれていた。

ほかの焼土からは，直接手がかりになる遺物は出土しなかったが，土層中の深さから推定すると，暗褐色土Ⅱ層上層上面としたものは，後期前葉から中期の時期，暗褐色土Ⅱ層下層中としたものは，縄文時代中期後葉から後期前葉の時期と考えられる。これらの焼土は，住居跡な



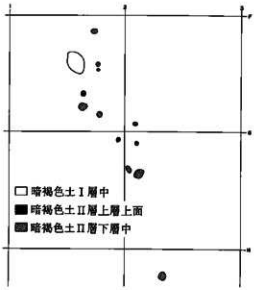
図Ⅵ－１－１　土器の出土位置柱状模式図

どの遺構に伴なう可能性もあるが，あいにく調査期間中，常時滲出する湧水が焼土とその周辺を浸していたため，遺構との関係を明らかにすることはできなかった。

㈥ 図VI－1－3は，別項の図VI－3－1，2に示したもの以外の土器の分布図である。これらの土器について，周辺の遺跡と比較してみる。

貝殻文土器（Ⅰ群a類）白老町虎杖浜3遺跡で多量に出土している。ほかに虎杖浜遺跡，千歳2遺跡，千歳6遺跡，川上B遺跡などで少量出土している。

円筒上層式土器(Ⅲ群a類)　川上B遺跡で割合にまとまった資料がみられる。ほかに鶯別1遺跡，千歳1遺跡，千歳4遺跡，虎杖浜3遺跡，虎杖浜4遺跡などで，少量出土している。



図VI－1－2　焼土の位置

船泊上層式土器・手稲式土器(Ⅳ群b類)　富岸遺跡，川上B遺跡，千歳4遺跡，虎杖浜3遺跡などで少量出土している。周辺の遺跡に比べると，千歳5遺跡の出土量は多いほうである。

堂林式土器（Ⅳ群C類）　富岸遺跡，川上B遺跡，虎杖浜3遺跡，虎杖浜4遺跡などで，ごく少量出土している。周辺の遺跡と同様に千歳5遺跡でも，ごく少量の出土である。

㈦ 図VI－1－4の柄は，石斧の破片の接合関係を示すものである。遺物番号は図V－2と同じであり，301，302はあらたに図示した石斧破片である。

162・169は，ほぼ半分に割れている。いずれも刃部に損傷はみられない。162の破片は5m以内で出土しているが，169は15mほど離れている。これらの破片は堆積の状態にちがいがあったらしく，162では上半，169では下半が，それぞれ黒褐色に変色している。162の刃部側は，F－1－C－イ区，169の刃部側は，E－1－b－イ区から出土している。

163・171・173は刃部が破損している。173の破片は5mほどであるが，163は20m，171は40mほど離れて出土している。163・171のように遠く離れて出土した破片は，それぞれに類似した表面をしており接合しても異和感はないが，近くから出土している173の表面は別個体ではないかと見まごうばかりに表面の状態は異っている。173の刃部側の破片は研磨痕が明瞭に残っているが，他の側の破片は研磨痕の内部に潜在していた敲打痕が露出しているところが多い。この敲打痕の顕在化した破片には，酸化鉄の付着が多く見られることから判断すると，滞水状態で堆積していたものであろう。163の刃先はD－100－c－ロ区，171の刃先はG－1－c－ハ区から出土している。

301の破片は30mほど離れて出土しており，表面はともに黒褐色に変色している。全面に研磨された石斧であったと推測されるが，この大きな破片２点でも，もとの形は明らかでない。裏面には，大きな剥離面がみられる。

302の破片は40mほど離れて出土しており，表面はともに緑色泥岩特有の淡い緑色である。この破片は節理にそって分かれている。表面には，研磨痕がよく残っている。刃部に近いところの破片と考えられる。

以上に述べた７点の石斧の接合例から，次のようなことが考えられる。石斧の破損には162・169のようにほぼ半分に割れるもの，163・171・173のように刃部が破損するもの，301・302のように原形を推定し難いほどに多くの破片に割れるもの，などがある。割れかたの相違と接合破片の出土地点の距離には，相関関係はみられない。遠いところのものでは171・302のように谷地形をはさんで40mほど離れて接合したものがあり，図Ⅵ－１－３の付に示す同一個体の土器の破片よりも広い範囲に散布していることになる。割れた破片は，堆積の状態のちがいによって，表面の色調に大きな差異が生じているものがある。

以上㋑～㋥で述べたことや，次項の２～５を，遺跡の形成という観点からまとめると，次のようになろう。

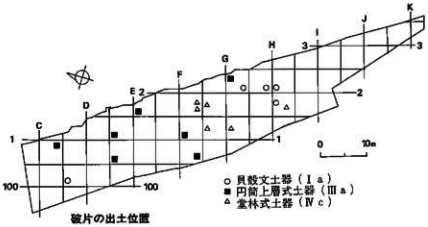
人間の活動がみられるのは，縄文時代早期の貝殻文土器の頃以降である。この貝殻文土器の時期には，少量の遺物しか残されていない。つづく撚糸文土器の時期と縄文時代前期の遺物は，検出されていない。空白の時期といえる。

ふたたび人間の活動がみられるのは，縄文時代中期中葉の円筒上層式土器の時期であるが，このときの遺物も少量である。中期後葉になると遺物の量はふえて，つぎの後期前葉までの時期には多量の遺物がある。この多量の遺物のなかには，より北方へ関連するもの（北筒式土器，四面砥石）や，より南方へ関連するもの（煉瓦台式土器，青竜刀形石器）などが認められる。多量の遺物の基盤には，住居跡の検出にみられるように，比較的定住的な生活があった。また，石斧の原石，破片，未製品や砥石破片が多量に出土していることは，石斧製作がおこなわれていたことの証拠であり，この一例をもってしても，この場所は周辺の遺跡と比べても，主体的な遺跡であったといえる。

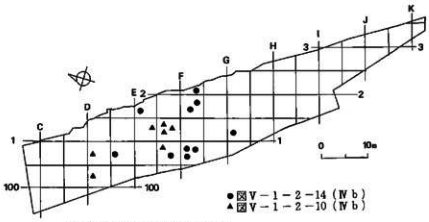
縄文時代後期中葉の時期は，比較的多量の遺物を残しているが，住居跡の検出例はない。この時期の遺跡は，札幌市手稲遺跡，江別市吉井の沢１遺跡，千歳市美々４遺跡などのように，泥炭層や滞水層の下に埋没している例があるが，千歳５遺跡の場合も類似した環境だったと考えられる。

人間の活動がみられる最後の時期は，縄文時代後期後葉の堂林式土器の頃である。この時期の遺物は，周辺の遺跡と同様に少量検出されているにすぎない。

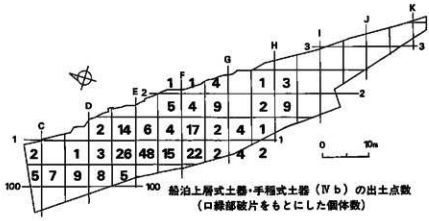
以後，洪水による土砂の堆積，滞水環境の泥炭形成，降下火山灰の堆積などの繰りかえしのうちに，遺跡は地中深く埋没していったものと考えられる。（西田　茂）



破片の出土位置

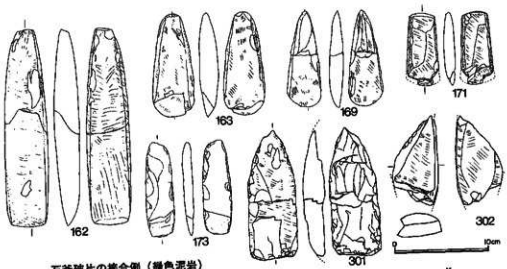


復原した土器の破片の出土位置

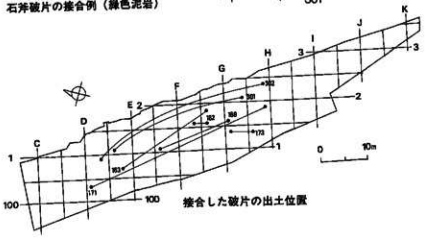


船泊上層式土器・手稲式土器（Ⅳb）の出土点数
（口縁部破片をもとにした個体数）

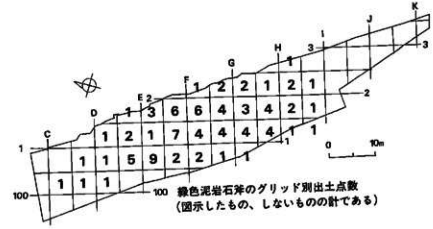
図Ⅵ－1－3　少量出土した土器の分布図



石斧破片の接合例（緑色泥岩）



接合した破片の出土位置



緑色泥岩石斧のグリッド別出土点数
（図示したもの、しないものの計である）

図VI－1－4　石斧の接合関係

2．遺構の構築時期・性格とその関係について

今回の発掘調査で11か所の住居跡と43か所の土壙が検出された。ほかに遺構に付属しない焼土が11か所検出されている。住居跡は北地区（Fラインの東西メインベルトで便宜的に北地区，南地区に分ける）の尾根上に2か所，尾根から南および南東に傾斜する緩斜面上に7か所，また南地区の同様の地形，西側緩斜面上に2か所検出された。土壙は尾根と尾根の間，標高19.50m～20.50mの緩斜面上に孤状に点在している。とくに南地区の東側に多く検出された。焼土は南地区の中央部，ほぼ平坦なところで検出された。

これらの遺構はどのような関係をもっているのだろうか。住居跡と土壙の構築時期は？　土壙の性格は？　生活空間での位置関係は？　以下掘り込み面，切り合い関係，出土遺物，覆土の堆積状況を検討し，各遺構の構築時期，性格などから各遺構間の関係を考えていくことにする。

(1)　住居跡

—掘り込み面，切り合い関係について—

遺構の検出にあたっては，57年度の調査結果を踏まえ，淡灰褐色火山灰除去後のくぼみを一つの目安として調査を進めた。くぼみの見られたところはトレンチ調査によって，掘り込み面，切り合い関係を確認することに努めた。その結果H—21，23，24，25，26，27の6か所を検出することができた。セクションベルトの断面観察により，H—21，24，26は暗褐色土Ⅱ層下層上面から掘り込まれていることが判明した。しかしながらH—23，27は包含層と覆土の境が不明瞭で，暗褐色土Ⅱ層下層上面の上方より掘り込まれていることは判明したけれども，明確な掘り込み面を確認することができなかった。後述するように土壙との関係で考えると，暗褐色土Ⅱ層上層上面に掘り込み面がある可能性が強い。H—22，28，30，31は上層のほとんどが道路敷時に削平されていたこと，冠水地区にあったことなどのため，掘り込み面を確認することができなかった。

重複していた住居跡はH—23，24，25，26である。先後関係を掘り込み面で確認できたものはH—23，24だけであったが，断面観察によりH—26→25→24→23という構築順序を確認することができた。H—22と28は，H—22の北側とH—28の南側の小ピットがきわめて接近していることから重複しているものと思われるが，その先後関係は明らかでない。またH—27と29では，H—29の石組炉が埋まった後にH—27の石組炉がつくられていることから，H—29→27という構築順序が明らかである。またH—22には石組炉跡が3か所検出されたけれども，これらが同時期に使用されたものか，あるいは先後関係があるのかは明らかでない。

—出土土器について—

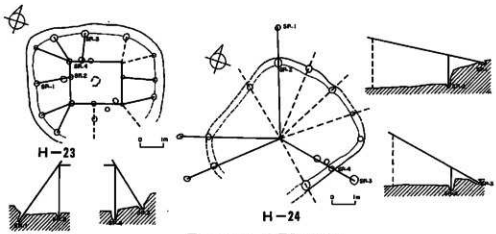
ここでは確実に床面上から出土した土器と石組炉内焼土から出土した土器に限定して取り上げることとする。H—21，22，23，27，30では床面上より土器が出土し，H—26は石組炉内焼土より土器が出土している。またH—24では床面上に堆積していた焼土内より土器が出土して

いる。それぞれの時期を見ると，H—21はⅢ群b－3類，H—22はⅣ群a類，H—23はⅣ群a類，H—24はⅢ群b－3類，H—26はⅢ群b－3類，H—27はⅣ群a類，H—30はⅣ群a類にそれぞれ相当する土器である。以上の住居跡内出土土器によって構築時期を決定するのは多少無理があるかも知れないが，その住居が使用されていた一時期を示しているといえるだろう。

—内部構造について—

ここでは石組炉跡と柱穴状ピットを取り上げる。石組炉跡が検出されたのはH—22，23，26，27，29，30の6か所である。H—22，23，27，30の石組炉は掘り込みはなく，炉石に小さな軽石や河原石を用い，つくりも粗雑である。これにくらべてH—26，29の石組炉は，浅いけれども掘り込みをもち，炉石には石皿や大きな礫を用い，ていねいにつくられている。

柱穴状ピットを見ると，二つの異った検出状況を指摘することができる。一つは，壁ぎわに，内側に傾くピットがめぐり，さらに住居跡の中央部には石組炉跡を囲むように，垂直に掘られたピットが長方形状に並ぶものである。もう一つは，壁ぎわに垂直に掘られたピットがめぐり，さらに住居の外側で壁より1.0～1.2mのところに上部が住居跡に大きく傾くピットがあるものである。前者に属するのはH—23，30　後者に属するのはH—24，26，31である。以上のような



図Ⅵ—2—1　住居復原模式図

な検出状況を顕著に示しているH—23，24を見てみると，図Ⅵ—2—1のような柱の構造を推察することができる。

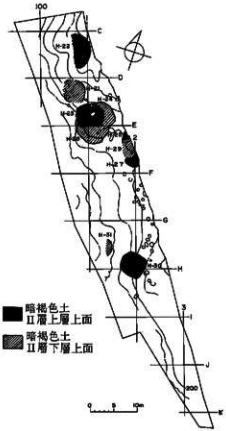
住居跡についてはおおむね次のような構築時期を考えることができるだろう。

暗褐色土Ⅱ層下層上面を掘り込み面とし，Ⅲ群b－3類の土器を伴出し，また内部構造に類似性をもつH—21，24，25，26，29，31は縄文時代中期後葉のものと考えられる。そして暗褐色土Ⅱ層上層上面を掘り込み面とし，Ⅳ群a類の土器を伴出するH—22，23，27，30は縄文時代後期前葉のものと推定される。前者についてはH—26→25→24という構築順序が見られる。さらにH—23と30は石組炉跡，柱穴状ピットの検出状況，平面形などの類似性から見て同時期と考えられ，また同様にH—22と27も同時期と推定される。

(2) 土壙

—掘り込み面，切り合い関係について—

検出された43か所の土壙はすべて地山を掘り込んでつくられている。このうち掘り込み面を確認できたものは15か所である。P—45，46，86は住居跡の床面下より検出され，P—51，53，54，84は同じく石組炉跡の下から検出された。またP—50，57，63，65，69，73，78，82はそれぞれのセクションベルトの断面観察によって確認された。P—45，46はH—25の床面下より検出され，H—26と同時期の可能性がある。P—86はH—29の床面下より検出されている。P—51，53，84の上にあった石組炉の石は動かされた痕跡がないことからP—51はH—23より古く（H—24と同時期の可能性がある），P—84はH—29より古いと考えられる。ただP—53，54については，H—22より古いと即断することはできない。H—22には石組炉跡が3か所あること，後述するように，P—53と54の覆土はほかの土壙のものと異質であることなどから，さらに検討の余地が残る。



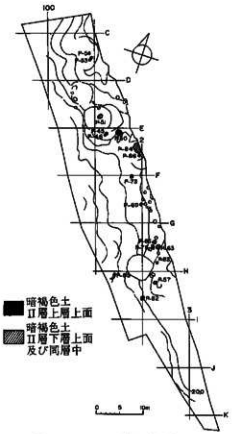
図VI—2—2　住居跡の新旧関係

セクションベルトの断面観察によると，掘り込み面には次の三通りあることを確認した。暗褐色土II層上層上面から掘り込まれているP—50，暗褐色土II層下層上面から掘り込まれているP—57，78，82　暗褐色土II層下層中から掘り込まれているものと思われるP—63，65，69，73である。

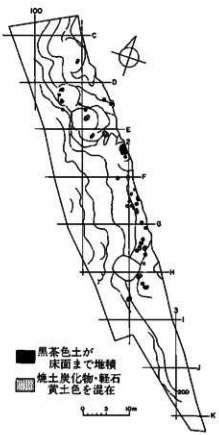
次に先後関係を確認できたのはP—45→46，P—54→53，P—61→58の6か所である。ほかにP—50がH—25を切っているのが確認された。P—45，46，53，54，58，61については各遺構のところで説明されているように，切り合い関係にあるのか，あるいは一遺構として把えるべきなのか判断することができない。

—遺物の出土状況と覆土について—

土壙内の遺物の出土状況を見ると，①礫・軽石が混在しているもの　②土器・石器などを含むもの　③遺物をまったく含まないもの，の三つに大別することができる。また覆土の堆積状況を見ると　④黒茶色土が床面まで堆積しているもの　⑤黄色土，炭化物，軽石などが混入し，人為的に埋め戻された状態を示しているもの，の二つに分けることができる。①では礫が一個置かれた状態で検出されたP—67，礫と軽石が数個混在し，その一部あるいはほとん



図VI－2－3　土壙の新旧関係



図VI－2－4　土壙の覆土状態

どが床面に接しているP－50, 79, 81, 82　とのちがいがある。　②には土壙の底に土器の一部が内面を上にした状態で出土したP－83と，規模，平面形ともほかの土壙にくらべて大きく，多量の土器片，礫，軽石が混在しているP－84と，また底面に完型土器が横倒しとなり，覆土に礫，軽石があったと思われるP－85　とがある。P－83の土器片，P－85の土器はIII群b－3類に相当するものである。これらの土壙からは人骨，ベンガラなどは検出されていないが，土壙墓の可能性があると考えられる。P－84の遺物の出土状態は一時的に入れられた様相を示しており，ほかの土壙の遺物出土状態とは異っている。

次に④について見ると，P－38, 39, 40, 44, 47, 48, 49, 52, 55, 56, 64, 66, 70, 71, 76, 80, 84が対応している。このうちP－48からは土製品が出土している。P－84は前述のようにほかの土壙とくらべて異質なものである。㊀について見ると　P－45, 46, 50, 51, 53, 54, 57, 58, 61, 63, 65, 67, 69, 73, 74, 75, 77, 78, 81, 82, 86がこれに対応している。このうちP－45, 46, 51, 53, 54は焼土，炭化物を多量に含み，軽石が多く，覆土全体が堅いことなどほかの土壙とは様相を異にしている。これらから判断するとP－51はH－24, P－53,

54はH－22，P－45，46はH－25にそれぞれともなう遺構と推定される。また礫・軽石を混在するP－50，67，81，82は㊀に対応している。また㊀のなかで炭化物の混入状態にわずかにちがいが見られる。即ち，炭化物が全体的に混入しているもの（P－53，54，84），覆土の上層に混入しているもの（P－50，58，73，74，77，86），覆土の下層に混入しているもの（P－46，57，69）とがある。

以上から土壙がつくられた時期は暗褐色土Ⅱ層上層上面，暗褐色土Ⅱ層下層上面，そして暗褐色土Ⅱ層下層中の三時期が考えられる。ただし暗褐色土Ⅱ層下層中はⅢ群b－3類に相当する土器を出土しているので暗褐色土Ⅱ層下層上面と時間的な差はそれ程ないものと思われる。

土壙の性格を見ると土壙墓と思われるもの（P－83，85），遺物の投棄場所と思われるもの（P－84），そして住居にともなうと思われるもの（P－45，46，51，53，54）に大別することができる。また㊀に相当する土壙は土壙墓と断定できる具体的な根拠はないが，覆土の堆積状態，掘り方などから見ると，特に礫・軽石を混在するものは土壙墓の可能性があるものと思われる。また㋑に相当する土壙はどのような目的で掘られ，用いられたのかを判断することはできない。

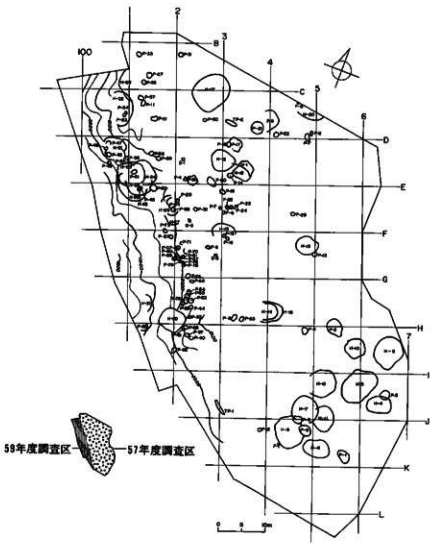
(3) まとめ

住居跡と土壙について，いくつかの観点から検討してきた。構築時期を見ると，住居跡では二時期が確認され，土壙では三時期が確認されたが，前述のようにこのうち二時期はごく接近したものである。暗褐色土Ⅱ層上層上面（同層中も含む）はⅢ群b－3類の土器をともなう時期でH－21，24，25，26，29，31，P－45，46，51，57，63，65，69，73，76，82，83，84，86が対応する。暗褐色土Ⅱ層上層上面はⅣ群a類の土器をともなう時期で，H－22，23，27，30，P－50，53，54が対応する。そしてこれらの二時期の中でH－26→25→24という順序で住居が構築されたこと，またH－22と27，H－23と30はほぼ同時期につくられたものであることが確認された。

住居跡と土壙の位置関係を見ると，今回の調査区での特徴的な現象と言えるほどのものを把握することはできなかった。ただ住居跡については北と南の尾根の緩斜面上に位置し，おおむね低いところから高いところへという移動を読みとることができる。土壙は住居跡にはさまれた緩斜面に，しかも重なり合うことなく集中してつくられている。また覆土の堆積状態で分類した㋑に対応する土壙は，ほぼ北地区のより高いところにあり，㊀に対応する土壙はほぼ南地区に集中している。

今回の調査区は千歳5遺跡の一部分であり，検出された43か所の土壙のうち構築時期と性格を推察できたのは16か所で，ひとつの土壙でこの双方を把握できたのは6か所にすぎなかった。したがって住居跡と土壙の位置関係などを今回の調査区のみで考えることには無理があろう。ここでは確定しえた事実関係を指摘し，若干の推察にとどめることとした。千歳5遺跡全体で具体的・詳細な比較検討がなされなければならないだろうが，ただ位置関係を概観すると，住居跡は北と南の尾根上およびその付近に集中し，土壙は尾根にはさまれた，とくに標高19.50m～22.00mの斜面上に集中していることを指摘することができる。

今後，千歳５遺跡と周辺の遺跡との具体的な検討を踏まえ，千歳５遺跡での遺構の構築時期，土壙の性格，各遺構間の関連性などが検討されなければならないだろう。（和泉田　毅）



図Ⅵ－２－５　57年・59年度遺構位置図

3．縄文時代中期末葉から後期初頭の土器の編年について

第Ⅴ章で述べたように，当遺跡からは縄文時代早期から後期にいたる多様な土器が約40,000点出土しているが，このなかで大部分を占めるのは，中期末葉から後期初頭にかけての資料である。

当遺跡のある胆振地方は，広い意味で道南，すなわち北海道の南部に含めることができるが，現在，北海道の南部～中央部における，中期末葉から後期初頭の土器の編年については，次の三つを代表的な見解としてあげることができる。

①高橋正勝氏に代表される編年（高橋正勝　1981）

余市式土器群の変遷を伊達山式[注1]→静狩式・入江Ⅱ類→煉瓦台式→ノダップⅡ式という順序でとらえるもの。

②大沼忠春氏らの編年（大沼忠春　1981）

	道　南	道　央
中期	ノダップⅡ式	(+) 北筒式[注2]
	煉瓦台式・静狩式	(+)
後期	天　祐　寺　式	余市式

③大島直行・瀬川拓郎両氏の編年（大島直行・瀬川拓郎編　1982）

短刻線文土器群，余市式土器群[注3]，北筒式土器群の３種が存在し，これらのうち，短刻線文土器群は大木系土器に，また，余市式土器群はトコロ６類系土器に，それぞれ類縁・影響関係をもつとするもの。

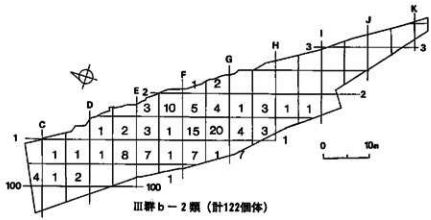
①と②にみられる差異の一つは，余市式をいくつかの型式から構成される型式群とみるか，否かということである。また，ノダップⅡ式，煉瓦台式，静狩式などという型式名の意味する内容が研究者によって異なっている点も注意すべきだろう[注4]。なお，最近，鷹野光行氏や宮夫靖夫氏によっても高橋氏の見解を支持する論考が発表されている（鷹野光行　1984，佐藤一夫・宮夫靖夫編　1984）が，前記の型式名によって示された内容はそれぞれ独自のものである。

一方，③は，従来の諸型式では型式内容の吟味に不充分な点があることを指摘し，製作手法・器形・器種構成に着目して分類を行っている。そして，その結果，短刻線文土器群と余市式土器群を異系統としているが，この考え方も各型式の間に時期差を想定する①，②とは大きく異っているといえよう。

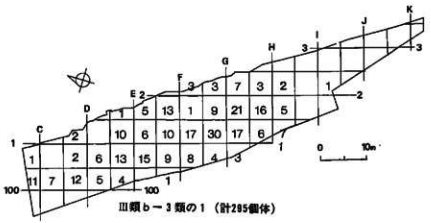
このように見解がわかれた原因のひとつには，各型式の層位的上下関係に関する資料の蓄積が不足している点をあげることができる。

今回の調査にあたっては，以上の状況をふまえて中期末葉から後期初頭にかけての編年を再検討するための資料を得ることを一つの課題とした。

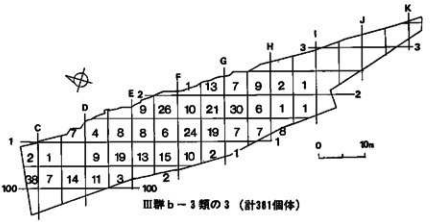
前述したように，登別市千歳６遺跡の調査をもとになされた大島・瀬川両氏の分類は，製作手法・器形・器種構成に着目しているが，これは，器形・文様要素の組み合わせによって行わ



Ⅲ群ｂ－２類（計122個体）

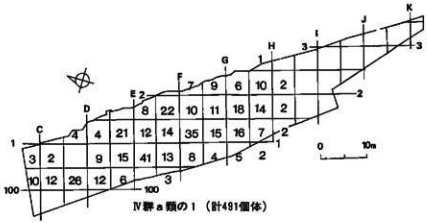


Ⅲ類ｂ－３類の１（計285個体）

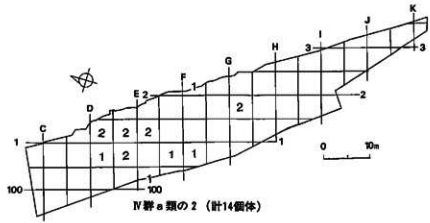


Ⅲ群ｂ－３類の３（計381個体）

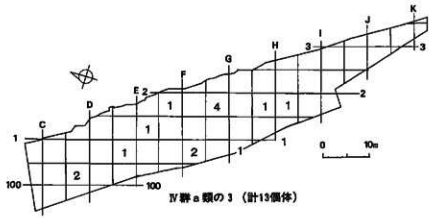
図Ⅵ－３－１　土器の分布図(1)



Ⅳ群ａ類の１（計491個体）



Ⅳ群ａ類の２（計14個体）



Ⅳ群ａ類の３（計13個体）

図Ⅵ－３－２　土器の分布図(2)

れていたこの時期の分類に新たな視点を導入したものとして評価することができると思われる。

また，当遺跡と千歳6遺跡は距離にして1km足らずであり，出土した土器も類似したものが多いことから，本報告書ではこの考えにしたがって土器の分類を行い，当センターの分類基準のうち，Ⅲ群b－3類とⅣ群a類を細分した。

対照表

Ⅲ群b－3類の1：トコロ6類に相当するもの

Ⅲ群b－3類の2：大木系の土器

Ⅲ群b－3類の3：函館市西股遺跡の第Ⅱ文化層，山越郡長万部静狩遺跡，函館市煉瓦台遺跡，登別市千歳6遺跡などから出土し，それぞれノダップⅡ式，静狩式，煉瓦台式，短刻線文土器群(Ⅲ2a群土器)などと称されているものに類似した土器

Ⅳ群a類の1：余市式土器に属するもの

Ⅳ群a類の2：虻田郡虻田町入江貝塚出土のⅢ群Ⅱa・Ⅱb土器の一部，上磯郡知内町涌元遺跡出土の土器，茅部郡森町鳥崎遺跡出土の第4群・第5群土器，爾志郡乙部町元和遺跡群出土のF群土器に類似したもの

Ⅳ群a類の3：トリサキ式土器～大津式土器に相当するもの

当遺跡から出土したⅣ群a類の1は，器面の凹凸や貼付帯の形状などⅢ群b－3類の3に比べて成形・調整が一般に粗雑であるが，後者の中にもP－84出土の深鉢（図Ⅵ－3－3－1）など粗雑なものが存在し，両者の差異はそれほどきわだったものとしてとらえることができなかった。

Ⅲ群b－3類の3の縄文は，原体を横方向に回転したものが多数を占めているが，縦方向に回転したものもあった。一方，Ⅳ群a類の1では，横方向の回転によるものと縦方向の回転によるものがともにみとめられた。また，貼付帯上に縄文を施文する場合，Ⅲ群b－3類の3では粘土紐を貼り付けてから行っているが，Ⅳ群a類の1では一般に地文の縄文を施してから貼り付けを行い，貼付帯上に地文とは別に縄文を施している。

器形については，全体像のわかるものが少ないが，どちらも胴部が直線的に立ちあがるもの，いったん屈曲後，外反する口縁に続くもの，胴部にふくらみをもつものがある。

Ⅲ群b－3類の3にはみられるが，Ⅳ群a類の1にはみられない文様要素には，短刻線文と縄線文がある。ただし，縄線文に関しては，Ⅳ群a類の2の編年的な位置づけともからんで問題があるといえよう[注5]。

反対に，Ⅳ群a類の1にあってⅢ群b－3類の3にない文様要素には，縦方向の貼付帯があげられる。

千歳6遺跡では，短刻線文土器群と余市式土器群をそれぞれ異系統のものととらえているが，後者の資料数が前者のそれに比べて極端に少ない点は注意しなければならない[注6]。当遺跡の資料からみれば，Ⅳ群a類の1の製作技法は，Ⅲ群b－3類の3の製作技法を簡略化したものと考え

ることも可能なのではないだろうか。

図Ⅵ－３－１～２は，縄文時代中期中葉から後期前葉にかけての土器の平面的分布状況を口縁部破片によって識別した個体数でグリッドごとに表わしたものである。

おおまかな傾向としては，調査区域の中央部に分布が濃く，南北両端は包含層そのものが削平されるなどして薄いこともあって出土数が少ない点を指適することができる。これは，谷底の平坦地という，遺跡の立地条件によるものであると思われる。

図でみると，Ⅲ群ｂ－３類の１・３とⅣ群ａ類の１はほぼ同じ分布を示し，住居跡の存在するグリッドから多く出土している。Ⅲ群ｂ－２類の土器の分布もこれらに似ているが，Ｆ－１－ａ，ｂに集中がみとめられる点が異なっている。Ⅳ群ａ類の２は，Ｄ－100からＤ－１にかけてややまとまりがみられる。Ⅳ群ａ類の３は，発掘区中に散在している。

発掘面積が少ないこともあって，土器の分布状況からは，Ⅲ群ｂ－３類の１～３，Ⅳ群ａ類の１の相互関係をつかむことができなかったが，遺構から検出された資料についてはどうだろうか。Ｈ－27，Ｈ－29，Ｐ－84から出土した土器について，他の遺跡の資料と比較しながら次に述べてみたい（図Ⅵ－３－３参照）。

遺構の項で述べたように，Ｈ－27，Ｈ－29，Ｐ－84はほぼ同じ場所に構築され，その新旧関係は，古い方から順にＰ－84，Ｈ－29，Ｈ－27となっている。

Ｐ－84の覆土から出土した土器にはⅢ群ｂ－２類，Ⅲ群ｂ－３類の３，Ⅳ群ａ類の１がある。Ｈ－29からは土器が検出されていない。Ｈ－27の石組炉周辺からは，Ⅳ群ａ類の１の深鉢が検出されている。この深鉢は貼付帯の間に無文部を有するが，Ｐ－84から検出されたⅣ群ａ類の１の中にはこのようなものはみられない。また，Ｈ－27とＰ－84は掘りこみ面が異なっている。これらのことから，少なくともⅣ群ａ類の１のうち貼付帯の間に無文帯を有するもの（図Ⅵ－３－３－３）は，Ｐ－84出土の遺物（図Ⅵ－３－３－１，２など）よりも時期が新しいということになろう。

では，本報告書でⅢ群ｂ－３類の１～３としたものの関係はどのように考えられるだろうか。

Ｐ－84から出土した土器のうち，図Ⅵ－３－３－１に類似した土器は，山越郡八雲町栄浜１遺跡Ａ地点の17号住居址床面からも検出されている（八雲町教育委員会編　1983）（図Ⅵ－３－３－４）。問住居址からはこのほかに数点の土器が出土しているが，その中で無文部と縄文の間に縄線文が施された大木系の土器（図Ⅵ－３－３－６）と類似したもの（図Ⅵ－３－３－10）は，登別市千歳４遺跡５号住居跡よりトコロ６類相当の土器２点（図Ⅵ－３－３－9，11）とほぼ同じレベルで検出されている（財団法人　北海道埋蔵文化財センター編　1981）のである。

当遺跡・栄浜１遺跡・千歳４遺跡の資料を比較した場合，図Ⅵ－３－３－６，10を媒介として，１・４と９・11も併行関係にあることが考えられるのではないだろうか。

ところで，千歳４遺跡５号住居跡では，前述した土器３点より約10cm高いところから静狩式土器（図Ⅵ－３－３－12）が検出され，報告者は焼土が２層に分かれる点に一考を有するとしながらも，以上の土器四点を共伴関係にあるものととらえている。鹿野光行氏はこのとらえ方

を批判して，むしろ，トコロ6類相当の土器・最花式土器と静狩式土器の間に新旧関係があることを示すとしている（鷹野光行　1984年）。確かにこれら4点の土器を共伴ととらえるのはやや無理があろう。しかし，1・4と12は同じ型式のものと考えることができるので，[注9] 鷹野氏のように12と9～11の間に新旧関係を指摘することには問題があるのではなかろうか。

当遺跡内の切り合い関係にある遺構のうち，H－27，H－29，P－84の出土遺物について他の遺跡から得られた資料と比較しながら考察を行ったところ，Ⅱ群b－3類の1～3は併行関係にある可能性が少なくないという結果が得られた。これは，冒頭にあげた中期末葉から後期初頭の編年に関する三つの見解のうち，大沼忠春氏らの説に近いものであるが，大沼氏のいうノダップⅡ式と図版Ⅴ－1－8に示したⅡ群b－3類の3の一部との関係については，資料不足もあってはっきりした関係をつかむことはできなかった。

Ⅱ群b－3類とⅣ群a類の系譜関係については，Ⅳ群a類の1の製作技法がⅡ群b－3類の3のそれを簡略化したとも考えられるものの，Ⅱ群b－3類の1との関係，Ⅳ群a類の2の位置づけなどを含めて，さらに資料を蓄積することが望まれる。（中田裕香）

註

1　高橋氏は，1976年に発表した縄文文化前・中期の編年表の中で，道南の見晴町式と道央の伊達山式を併行関係においている（高橋正勝・小笠原忠久　1976）が，1981年の論考ではこれらの関係についてはっきり述べられていない。

2　大沼氏は，伊達市南稀府5遺跡の報告書では，「ほぼノダップⅡ式に相当する位置に北筒式の一群が存在する」ものと考えている。ただし，柏木川式とノダップⅡ式の区別は必ずしも明確ではないようである（北海道文化財保護協会　1983）。

3　報文の一部では「余市式土器」という用語も使われているが，同者はほぼ同じ内容を示すと思われる。

4　森田知忠氏は大沼氏の編年を引用した際に「レンガ台式」と記述している（森田知忠　1981）が，誤解を生む記述の仕方であろう。

5　Ⅳ群a類の2は，浦元式（千代肇　1972）との関係も考慮すべきだろう。

6　千歳6遺跡の報告者は，余市式土器群を伴う明確な居住遺構が検出されていないことから，出土した余市式土器群が本来のセットのうちですべての器種を揃えていたかどうか疑問が残るとしている（大島直行・瀬川拓郎編　1982）。

7　栄浜1遺跡の報告書の本文では，図Ⅶ－3－3－7，8の土器は床面直上から出土したと記述されているが，同書第31図の説明では，図Ⅶ－3－4～8が床面から出土したと書かれている（八雲町教育委員会編　1983）。

8　報告者では最花式に近似するものとされている（財団法人　北海道埋蔵文化財センター編　1981）。

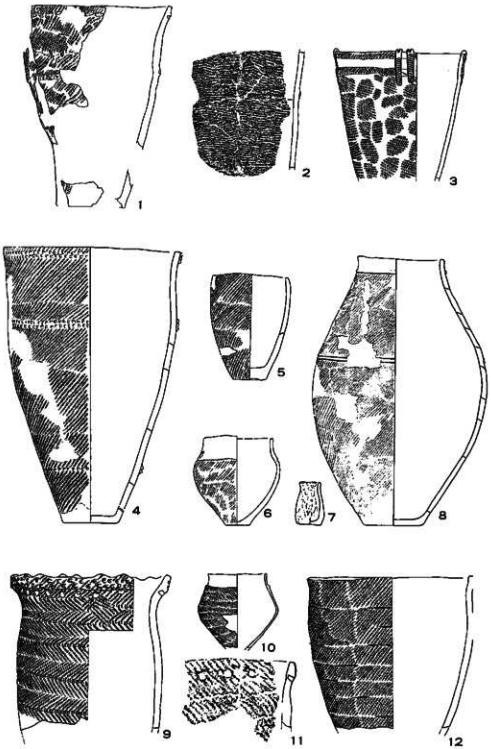
9　前述した鷹野氏の編年の中で，煉瓦台式と静狩式は同じ時期（大谷地第4期）のものとされている（鷹野光行　1984）。

参考文献

大島直行・瀬川拓郎編『札内台地の縄文時代集落址　北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書』（1982年）

大沼忠春　「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」（『考古学雑誌』第66巻第4号，1981年）

財団法人　北海道埋蔵文化財センター編『社台１遺跡・虎杖浜４遺跡・千歳４遺跡・富岸遺跡――北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財調査報告書――』（『財北海道埋蔵文化財センター調査報告』第１集，1981年）
佐藤一夫・宮夫靖夫編　『タプコプ――北海道苫小牧市植苗地区国道36号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――』（1984年）
鷹野光行　「縄文時代後半期」（『北海道考古学』第20輯，1984年）
高橋正勝・小笠原忠久　「縄文時代前期・中期」（『北海道史研究』第10号，1976年）
高橋正勝　「北海道南部の土器」（加藤晋平・小林達雄・藤本強編　『縄文文化の研究』第４巻　縄文土器Ⅱ，1981年）
千代肇　『涌元遺跡』（1972年）
北海道文化財保護協会　『南稱府５遺跡――北海道立伊達緑丘高等学校建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書――』（1983年）
森田知忠　「北海道」（野口義麿編　『縄文土器大成』３――後期，1981年）
八雲町教育委員会編　『栄浜――八雲町栄浜１遺跡発掘調査報告書――』（1983年）



図Ⅵ－３－３　千歳５遺跡の土器と栄浜１遺跡・千歳４遺跡の土器
（１～３　千歳５遺跡，４～８　栄浜１遺跡，９～12　千歳４遺跡）

4．石器等について

今回の調査で出土した石器等のうちで図示したもの（Ⅴ－2－6～26）について，前回調査の資料も参考にしながら，時期ごとの石器群の把握という観点から，その特色について述べる。

縄文時代早期の貝殻文土器にともなう石器群

確証を欠くが，横断面が略三角形のすり石（197～198）は，この時期のものとみなされる。

縄文時代中期中葉の円筒土器上層式土器にともなう石器群

確証を欠くが，北海道式石冠と呼ばれるすり石（200）は，この時期のものとみなされる。

縄文時代中期後葉から後期前葉にわたる時期の石器群

図示した石器等のうちの大多数は，この時期のものとみなされる。出土する土器は，より北方と関連するもの（北筒式土器）と，より南方と関連するもの（煉瓦台式）とがあって，石器も土器に類似した対応関係があるものと推定しうるが，明確な区分はできなかった。石鏃は，茎が明瞭でないもの（5，8など）と明瞭な茎があるもの（14，18，20など）の二種がある。石槍またはナイフにも，茎があるもの（30，31など）と，明瞭な茎がないもの（60，63など）の二種がある。

石鏃は，棒状のもの（67，70など）と，つまみ部があるもの（80，81など）とがある。つまみ付きナイフは，縦長のもの（91，92など）と，横長のもの（98～101など）とがある。スクレイパーは，石べらと称されるもの（102，103など），まる形のもの（105），エンド・スクレイパー（106～110など）などとともに，Ⅲ B9 に分類したさまざまの形態のものがある。

石斧の素材となっているものには緑色泥岩と黒色片岩の二種がある。形態・大きさ・刃部形態などによって，いくつかの細分は可能であるけれども，有意な結果はえられていない。石のみは，黒色片岩を素材としている（175～177）。176は断面がふ厚く，細長い特徴的なもので，これに類似したものが，前回の調査でも出土している（図4－28の223）。

たたき石は，棒状のもの（179，180など），扁平礫の周辺をたたくもの（186，187など），扁平礫の腹背をたたくもの（188，189）などがあるが，どれも片手で握れるものが多い。すり石は，円礫状のもの（201，202）である。

台石・石皿は，登別溶結凝灰岩を素材にした多孔質のものが多い。225・236のように全面的に整形してあるものは，この時期の特色ある石器といえる。同様のものが登別市川上B遺跡C地区でも多数出土している。

石錐は，砂岩製で，片手で握れる小さなものである（203）。

砥石は，板状のもの（207・208など），角柱状のもの（210・211など）などである。角柱状のものは「四面砥石（ようめんといし）」とも呼ばれ，千歳4遺跡では北筒式土器に伴ない（5号住居跡），虎杖浜3遺

跡では，北筒式土器と余市式土器のみられるB地区から出土している。これと同類とみなされる砥石が千歳6遺跡では煉瓦台式土器の時期の住居跡の埋土から余市式土器の破片などと一緒に出土している（XL25竪穴）。このほかに余市式土器に伴なうものとされた例には，大麻1遺跡（江別市），西野幌3遺跡（江別市）があり，北筒式土器に伴なうとされた例は，西野幌1遺跡（江別市）がある。

縄文時代後期中葉の船泊上層式土器，手稲式土器にともなう石器群

石鏃は，明瞭な茎のある特徴的な形のものである（10～13）。つまみ付きナイフは，つまみ部が小さなもの（84・88など）がこの時期の可能性がある。

縄文時代後期後葉の堂林式土器にともなう石器群

石鏃（1）とつまみ付きナイフ（97）とが，堂林式土器と一緒の焼土から出土している。三角形の石鏃で，ゆるいえぐりのあるものは，長沼町の堂林遺跡でも出土しており，この時期の特色ある石器といえる（1・2）。

土製品

三角形土製品（263～265）と焼成粘土塊（278）とでも称すべきものの二種がある。三角形土製品は前回の調査で5点ほど出土しており，あわせて8点になる。すべて土器破片を，ほぼ正三角形状に整形したものである。前回は，5点のうち4点がC－4－b地区から，今回は3点のうち2点がE－100－d－二区から出土している。時期の推定は，縄文時代中期後葉から後期中葉という広い幅をもってしか，なしえない。類例としては南茅部町木直C遺跡のHP－1出土品，八雲町栄浜1遺跡の包含層出土品とがある。詳細な説明は記してないが木直C遺跡のものの時期は，縄文時代中期後葉と理解される。かって昭和8年に亀田郡亀尾村目名出土品として紹介された三角形土製品は，その三角形の頂点にふくらみが顕著であるが，ここの8点（木直C遺跡のもの・栄浜1遺跡のもの）にはふくらみがまったく見られないことから考えると，まったく別種の土製品の同称にすぎないものであろう。

石製品

垂飾（257～262），石刀（274），青竜刀形石器（275・276），オロシガネ状石器（277），その他（266～273）などがある。垂飾は前回の調査で12点ほど出土しており，あわせて18点になる。石刀（274）としたものは，包含層の最上部に相当する深さから出土しており，手稲式土器に伴なう可能性がある。

青竜刀形石器（275）は，G－1－d－ロ区から多くの破片になって出土したが，これらと接合する破片のひとつが住居跡H－25の床面から検出されていることから，時期は縄文時代中期後葉と推定される。淡黄褐色の珪藻質泥岩を素材としており，接合した本体はもとより，多数

の破片にも研磨の痕跡がよく残っている。表面は，黒ずんでいるところもあるが，全体に酸化鉄の付着が著しい。形態は，これまでに北海道内で報告され，野村崇氏が分類したもの（1984「青竜刀形石器と棍棒石器」）とは，わずかに異なるところがある。突起が想定される位置が失なわれているために，突起の有無はあきらかではないが，内反部分がうすくなり，外反部分が厚くなって，その外反に溝があるところから青竜刀形石器と認定された。軟質の素材で加工が比較的容易ということもあってか，外反部分の溝はするどい。そして，外反にそって幅1cm内外のところに明瞭な段差をもつ区画がみられる。このように外反にそう明瞭な区画をもつところに，本例の特徴を指摘できる。

前掲の野村崇氏や冨樫泰時氏（1983「青竜刀形石器」）の分布図をかりると，この千歳5遺跡の例は，太平洋岸では最北の青竜刀形石器ということになる（図Ⅵ－4－1）。

図Ⅵ－4－1　青竜刀形石器の出土地

オロシガネ状石器（277）は手稲式土器に伴なうものと考えられる。これについては，別項，「5．オロシガネ状石器について」で詳しく述べる。（西田　茂）

引用・参考文献

犀川会　1933　『北海道原始文化聚英』，『北海道原始文化要覧』

野村　崇ほか　1967　『長沼町幌内堂林遺跡調査報告』　長沼町教育委員会

財団法人　北海道埋蔵文化財センター　1980　『大麻1遺跡・西野幌1遺跡・西野幌3遺跡・東野幌1遺跡』

小笠原忠久ほか　1981　『木直C遺跡』　南茅部町教育委員会

財団法人　北海道埋蔵文化財センター　1981　『社台1遺跡・虎杖浜3遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』

瀬川拓郎ほか　1982　『札内台地の縄文時代集落址』　登別市教育委員会

財団法人　北海道埋蔵文化財センター　1983　『虎杖浜3遺跡』

三浦孝一ほか　1983　『栄浜―八雲町栄浜1遺跡発掘調査報告書―』　八雲町教育委員会

冨樫泰時　1983　「青竜刀形石器」　『縄文文化の研究，第7巻，道具と技術』所収
野村　崇　1984　「青竜刀形石器と棍棒石器」『河野広道博士没後二十年記念論文集』所収
市立函館博物館　1971　『函館市日吉遺跡発掘報告書』

5．オロシガネ状石器について

オロシガネ状石器（図Ⅴ-2-25-277）は，G-1-b-二区から出土している。多孔質の登別溶結凝灰岩を素材にした，たて11.5cm，よこ10cm，厚さ1.3cmほどの板状のものである。これと同じような石器の出土例は，表Ⅵ-5-1に示すとおりである。名称として，これまでに「石皿形石器」，「石皿様石製品」，「石皿様の石製品」，「皿形品」，「石製品」，「小型石皿」，「皿形石製品」，「オロシガネ状石製品」などが用いられている。これらの類例はオロシガネ状土製品とともに，図Ⅵ-4-1～4に集めてある。

オロシガネ状石器の素材は，角閃石輝石安山岩，輝石安山岩，安山岩，軽石，凝灰岩，登別溶結凝灰岩などで，多孔質の石材が使用されている。おおまかな形態は，楕円形状の板である。長さ10cmほどのものが多いが，大きいものでは20cmにちかいものもある（図Ⅵ-5-1-6）。厚さは，長さの10分の1ていどである。一面は，ほぼ平らかあるいはわずかにくぼんでおり，その裏面はわずかにふくらんでいる。

なかには，長径方向の片辺が，内側にえぐられているもの（図Ⅵ-5-1-6・9），幾分張り出しているもの（図Ⅵ-5-1-7・8，図Ⅵ-5-2-1），こぶ状の突起のついたもの（図Ⅵ-5-1-6，図Ⅵ-5-3-1）もある。手稲遺跡の例には，三か所の脚部がついたもの（図Ⅵ-5-1-2），周縁に溝がめぐるもの（図Ⅵ-5-1-3）もある。北広島団地第1遺跡のものには，一孔が穿たれている（図Ⅵ-5-1-5）。石材の硬軟によって，整形の状況は異なるところもあるのだろう。

伴出する土器は，縄文時代後期中葉の手稲式土器の場合が多い。

出土状態で注目されるのは，美々4遺跡の，焼土BF-70（図Ⅵ-5-2-1）と焼土BF-10（図Ⅵ-5-2-2）の例である。とくにBF-70の場合は，手稲式土器と一緒に出土しており，時期決定の有力な手がかりになっている。

図Ⅵ-5-3-5は，大正2年の「深川灌漑工事の際，地下二丈の処より掘出す。安山岩にて面は粗造なり。厚六分余。」「石皿」と紹介されているものである。宇田川洋氏の脚註は「形態的特徴からアイヌの火皿の一種と思われる」とある。検出の状況，伴出の土器等不明であり断言はできないが，「形態的特徴」からみて，オロシガネ状石器にふくめられよう。

このオロシガネ状石器を模して作ったと考えられる土製品の出土例は，表Ⅵ-5-2と図Ⅵ-5-2～4に示してある。

オロシガネ状土製品について，興味ある説明をおこなったのは大塚和義氏である。1967年，大塚氏は，東京都江戸川区郷土資料室に寄託してある余市町出土という土製品を紹介するなかで，「……携帯用のすり石であるかもしれない。そのばあい，狩猟の際に用いるブシ毒をすりつぶすものかもしれない。」と述べている。

土製品の祖形については，1969年に名取武光・松下亘両氏は『北海道原始文化聚英』の野幌出土例をもとに「この土製品の原形がこの石器と思われる」と述べている。そして大塚氏の説に対しては，次のような条件付き肯定論を展開している。「……この説は注目すべき新説である

が，磨りつぶすという機能と材質の点と，手稲遺跡出土のものには，使用痕がみられないことなどから，さらに検討すべきであろう。もっとも，この上で練るとか調合するというのであれば問題は別である。」

北海道埋蔵文化財センターが調査をおこなった江別市吉井の沢1遺跡の報告書では，オロシガネ状土製品について，次のように記している(1982年)。少々長くなるが，図Ⅵ-5-3の1～15の説明をかねて，全文を引いておく。「オロシガネ状のものは石製品と土製品があるが，系譜的には石製品の方が先行するのであろう。土製品の形態，文様などの変化は，はじめ2，4，5のように楕円形にふたつのとんがりがあり，石製品のざらついた表面を刺突孔によって模したかのようであり，つぎには8～12のように楕円形，円形で周辺にはふちどりがあらわれ，皿状の表面は，ひっかきの直線，曲線によってうめられている。そしておわりには，13のような土器の底部に類するものや，14のように片面に縄文のみられる土板状のものになってしまうのであろうか。」

吉井の沢1遺跡の調査とほぼ時を同じくして，千歳市末広遺跡の調査がおこなわれ，オロシガネ状石器が4点，オロシガネ状土製品が18点出土している（図Ⅵ-5-4）。これらは「焼土遺構」と呼ばれるところから検出されたものが多い。出土状況のもうひとつの特色として「……土製品は磨滅痕は認められない」にもかかわらず，小破片での出土例が多いことが指摘できる。オロシガネ状石器の完形品（図Ⅵ-5-4-1）は，両面ともに平らか，あるいはわずかにくぼんでいる。土製品は，吉井の沢1遺跡例について引用した説明のなかにおさまりきるものである。この末広遺跡の報告書で「小型の皿形土器」と記してある（図Ⅵ-5-4-11）のも，吉井の沢1遺跡（図Ⅵ-5-3-15）と同じようにオロシガネ状土製品にふくめられるであろう。

以上の説明によって，オロシガネ状土製品には，いくらかの変化形態はあったとしても，その祖形は，オロシガネ状石器であるといえる。

これまでに石器の名称は説明なしに使ってきたが，土製品との関連からすれば，本文で使ってきたオロシガネ状石器が適切と考えられる。

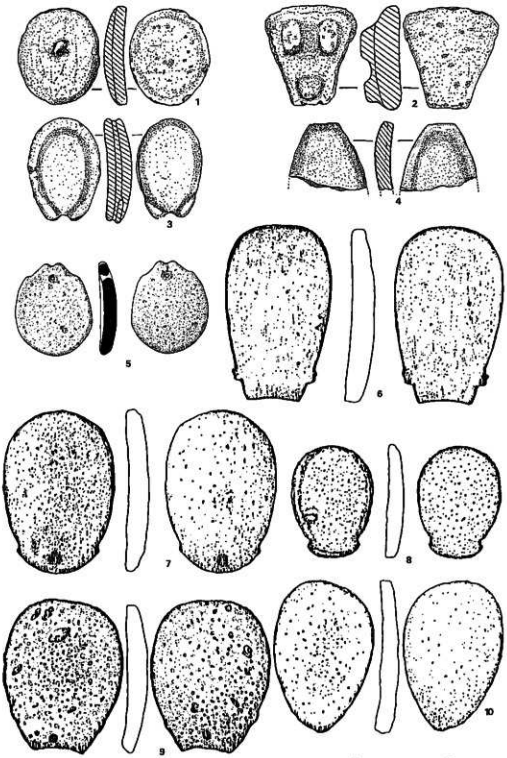
オロシガネ状石器の説明をおこなったもののひとつに，美沢1遺跡例での「……小型の石皿で，スルク・シュマ（スルク：毒，シュマ：石）といわれる，トリカブト毒を使う北見アイヌの土俗資料に類似する……」がある（1977，北海道教育委員会）。石器の使いかたに関しては，多孔質の素材を，手のひらにのるていどに加工してあるところからすると，オロシガネであった可能性は高い。

オロシガネ状石器は，川べりの低湿地での大規模な発掘調査によって，出土があいついでおり，石器と認識されてから，日はまだあさい。この石器が出土する遺跡の，地理的および時間的な分布状態が定まるなかで，用途についても理解が深まるのであろう。（西田　茂）

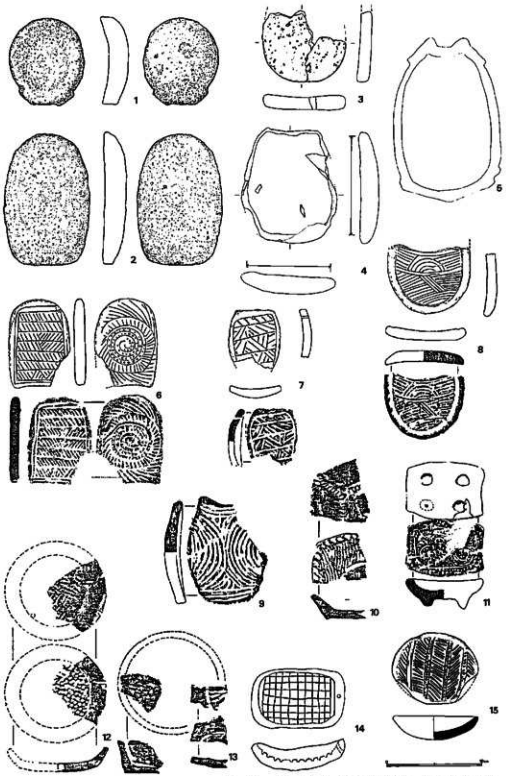
図Ⅵ－５－１　オロシガネ状石器・土製品の出土地

番号	遺跡名（所在地）	時期の推定（土器型式）	オロシガネ状石器　点数・素材など	オロシガネ状土製品・点数など	文献
1	手稲（札幌市）	縄文時代後期中葉　（手稲式）	4点　角閃石輝石安山岩、輝石安山岩　図Ⅵ－５－２	9点　図Ⅵ－５－３	1、12
2	北広島団地第1（広島町）	縄文時代後期中葉　（手稲式）	1点　安山岩　図Ⅵ－５－２		2
3	吉井の沢1（江別市）	縄文時代後期中葉　（手稲式）	1点　安山岩　図Ⅵ－５－４	14点　図Ⅵ－５－４	3
4	大麻24（江別市）	縄文時代	1点　安山岩　図Ⅵ－５－４		3
5	美沢1（苫小牧市）	縄文時代	10点　輝石、凝灰岩		4、5
6	美々4（千歳市）	縄文時代後期中葉　（手稲式）	28点　輝石、凝灰岩　図Ⅵ－５－２・３	4点　図Ⅵ－５－４	4,6,7
7	不明（江別市）	不明	1点	1点	8
8	不明（深川市納内）	不明	1点　安山岩　図Ⅵ－５－３		9
9	末広（千歳市）	縄文時代後期中葉（ネッケマ式）	4点　記述なし　図Ⅵ－５－５	18点　図Ⅵ－５－５	15
10	千歳5（登別市）	縄文時代中期～後期	1点　登別海綿凝灰岩　図Ⅵ－５－３		本書
11	ウレロッチ川左岸（長沼町）	縄文時代後期中葉　（手稲式）		1点　図Ⅵ－５－３	10、11
12	ママチ（千歳市）	縄文時代晩期よりも新しい？		1点　図Ⅵ－５－４	13
13	不明（余市町）	不明		1点　図Ⅵ－５－３	14、12

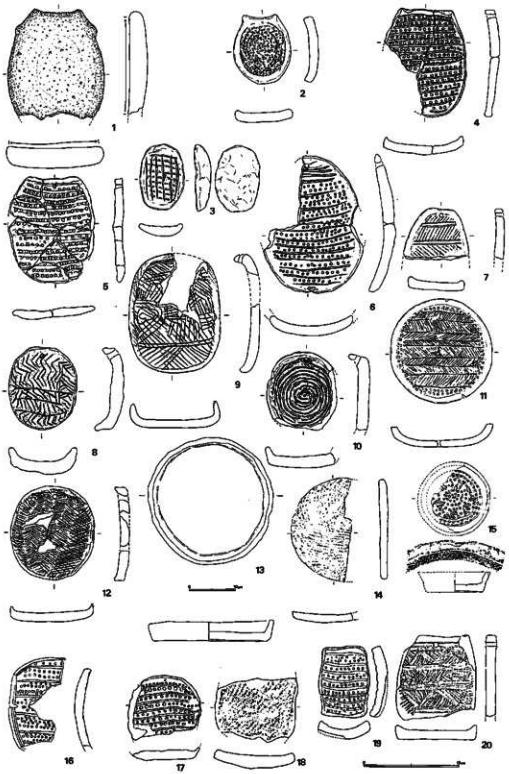
表Ⅵ－５－１　オロシガネ状石器・工製品の出土地名表



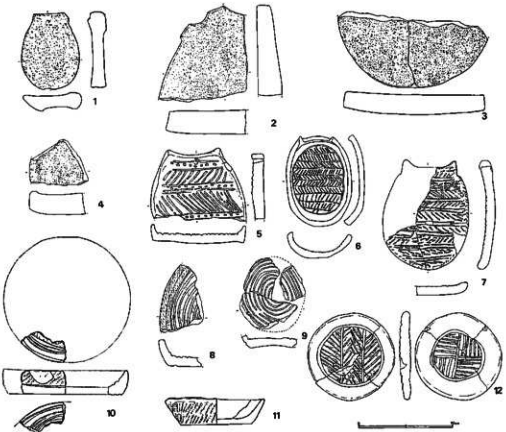
図Ⅵ－5－2　オロシガネ状石器（1～4：手稲遺跡　5：北広島団地1遺跡　6～10：美々4遺跡）



図Ⅵ－5－3　オロシガネ状石器・土製品（1・2：　奥々4遺跡　3：大麻24遺跡　4：千歳5遺跡　5：桜川市納内の遺跡　6～13：手稲遺跡　14：ウレロッチ川左岸遺跡　15：余市町）



図VI－5－4　オロシガネ状石器・土製品　1～15：吉井の沢1遺跡
16　：ママチ遺跡　17～20：美々4遺跡



図VI－5－5　末広遺跡のオロシガネ状石器・土製品

※　オロシガネ状石器，オロシガネ状土製品の例示は，それぞれの報告書から複写したものである。したがって，縮尺にいくらかのふぞろいはあるが，遺物の置きかたは，掲載図にならった。手稲遺跡の土製品には二種の図が報告されているのがあり，これらは両方の図を示した。

引用・参考文献

1．大場利夫・石川　徹　1956『手稲遺跡』　手稲町教育委員会

2．藤本英夫・高橋正勝　1971『北海道広島町の縄文時代後期の遺跡』　北海道文化財保護協会

3．財団法人　北海道埋蔵文化財センター　1982『吉井の沢の遺跡』

4．北海道教育委員会　1977『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』

5．北海道教育委員会　1979『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』

6．財団法人　北海道埋蔵文化財センター　1981『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』

7．財団法人　北海道埋蔵文化財センター　1984『美沢川流域の遺跡群Ⅶ』

8．厚川会　1933　『北海道原始文化聚英』『北海道原始文化要覧』

9．宇田川　洋（校註）1983『河野常吉ノート　考古篇2』北海道出版企画センター

10. 野村崇・斎藤徳太郎　1959「長沼町幌内出土の土製品」『黒曜石』 4
11. 野村崇　1977「長沼町幌内ウレロッチ川左岸遺跡」『石狩川中流域の先史遺跡』
12. 名取武光・松下　亘　1969「縄文後期文化　北海道」『新版　考古学講座3　先史文化』
13. 財団法人　北海道埋蔵文化財センター　1983『ママチ遺跡』
14. 大塚和義　1967「北海道余市町出土のオロシガネ状土製品」　『Field』 5
15. 大谷敏三・田村俊之　1982『末広遺跡における考古学的調査(下)』 千歳市教育委員会

千歳5遺跡の古植生について

北海道開拓記念館研究員　　山　田　悟　郎

1．試　料

ここで取り扱ったのは昭和59年に発掘調査が行なわれた千歳5遺跡担当者によって採取された15点の土壌試料である。

柱状に5点の試料が採取されたF—100—dの土壌断面では，最下部が縄文時代中期～後期の遺物包含層になっている黒色腐植土（試料No.5）で，上位には軽石質火山灰の二次堆積物が厚く堆積している。二次堆積物中には8枚の腐植土の薄層がレンズ状に堆積し，各薄層の間には6枚の火山灰質堆積物が挟在している。その内噴出源が確認されているのは試料No.2と3の間に挟在する火山灰で，北朝鮮の白頭山降下火山灰に対比が可能とされ，その噴出年代は11～12世紀とされている（町田他，1984）。

試料No.1～4は8枚の腐植土の薄層の内4枚から採取されたものである。

その他に，H—26住居址の炉内焼土（No.6～7），H—28住居址の炉内焼土（No.8～9），H—29住居址の炉内焼土(No.10)，H—1グリッドの西側の焼土(No.11)，Pit46覆土の下部(No.12～13)，同中部（No.14），同上部（No.15）の10点が遺構内から採取されている。尚，6～15の試料には小粒の軽石が多量に含まれていた。

2．試料処理

試料処理にあたってはNo.1～5については採取された全試料がそれぞれ20g程度であったので全試料を処理し，その他の試料については約300～500gをビーカーにとり次のように物理・化学処理を行ってグリセリンゼリーで封入し各3枚のプレパラートを作成した。

アルカリ処理（24時間）—水洗（3週間）—沈澱法による砂・礫・軽石の除去—混酸処理—水洗—アルカリ処理—水洗—比重分離—水洗—アセトリシス処理—水洗—HF処理の順に行なった。

検鏡にあたっては位相差装置を併用して通常400倍で行ない，必要によって1,000倍で行なった。

同定にあたっては樹木花粉が200個以上に達するまでに出現した花粉・胞子を無作為に同定し計数するように努めたが，花粉含有数が少なかったため各試料とも3枚のプレパラート全てを検鏡した。

そのうち樹木花粉総数が200個以上に達したのはNo.1～5の試料のみで，他の試料では200個を満たすものはなかった。

表示にあたっては，各試料での花粉・胞子の出現数を表に示すとともに，No.1～No.5の試料については花粉ダイヤグラフに表示した。

表示にあたっては，樹木花粉については樹木花粉総数を基数とした百分率で，草本花粉・胞子については総花粉・胞子数を基数とした百分率で表示した。また，樹木花粉・草本花粉・胞

子の出現比も末尾に表示した。

3．分析結果

15点の土壌試料から樹木花粉26属1科，草本花粉2属19科，胞子3科，形態分類胞子2種類を確認した。

その内訳および想定される母植物は次のとおりである。

樹木：*Abies*（モミ属：トドマツ），*Picea*（トウヒ属：エゾマツ・アカエゾマツ），*Pinus*（マツ属：ハイマツ），*Cryptomeria*（スギ属：スギ），*Salix*（ヤナギ属：バッコヤナギ・ネコヤナギ・オノエヤナギ他），*Juglans*（クルミ属：オニグルミ），*Alnus*（ハンノキ属：ハンノキ・ケヤマハンノキ），*Betula*（カバノキ属：シラカンバ・ダケカンバ・ウダイカンバ），*Carpinus*（クマシデ属：サワシバ），*Corylus*（ハシバミ属：ツノハシバミ），*Castanea*（クリ属：クリ），*Ostrya*（アサダ属：アサダ），*Fagus*（ブナ属：ブナ），*Quercus*（コナラ属：ミズナラ・コナラ），*Ulmus*（ニレ属：ハルニレ・オヒョウ），*Cercidiphyllum*（カツラ属：カツラ），*Magnolia*（モクレン属：コブシ・ホオノキ），*Hydrangea*（アジサイ属：ノリウツギ・ツルアジサイ他），*Sorbus*-*Prunus*（ナナカマド属ーサクラ属：ナナカマド・アズキナシ・オオヤマザクラ・シウリザクラ他），*Phellodendron*（キハダ属：キハダ），*Rhus*（ウルシ属：ヤマウルシ・ツタウルシ），*Acer*（カエデ属：イタヤカエデ・ハウチワカエデ他），*Aesculus*（トチノキ属：トチノキ），*Tilia*（シナノキ属：シナノキ・オオバボダイジュ），Araliaceae（ウコギ科：ハリギリ・コシアブラ・タラノキ），*Fraxinus*（トネコリ属：ヤチダモ・アオダモ），*Euonymus*（ニシキギ属：ツリバナ・オオツリバナ他）。

草本：Chloranthaceae（センリョウ科：ヒトリシズカ・ワタリシズカ），Polygonaceae（タデ科：オオイタドリ・ミゾソバ・ギシギシ他），Chenopodiaceae（アカザ科：アカザ・シロザ），Ranunculaceae（キンポウゲ科：カラマツソウ・ニリンソウ他），Cruciferae（アブラナ科：タネツケバナ・ナズナ他），Saxifragaceae（ユキノシタ科：ネコノメソウ・エゾネコノメソウ他），Rosaceae（バラ科：ダイコンソウ・オオダイコンソウ・ワレモコウ・オニシモツケ他），Leguminosae（マメ科：クサワジ・ヌスビトハギ他），Balasaminaceae（ツリフネソウ科：キツリフネ・ツリフネソウ），Haloragaceae（アリノトウグサ科：アリノトウグサ），Umbelliferae（セリ科：エゾニエウ・オオハナウド他），Campanulaceae（キキョウ科：ツリガネニンジン他），Plantaginaceae（オオバコ科：オオバコ），Chichorioideae（タンポポ亜科：コウゾリナ・オオバナニガナ他），Carduoideae（キク亜科：フキ・ハンゴウソウ・チシマアザミ他），*Artemisia*（ヨモギ属：オオヨモギ・オトコヨモギ），Gramineae（イネ科：ヨシ・ササ・ススキ・イワノザリヤス・エノコログサ他），Cyperaceae（カヤツリグサ科：クロアブラガヤ・スゲ他），Liliaceae（ユリ科：バイケイソウ・ウバユリ・エンレイソウ・オオバナノエンレイソウ・マイズルソウ他），Iridaceae（アヤメ科：ノハナショウブ・ヒオウギアヤメ他），Lysichiton（ミズバショウ属：ミズバショウ）

胞子：Equisetaceae（トクサ科：スギナ・トクサ他），Osmundaceae（ゼンマイ科：ゼンマイ・

ヤマドリゼンマイ他)，Lycopodiaceae（ヒカゲノカズラ科：ヒカゲノカズラ他）

形態分類胞子：Monolate type spore（シダ類），Trilete type spore（ワラビ他）

F—100—d の腐植土では全般に樹木花粉の *Alnus*・*Quercus*・*Ulmus*・*Salix*・*Juglans*・*Betula*・*Carpinus*・*Acer*・*Fraxinus*・*Abies*，草本花粉の Gramineae・Polygonaceae・Ranunculaceae・Carduoideae・Artemisia・Cyperaceae，胞子の Osmundaceae・Monolate type spore を主とした花粉構成であることが確認された。

縄文時代中期～後期の遺物包含層では落葉広葉樹の *Alnus*・*Quercus* が優勢で，次いで *Salix*・*Juglans*・*Betula*・*Carpinus*・*Magnolia*・*Acer*・*Fraxinus* と針葉樹の *Abies* が多く出現し，草本花粉・胞子では Gramineae・Polygonaceae・Ranunculaceae・Carduoideae・*Artemisia*・Cyperaceae，胞子の Osmundaceae・Monotate type spore を主とした花粉構成であることが確認された。

縄文時代中期～後期の遺物包含層では落葉広葉樹の *Alnus*・*Quercus* が優勢で，次いで *Salix*・*Juglans*・*Betula*・*Carpinus*・*Magnolia*・*Acer*・*Fraxinus* と針葉樹の *Abies* が多く出現し，草本花粉・胞子では Gramineae・Monotate type spore が優勢で，次いでPolygonaceae・Ranunculaceae・Umbelliferae・Carduoideae・*Artemisia*・Trilete type spore が多く出現している。総花粉・胞子に対する樹木花粉の出現比は低く，草本花粉・胞子の出現比が高い。

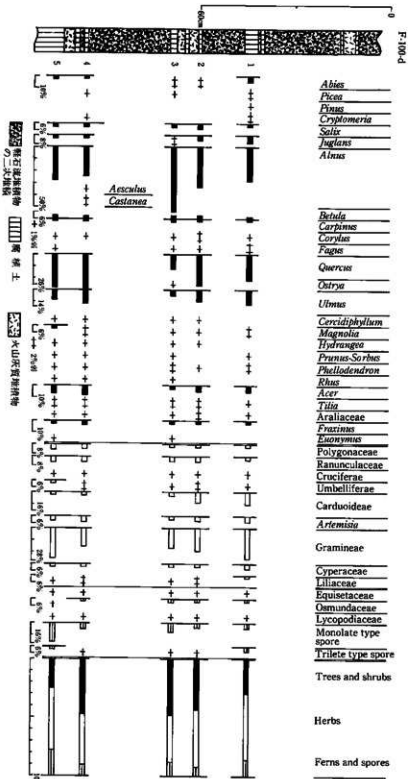
直上のNo.4 では花粉構成に変化は見られないものの，No.3 では *Alnus* が急増し *Quercus*・*Juglans*・*Ulmus*・*Abies* が減少している。しかし，No.2 ～ 1 では再び元の出現率に戻っている。また，No.3 では Haloragaceae が多く出現している。

住居址等の遺構内から採取された焼土・覆土でも花粉・胞子の出現数は少ないものの，樹木花粉の *Alnus*・*Betula*・*Quercus*・*Ulmus*・*Acer*，草本花粉・胞子の Polygonaceae・Ranunculaceae・Garduoidea・*Artemisia*・Osmundacede・Monolate type spore を主とした花粉構成が確認された。遺物包含層のNo.5 の花粉構成とほぼ類似した組成である。

4．古植生について

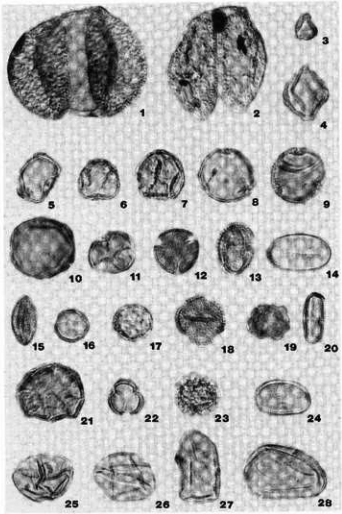
15点の土壌試料から検出された花粉・胞子の構成比をもとに，縄文時代中期～後期に位置づけられた千歳5遺跡周辺の古植生は次のように推定される。

岡志別川に面した西向き斜面の遺潤地にはミズナラ・コナラ・ハルニレ・サワシバ・ハウチワカエデ・イタヤカエデ・シナノキ・ツクハシバミ・シラカンバ・オニグルミ・ホオノキ等からなる冷温帯林が，遺跡前面の沖積地にはハンノキ・ヤナギ・ヤチダモからなる低湿地林（河畔林）が分布していた。低湿地や隣接した場にはヨシ・クロアブラガヤ・スゲ・ミゾソバ・アリノトウグサ・バイケイソウ・ヒオウギアヤメ・ミズバショウ・ネコノメソウ等が群落をつくり，冷温帯林および低湿地林の周縁や遺跡の生活空間周囲には陽地性のオオイタドリ・オオヨモギ・カラマツソウ・オニシモツケ・エゾニユウ・フキ・ハンゴウソウ・チシマアザミ・ススキ・シダ類からなる高茎群落が繁っていた。それらの草陰ではキツリフネ・ツリフネソウも花を開いていた。


F-100-d
Abies
Picea
Pinus
Cryptomeria
Salix
Juglans
Alnus
Aesculus
Castanea
Betula
Carpinus
Corylus
Fagus
Quercus
Ostrya
Ulmus
Cercidiphyllum
Magnolia
Hydrangea
Prunus-Sorbus
Phellodendron
Rhus
Acer
Tilia
Araliaceae
Fraxinus
Euonymus
Polygonaceae
Ranunculaceae
Cruciferae
Umbelliferae
Carduoideae
Artemisia
Gramineae
Cyperaceae
Liliaceae
Equisetaceae
Osmundaceae
Lycopodiaceae
Monolate type spore
Trilete type spore
Trees and shrubs
Herbs
Ferns and spores

また，住居址の周辺にはアカザ・シロザ・タネツケバナ・オオバコ・ギシギシといった人里雑草も繁っていたようである。

その後，雨水による浸食によって周囲から軽石流堆積物が流入して遺物包含層を埋積しはじめるが，腐植土も流れ込みレンズ状に堆積した。この頃から遺跡の周囲が多湿になり，それにともなってハンノキ林の分布域が拡大したが，白頭山降下火山灰が堆積した11～12世紀頃には縄文時代後期頃の規模に縮少している。



1．*Abies*，2．*Picea*，3．*Salix*，4．*Alnus*，5．*Betula*，6．*Quercus*，7．*Ulmus*，8．*Fagus*，9．*Tilia*，10．*Juglans*，11．*Sorbus–Prunus*，12．*Acer*，13．*Phellodendron*，14．*Magnolia*，15．Polygonaceae，16．Ranunculaceae，17．chenopodiaceae，18．cruciferae，19．Haloragaceae，20．Umbelliferae，21．Campanulaceae，22．*Artemisia*，23．Carduoideae，24．*Lysichiton*，25～26．Gramineae，27．Cyperaceae，28．Monolate type spore

1，3～10，14～18，20，22～23，25～28，No.5，2，No.1，11～13，No.4，19，24，No.3，21，No.4（1～2，x 1,100，3～28，x 1,200）

	F－100 d					H-24 9月内 竪土 No 6	H-25 9月内 竪土 No 7	H-28 9月内 竪土 No 8	H-29 9月内 竪土 No 9	H-29 9月内 竪土 No 10	H-1 表採 竪土 No 11	P14a4 竪土 下部 No 12	P14a4 竪土 下層 No 13	P14a4 竪土 中部 No 14	P14a4 竪土 上部 No 15
	No 1	No 2	No 3	No 4	No 5										
Abies	12	4	4	6	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Picea	4	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Pinus	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Cryptomeria	4	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Salix	6	12	12	8	8	2	1	－	－	－	2	1	－	1	1
Juglans	16	11	6	6	8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
Alnus	76	88	174	61	72	17	5	8	3	1	11	9	4	3	4
Betula	6	8	12	6	8	5	1	2	1	1	8	10	4	3	5
Carpinus	8	6	8	7	6	－	－	2	－	－	1	2	－	1	1
Corylus	2	3	3	2	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Castanea	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Ostrya	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Fagus	3	1	1	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Quercus	56	71	41	73	76	15	7	5	8	－	13	16	5	6	5
Ulmus	34	26	16	28	22	5	1	2	3	－	5	3	2	－	－
Cercidiphyllum	－	1	2	3	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Magnolia	4	2	3	3	6	1	－	－	－	－	1	2	－	2	－
Hydrangea	－	2	2	2	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Sorbus-Prunus	1	－	1	2	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Rhododendron	3	1	4	2	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Rhus	－	－	1	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Acer	14	14	8	21	18	3	1	2	1	－	3	1	－	3	1
Aesculus	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Tilia	3	3	6	4	4	1	2	－	1	－	1	3	－	－	－
Araliaceae	2	3	2	2	2	－	1	－	2	－	2	－	－	－	－
Fraxinus	6	6	9	8	8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Euonymus	－	－	2	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Chloranthaceae	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Polygonaceae	22	21	18	21	41	7	3	10	13	1	18	14	2	1	1
Chenopodiaceae	－	－	－	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Ranunculaceae	28	28	26	26	48	11	8	15	11	－	12	5	10	3	1
Cruciferae	1	2	2	4	3	1	－	－	－	－	－	6	－	－	－
Saxifragaceae	1	－	2	2	－	－	－	2	－	－	－	－	－	2	－
Rosaceae	8	3	2	8	11	2	1	1	3	－	5	2	－	－	－
Leguminosae	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Balasaminaceae	－	－	－	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Haloragaceae	－	2	6	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
Umbelliferae	2	6	3	6	20	2	1	－	3	－	4	1	1	2	1
Campanulaceae	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
Plantaginaceae	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	－	1	－	－	－
Cichorioideae	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	－	－
Carduoideae	91	56	23	18	32	31	13	51	18	7	9	13	19	23	10
Artemisia	52	26	16	31	40	51	21	39	15	5	21	33	23	26	11
Gramineae	232	118	111	84	244	80	35	43	33	11	54	73	27	58	23
Cyperaceae	38	19	23	14	31	2	1	2	1	－	5	2	－	－	－
Liliaceae	19	6	6	7	3	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－
Iridaceae	－	－	1	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Lycichiton	－	－	2	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－
Equisetaceae	2	2	2	3	4	－	－	－	－	－	1	－	－	2	－
Osmundaceae	28	12	16	11	8	2	1	1	3	－	3	6	1	3	2
Lycopodiaceae	6	2	3	2	3	－	－	1	－	－	1	1	－	－	－
Monolate type spore	46	31	56	31	162	2	3	2	13	－	5	1	1	2	2
Thilete type spore	44	1	2	3	28	1	－	－	－	－	1	1	－	－	－
Total grains	627	335	330	276	693	242	106	186	132	27	186	209	99	143	70

表　千歳5遺跡で検出された花粉・胞子数

引用・参考文献

北村四郎・岡本省吾(1970)：原色日本樹林図鑑　　保育社

北村四郎・村田　源・堀　勝(1971)：原色日本植物図鑑(上)，草本編(Ⅰ)，合弁花類　保育社

北村四郎・村田　源(1970)：原色日本植物図鑑(中)，草本編(Ⅱ)，離弁花類　　保育社

北村四郎・村田　源・小山鐵夫(1970)：原色日本植物図鑑(下)，単子葉類　　保育社

町田　洋他4名(1984)：テフラと日本考古学―考古学研究と関係するテフラのカタログ，古文化財の自然科学的研究　　同明舎

田川基二(1971)：原色日本羊歯植物図鑑　　保育社

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告 第21集

登別市千歳5遺跡

—北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財第二次発掘調査報告書—

昭和60年3月30日　発行

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目

印　　刷　㈱ 総 北 海 札幌支店

001 札幌市北区北30条西5丁目菊地ビル2F

この報告書は、日本道路公団札幌建設局のご了解を得て増刷したものです。